

---

# 母親の実家は異世界でした！！

---

歩夢りんご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

母親の実家は異世界でした！！

### 【Nコード】

N1136CN

### 【作者名】

歩夢りんご

### 【あらすじ】

俺の両親はかなり前に死んでしまっている。しかし17歳の誕生日を目前にして、俺は母親の実家に帰らされることになった。実家？行ったことがないです。というか、知らないです。

話を聞いたらどうやら母親は別の世界から来ていたらしい。うん、どうしろって言うのでしょうか？

初投稿作品です。

2015/07/01 完結しました。

## 第1話（前書き）

初投稿です！

色々拙いところもあると思いますが、読んでいただけると嬉しいです！

## 第1話

突然だが、我が家には目覚まし時計というものが存在しない。必ず起きる時間を固定しておけば人間勝手に目が覚めるものらしい。

目覚ましは鳴らなくとも、俺は5時に目が覚める。そして、着替えたらまず両親のいる仏壇に線香をあげて手を合わせ、そこから俺の一日が始まるのだ。

俺の名前は辰野謙人。東高校二年で、一人暮らしをしている。両親が亡くなった後、正確に言うとうと光弘叔父さんと一緒に住んでいるのだが、国内だけでなく海外あちこちを仕事で飛び回っていて、一年のうち数週間しか家にいない。おかげで自炊生活が身に付き、いつでも彼女に飯をふるまえる…。彼女いないけど。

顔はそこそこ、身長も低くはないがそんなに高くもない。勉強は進学校といわれる東高校で1ヶ台というトップクラスを維持、運動はかなりできる。結構優良物件だと思うんだがなあ…。

さて、両親が亡くなったのは実は小学校5年生のときだ。殺人事件に巻き込まれて、二人とも遺体で見つかった。突然のことで俺は大泣きしていたが、家の中には母親が手紙を残していた。

「もし私が死んだら、次の三つのことをしなさい。」

- 1．富士山のそばに知りあいが住んでいます。私の名前を出して面倒を見てもらうこと。たぶん、師匠として色々学ぶことになる
- 2．行く前に光弘叔父さんに1の内容を伝えること
- 3．いちいちよくよしないので、まっすぐ生きること

私とお父さんの息子なんだ、それくらいやりなさい」

なんともまあ、簡潔な文章だ。葬式が終わってからこれを見つけたんだが、一緒に読んだ光弘叔父さんが、

「お母さんらしいな」

と苦笑するほどだった。

あの両親に育てられた俺としては、もう泣いているわけにはいかなかった。

その後、俺はその知り合いのところにも身を寄せ、4年間その人に師事した。

ちなみに、そこで学んだひとつ目が、目覚ましなんかには頼らず正しい時間に起きることである。師匠は格闘技の達人だったので、それを習い続けたから運動神経はかなりのものが育ったんだろう。

母親は厳しかった。

一つ一つの生活態度に目くじらを立てる人ではなかったが、ここぞという場面では毅然とした態度を取ることを口がすっぱくなるほど言っていた。

たとえば、小学校で大喧嘩をした時、殴られて泣いて帰ってきた俺を母親は家から放り出して言ったのだ。

「自分が悪いことをしたと思っているなら、喧嘩になるまでその非を認められなかった自分を反省して、一晩そこに座っておきなさい。自分は悪くないと思ってるなら、逃げて帰ってないで一発入れておいで！」

今考えると、普通に虐待で訴えられてもおかしくなかったかもしれない。しかし、俺としてはそう育てられてきたことに後悔はなかった。

（ちなみに、その時は殴った相手の家まで訪ねて行って相手を殴り飛ばして帰ってきたら、あっさり家に入れてくれた。その後、母親は家から1時間ほど出て行ったのだが何をしていたのか…）

『毅然とした生き方』と母親は何度も言った。いつもは丁寧で優しくしゃべるのに、みっともない姿を見せた時は烈火のごとく怒った。

他にも、駆けっこで負けた悔しさに俺が泣き顔で帰ってくると、母親はこう言って河原まで連れ出した。

「負けて悔しいなら、次勝てるようになるの！さあ、今から特訓するわよ！」

こんなときの母親はとても楽しそうで、俺も泣くのを忘れ明るい気分になった。まあ、その特訓内容は小学生どころか、アスリートですらやらないような過酷なものだったせいで、明るい気分どころか吐き気もしたんだが…。

また、俺は生まれつきかなり頑丈な人間だった。

というより、怪我したら一瞬で治ったので、それに気づいた母親は俺に言い含めた。

「けがの治りが早いのはいいことだけど、あんまり人に見られないようにね？」

「どうして？どうしてだめなの？」

「他の人はあまり早くないのよ？怖い大人が謙人のことを実験動物にするよ？」

説得の仕方としてどうなんだと父親は苦笑していたが、そのおかげで頑健な体に育ち、その上でその性質が目立たないような生活を送ることができた。



そう、母親は大きな目標としていつも俺の前において、俺の目標として今もある。

父親は優しかった。

声を荒げたところを見た記憶がない。いつもにこにここと笑って、母親の横に寄り添っていた人だった。

しかし、俺にとって母親の姿が目標ならば、父親の姿は理想である。

母親が3日ほど家を空けると言っ、いなかったときのことである。父親も仕事でいなかった。

そんなとき、小学校3年生だった俺は友人の家に遊びに行き、そのまま遊び呆けて家に帰ったのは7時だった。門限は5時半であり、母親がいたら絶対にしない所業だった。

家に帰ると、もうすでに父親が帰っていた。

「ただいま…」

「おかえり、謙人。もうご飯できているから、手を洗っておいで」

いつもと変わらずにここにこしたまま、いつもの言葉を言う父親に俺は安心してほっと一息つき、怒られないだろうと思いつながらご飯や風呂を済ませた。

その後、残っていた宿題を済ませた俺を見て、父親は謙人を呼んだ。

「謙人、ちょっとおいで」

ここにことしたまま言う父親に、うなずいて俺は立ち上がる。いつも通りの父親に連れられて入ったのは、和室の中だった。和室は六畳だったが、真ん中にいつも置いてある机がどけられていた。

「そこに座りなさい」

父親のまどついている雰囲気は変わらない。しかし、さすがに俺も父親がこれから何をするつもりか、おぼろげに想像できた。何も口にすることができずに、俺は指された場所に正座する。父親も真向かいに正座した。俺が目線を上げると、父親はいつも通りの笑顔で笑っている。

「お父さん、あの…」

「座りなさい」

「あの、でも…」

「座りなさい」

全く変わらない雰囲気。そこから、俺は父親が怒っているということを感じとった。そこからは何も話すことができず、ただ目線を下げることができず、ほほ笑む父親と相対していた。

3時間くらい経っただろうか。正座していた足が痺れるどころの話ではなかったが、精神的に限界が来た。

目線を下げることが許されず、逃げることもかなわないこの雰囲気、否応なく自分の悪事を見つめ直させられたのだ。

突然、俺の目から涙がこぼれた。もうほとんど泣くことはなくなっている時期であるが、泣いた。泣かされた。俺はこの父親には絶対敵わないと思った。

泣きだしてもなお目線を逸らさないで俺を見つめていた父親は、やっと口を開いた。

「家に帰るのが遅かったからじゃない。謙人が悪かったところは明らかに別のところだ。

それがわかる年だと思うし、わからない人間にお母さんも私も謙人のことを育てたつもりはない。

なにも言わなくていい、自分でわかったのなら、布団に行って寝なさい。今日は学校を休む連絡を入れておくから」

しゃくりあげる俺を見つめながら、父親はやはりほほ笑んだままだった。

帰りが遅かったことはそこまで重要なことではなく、母親がいないからという理由で遊び呆けた俺の態度を問題視したのだと思う。

身にしみて理解した俺は布団に潜り込んだが、その時見た時計は朝の5時を指していた。3時間どころではなかったのだ。

目が覚めたら12時だった。俺は急いで起きだして居間を覗くと、父親の作った昼食と書き置きだけが置いてあった。

きちんと食べて、勉強は済ませておくように、と書いてあった。俺は父親を徹夜させて、さらにご飯を作らせて、そして仕事にいくのも見送らなかつたようだ。

あまりの自分のふがいなさ、父親の偉大さが身にしみて分かったひとときだった。

その晩帰ってきた父親は、徹夜からの仕事というのにやつぱりいつも通りほほ笑んでいた。その顔を見て、俺はやはり何も言えなかつた。

この日以来、俺の生活は変わった。

人としての起点が父親と母親であり、自分を作った彼らの愛情に深い感謝と尊敬をずっと心に抱いている。

仏壇に線香を上げ、朝の挨拶を済ませる。やはりほほ笑んでいる父親と、きりつとした母親。

今日もがんばりなさい、と言われた気は……しなかった。

彼らなら、何も言わずに見守るだけだろう。そう想像できるくらいにまでは、俺も成長しているんだ。

## 第2話

東高校二年二組。

俺のクラスで、俺が必ず一番に登校する教室だ。

今日は5月9日。クラス替えにも慣れ、遅刻者が出だす5月のゴールデンウィーク明けの時期である。

「おはよー」

「よう、謙人。おまえいつも学校くるの早いな。何かあんの?」

「いや、一人暮らしだから用事終わったらさっさと来てるだけ」

「ほえー、一人暮らし!いつからよ?中学の時からか?」

「いや、高校入ったのと同じ」

「それでもすげえ。なんだよ、空手ができて頭も悪くない、あげくの果てに自炊男かよ…」

「ありがとさん、ただ俺のやってたのは空手じゃなくてただの、個人的な格闘技だが」

「あんま変わんねえよ…」

格闘技というよりは、戦う技術と言うものだろうか。山にこもっていた母親の知り合いを師匠としてかなりの修行を積んだ4年は、かなりきつかったが…。勉強に手を抜くことも許さない人だったからなあ…。

さて、軽く挨拶をしてきたのは友人の国守一だ。そもそも人付き合いはあまり俺は得意ではないが、一のお陰で大変助かっているのだ。

予鈴も鳴り、徐々にクラスメイトも集まり始める。ぼんやりと取り留めのない話をしていた俺は、ふと今入って来た女子に目を留める。

渡辺未菜。少し小柄で、誰が見ても美少女と言うであろう容姿に、下手な細工をしないストレートの黒髪。入学式からこの一年ですでに100以上の告白を受けたと言う噂もあながち嘘ではない彼女は、その全てを一発で断り、逡巡することもないと言うことで有名だった。

「お、姫の登校だな。羨ましいいぜ、謙人よー」

「何がだよ」

にやにやと下世話な笑みを浮かべながら話を振ってくる一に、何の気なしに返す。

「スポーツは少し苦手らしいが、それでも標準レベルだ。眉目秀麗、頭脳明晰。去年はお前一緒にクラスだし、彼女と釣り合うのっておまえくらいだ…痛い痛いっ、やめろお前の握力で俺の頭掴むなっ！」

やはり下世話な話を振ってきた一の頭を、表情を変えないまま俺は鷲掴みにする。なお、握力は80キロを優に超えるから手加減をしていてもかなり痛いと思うんだが…。

「一々その話題を出すな、鬱陶しい」

「でも、喋りかけるのも憚るほどの美少女だぞ？彼女が明るい笑顔を見せる男は謙人だけだ、という調査結果もあるんだ！」

俺の手に鷲掴みにされながらも、必死で語る一の姿はどこか滑稽だった。しかし、その調査には俺も少し興味がわく。

「他にはどんな調査結果がある？」

「ふっ、俺のクラス女子調査ノートは最強だ！だからちょっと手をどける」

考えあつて手をどけてやるが、一の後ろに立っている人影が見えて



いるからの行動だった。まあ、本人が見えてないから良いんだろうが…。

「見る、クラス女子バイブル！！さて、姫についてだが、最近で言うと一昨日の放課後、一組の男子A氏に呼び出されてラブレターを手渡されそうになったが、受け取ることなく断る。その断った理由は『好きな人がもういるから』という…。」

「うん、すごい調査能力だね国守くん。プライバシーの侵害で訴えてもいいかな？」

手を一の肩に載せて満面の笑顔を向ける当人である渡辺と、冷や汗をダラダラ流す一。分かっていた結末が当たって、俺は堪えきれず吹き出した。

「ハハツ、いやー、本人の目の前でそんなこと言つとか、そのノート取り上げてくださいって言ってるんだよね？」

「そうだね、しかも私以外の子も被害に合いそうだし、このノートは貰うね？」

やはりほほえみながらノートを没収して去っていく俺を見送りながら、ニヤツと片頬を上げて笑って一に言った。

「良かったな、満面の笑顔を向けられたぞ？」

俺の一言がとどめとなり、一はその場に崩れ落ちた。

その日の放課後。

俺は早々に家に帰る支度をしていたが、そこに渡辺が近づいてきた。

「ねえ、謙人くん。少しばかり頼みにくいお願いがあるんだけど…」

「ん？俺にできることなら手伝うが…俺にしかできないことか？最近俺と仲がいいとかどうとか、かなり噂立ってるし、俺が好きとかどうとか言ってくる奴でてくるんじゃない？」

「別にいいのっ！他人の噂なんて！」

少し心配そうに聞き返すと、渡辺はキッと言い返した。

「いや、その…」

「ううん、私の方こそごめんなさい。噂なんて、ね…。それで、やっぱり嫌なら諦めるんだけど、どうしても頼みたいかなって…」

渡辺もかなり困った様子で話しているので、俺も少し心配になってくる。なんてったって学年一有名な人だぞ？俺は去年クラスが一緒だからある程度話しかけてくれるが、接点のないやつらにとっては一みたいに暴走の矛先がこっちに向けるいい理由になるらしい。

「別に大丈夫だが…何なんだ、その頼みごとって？」

「うーん、ここじゃちょっと…」

「なら場所を変えるか」

そう言っただけ俺は鞆を持って立ち上がる。こういう場面に食いついてきそうな一は、自分のノートの場所を教えてもらって飛び出していたところだったので、ここにはいなかった。計算していたのか？と思うと少し背筋が寒くなるが、彼女はそのままであくどくないだろうと思ひ直す。

「じゃ、中庭でどうかな？人もあまり来ないし」

「分かった」

東高の中庭は何もない。コンクリートとベンチが無造作に並んでいるだけ、という殺風景さはここの学生から絶大な不人気を誇る。

さて、その中のベンチの一つに俺は座っていた。

そして、持ちかけられた相談の面倒くささに頭を抱えていた。

「ごめん、本当にごめん！頼めるのって謙人くんくらいで…。流石に嫌がられるのは分かってただけど、どうしても！」

「ああ、分かるよ…。そりゃこれを頼めるのは俺くらいなんだろうけど…」

「ごめん、でも西高の、しかもこの手紙にある人たちってここら辺牛耳ってるじゃない…。私だけじゃ、ちょっと…」

さて、俺に持ちかけられた相談は告白を断る付き添いだった。

市内の東高は県下有数の進学校だが、西高の方は逆に暴力沙汰で有名である。しかもその中でもトップの奴が渡辺に手紙を出した、というこどらしいのだが…。

「何が必ず来いだ…。ラブレターどころか、ただの脅迫文だろ、これ…」

あまりの文章のひどさに呆れたところに、付き添いのお願ひである。確かに、女子一人を西高に送るのは危ない。しかし、行かないと奴らが間違はなくこつちに来る。ところが、どつちにせよ返事はお断りだ。奴らのことだ、絶対に暴れる。

「いつ、行く？」

「今日、これから…」

「おいおい…。わかった、行く。ちゃんと連れて行って家まで無事送り届けるから」

「本当にごめんなさい、ありがとう」

「…っ、どづいたしまして」

結局OKしてしまった俺は、そこでふと気になることを聞いてみる。

「そう言えば、なんであんなに告られててOKしないんだ？誰か無難な奴にOKしといたら、そういう絡みも減るんじゃない？」

「うーん、そうなんだけどちょっと理由があってね…そうだね、頼むんだから謙人くんには話そうかな。西高に向けて歩きながらしよ?」

### 第3話

少し古びた町の通りを、二人の高校生が歩いていく。皆が振り返るような美少女と、冴えない男の組み合わせだ。デートに間違えられそうだが、二人の話している内容はおよそデートとはいえない、重たい話だった。

「私ね、小学校の頃はここには住んでなかったらしいの。それで、中学1年生の時だったかな、男に襲われかけたの。それで、ああもう終わりだっと思ってたら意識が飛んじやったんだ。結局、今もそれより前の記憶は戻ってこないんだけどね」

「……」

俺は黙って耳を傾ける。渡辺は俺を見ることなく、前を見たまま話を続けた。

「それで、ふつと目が覚めたとき、同い年くらいの男の子が襲おうとしていた男に立ち向かっているのを見たの。でも近くには私の体が横にあったし、幽体離脱！ってびっくりしてね、そしたら男の子が男を捕まえて、私の体に寄ってきたんだ。それで、『怖い思いかけてごめん』って言うってくれてくれた」

「…それって、どこだ？」

ふと尋ねた俺に、渡辺は首を横に振った。

「多分、富士山のそばだったと思うんだけど…。男の子がそう言ったらまた意識がなくなっって、目が覚めたら中学3年生だったから…」

「そっか。」

「うん、だからね、まず彼にありがとうって言いたいからね。話はそれからしたいの」

そう言っって微笑む渡辺は輝いて見えて、思わず俺ははっとした。彼女は輝いていて、その好きなのであるう人について話す姿は明るかった。俺ははつきりと分かる胸の痛みを押さえながら、呟くしかなかった。

彼女が好きだったから…というわけではないと思う。少なくとも、もっとはつきりした理由があった。

彼女の話は聞き覚えがある。彼女を助けたのは俺の師匠だ。しかも、彼はもうこの世にはいないのだ。彼女が望む人に会うことはもう叶わない、こんな不条理に俺はため息をつくしかなかった。



「もしかして、謙人くんこの話知ってたりするの？」

「ああ、たぶんだけどその人が誰かも知ってると思う…」

「本当！じゃあ、これが終わったら教えてもらおうかなっ」

なんで後回し。

そんな疑問が顔に出ていたのか、渡辺は笑って付け加えた。

「だって、大事な話は嫌なことをきちんと消化してから聞きたいもん」

「そう…か」

「よしっ、じゃあ謙人くんの秘密も何か聞かせてよ！私ばかりじゃなんだかずるいでしょ？」

また突然話が変わったが、これは重たい話を続けないようにしようという配慮だろうとわかったので、俺はそのまま話の流れに乗ることにした。

「秘密？男の秘密なんて聞いても楽しくないぞ？」

「いいじゃん、教えて？」

彼女が話してくれた秘密はとても大きなものだったなあと思いつつ、それに釣り合うような秘密を考える。

秘密といっても…と考えて、誰にも言ったことがない自分の性質に思い当たった。

彼女は言いふらしはしないだろうと思った俺は、ポケットからカッターナイフを取り出した。

「ちょ、ちょちょちょっと！どうしたのいきなり！」

歯を出して腕に当たった俺のしぐさに、血相を変えて止めに入る渡辺。

「ま、まだ人生は長いから！あきらめるには早いから！」

慌てる渡辺とは対照的に、ケロツとした顔で俺は返す。

「いや、死ぬつもりも怪我を残すつもりもないし」

「ほんとに？ほんとにほんと？」

「当たり前だよ、だからちょっと手を離してくれ」

疑いの目を向ける渡辺に対し、ニヤニヤと笑う俺。  
ちよつとびっくりさせやろうと思ひ、渡辺が手を離れた瞬間、俺はカッターを思いつきり引いた。

「ちよつ、本気！こら、血が…？」

目の前でみるみる治っていく怪我に声も出ない様子の渡辺を見て、俺は思惑が当たったことにニヤリと笑った。

「怪我が一瞬で治る化け物じみた人間ですよ、俺」

俺がそう言ったとたん、渡辺が顔を上げた。  
そして、次の瞬間。

バシツと音を立てて、俺の頬を渡辺がひっぱたいた。

「な、何です…」

「化け物じゃないっ！自分のことを化け物なんて言っちゃだめ！」

泣きそうな顔で言う渡辺に、俺はニヤニヤ笑いを引っ込めて固まる。

「謙人くんは優しい人間だよ。自分でそんなこと言ってたらだめ」

「…すまん、悪かった」

俺が謝ると、渡辺は笑って答えた。

「うんっ、分かればよろしい」

こんな風に言ってくれる人は世の中には全然いないことを俺はわかっている。そんな中、認めてくれる人が近くにいることに俺は少しうれしい思いがした。

渡辺はその場でぐるりと回ると、俺に背中を向けながら言う。

「きつと誰にも言ったことがないんでしょ？教えてくれてありがとう」

「そりゃお互い様だ」

軽く答えながら前を見る。

「それって、生まれつき？」

「だと思っ。気付いたときにはケガの治りは早かった」

「うーん、じゃあ風邪も引かなかったりするの？」

その質問に、俺は思い返してみる。

「そう言えば…風邪引いたことがないな」

「インフルエンザも？」

「ああ、予防接種すらしたことがないぞ？」

すると、渡辺は振り向きざま明るくい口調で口にした。

「それはつらやましいね…。私は身体は弱い方だから、そういうのはちょっと羨望の的かも」

「確かに、学級閉鎖のときもピンピンしてたからなあ。食中毒もスルーだったし、超便利」

「そうかあ…。おっと、あれが西高だね」

話しながら歩いてきたせいか、俺たちはいつの間にか西高のそばまでついていた。

「さて、到着だな。さっさと終わらせようか」

「そうだね、さっきの話も聞かなきゃだし」

「だな」

そう話しながらも、性質のおかげで腫れもないはずの左頬が、まだかすかな痛みを感じたのは気のせいだろうか。

そんな疑問を抱えながら、俺は西高の校門をくぐる。

叩かれても、こんな風に心が温かくなるのならいいかもしれない。聞くところによつては特殊な趣味の持ち主に見えるぞ、と自分に突っ込みを入れつつ、俺は周りを見回した。

古びた校舎に割れたガラス。落書きの目立つ壁に、煙草の吸い殻。あまりの荒れように呆れつつ進むと、渡辺が立ち止まった。

「三方さんという方のところへ案内していただけますか？」

話しかけた相手は金髪の小柄な男。彼は黙って歩き出したので、付いてこいという意味と判断する。

(校内にはそんなに大人数はいない。あの小柄なねずみ男も別に強そうじゃないから下っ端だろう。校門からはあまり離れたくないな…)

のんびりした考えは一旦仕舞って、俺は頼まれた仕事を全うすべく準備する。

両親の言ったことの二つだ。

『言ったことは必ず守れ』

そして俺は心の中で呟いた。

(お前ら、彼女にケガしたら生まれしてきたことを後悔させてやるからな?ま、ふつうの高校生の喧嘩には負ける要素がないがな)

### 第3話（後書き）

ブックマークや評価してくださった方、ありがとうございます！

02/11 誤字訂正

02/12 タイトル修正



## 第4話

校舎の中庭で、少し奥まった建物の陰に五人の男が座り込んでいる。

(少しはやる奴が一人いるな…。ボクシングか?)

早速男たちの力量を俺は測る。

『まず相手を見極めないと、勝てないよ?』

とは師匠の言葉である。長い間の修行でかなりの腕前まで育ったが、それでも上には上がいる。結局師匠の死ぬ前に師匠に勝つことはできなかつたのだ。油断なくあたりを見回す俺の耳に、渡辺の凜とした声が響いた。

「お手紙を頂いたのですが、その方はどなたでしょうか?」

「あー、俺だ俺。いやー、いい体してんじゃん、ヒヤハハッ!」

「そーっすよ三方さん、やりがいがありそっつすね」

「だろ?俺の目の付け所は最高だ!で、女?ちよつと付き合えや、あん?」

「貴方とは一瞬一秒たりとも一緒に居たくありません。お手紙やこれからのお誘いは是非ご遠慮させていただきます!」

下品な言葉を並べ立てる男たちに眉をしかめ、渡辺は勢いよく言い放った。その言葉に、取り巻きの男共がいきり立つ。

「あん?このアマ、調子のつとんのか、ああ?」

「お前三方さんが優しくしゃべるからってつけあがってんじゃないぞコラ!」

「大人しく付いてくりゃ良いんだよ黙ってる!」

「皆さんに付いていつて何をされるか目に見えていますし、それについて行くほど私はバカじゃないです」

「お、何されるか分かるの?いやー、キモチイイよ?クククツ、これからじっくりなじませていくといいじゃない?」

「お断りですつ!」

どこが優しく喋っているのか分からないが、典型すぎてみっともない。

あまりのアホらしさに呆れ果て、俺はここで口を挟むことにした。

「おい、テンプレ共。帰るつつつてんだから俺らは帰る。二度と彼女に関わってくるんじゃないやねえ」

「オイ何だテメエは？目障りだぞゴミめ！」

すぐに吠える取り巻きどもにイラつく。もうちょっと理性を持ってほしいものだ、獣かお前ら。

「俺は彼女の護衛だ。彼女はお前たちみたいな粗雑な人間にきちんと断りにいく人だ、お人好しすぎて何されるか分からんからな」

すると、三方というこのボスらしい奴が立ち上がって言った。

「お前がこの女の彼氏ってことか？」

「話聞いているか？護衛つつつてんだろ」

「そうかそうか、なら俺らがお前を沈めといたら良いわけだ。ケガしたくないならお前だけ帰っとけ、な？」

「やっぱ三方さん優しいっす！おら、さっさとしっば巻いて帰れ！」

渡辺が静かなことに気づいて横を見ると、彼氏？とかお人好しって何？とか隣で渡辺がぶつぶつ呟いているので、こういうのに反応していたらさすがにテンプレ共がキレそうと思いきる。

そして、俺は三方に向かって言い放った。

「二人で帰るぞ？家まで送るのが俺の仕事だし」

「ほう、五対一で一人を守りながら戦うと？舐められたもんだ」

「喧嘩はしたくないが、仕掛けてくるなら吝かではないな」

「このガキツ！！テメエらっ！コイツを袋叩きにしてやれっ！！」

「オウツ！！」

俺が挑発した途端、全員が襲いかかってきた。

渡辺を壁際に立たせてその前に移動する。これで俺を倒さない限り不良共は渡辺に手出しが出来なくなる。

「オルアツ！！」

「…甘い」

一人目が殴りかかってきた瞬間、その男の拳を掴んで捻る。

それだけで見当違いの方向へ男は飛んでいくが、今度は三方がナイフを持って襲ってくる。

「…あぶねえな」

全く危ないと思っていない口調で呟くと、ナイフを横から蹴って手から弾き飛ばし、そのまま鳩尾に一発入れるが、そこで俺は顔をしかめる。

「…浅い」

「「テメエツ!!」」

もう一発入れようとすると、入れ違いに二人まとめて左右から蹴りが飛んでくる。それはフェイントと即座に看破、追い打ちをあきらめて蹴らせておき、続けて飛んできたフックが届く前に拳で鳩尾を殴って気絶させ、返す蹴りで顎の下を掠めてもう一人を昏倒させる。続いてボクシング野郎がパンチを仕掛けてきたが、まともに取り合えるのも面倒くさいので蹴り飛ばす。それだけでボクシング野郎は数m吹き飛び、転がって動かなくなる。

「はい、終わり」

始まってから二分もかかっていない。終始圧倒的な戦闘だった。

「渡辺、大丈夫？」

「う、うん…。でも強いね、謙人くん」

あっさり始まりあっさり終わった喧嘩に目を白黒させながら渡辺が  
呟く。

「まあな。さて、用事も終わったし帰りますか」

「そうだね、本当にありがとう。…それで、この人たちどうするの  
？救急車呼ぶ？」

「一時間もしたら起きるから、放っておく」

やはりお人好しな発言をする渡辺に苦笑しながら、俺は答えた。

そこに、呻き声が聞こえて振り向くと、拳の入りが浅かった三方だ  
った。動けないようだ意識が残っているらしい。

「そういうわけで、俺らは帰るし二度と手を出すなよ？さて、じゃ  
あ帰りますか」

「クソガキイ…」

そう言葉を残すと、俺は帰るよう渡辺を促す。

そこで、ふと気づいた疑問を口にした。

「何でコイツらこころ辺牛耳ってるんだ？こんなに弱いのに」

「いや、それは謙人くんが強すぎるだけだと思うけど…。それはね、トップの人の親が金持ちで、何でも買ひ与えるからって聞いたよ？」

本気で聞いたのだが、あきれた様子で渡辺は話す。

「スタンガンとか睡眠薬とか、色々買ひ集めてたらしいよ？全部通販で色々と買ひ占めていたとか」

「おいおい、その親はバカか」

「だよー、でもそのせいでかなり困ってる人もいるんだよ？」

「そりゃ大変だなあ…」

のんびり話す俺たちは失念していた。

まだ、西高校内だということ。

気を抜いて話しながら歩いていたことを、俺は後悔しなければならなくなる。

「ッ!？」

異様な殺気に振り向いた俺は、いつの間にか三方が起きあがっているのを見た。

そして、何かをする間もなく…。

タァンッ！

乾いた音が校内に響く。

三方の手に拳銃があり、そこから薄く煙が漂っている。

そこから出た弾は…

「…えっ？」



渡辺の胸を貫いていた。

そのまま弾の勢いに押されて倒れていく渡辺の姿に我に返り、慌てて渡辺に駆け寄る。

渡辺は早々に意識を失っているようだった。心臓は外れているようだが、肺を貫通してしまっている。

「おい、嘘だろっ！」

手は適切な止血動作をしながらも、頭はパニックだった。

渡辺が撃たれた。

怪我をさせないと言ったのにその約束を破ってしまった。

とりとめのない思考が俺の頭の中をぐるぐる回り、何も耳に入らなくなる。

隣で西高の教師が何か叫んでいるが何も聞こえない。手を出してきたので知らないうちに投げ飛ばしていた。銃声を聞いて駆け寄ってきた教師に三方が取り押さえられるのが目に入ったが、それを理解することも無い。

ただ、適切な応急処置をするだけになっていた。

俺のフリーズ状態は五分後救急車が到着するまで変わることはなかった。

第4話（後書き）

明日も更新します。

02/13 誤字訂正

## 第5話

暗くなった病院の廊下に、ぽつんと俺は座り込む。病院の隣の道路はひっきりなしに車が通り、せわしないクラクションが壁越しに小さく響く。

時刻は21時を少し回ったところだった。時計を見ると、今日の日付である『5/09』が目に入る。何か見覚えがあると思いつながら首をひねった俺は、のろのろとあることを思い出した。

「そうか、明日は俺の誕生日だ……」

人を一人殺しかけておいてそんな記念日が来ることに、言いようのない苛立ちを自分を感じる。

そこに、誰かが近寄ってくる気配を感じ目を上げる。

「ちょっと君、いいかな？」

目の前には看護婦が一人、心配そうな顔でのぞき込んでいた。

「君、あの子の彼氏くんだよな？そろそろ病院閉めなきゃいけない

の。彼女の容態は今は安定してるし、急変したら知らせるから一回帰って休まない」と

「…じゃないです」

「ん？どうしたの？」

聞き返した看護婦に、絞り出すように俺は言った。

「彼女でも、彼氏でもないんです！守るって言ったのに…容態の安定なんて、大丈夫って、元は俺のせいじゃないですかっ！！」

「それは…」

「何かできると思ったのに、今度は手伝えると思ったのに、結局こっちはちゃうんですよっ！！」

苦悶の色を浮かべながら俺が言うのを聞いて、看護師はゆっくりと口を開いた。

「事情は知らないけれど、その気持ちはあの子に伝えなさいな。あなたが倒れては意味がないし、次会うまでに言う内容ははっきりとさせておいた方がいいのよ」

「…」

「さ、帰りなさい。見舞いそのものは7時から一応できるから、その時には私が許可出したげるよ」

「…すみません、ありがとうございます」

看護婦の説得に、俺はのろのろと重い腰を上げた。

(…すぐ来るから)

胸の中で渡辺にそう呼びかけ、病院を出る。

外はそんな俺の気持ちを知ってか、雲が星を隠していた。

家に帰り着いたのは22時近くだった。

晩御飯の準備は何も考えていなかったことに気づき舌打ちをする。

(晩飯食ってなかったけどどうするか……ん?)

ふと見上げると何故か換気扇が回っている。

「光弘叔父さんが帰ってきてる? 思いのほか早い帰国じゃん」

少し意外な事実に驚きつつドアを開けると、いい香りが玄関先まで漂ってきていた。

「…ただいま」

「お帰り、謙人。事情は聞いたよ。とりあえず飯を食おう、話はそれからだ」

「…わかった」

台所から廊下に顔を出した叔父さんに挨拶をしつつ、そのままリビングに入る。

いつも海外を飛び回っているのに今日は珍しく早めの帰国で、前回出発してから2ヶ月であった。

（ちなみに最長で二年間国外にいたと聞いたことがある…）

制服の上着を脱いで食卓に目をやると、そこには三人分の親子丼が並んでいた。

そして、見知らぬじいさんも座っていた。

年の頃は70そこそこだろうか。頭は真っ白になっているものの、そこから漂う威圧感<sup>あつぱん</sup>は並のものではない。

「…誰」

ぼそりとつぶやく。見覚えは全くないのにちょうど、師匠と相対したときのように緊張が走る。

「ふおっふおっ、良い腕をしとる。しょぼくれた顔しとるのが減点じゃがのう」

「だから誰だお前」

「ふおっふおっ、まず食事じゃよ食事。腹が減っては戦はできぬし、見舞いも行けぬからのう」

そう言うとおっさり身から漂わせていた威圧感を消す老人。

(このジジイ)

全く答える気がない様子のジジイに舌打ちをしつつ、目線を叔父さんのほうにずらす。申し訳なさそうな顔をしながらも、このジジイの正体を言うつもりはないようだった。

「分かった、食べよう。無理やり言わせる必要もないし」

そう吐き捨てると、食卓について箸をとる。



「いただきます」

「わしもただごうかの、みーくんもはよ座って食べよ」

「は、はい…」

みーくんって何だよ。

その突っ込みが頭の中をぐるぐる回っていたが、とりあえず飯を食うことに専念する。叔父さんの作る食事はかなりおいしい。残念ながらいまだに料理の腕には追いつかないということが、この親子丼一つでよくわかる。

「やはりみーくんの料理は旨いの」

「ありがとうございます」

いや、みーくんって何だよ。

「これは何じゃ、えーっと…」

「親子丼、といます。鶏肉を卵でとじたもので、卵と鶏から親子丼だとか…」

「ほうほう、旨いのっ」

どこのジジイだよ、親子井知らないとか。

あきれた目を叔父さんに向けたが、黙って首を振るばかりだった。

さて、二十分ほどで三人ともが食べ終え、空のお椀が並んだ。  
そこで、俺が口火を切った。

「さてジジイ、お前誰？」

「そうじゃのう、はっきり言ったほうがいいのか、みーくんや」

「…それはご自分でお決めください」

あくまでふざけた態度のジジイに、頭に血が上ってくる。この年でも自分より腕が上だというのは分かっていたが、それでも腹が立つものは腹が立つのだ。

「俺よりも強そうだし、ただの爺さんじゃないんだろ？叔父さんもなんかすごい敬語使ってるし」

「そうじゃな、じゃあもつぶつちやけるとしようかの」

あくまでふざけて見えるこの態度に一言物申そうとした瞬間、ジジ

イは強烈な一言を放った。

「わしゃお前の爺さんじゃよ」

はい？

「お前の親父の生みの親じゃて」

おい。

「なお、この世界系の管理者でもある」

「…ぶぢけてんの？」

「いや、大真面目じゃよ？のうみーくん」

「ごめん、謙人。これほんとの話」

叔父さんは父親と一緒に嘘はつかない。つまり、本当なのだと思わざるを得ないわけだが…。

「…マジか」

「おお、マジじゃよ？どっじゃ？感動の祖父と孫の出会いに泣いて抱きついててもよいぞ？」

やはりふざけた態度のジジイに、眉間を押さえて俺は言う。

「俺の爺さんが生きてたっていうのは衝撃だが、それよりもこのジジイと血が繋がってると思うと吐き気がするな」

「ハハハッ、謙人、それは思っても言っちゃダメだろう。私も何回それを思ったか」

苦笑しながら叔父さんも返事をする。

「そっか、息子になっちゃったのか」

「そっさいじつと」

「二人ともひどくないかのう？」

泣きごとを言うジジイに、二人は揃って同じ言葉を投げかけた。

「「自業自得」」

その言葉にジジイも少し萎れたように見えた。どうやらかなり刺さったらしい。

「わしだって孫の顔見たかったのに、息子どもに止められるし……。上の世界を無理やり離れるわけにもいかんかったのじゃよあ……」

確かにこんな祖父がいると知っていたら、二度と会いたくないとか言うてごねていそうだった。しかし、それよりも気になることがいくつもある。

「なるほど、ジジイが誰かは分かったよ。でも、父さんに止められたのにここに来ている理由が分からない。しかもこんなときに……」

「ふおっふおっ、今日来ることは昔からの決定事項なのじゃよ。今日起こったことは全くの偶然じゃった」

やっとまじめな内容を語り始めたジジイの話に耳を傾ける。さつきまで薄れていた威厳がまた、ジジイの体から感じられるようになつたところで、ジジイが口を開いた。

「謙人、お主母親の実家に里帰りせい」

うん、やはり訳が分からない。  
何考えてんだこのクソジジイ。

そんな言葉が頭に浮かぶが、そんなことはおくびに出さずに俺は言う。

「俺は実家知らないぞ？一回も連れて行ってもらったことないし、  
というか実家に帰ってるのも見たことがない」

すると、中途半端に伸びた白髪を掻きながらジジイは答えた。

「そりゃわしがいないと行けないからの、行ったことはないじゃろ  
うて。ま、異世界じゃしの」

今度は異世界かよ、本当にいい加減にして欲しい。  
そんな感想が頭に浮かんだのだった。

## 第5話（後書き）

明日も更新できたら頑張ります。



## 第6話（前書き）

更新出来ました！

説明回チックでごめんなさい。

## 第6話

突然異世界が実家と言われて、納得できる人がいるだろうか？しかも、友人が意識不明だというのだ。身勝手すぎる話にとつとつ俺の堪忍袋の緒が切れた。

というか、今まで我慢できた俺に拍手だよ！

「…おい」

「なんじゃ？だから里帰りの準備を早めにしてほし…」

「うるせえんだよっ！何でお前の言うことを聞かなきゃいけない！何で叔父さんの知り合いだからって俺がお前の言うことをまるまる信じなきゃいけないんだっ！

散々なめた態度として、ふざけんよ！俺は俺で俺の人生だ！俺が決めるんだから勝手に口出しすんじゃねえこのクソジジイっ！！」

俺がここまで大声を出すところは叔父さんも見たことがなかったはずだ、目を見開いている。

しかし当のジジイは何も堪えた様子はなく俺をじっと見つめた。

「やはり、そうでなくてはな。あの女の息子だ、この程度のことを言えないようなら叩き潰していた」

「…何だよ」

突然、話し方が変わったことに少し戸惑う。

「おちよくった態度を取ってすまないな。こういうことにしっかり言い返せないような息子なら叩き潰せとお前の母親に言われてな」

「…」

突然母親のことを持ち出され、態度もある程度誠実なものに変わり、かなりの違和感を感じるが、そこには気づかない様子でジジイは懐から手紙を出した。

「お前の母親から預かった手紙だ。事情があつて説明はそこに書いてあることだけしかできない。これはお前の母親のものだと証明することはできないが、読めば分かってくれると思っっている」

そう言つてジジイは手紙を俺に渡した。

手紙はふつうの茶封筒に入っていて、表書きは『謙人』と書かれていた。

筆跡はそっくりだったが、あまり信用できない。そう思いつつ、封筒を開けた。

『これを読んでいいるなら、おそらく17歳になる前日でかつ私もお父さんも死んでいるときだと思います。これを書いているのはまだ貴方が小学3年生の時です。どんな風に成長しているのでしょうか。お父さんに似て優しい貴方のことです、きっといい大人になっていると思っています。さて、彼女の一人くらいできていいるのでしょうか？結婚式も見られず、孫も見られないのは心残りなのです、せめて墓前に報告に来てくださいね。

ここまでが軽い話で、ここからが本番の大事な話です。

まず、私もお父さんもこの世界の普通の人間ではありません。お父さんはこういうことを書きたくないらしく、全部私に任せてきたので先に私について書いておこうと思います。

私は別の世界で『真竜』という種族の長でした。青い鱗の、自分で言うのもなんですが強い竜だったのです。私達真竜は原始の生き物で、その世界では世界最強の存在だったのです。そんなある日、私は世界の壁がこじ開けられたことに気づきました。私たちですらできないことを異世界のものがやってのけている、つまりそれはこの世界の危機である。こんな結論に至ったのも当然のことでした。

そして、状況を確認している内にこじ開けられた穴から大量の生き

物が飛び出て来ました。

悪魔族。

彼らはそう名乗り、世界で暴虐の限りを尽くしました。そして、それに対抗できる力を持っていたのは一部のほかの種族と、真竜でした。

私たちは即時抗戦を決め、全力を挙げ悪魔と戦いました。そしてどちらも数を減らし、むこうは王とその直近の部下の5名まで減らすことができたのです。

そのとき、彼らは一旦元の世界に戻り、再度戻ってくるため世界にあけた穴をさらに広げようとしてました。それをさせるわけにはいかない、そう考えた私たち真竜はほかの種族たちの協力の申し出を押し止め、奴らの殲滅のため数少なくなった同胞と再度戦いました。ほかの種族たちにはこれからの復興をお願いし、真竜という種が滅びる覚悟で飛び立ったのです。

私たち真竜は残り20匹ほどでした。そうして、最後の戦いが始まったのです。

戦いはほぼ互角でした。悪魔たちの方が力は強く、個人で太刀打ちできたのは真竜の中でもっとも強かった私だけだったのです。

しかし私たちも連携して戦うことで徐々に相手を追い詰めていき、相手を2人まで減らしたのです。こちらは5匹まで減っていました。

あと少し、と思って気が緩んだのでしょうか。私たちのそのすきを突いて、生き残っていた王がとうとう空間を広げる術を完成させてしまい、それに乗って王とその最後の仲間を逃げに走りました。そこで残っていた5匹で相談し、力の最も強い私が彼らを追い、残り

で空間の穴をふさぐことに決めたのです。

そうして、私は世界を越えました。

この世界系にはどうやら4つの世界があるようです。1つ目が管理者の住む世界、2つ目が今私たちのいる、物理学が確立し魔術などのイレギュラーを完全に排除した世界、3つ目が私が前にいた物理と魔法の混在した世界、そして4つ目が魔術法則のみで成立する世界です。

私はやつらの後を追ひ、穴に飛び込みました。そして、その出た先がこの物理学の世界だったのです。

時代は、ちょうど日本は江戸時代くらいでしょうか。出てきた途端、私は真竜の力を世界に奪われそうになりました。

この世界はイレギュラーを許しません。この世界にとっての異物です。すから、イレギュラー自身がこの世界に悪影響を及ぼすのです。すでに来ていた悪魔たちも肉体を失い、なんとか精神体を維持しているらしいと気配でわかりました。しかし私は真竜、力そのものが肉体でした。なので、力の消滅はそのまま死に直結することを感じ取り必死で抗っていたのです。

そんなとき、お父さんが通りがかりました。

お父さんはこの物理学の世界、つまり2の世界の監視に携わる使徒だったそうです。管理者の子として、監視に携わっていたそうなのですが、私の話を聞いて私を助けてくれました。

私と契約を結んでくれたのです。

それはお父さんにとって使徒としての資格を剥奪されることでした。それでも、お父さんは私と契約を結んでくれました。

魂の契約を結んだことで私はこの世界に定着し、その後数百年かけて王を倒し、その配下を肉体を持ってない精神体のまま、魔術法則の世界にたたき帰すことができました。

そして空間の穴を閉じた結果、私とお父さんはこの世界の住人となりましたが、魔力を補充できないため私たちの寿命は急速に縮んでいました。

その後結婚し貴方を産んだとき、管理者からの伝言として、光弘叔父さんから言われました。

『子どもに私たちのような異能があったなら、間違いなく排除機能が働く。それだけでなく、子ども自体が世界に悪影響を及ぼすかもしれない。世界が成人と認める17歳までは大丈夫だが、その後は危険だ。生かしておきたいなら子どもだけは3つ目の世界に送ることができると。』と。

そして、貴方の身体は再生機能が著しかった。それは間違いなく、真竜の力です。お父さんによると、世界に魔力がないせいでこの程度で済んでいるが、魔力があったなら私やお父さんよりも強い力を持っているということですよ。

だからこそ私は貴方に真竜としての誇りだけは持つていてほしいと、あえて厳しく当たりました。ほんとうにごめんなさいね。

そして、おそらくこの手紙を読んでいるということは、管理者のじいさんが貴方を認めてくれたということでしょう。というか、そうするようには脅しましたからね…。

私たちは貴方に生きていてほしい。なので事情をこのように書き残します。しかし人生を決めるのは自分、意思をしっかりと持って決断しなさい。

お父さんもお母さんも、貴方を愛しています。

母より』

暖かい。

ただの便箋なのに、両親の愛情が温度となって伝わってくるようだった。

まちがいなくこれは母の書いた手紙だと確信し、そう思ったとたん俺の目から涙がこぼれた。

「…ありがとうございます、そしておやすみなさい…」

亡くなった後のことをも考えてくれていた両親に、心の底からの感謝を込めて謙人はつぶやいた。



いつまでも守られているわけにはいかない。

自分のことは自分で決めるのだ。

## 第7話

涙を流しながらも俺の頭は現状を整理するために動く。それこそが、両親の望んでいたことなのだから。

（つまり、俺の母さんは異世界人…いや、異世界の『真竜』か。俺の生きるこの世界とは違う場所…。そしてこの爺さんは母さんの言うことを守った、つまり俺のことを助けようとしてくれた訳なのか）目を袖で拭い、俺は祖父さんの顔をまっすぐ見つめる。

「ごめんなさい。俺の不甲斐なさを祖父さんにぶつけてしまっていたようだし、暴言を無責任にぶつけた。心配してくれたようだし、本当に申しわけない」

しっかりと俺は頭を下げる。落ち着いていたならことういう暴言は吐かなかっただろうか。

所詮、自分が未熟なだけだろう。もっと精進しなければ。

「それは構わん。で、行くのか行かんのか？」

「それは…。今すぐじゃないといけないのか？俺としては友人の容態が安定するまで居たいんだが…」

「そうか…。なら0時には出発するから、それまでなら何とかなる。」

後一時間くらいか、それまでに準備をしる。文化ハザードを引き起こしかねない物品はお前以外には触れられないように、管理者権限でロックをかける。空間をつなげるから、持ち物は全部で3キロ以内に抑える。他に質問は？」

「そうだな…。二つ、いいか？」

「言ってみる」

質問を促されたので、俺は考えた結果の質問をすることにした。

「両親はなぜ死んだんだ？」

「魔力の枯渇だ。殺人事件に巻き込まれたというより、殺人犯が人を殺す前に取り押さえるため魔力を使い、その結果魔力が枯渇して二人とも死んだんだ。二人ともあと一回でもこの世界で魔法を使ったら死ぬって分かっていたのに、なぜ使ったのか…。自分たちで決めたのだから、何も言えないがな」

「…そう、か」

やはり、母親も父親も自分で死に方を決めて死んだのだ。みっともない姿を見せるわけにはいかない。

「もう一つは？」

「ん、ああ、俺はなぜ今まで魔力を奪われて死ななかつたんだ？」

「それは…。お主の魔力は血にあるからな。母親は身体すべてが魔力だったがお主は流れる血だけだ。他はきちんとした肉体なのだよ。だから17までその力は見逃されることになったのだ」

だから怪我したら一瞬で治っていたわけだ…。

そりゃ真竜さんなんだから、ファンタジックな能力の一つや二つ持つていてもおかしくはないわけか…。

「なるほど、分かった」

「さて、あの娘のところだったか？時間までに行ってきたらどうだ？」

「ああ、ちよつと行ってくる！」

俺は家を飛び出した。少ししか時間はないが、今まで鍛えてきた力で走れば病院まではすぐだ。師匠の話をするっていう約束をしているのだ、今から紙でも残しておかないと！

「父上、あまりに露骨では？」

「ふおっふおっ、こっちが素なのじゃが孫は腹が立ったようじゃのう」

「そうではありません、魔力の話です！彼に露骨に可能性を示唆したでしょう？」

「ふおっふおっ、どうじゃかのう。それよりみーくん、病院のセキユリティくらいごまかしてやるとええ」

「言われなくてもわかっています。兄上亡きいま、私がここの監視者ですよ？」

「そうかそうか、立派になったのう」

「やはりあなたは謙人にブツ飛ばされたほうがいいと思いますよ」

15分ほどで病院に着いた。少し息が切れているが、しんどいほどではない。

しかし、問題はここから渡辺の病室へ行く方法である。正面玄関は閉まっているし、急患受け入れ口から入ったりしたら即効警察に突き出されるだろう。

彼女の部屋は6階の一番端の部屋だ。どうするか…と考えていたら、迷案が閃いた。

「登るか！」

俺は病院の雨どいにとりつき、登り始めた。たいてい転落防止のために窓の下には足場が付いている。それを蹴りながら、俺は6階まで登っていく。

「これ、降りるのやばいな……。まあ、飛び降りても怪我は治るだろうしいか」

そして、渡辺の部屋までたどり着き、窓から中をのぞく。

運よく、窓のカギはあいていた。するりと中にもぐりこみ、渡辺の顔を見る。

マスクをつけられ、点滴を打たれながら渡辺はベッドに横たわっていた。しかし、間違いなく呼吸はしている。手術そのものは成功していたのだろう、一安心だ。

だが、体の弱い彼女には手術はつらいはずだ。俺としても、彼女の気配がとても希薄になっているのがよく分かる。分かってしまう。

俺はまず窓際にあつた紙を取り、そこに師匠から聞いた話を書く。

『渡辺末菜様

あなたと約束をしていたので、あなたの思い出についてここに書いておきます。

あなたが中学1年生のころですね、暴漢に襲われたのは。

その時、私の師匠である方があなたの襲われているところに駆けつけ、助けたそうです。しかし、あなたは恐怖のあまりか意識を失っていて、富士山のふもとという場所ではうまく治療することはできないだろうと考え、あなたを病院まで運んだと言っていました。

私の師匠の写真を添えておきます。この人ではないかと。

ただもう亡くなっていますので、会うことはできません。この町の共同墓地にお墓がありますので、顔を見せに行つてあげてください。

名前は神野仁。60歳で亡くなるまで、見た目が少年のままだった若々しく、強い方でした。』

こんな感じだろうか。俺はここからいなくなるのだから、名前を書く必要はないだろう。

願わくは、これで渡辺が新たな恋路に進めますように…。

「…さて、ここからが本番だ!」

俺は自分に気合を入れる。そして渡辺の布団をめくり、手術着を少しはだけた。

意識のない彼女を横目に見ながらゆっくりと包帯をほどいていくと、渡辺の体が夜の空気にさらされる。

真っ白な肌が露わになる。日焼け一つしたことがなさそうな肌。そこに刻まれた痛々しい傷跡に、俺は唇をかみしめる。そして、彼女の胸の上に俺は右手を伸ばすと…。

左手に持ったカッターナイフを力の限り、俺の右手に突き刺した。

焼けるような痛みが腕を走り、溢れ出た血液が雫を作る。その痛みをこらえながら、なるだけ傷口が閉じないようにカッターナイフを動かした。

そして、雫が渡辺の傷口の上に落ちた瞬間、落ちた血液が光り、傷口を治していく。

うっすらと輝くこれが魔力というものなのだろうか。

俺の血にはこの世界にはない魔力があるらしい。そして、それによって体の治癒力が異常な速さになっていたことは祖父さんの話から分かる。

なら俺の血には万能薬みたいな働きはないだろうか、ということだ。風邪も引いたことないから病原菌もないはず…。

血液型を調べたことがなかったのは、血液型がなかったからなんだろうか。

俺の血は彼女の傷口を通して体の中に流れ込み、傷んだ体を癒していく。そして、渡辺の体全体が淡い青色に輝きだした。血の流れに乗って体中を巡っているのだろうか。

幻想的な風景に見とれていたら、光がゆっくりと消え始めた。そし



て、最後まで輝いていた胸の傷のところから光が消えると、完全に怪我の治った渡辺の姿があった。

「良かった…」

ふと自分の体を見ると、俺の傷口もふさがりそうになっていて焦る。

「っと、やべっ」

慌ててカッターナイフを引き抜く。放っておいたら簡単には抜けなくなりそうだったからだ。

カッターナイフを拭ってポケットにしまい、渡辺を見るが、もう大丈夫そうだ。

と、今更ながら俺は自分のやっていたことに気づく。意識のない美少女の服をこっそり脱がせた不審者が、息を少し切らして立っているのだ。

（アウトオツツツ！！）

「すまん、渡辺。見てない、見てないからな？いや、見たんだけど…」

勝手に服を脱がせてしまったことに、聞こえていないとは思いつつ謝る。気分の問題だ、うん。

手早く包帯と手術着を元に戻し、そのまま毛布も掛けてやる。…たぶんこれで問題はない、はず？

「それより、守れなくてごめんなさい！家にきちんと送り届けるって言ったのに、俺が不甲斐ないばかりに怪我させてしまった。あと、バレなかつたら問題ない！とは言わないけど、渡辺の素肌を拝んでしまったことは誰にも言わないから！」

言うことは言って頭を下げる。

渡辺ごめん、本当にごめんなさい。

## 第7話（後書き）

カッターナイフ再登場…。

次の更新は次の週末ごろになります。  
少し忙しいので…

## 第8話

俺もいつまでもここにいるわけにもいかない。血色の戻った渡辺の顔はただ眠っているように見える。

「じゃあな、渡辺。無理すんなよ」

俺はそうつぶやくと、病室の窓から体を宙に投げた。足が下になるようにだけ気をつけて20m近い高さから一気に飛び降りる。

数秒の落下感のあと、かなりの音を立てて着地する。

「いつて！骨が数本いつたか？」

そう呟き、傷の治る感覚を待つが、

「いつもより遅い…？渡辺の傷を治したからかな」

思いのほか治るのが遅くその場から動けない。そんな中、微かに声が聞こえた。

「おい、なんの音だ！」

「知らねえよ、向こうの棟だろ？おまえの担当だ、見に行つてこい」

「なんか出てたらどうする！お化け嫌いなんだよ！」

「お化けなわけがねーだろっ！」

「どうやら警備員か？」

（まずいまずいまずいっ！ちょっと今は走れないぞ？これは捕まったらヤバいんじゃないか？）

と、慌てていると後ろに人の気配がした。

「まったくもって無茶すぎだ、謙人。帰るよ」

その人はそう言うので俺を背負い、ひとつ飛びで病院の敷地から抜け出した。

「ごめん、ありがとう叔父さん」

「まあ、気にするな。そのまま何を持っていくか考えておきなさい。たぶん家に帰ってから出発まで30分くらいしかないから」

叔父さんの背中に背負われながら、俺は家に帰ることになった。

帰ったときにそれを見た祖父さんが爆笑していたのは別の話である。

うん、妙に悔しいぞ？

結局、足が治るまで数十分かかった。いつもの治る速度から考えるとあまりにも遅い。何となく治るのが遅い普通の人の苦勞が少しだけ分かった気がする。

それでもおかしい速度らしいが。

ある程度荷物をまとめ終わって立ち上がると、もう足は大丈夫そうだった。その荷物を持って時計を見ると、23時55分を指している。もうあと五分でこの世界から出ていかなければならないのだ。

「いい世界だったよ。ほんとに」

俺はそう呟いた。

俺の部屋は机と布団以外何も無い殺風景なものだ。ただ一つ壁にある写真は、去年東高の学園祭でのクラス写真だった。俺としてはじめて、仲間と何かをして楽しいと思えた時間だった。

「持って行くこうか…」

俺は外して鞆の中に入れる。叔父さんによると、俺はこの世界では

『いなかったこと』になるらしい。ありとあらゆる俺の痕跡が消滅するので、俺が持っていないほかの写真からは俺の姿が消えることになるのだ。  
世界にたった一つしかない俺の思い出になる、大切に持って行くことにしよう。

俺がリビングに戻ると、祖父さんはコーヒーを飲んでいた。

「ふおつふおつ、黒くて苦いこの飲み物は『大人の味』じゃのう。  
ゲホケホツ、うまいとは思えんがのう」

「そっちが素なのかよ祖父さん」

「…」

俺が入ってきたのに気づいていなかったのか、ふざけた喋り方が復活していた祖父さんに声をかける。

「一発返したぞっ！」

「さて、荷物を見せい。何を持って行くつもりじゃ」

「ほらよ」

何事もなかったかのように聞いてくる祖父さんに、俺は背負っていたバックを投げる。

「…スマホとリュックサック、後は塩と水だ。後は何とかなる」

「向こうは争いごとが日常だが？お主、こんな持ち物で行くのか？」

「武器はない方が俺は強い…と思う」

「まあ、人それぞれだろうが…。後は写真か、スマホだけロックをかけるが、後は好きにしろ」

俺の荷物はお気に召さなかったらしい。でも大抵現地で調達すればいいのだろうし、どこに行くか分からない以上、当然要るのは水と塩だ。

祖父さんは何だか大事なところで失敗しそうなタイプだと俺は思う。

「何考えとるか分かる気がして、わしは泣きそうじゃぞみーくん」

「自業自得です父上。さっさと仕事をしましょう」

「息子までつれないのう」

「結局どっちの口調でいくんだよ、キャラがぶれにぶれてるし」

「どっちが素じゃよ。もうこれでいかせてもらつわい」



すぐに元の口調に戻った祖父さんにつっこんでみると、祖父さんはため息を一つついて、諦めたように言った。

「さて、出発じゃな。よし、開けゴマ！」

そうやって祖父さんはリビングの扉を指さした。その指から光が迸り、リビングの扉を直撃する。

「おいおい、ファンタジーだな……」

俺の治癒力もファンタスティックだが。

「ほら謙人、あの扉が境目だよ」

「叔父さん、あの扉が向こうの世界に繋がってるということであってる？」

「そういうこと。こっちに帰ってきたいならあっちでかなり頑張らないといけないよ。父上も管理者権限でこの扉開けたから、後数年は下界に降りてこれないだろうし」

「頑張ったら帰ってこれるのか。わかった、ありがとう叔父さん」

「頑張ったのはわしなのに、なぜか孫と息子が和気藹々だし、ふ、ふふふ……」

どうやら叔父さんと仲良く喋っていたのがお気に召さないらしい。しかし、祖父さんも数千年外に出られないことを承知で、孫の俺を助けるために来てくれたのか。

扉を開けると、廊下ではなく真っ暗な暗闇だけが広がっていた。じかんは23:59、もうこの世界とは一旦おさらばだ。

「祖父さん、ありがとう。行ってくるから、数千年だったか、のんびり待ってたらいい」

感謝の一言を告げ、祖父さんに背を向ける。お礼を言った後に顔見るの恥ずかしいし。

祖父さんが何かを言う前に、俺は身を暗闇に投げ出した。

そのとたんに身を襲う落下感に、少し胃袋が浮き上がる。

「さあ、実家に帰省だぞ母さん。どんな世界か、楽しみだ！」

「父上、どうされましたか？顔がだらしないですよ」

「いやのう、孫にありがとうと言われるのがここまで嬉しいとは思わなんだ」

「本当にバカ親ならぬバカジジイですね。管理人としてはこれからの仕事が大変なんですよ？どんな思いで甥の痕跡を消して廻らないといけないとおもっているんですかね？」

「…すまんの、みーくん」

「…いいですよ、それよりあの女の子はどうするんですか？」

「ん？あの入院してる女の子のことか？孫はどうやってあの子を治療したのじゃ？」

「自らの血を体に注いで、ですよ！傷口だけでなく、生まれつきの病弱を治すほどの魔力を注いで、自分の治癒力が一時的とはいえ低下するほどにね。そう誘導したのではないのですか？」

「そうじゃな、そうなるように仕組んだわけじゃが…。体中が光ったりしなかったかの、みーくん？」

「眩く輝いていましたよ？」

「ふーむ、なら彼女もあつちの世界に行くかもしれんのう」

「どういうことですか？」

「まあ、それはそのときが来てからのお楽しみじゃよ。将来の義理の孫じゃぞ？会って孫のことを頼まねばなるまいて」

「…会いたいと思うのは勝手ですが、仕事のたまっている量から考えて父上はこっちに降りてこられませんよ？」

「嫌じゃ！わしも曾孫の顔を見たいし抱き上げたいのじゃよ！」

「まだ二人とも付き合つてすらいなのに、何考えているんですか？さあ、帰ってください。仕事はたまる一方ですよ」

「そうじゃな、今は耐えて仕事するわい。後は任せたぞ、みーくん」

「かしこまりました。今晚中に、ある程度の物理痕跡と記憶は削除しておきます」

「ではな、みーくん」

謙人のいない部屋で親子は語り合う。そして片方が消えてから残りがそつと呟いた一言は、誰の耳にも届くことはなかった。

「辰野謙人。貴方の身に、輝かんばかりの幸運のあらんことを」

流れ星が一つ、空を走った。

## 第8話（後書き）

何とかきょう投稿出来ましたが、また少し間があきます、すみませ  
ん。

第9話 幕間（前書き）

間の時間を縫って投稿です

## 第9話 幕間

「ニュースをお伝えします。」

昨日午後4時ごろ、市内の高校で銃が発砲される事件がありました。一人の少女が胸を撃たれて重傷だということです。現場に松本アナウンサーがいます。松本さん？」

「はい、こちら発砲事件のあった高校の校門前です。現在校内は封鎖されており、立ち入ることはできない状況です。」

昨日の午後4時ごろ、この高校とは別の高校に通う被害者の少女が、一人でここを訪れています。撃つたのはこの高校の男子生徒だということ、警察は銃の入手経路と動機について詳しく調べることにしています。」

被害者の少女について、話を聞くことができました。」

「とっても可愛い子で、人気のある誠実な子でした。何でこんな事件に遭うことになってしまったのか、分かりません…。」

「他に、少年の周りには多くの同級生が軽い怪我をしていたということで、少女と少年の間に何があったのか、警視庁は事件の関連を調べています。」

「松本さん、ありがとうございました。また、少女のいる病院の前



に宮原アナウンサーがいます。宮原さん？」

「はい、こちらは市内の病院前です。ここに被害者の少女が入院しているということです。どうやら一晩たって容態は安定しているということです、警察は少女の完全な回復を待つて話を聞くことにしています。昨夜は、何か警備員の方々が慌てていましたが、原因を聞くことはできていません。以上、病院前から中継でお伝えしました」

何なんだろう、この感覚。

私はテレビを消してベッドに再度身を倒して考える。何か大切なものを忘れてしまっているような気がしてならないのだ。

昨日、私はあの西高に行った。でも、何をするか分からない人たちがいるということは私も分かっているはずなのだ。普通なら一人で行くはずがない。

一応、人から見てかわいい部類に入る容姿をしていることは、あれだけ毎日のように告白されれば分かるものだ。というか、あの頻度だったらされて断る私の方がしんどいよ…。

でもそれなら、何故一人で行ったのか？と考えると、頭の中に靄がかかったようになってそこから先を考えることができないんですよ。

特に、昨夜は昔富士山の麓で起こったみたいな幽体離脱現象が起こった記憶がある。

撃たれた瞬間は気を失ったみたいだけど、ふと気がついたら病院のなかをぶかぶか浮かんでいた。

もはや幽霊だわー。

それより、そこでも何かあった気が…。ここまで釈然としないこの気分は何なのかなあ。

そもそも、私は昨日だいぶ危ない状態だったらしい。朝起きたら看護師さんがびつくりしてお医者さん呼びに行っただし。朝から軽く診察されて、健康そのものだったらしくお医者さんが首を傾げてた。そんな朝のことを思い返しながらぼんやりと外を見ていたら、病室のノックの音が聞こえた。

「ども〜…って、おや？もう起きて大丈夫なのか！良かったな姫！」

うん、うるさい人がきたよ。

「ありがとう国守くん、でもここは病院だからもうちょっと静かにしてよね」

「すまん…」

「あと姫もやめて欲しいな」

「それはいやだな」

嫌なのか。私としても不本意なあだ名なんだけど。

「あだ名？いや、敬称だろ！」

「あ、口に出てた？」

「ああ。それより、何か元気そうだな。もっと怪我ひどいのかと思  
つて心配したんだぞ？我が東高の最高のヒロインだからな、西高  
の奴らに渡すもんか！」

あ、そう。

まあ、国守くんはいつも通りみたいだ。やっぱり事故の後によく起  
こるっていう記憶の混濁かなあ？

「まあ、けが人にはやっぱり梨だと思って持ってきた。また食って  
くれ」

「そういつときって林檎じゃない？ベッドの横で剥いてくれるみた  
いな」

「いやー、俺は梨派だな。ここの棚にでも置いておくぞー…うん？」

窓際の机に置くようとして国守くんが何かに気づく。

「どうしたの？」

「姫宛のメモだな。寝てるときに見舞い客が居たんじゃないか？クソ、先を越されたか」

「ありがとう、見せてくれる？」

「ほい。さて、俺部活あるし帰るわ。またあいつにも知らせてやれよ？」

「あいつ？」

「あいつは…あいつって誰だっけ？」

「私に言われても…」

「…まあいいや、じゃなっ！」

誰のことかな？と思い聞き返すと、国守くんも分からないらしい。

何だろう、この感覚。

誰か私のとて大切な人が、この世界からいなくなっ  
てしまっただよくな…

第9話 幕間（後書き）

3 / 4 タイトル変更

第10話（前書き）

一章です

## 第10話

「これ、どうしようか…」

この世界に来て、数分後。俺の実家帰りは山に数十メートル突き刺さって始まった。

完全に体は埋まっていて、体の動かすスペースもない。吹き飛ばして出ようとしても、魔力とやらが尽きているらしく力が前の世界並みにしか出ないのだ。

「寝てたら魔力って戻るのか…？」

現実逃避気味に俺は呟く。周りはきらきら銀色に輝く石の層である。何かの鉱脈に突っ込んだらしい。

はあ…。

誰か気付いてくれないかなあ…。

暗闇の中にいた時間はかなり短かったが、その中で頭に知識が突っ込まれる感覚があった。どうやら現地の言葉データらしい。意外と気の利く祖父さんに感心した。うん、やはり見直しておかねば。

そして、そのすぐ後に前に光が見える。

さあ、とうとう異世界だ！と気合いを入れて光の中に飛び込んだ瞬間だった。

目が光になれると、下には雲海が広がっていた。

どうやら、俺は高さにして数千メートルの上空に飛び出したらしい。落下まで数十秒という驚異的な高度である。

いくら頑丈でも、この高さから落下したらふつうにミンチになる。

全く気が利いてなかったっ！！

やっぱり祖父さんはジジイでいい！

脳内でそんなことを考えていてもフリーフォールは続行中である。あっさり雲の層を突き抜け、もう地面が見えてきているのだ。ありがたいことに落下地点は海ではなかったが、どうやら山の頂上あたり突き刺さるらしい。

取りあえず体に力を込めて衝撃に備えようとするが、そこでふと俺は気がついた。



体を何か力みたいなのが巡っているのだ。恐らくこれが『真竜』の魔力なのだろう。

取りあえず力加減も分からないし、力を全身の細胞に染み渡らせる。イメージは『硬』、形は紡錘形。

最も衝撃が少ないであろう形を取って、俺はその山の頂上に轟音をたてて突っ込んだ、というわけである。

その結果、数十メートル掘り下げて何とか止まったもののそこで魔力が尽きて、この状況なのだ。

里帰り早々、ひどい目に遭っている。当分は祖父さんはジジイだな。

さて、ロクククライミングをするにはこのフリーフォールのせいで少し心許ない。しかも魔力を使いすぎたせいかわ、渡辺を治療したときよりも疲れを感じているし、眠くなってきた。

「とりあえず、うたた寝をしますか」

そう呟くと、俺は眠気に身を任せた。

頬に触れる感触に俺はふと目が覚める。横に目をやると、綺麗な銀色をした子猫が俺のことを舐めていた。どうやら気にしていてくれたらしい。

「に〜」

「お、起こしてくれたのか。どうもだな」

あまり栄養状態が良くないのか、毛並みがあまり良くない。せつかく綺麗な銀なのだから、しっかり食わせてやれよ飼い主、と思う。

「いい色してるのに、勿体ないなあ」

「ふにっ!?!」

びっくりしたように見つめる猫に、俺は苦笑しながら聞いた。

「おい、お前どこまでどうやって来た?」

「に〜」

猫は上を見上げた。間違いなく、あの穴の入り口から入ってきたのだろう。

「…降りてきたのか」

「に〜！」

自信満々に鳴く猫だったが、最も気になることをひとつ聞いてみる。

「…お前、この高さ登れるのか？」

すると、猫は耳と尻尾をふにゃつとさせて情けなさそうに鳴いた。

「…に〜」

…登れないらしい。

どういってもりで降りてきたのか分からないが、人の言葉も少し分かるみたいだし、飼い主がいなかったら俺が飼いたいくらいだ。

「…まあ、いい。俺が上まで運ぶよ、魔力も戻ってきてるし」

話していて気がついたが、もう魔力は半快はしていた。これだけ魔力があつたら、多分上までひとつ飛びで行けるだろう。

俺は子猫を手に抱えると、周りを魔力で覆う。そのとたん、猫が毛

を逆立てて暴れ始めた。

「にーっ！！」

「っ、大人しくしろ！上までひとつ飛びで行くから！」

「にーっ！！」

猫は大暴れに暴れて引っかいてくる。これはさっさと逃がしてやった方がいいだろうと、俺は足にも魔力を込め始めた。

それを察したのかますます暴れ始める猫をしっかりと抱えて、俺は一言言った。

「ジャンプ！」

足の裏からその魔力を噴出させ、俺は跳躍する。

ある程度手加減をしたので、跳んだ高さもちょうど穴の分の数十メートル位である。

あっさり穴を飛び越えてしっかりと着地してから、手の中の猫を解放してやる。

「ふしゃーっ！！」

「すまん、無理矢理やつて。でもまあ、上に上がったんだから良いことにしてくれ。」

毛を逆立てて怒っているような猫にそう言つと、俺は背を向けた。

「あ、でもお前の首輪似合わなさすぎるぞ。何か似合うもの買い直してもらえよ」

最後にそう言つと、俺はそこから走り出した。まずすべきは俺の力の確認である。自分としては軽く魔力を出したつもりだったが、それでこれだけ猫が怯えてしまうのである。取りあえず自分の力を確認して、周囲に影響を及ぼさないようにしなければいけない。

そんな中にこの猫が近くにいたら絶対に巻き込んでしまうだろう。そう思ったのである。可愛い猫から離れたのだ。さっき辺りを見回すと東の方に広い草原があったし、そこでなら何を試しても大丈夫そうだ。

なお猫と別れたところから草原まで20キロほどあったが、軽く走つて10分そこそこで到着した。

地球と比べて俺の身体能力はかなり向上しているらしい。地球で20キロ走ろうとしたらその三倍はかかっていたからなあ。

私は、どうしたらいいのでしょうか。

獣人族の村で生まれ、そのまま育っていけたらよかったのに……。突然私の髪や毛が茶色から銀色になったのは、今から2年前のことでした。

両親からファルシアと名付けられ、すくすくと育って一人で川の魚も取れるようになっていたころだったのに。

村は突然色が変わった私を嫌い、村の決議で私を奴隷として売ることになりました。母親は反対しましたが誰も聞いてくれませんでした。友達だと思っていた子たちは、目も合わせてくれなくなりました。

もう誰も信じない。

そう心に決めて私は奴隷商人に売られましたが、それを買い取ったのは投げ組という盗賊でした。そこには奴隷が三人いて、彼女たちはみんな獣人でした。

荷物を運ばせるのに楽だったからのようです。投げ組は人間だったので、夜の奉仕のようなことはする必要がありませんでした。異種族同士だと性的欲求がほとんど生まれません。だから異種族カップルはかなりレアだとか。村からほとんど出たことなかった私に、先輩の奴隷の皆さんが教えてくれました。

彼らの奴隷になって二日後、先輩の奴隷の一人が投げナイフの的になって殺されました。事情を聴いて、私は恐怖より先に安堵を感じました。

最後には必ず殺してくれるのです。もう人を信じるつもりもなかつ

た私としては、必ず殺してくれるというこの職場に少し安心しました。

そして、今朝。

なぜか朝から酒盛りを始めた彼らのために、山にある酒の泉から酒をくんだ帰り道にそれを見つけました。

直径1メートルほどの穴。そして、その奥からは生きている人間の匂いがしました。人サイズのときに持っていた荷物は変化したあとは影響がないので、重い酒瓶を運ぶために猫になっていた私はその匂いにいち早く気付いたのです。この世界で一度もかいたことのない匂いでした。

猫の姿の私なら、このくらいの高さからなら落ちても怪我はしない。そう分かっていたので躊躇なく飛び込みました。興味本位で飛び込んだ分、高さの把握が甘かったのでしょうか。思いのほか穴は深く、少しびっくりしました。

そして、穴の底では一人の少年がうたた寝していました。匂いのもと、見たことのないその服だったようです。彼の着ている服は私の見たことがない素材と形をしていました。

私はとりあえず彼の頬をなめ、起こして帰るように伝えようと思いました。

残念ながら、私ひとりでは帰れなかったのです。

帰るとき、彼が魔力で私を覆ったことに驚きました。猫になっているときは感度が高いため、魔力の変化には敏感なのです。大暴れに暴れましたが、彼は私を魔力で覆っただけで一切の干渉をしませんでした。そのおかげで、魔力にこもっていたまっすぐな心持ちだけ

が私に伝わってきました。

だからと言って怖いものは怖いのですが。今まで会った中でいちばん魔力量も多かったですし。

穴を出てからも私は彼を威嚇したままでした。すると、彼は私に背を向けて奴隷の首輪は似合っていないと言ったのです。

私は彼のようなまっすぐな人に買ってもらえていたら、もう少し生きることになれたかな、と思うのです。

そして、投げ組のアジトで私は夕方に殺されると聞きました。何かの儀式の生贄にするそうです。

やっとそのときが来た、というだけであまり怖くはありません。しかし話を聞いていると『悪魔の降臨』と言っていました。そんなこと、本当にできるのでしょうか？



第10話（後書き）

更新速度を戻せるよう頑張ります！

4 / 28 微修正

## 第11話

とりあえず見渡す限り広々とした草原に着いた。まあ、山を一つ下りていることになるが細かいことを気にしてはいけない。どうやら俺は高速道路で並んで走れるくらいの速さになったらしい。

今度あつちに帰ったら名神高速走ってみようか。  
走らないけど。

さて、何をすることなく立ち尽くしていたが俺の荷物は以下の通りだ。

- ・ 制服
- ・ 腕時計
- ・ 水1.5リットルのペットボトル
- ・ 塩一瓶
- ・ 写真
- ・ リュックサック
- ・ スマホ

もうちょっと何とかかなりそうなものではあったが、俺としてはこれだけあったら十分すぎるくらい十分である。これだけあれば、富士山の樹海で快適に俺は生活できる。経験済みだ。

さて、ここからは俺の現状把握である。

こっちに来てから、身体の中に魔力らしきものが存在することは身をもって体感した。というか、数千メートルからの落下で無傷という時点で、俺の魔力のおかげで助かっていることは分かっている。

そこで、俺の力はいったいどのようになっているのだろうか。自分の力を異世界で発揮する、というこの状況に俺は少し興奮していた。だって異世界だもん、男子なら少しは興奮するでしょ？

まず、魔力抜きで挑戦してみた。

全速力で走ると、時速80キロくらい出た。うん、間違いなく高速道路走れそうだ。

さらに石を投げたり、蹴ったり、持ち上げたりしてみたが、大体地球にいたところより一回り強くなっていた。

一回草原の中に巨大な蛇が顔をのぞかせたが、俺の顔を見たたん全速力で去っていった。俺ってそんなに恐怖を与える顔はしていないぞ？全長4メートルくらいで、俺の身体くらいの太さがある蛇だったからたぶん魔物、とかいうやつだろう。

続いて、異世界定番の魔法に挑戦しようとしたが、そこでふと気付く。

魔法の使い方を知らないのだ。

怪我が治せたということは魔法を使える可能性はかなりある。しかも、魔力があるのだから魔法は使えるのだろう。

ところが使い方がわからない。身体を強化することはできても、雷を落とすとか地面を揺らすとか、the 魔法っ！というのができないのだ。

数時間言う言葉を覚えて粘ったが、一切できる兆しは見えなかった。

「もういい、使えなくても戦えないことはないし！」

かなり拗ねたくなる状況だった。  
やっぱりジジイは気が利かない。

続いて、真竜という存在なのだからドラゴンの姿に変身できないか  
と思ったのだが…。

「まず、真竜ってどんなフォームしてたんだ？」

それもわからない。変な形になって戻れなくなっても困るし、俺は  
早々にこれをあきらめた。というか、わざわざ竜の姿になる必要も  
ないし。ないものはできなくてもよいのだ、うん。

しかし、次にジジイにあったときにワサビたっぷり刺身でもごち  
そうすると心に決める。泣かず。

ついでに、竜なのだからドラゴンブレスッ！って言うのができ  
ないかも試した。

「ドラゴンブレスっ！」

すると、魔力が口に集まってきた。これは成功か？と思って口を開  
くと…。

「…げふっ」

げっぶが出た。たまったエネルギーはただ無くなっただけである。あれ？

何度か試してみたがどれも結果は一緒だった。どうやらドラゴンブレスもできないらしい。

うん、俺って真竜だそうだけど、どこも竜っぽくない。

結局、俺ができるのは魔力で身体強化だけらしい。ところが、これは捨てたものではなかった。

足が速くなるとか、頑丈になるとかそれだけではなかったのだ。

目に魔力を込めれば視力がよくなるし、耳なら聴力が良くなった。

ただ単に強化するのではなく、俺のイメージに合わせて変わるらしい。

因みに、足に魔力を込めて全力で疾走したら音を超えた。地面はへこみ衝撃波で周りの草が細切れになったので、これは町中では使えなさそうだ。

高速道路を走ったら車を巻き上げてしまいそうだ。

しかし全力で身体を強化していたら周りから慌てて動物が逃げているのが分かった。強化に費やす魔力を調節して、動物たちが逃げなくて済むようにする練習をしていたら、いつの間にか夕方になっている。

「…っん？」

俺がそうつぶやいたのは、目に魔力を集めて視力を強化していたときだった。遙か遠く、俺がさつき出てきた山の中腹で、何かが動いたのだ。

20キロも離れていて見えるわけがない距離を、魔力強化はなかったことにする。

どうやら、盗賊団の連中が少女を一人、誘拐してきたようだ。縛られて担がれているが、大きさに少女だろう。

連れて行った先には魔法陣らしきものが描かれており、そのそばに銀色の子猫がちよこんと座っていた。

「あれ、盗賊が飼ってた猫なのかよ」

可愛らしかった猫のいけてない首輪のセンスは、どうやらあの盗賊たちのものだったらしい。

その魔法陣の真ん中に、縛りあげられた少女が投げ込まれる。そのとき、薄い緑色の髪の毛が分かれ、先のとがった耳が露わになった。

「…エルフ？」

少女はかなり可愛らしかった。これをいじめてたらいけないだろうに…。

するとそこに猫が駆け寄り、縄に歯をあてた。噛み切ろうとしているのだろうか。それを見た男が駆け寄り、猫を思いつき蹴り飛ば

す。どうやら何か言っているが、耳は強化していないので聞こえなかった。

「…動物虐待だ…ん？」

俺はそうつぶやいたが、少し信じられないものを見てその現場を見つめる。

猫が人の姿になって、血を吐いていた。銀の髪、耳、尻尾がついているから間違いない。猫は彼女だろう。彼女に蹴った男が近づき髪をつかんで魔法陣の中に放り投げた。

彼女はまた果敢にもエルフの縄をほどこうとするが、縄にふれた途端、首輪をつかんで七転八倒する。

「…ということはあの首輪は奴隷か何かか？で、彼女が獣人ってやつになるのか？うーん、奴隷とはえげつないことをする」

日本元在住者としては奴隷制度に好ましい思いが持てない。しかし郷に入れば郷に従え、変革を起こす気はない。

まあ、俺は奴隷は要らないけど。

俺としては、穴の中の出来事を考えると少女が悪者のようには思えない。

「とりあえず穴で俺の心を癒してくれたお礼に、あんな可愛らしい女の子二人をいじめてる大人をやっつけに行きますか」

俺は彼女なんてできたことはないが、あんな可愛らしい女の子を見殺しにするわけにはいかない。男がすたるといふものだ。

「見張りもいるだろうし、何が起こるか分からない魔力は抜きで行きましようか」

ただか20キロほどだ。ちょっと急げば五分以内に着くだろう。そう決めると俺は視力強化をやめ、山めがけて走りだした。

私は運ばれてきたエルフを見て愕然としました。彼女は私の村で、唯一私を敬遠しなかった少女、リリーでした。

私を売ると決めたときリリーは遠くの村まで治療をしに行っていたのです。お別れができなかったのは残念なのですが、こんなところで再会したくはありませんでした。

しかも、彼女を悪魔の依り代にするというのです。

それだけは絶対に阻止する。

そう思っただけで頑張ったのですが、あっさりリーダーに見つかり、蹴り飛ばされました。

「このブス猫っ！」

痛さのあまり変化が解けてしまい、そのまま血を吐きます。

ゲホゲホと咳込む私の髪を掴んで、リーダーは魔法陣の中に私を放り込みました。



「邪魔をするな」

魔法陣の中で私はリリーのそばまで放り投げられました。リリーは意識がない、そう気づいて私はリリーの縄に手を触れました。

そのとたん、首輪がギュツと締まったのです。

奴隷の首輪。

主人の指示に逆らった場合、ただ締まるだけではなく魔術的に直接、神経に痛みを流し込む装置です。それを私は、身を以て体感することになりました。

「誰か、誰か助けて…」

そう呟いて、あまりの痛みには私は意識を失いました。

## 第11話（後書き）

高速道路の真ん中を、車と並んだスピードで走ってみたいと思っ  
たことのある人はいませんか？

## 第12話(前書き)

少し流血描写があります。苦手な方はご注意ください。

## 第12話

「儀式を始める」

そう宣言したリーダーの顔は、破滅への狂気に染まっていた。

「空間をつなぐ銀色の獣人によって開けられた扉からの偉大なる力をお借りし、巫女たるエルフの光を反転させ、闇たる魔王として覚醒させるっ！！」

我らの悲願が叶うぞっ！！」

「っっっオウツツツ！！」「っっ」

その声を皮切りに、地面に描かれた魔法陣が黒い光を放ち始める。その原料の魔力はすべて、獣人のファルシアから奪われていた。

「ああああああっっっっ！！」

ファルシアが苦痛のあまり目覚めて絶叫するが、それを聞いている周りの盗賊たちは何も感じない。彼らの目的は悪魔の召喚、そしてその第一歩たる魔王の誕生である。そのためなら何でもする集団がこの盗賊たちであった。

「ああああっ！！！」

さらに絶叫を続けるファルシアのあちこちから血が流れ、それを受け取った魔法陣が歓喜の色を表すかのように点滅した。そして次の瞬間、魔法陣から真っ黒な魔力が噴出し始める。

それらは最初靄のようだったが、空中で蛇の形を取るとそのままリリアーヌの元へと襲いかかった。

「きゃああああああっっっ！」

蛇は彼女の身体を傷つけることはなかったが、意識が戻り、ファルシアよりも大きな苦痛の声を上げるリリアーヌ。その蛇はいまだに地面の魔法陣とつながっており、そこから黒色の魔力が送り込まれ続けている。ファルシアの身体から生み出される魔力もどんどん減っていて、命も尽きかけようとしていた。

（こんな死に方は嫌ですっ！誰か、誰か助けてくださいっ！）

そう心の中で叫んだファルシアの心には、見たことのない服に鞆を背負った少年が浮かぶ。今は痛みよりも寒さを感じるほどに生命力を魔法陣に奪われたファルシアだったが、人の気配を感じてうつすらと目を開けた。そこに映ったのは、投げ組のリーダーを殴り飛ばす少年の姿だった。

その姿は、心に浮かんでいた姿と同じものだった。

俺は数分後には山に着いた。途中で少女の絶叫が二つ聞こえて、これはまずいと足を速める。

俺の感覚ではこの山の中にいるのは俺を含めて12名。内2人は少女たちで、1人は俺だから3人をたたきのめせばよいと心に決めた。ここは日本ではない。手加減をするつもりはなかった。

気配を殺して後ろに立ち、手刀をたたき込んで気絶させる。なかなか気付かないのでこれ幸いとやっつけていたら、陣の周りに立っていた男たちを5人撃破したところで他のやつらが気付いた。

この間も少女たちの悲鳴は続いている。陣から出てきた蛇はさすがに気持ち悪かった。絶対に触りたくないタイプの禍々しさを持っている。魔術がどうなるかは分からなかった。ので、手を出すことができない。

そうこうしてるうちに、猫少女を蹴り飛ばした男以外の全員を沈めたところで、魔法陣の動作が終わるのを感じた。とりあえず鳩尾に強烈なものを一発ぶち込んで、どうでもいいリードー格は気絶させておく。

術中には何が起こるか分からず飛び込めなかった。ので、終わった気配を察知して猫少女を魔法陣から引っ張りだした。

意識もなく体のあちこちが裂け、出血量が甚だしい。魔力で視力を強化すると、さらに身体に内包する魔力と生命力が枯渇しているのが見て取れた。

これをほっといたら死ぬ。

そう直感した俺は、リーダー格が持っていたナイフで手首の血管を切る。さすがに大きな血管を切ったら結構な量の血が出て、それと一緒にかなりの魔力が持つて行かれた。

しかしその分、彼女の身体に注いだ血は光を発し、傷をいやしていく。

ある程度傷の治りが安定したことを見届けて、俺は腕に力を込める。今度は俺の腕の傷口がすつと閉じ、なかったことのように見えるほど回復する。

「魔力が半分無くなった…」

そう俺は呟く。そういえば渡辺のときには俺はどれくらい魔力を注いだんだろうか。感覚的には同じくらい量の量ではあるのだが。

そして、もう一人の少女のほうに目を向ける。

外傷はなさそうだが、拘束していた縄はあっさり千切れ飛び、髪の色は緑からどぎつい紫に変わっている。肌も白から灰色になっていて、目は真っ赤に染まっていた。さらには額に黒い蛇が巻き付いている。魔力強化した目で見ると、そこから禍々しい魔力が彼女の体を縛って操っているような様子が分かった。

「悪魔チックだなー。やっぱり、これが目的か？」

「キエエエエツツッ!」

それに答えるかのように、少女は奇声を上げた。どうやら意識がないらしい。それと同時に、地面からぬらぬらと光る触手が飛び出してくる。魔法陣の発光は地面が割れたことで止まったが、少女はその様子を変えることはない。

「乗っ取られたかな?しかし、元の姿のほうがよっぽどいいぞ?俺たちの世界でならミスコンに出れるクラスだと思っぜ?」

俺は襲ってくる触手をよけながら言う。当然、後ろの猫少女を襲おうとするやつは遠慮なくたたきつぶした。

「魔力が少ないから節約気味になっ!」

俺はそう言つと、触手の根元が集まっているエルフ少女の背後に回る。ちょうど少女の腰のあたりに、触手の根が突き刺さっていた。

「ふっふ」

俺はその位置に手刀を音速近くでたたきつけ、一刀のもとに切断する。



「ギイヤアアアアアッッ!!」

絶叫するエルフ少女。めっちゃくちゃに鉤爪となった両手を振り回すが、その時には俺は上数メートルの高さに跳んでいる。

「ださいぞー、その鉤爪」

その声に反応して、彼女が鉤爪を上突きだしてくる。しかしこの速度なら、本当に魔力抜きでも何とかなるレベルだった。

「悪魔もどきさん、引導を渡させてもらっぞ」

あっさり正面に回った俺は、ごめんと呟きながら彼女の頭を鷲掴みにする。

「やめてっ!! 殺さないでっ!!」

後ろから猫少女の絶叫が聞こえた。いや、こんな可愛い子を殺すつもりなんて毛頭ないのだけれど。

俺は右手でエルフ少女の頭をつかみ、左手で繰り出してくる鉤爪をさばきながら言った。

「殺すつもりないから、安心してくれ」

取りあえず頭に巻き付く蛇を剥がそうとしたがびくともしない。殺さないと言ったからには無理やりも出来なさそうだし…。

悩んでいる内にも手の鉤爪は攻撃してくるがあっさりいなす。今は…そうだな、頭を鷲掴みにしてぶら下げているんだが、悪魔少女は鉤爪を振り回すだけなのだ。

「魔王にしては攻撃がお粗末だな。触手潰されたらただのただっ子か」

そんなことを言っではいるが、少し攻め倦んでいる。どうやってこの蛇引き剥がしてやるうか…。

助けを求めて後ろを見ると、猫少女はまた意識を失っていた。

…どうしよう。

そのとき、頭に巻き付いていた蛇の口が開き、俺の腕にかみついた。

「痛っ…、何しやが…る？」

魔力の残りほとんどが流出したことで気がついたが、その蛇に視線

を向けると疑問系になってしまった。

吸い出した魔力がまずかったのか、痛みに悶えているらしい。攻撃して自滅したようだ。

しかし俺の血も結構抜けている。つまり、真竜の血はあの蛇にとつて猛毒か…。

そうこうしているうちに少女の暴れるのが止まり、徐々に肌の色が白く戻っていく。それに応じて蛇も身悶えを小さくし、痙攣するばかりになっていった。

髪の毛も緑になり、蛇の体積も小さくなっていった…。

エルフ少女は元の姿に戻り、俺に頭を掴まれたまま脱力し、カラントと音を立てて少女の額から真つ黒な石が落ちた。嫌な感じのする魔力が詰まっていたので、これが根源らしい。

「…えー、終わり？何だかなあ…。こいつを始末すれば終わるかな？」

最早何がしたかったのか分からない悪魔もどきだった。あっさり自滅って、どうかと思うよほんと。

別に俺戦闘狂じゃないからいいんだけどさ。

残っている魔力はこの世界に来たときの100分の1位だ。取りあえず、この石を消滅させるくらいは残っている…と思う。

「よっこいせつと…」

俺はエルフ少女を地面に寝かせて石を拾い上げると、手の平に魔力をのせて握りつぶす。

バラバラに砕け散る石と、そこにあった魔力が俺の魔力に食い荒らされる感覚。

「これでおしまいですか…あゝ、アイツ等がいたじゃん」

周りを見回し昏倒させた盗賊たちを思い出して、まだまだ続く俺の労働のため息をついたのだった。

## 第12話（後書き）

感想・評価お待ちしております。

2015/07/14 一部ファルシアの名前がフィオになって  
いたのを修正

### 第13話

近くにアジトらしき小屋があったのでそこに少女二人を運ぶ。ついでにそこにあつた縄で盗賊たちを縛り上げ、木に一人ずつぶら下げた。

盗賊の天日干しだ。

俺は、相手を倒すことに躊躇はしないし遠慮もしない。けれど無益な殺生はするつもりもないので、今回の盗賊たちは殺すこともなかった。

なるだけ殺すという安易な手段に頼らないように師匠に言われ続けたし、取らないで済む方法を徹底的にたたき込まれた。

緊縛術なんて向こうの世界ではほとんど必要のない知識だったが、こちらに来て早々役に立っている。

師匠は俺のことを知っていたのだろうか…？

まあ、そういうわけで俺は盗賊たちは殺さなかった。殺すまでもない雑魚だったから盗賊のなる木が出来上がった、ということである。逃げ出せないように縛ってあるし、取りあえず放置しておこう。

小屋に帰ったが、少女たちはまだ意識が戻っていなかった。体調が悪いかいいうわけではなく、ただただダメージが大きかったのだろ

う。  
食事でも作ろうか。

台所に行ってみると、並んでいるのは酒、酒、酒……。盗賊ってこういうものなのかね？

あちこち探っていると、しなびた野菜や薫製肉ばかり出てくる。倉庫には一応米らしいものがあつた。

「おう、米だ！しかもジャポニカ米」

日本で食べられているのはジャポニカ米で、粘り気が強いのだが、世界的にはパラパラになるインディカ米が食べられていたりする。ここにあるのはジャポニカ米っぽい形をしていた。

「うーん、お粥作つとくか。あの子たち、お粥食えるかな？」

調理器具はよくわからないので、家の前で鉄の器を使って飯ごう形式で作る。だって、魔力コンロの使い方とか分かりませんから。塩らしきものも見つけたので、取りあえずシンプルなお粥だ。やっぱり、お粥の一番はこの塩味の粥だと思っただよな。

さて、作り上げて家に戻るとちょうど猫少女が目を覚ましたところだった。

「お、目が覚めたみたいで。体調は？」

「は、はい。大丈夫です…あっ！リリーは?!」

「エルフ少女なら隣で寝てる。怪我してたんだから落ち着いて寝とけて。彼女の傷はもう治してあるから」

慌てて飛び起きようとする少女を押しとどめ、俺は言う。今は治ってはいるがあれだけのダメージを負っていたのだ。少しくらい休まなければいけないだろう。

少女をもう一度ベッドに押し込むと、彼女が再度口を開いた。

「良かった…元の姿みたい。あなたですよ、助けてくださったのは。本当にありがとうございます」

「気にするな、成り行きだし。まあ、これは穴の中で一緒にいてくれたお礼みたいなものと思ってくれ」

「あ、分かっていたのですか！すみません、あのときはびっくりしてしまっ…」

「それこそ気にするな、俺が力加減が下手くそなんだし。彼女を心配するのも良いけど、とりあえず体調整えないと。お粥作っただけど、



食べる？」

「…おかゆ、ですか？何ですか、それ？」

何と、米はあっても粥はないらしい。まあ、冷めたら美味しくないし取りあえず食べてもらおうか。

「これ。あんな怪我した後だから、取りあえず軽く食べられるものを用意してみた。布団の上で食べれるようにお椀によそってあるし、のんびり食べて」

「は、はい…。では、お言葉に甘えて…」

お椀から一口すくって口に入れた少女の目が丸くなる。

「…マズい？」

「いえ、美味しいですっ！どうやって作ったんですか！？」

「うーん、煮ただけ？」

「そうなんですか！」

びっくりしたように食べている少女に、俺の心中はガッツポーズだ。少なくともこの少女の味覚は俺に似ているのだろう。作って喜んで

もらえる嬉しいんだよね。

そうこうしているうちに少女はほとんど食べてしまっていたが、少し物足りないのか名残惜しそうにお椀を見ていた。

「…お代わりあるけど、欲しかった」「本当ですかっ!」

…食いつき早いな。

さて、作ったものの全てを平らげてしまった少女は、少し心配そうな顔をして言った。

「リリーの体調はどうなんですか？見たところ外傷は大丈夫そうですが…」

「んー…あの子リリーって言うの？名前知らないんだが」

「あ、自己紹介をしてませんでした！

私はファルシアです。獣人の猫族で、奴隷身分なので名字はありません。それで、彼女はリリアーヌ・ミルエノン。エルフです」

「俺は辰野謙人。謙人でいいけど、何というか…異世界人？」

「ケントさんですね、私は縮めてファルと呼んでください。よろしくお願いしま………異世界人ですか？」

少々処理に時間がかかったらしい。まあ、目の前の男が突然「異世界人です」なんて大真面目に言ったら、普通固まるわな。うーん、何があるか分からないし真竜情報は伏せておこうかな。

「まあ、言つてて何だが信じられる？」

「えっと…簡単に確かめられる方法があるので試してもいいですか？一つやっていただきたいのですが」

「何すればいい？」

「手を出して、ネームプレートって言ってください」

そのまんまだな。

「えっと…ネームプレート？」

俺が右手を出して言ったとたん、きらきらと光が手の平に集まり、小さな金属板を作り出した。

「おお、魔法っばい！」

「はい、この世界にいる人ならみんな使える魔法です。身分証明になりますし、犯罪歴や生まれたところも表示されるので。この魔法は絶対に偽造できない魔法の一つなんです」

「へえ〜……すごいなあ」

簡単にできる戸籍だなあ。

俺はどういう表示になっているかというところ…。

名

辰野 謙人 (17)

パーティ

無所属

出生地

不明

これだけなのか？と拍子抜けがしたが、まあ、5×3センチくらいのサイズにはこれぐらいだろう。

俺がプレートをファルに渡すと、申し訳無さそうにファルが言った。

「異世界人であつても、悪魔族なら何もしないわけにはいかないのです。疑っているみたいでごめんなさい」

「あー、悪魔族も異世界人なんだっけ。でも、それだけでどうやって見分けるんだ？ほとんど情報無いのに」

不思議だったので俺は聞いてみたが、ファルはプレートを布団の上に置き、申し訳無さそうな顔で言った。

「騙しているみたいでごめんなさい。…オープン」

ファルがそう呟いた途端。

俺のネームプレートがまばゆく光り、A4サイズくらいまで大きくなった。

「ちよっ…え？」

名

辰野 謙人（17）

パーティ

無所属

出生地

不明（異世界）

種族

真竜

父親

不明（死亡）

母親

シャルナ

（辰野 蒼子）

真竜の長（死亡）

住所

なし

職業

無職

個人情報がつ！！

っていうか伏せときたかった真竜情報までつ！！

「ちよっおい、ファル！騙したみたいってこれかい！」

俺は少しびっくりしてファルに言った。不審者なんだから、こんな

感じに身分審査は来ると思ってたので怒りはしないけど…。  
まあ、親のところまでオープンになるとはね…って、だからオープンか。

ところがファルから反応が返ってこない。不審に思っただけでみると、ファルの顔色が真っ青になっている。

「…あ…し、しん、真竜？」

「…おい？」

俺が固まっているファルの目の前に手を伸ばした瞬間。

パフンツと可愛い音を立ててファルが猫になり、毛布の中に潜り込んだ。

「…えつと…」

手を伸ばそうとしても、がたがた震えている所に触ったら逃げられるだろうなと思う。

大抵竜って神聖とか邪悪とか、何か畏怖の対象になるし。

「…じつなりそうだったから言いたくなかったんだよなあ…」

俺は大きなため息をつく羽目になった。



### 第13話（後書き）

『シャルナ』は母親のこっちの世界での名前です。

『辰野蒼子』は母親の地球での名前です。

父親はこっちの世界に来たことがないので情報がなく、不明になっています。

## 第14話(前書き)

ブックマが40件越えしていてびっくりしました！  
いつも読んでいただきありがとうございます！

## 第14話

結局、ファルは毛布から出てこなかった。触ろうとすると逃げないが、体がガチガチになっていて恐怖で動けないらしい様子が明らかだった。

エルフ少女も目を覚まさないなのでこのアジトで夜を越すことになったのだが…。

朝になると吊していた盗賊たちがみんな死んでいた。

どうやら口の中に隠していた毒を飲んだらしい。魔術は使わなかったようなので、気づかなかったのだ。

朝起きて外を見たら、全員事切れていた。少女たちに見せたい風景ではないし、埋めてしまうことにする。

「身体強化って楽に穴掘れるな…」

盗賊たちの人数分穴を掘り、埋めてやろうと考えたが、こんなことで向こうの世界の名残である制服を汚したくもないし、アジトに転がっていたそこそこな服に着替える。制服は畳んでリュックにしまい、服を着てみると意外と着心地が良い。何かの装備とかで追加の機能があるのだろうか？伸縮性のよい茶色のズボンに、白いTシャツだった。これでは肌寒いので少し漁ると皮のジャンパーもあった。革ではなく皮で、きれいなめしているとは言えないので、ボツにした。ということと、俺が選んだのは黒いセーターだ。

こうして、着替えも終わったところで全員を埋めてやった。俺が直接手を下したわけでもないが、間違いなく死んだのは俺のせいなのだから。

俺が朝に手を合わせる相手に、両親に加え名も知らぬ盗賊たちが加わった。

全て埋めて手を合わせた頃に、日の出を迎えた。今度は朝ご飯を作ることにするが、米しかないこの台所事情ではどうしようもない。何か狩りとかが出来ないかファルに尋ねようと小屋に戻ると、ファルはもう起きていて人の姿に戻っていた。そして、俺の目の前で土下座をする。

「申し訳ありませんでした真竜様。私はもうすでに絶滅したと言われている真竜様を見たことが無く、大変失礼な態度を取ってしまいました。私の命で償いますので、どうかリリーは見逃してください。どうか、どうかお願いいたします！」

嫌だな、これ。

化け物扱いじゃないけど、こういうのは嫌いだ。俺はそこで、ファ

ルに言った。

「じゃあさ、一つだけお願いしてもいいか？」

「何でも、御命じください、何なら命でも…」

「命令じゃなくて、お願い。」

俺な、前の世界では身体能力が高すぎたんだ。小さい頃に鬼ごっこって遊ぶをやっつけていてさ、本気で追いかけたら俺は数秒で捕まえていたんだ。鬼ごっこってわかる？」

「え、ええ。鬼役が一人いて、逃げる子役を追いかけるんですよ？」

突然話し出す内容にファルは戸惑っているらしいが、構わずに俺は続ける。

「そう、それで、あまりに俺が速すぎてだれも俺を捕まえられないし、最初の鬼を俺にしても数秒で捕まえてしまう。こんな俺にいたあだ名が、『化け物』だったんだよ。」

それから俺自身はその能力を隠して人と同じような生活を送ってきたし、変な能力はあっても人間だと思ってる。能力を見せて化け物じゃないって言うてくれた人も居ないことはなかったけれど、辛かった。ところが突然、俺は『真竜』なんて言われたんだよ。それでこの世界に来ただけだけど、別に竜になってウハウハしたいんじゃない。そりゃちょっとくらい男の子の夢が叶うかやってみただけさ、そんな都合のいいことは起こらないんだ。

だからさ、俺は真竜なんかじゃない。実際、竜っぽい力はいっさい使えないんだ。

というわけで、お願い。

頼むから普通に接してくれないか？俺はただの料理がうまかった通りすがりの人だよ。ダメか？」

「えっ、でも…」

「ただのお願いだし、ここの常識というものを俺は何も知らないから、教えてくれたりすると嬉しいんだよ。だから、さっきみたいに怯えなきゃいけないんだったら俺はファルから離れた方がいいんだと思う」

「……」

とりあえず思ってることを俺は伝えた。後はファルがどう考えるかだ。

「…では、騙してしまったネームプレートを私の分もお見せして、もうケントさんが真竜かどうかは考えないことにします」

「…ありがとう」

何とかなつたみたいだ。流石にトラウマをビンビンに刺激するから、あの態度はきついんだよな。

「ケントさん、ネームプレートを見せるとき、他人に手渡ししてしまつと私みたいにオープンの一言で開示出来てしまいます。誰かに見せるときは『ネームカード』です」

名刺、ね。

「私のお見せしますね。ネームプレート」

ファルは昨日の俺のようにネームプレートを作り、俺に渡してきた。別に個人情報を見たいわけじゃないけど、これで落ち着くならそれで良いか。

「えつと…オープン」

名

ファルシア（17）

パーティ

無所属

出生地

ドレア村

種族

獣人族 銀猫

父親

ケルト・ニネルナー（死亡）

母親

ミシエル・ニネルナー

住所

なし

職業

無職（元奴隷）

「うん、ありがとう」

俺はそう言ってネームプレートを返したが、ファルは自分のネームプレートを見つめている。

「いえ、別に……って、あれ？私、奴隷じゃないのですか？」

「あの首輪か？治すついでに外したんだけど壊してしまったみたいだ。あっちに置いてあるけど」

俺が指さしたのは真っ二つになった首輪だ。ああは言ったけど、実は血をかけて治してたら勝手に割れて外れていた。

びっくりしたぞ？ファルを持ち上げたら首輪が外れて落下したんだ



から。

「…普通壊せませんし、壊そうとしたら奴隷は死んでしまうのですが…。いえ、でも外して下さってありがとうございます、嬉しいです」

ファルはそう言うと、ぱつと明るい笑顔を俺に見せた。

「ま、気にするなよ」

仲間も友人も、奴隷なんかじゃないからな。

俺はこっそり呟いた。

少し落ち着いたところで、俺は本題を切り出す。

「あのさ、このエルフの…リリアー又だっけ？彼女の様子のことなんだけど」

「はい、一晩眠りっぱなしみたいですね…。結局、リリーに何があ

「ったんでしょっ?」

やっぱり親友のことはとても心配らしい。ファルも彼女を撫でながら聞いてくる。

「たぶん、悪魔?みたいなのが彼女の中に入ろうとしたんだと思うけど。まあ、色々あってその元凶みたいな黒い結晶は消したら、見た目だけは元に戻ったんだよ。精神、というものがどうなっているのかは分からないな」

「やっぱりですか…。悪魔降臨とあの盗賊たちは言っていましたから。確かに、悪魔の魂を詰め込まれたら、せ、精神が…」

ファルの顔が歪み、涙が目から零れる。

「精神に働きかける魔法っていうのはないのか?」

「…一応あるのですが、エルフの特性魔法です。私には使えません」

特性魔法?

エルフ固有ってことだろうか?

「特性魔法って?」

「えっと、種族固有の魔法のことです。人族にはありませんが、エルフ族は生き物の魂と会話する精神魔法、魔族は物に自らの感覚を繋げる感覚魔法、獣人族は自らの血の中にある種族に変身できる変化魔法があります」

「なるほど。確かに、エルフの魔法なら何とかかなりそうな気がするな。だったらエルフの里に向かうか」

ありがたいことに、何とかなる方法がありそうだ。俺としてはせっかく助けようとした少女が目覚めない、みたいな嫌な話はごめんだからな。

「でも、ここからは歩いて5日くらいかかります。そんなのではないの？ 体力が保たないのではないのでしょうか？ 食事も取れそうにありませんし……」

「うーん……」

確かに、飲まず食わずで二週間は絶対にだめだ。1日で着くとすると……。

歩いて5日なら220キロくらいだろうか。俺の魔力無しの走りが時速50キロそこそこだから……。

「俺が全員背負って走れば、多分1日かからないぞ？」

「……………」

ファルは固まっていた。失敬な！嘘じゃないぞ？

「ファルはごめんだけど猫になつてもらつて、俺の鞆の中に入る。で、俺がリリーを持って走ればいい。そしたら走りやすいし」

「…分かりました。まあ、私の常識で測れる話じゃ無さそうですし…。お願いできますか？」

「任せろ！ただ、エルフの里の方向は教えてくれるか？」

「ええ、時々鞆から顔を出して方向を確認します。そうしたら迷うこともないでしょう」

「よし、じゃあエルフの里へ行くか！」

## 第14話（後書き）

投稿は二日おきを頑張って維持します！

## 第15話

俺とファルは手早く準備を済ませる。水はあるので山の中の食べられる草を集め、まとめてリュックに放り込んだ。

「これくらいで、何とかなると思います。後は私が猫になってこの鞆に入れば良いですね？」

「うーん、容量的に猫サイズでも入らないかもしれない…。俺が魔力で覆うアッって、やっぱり怖いかな？」

ここで問題発生である。俺の鞆はそんなに大きい方ではないので、食料を入れたらパンパンになってしまったのだ。猫のファルを肩に載せていても、魔力で覆っておけば安心なのはあの穴での一連の出来事でわかっている。そこで聞いてみたのだが…。

「…えつと…」

ファルは分かりやすく顔を引きつらせた。どうやら、やっぱりあのジャンプは怖かったのだろうか。

「ごめん、なら取り敢えず食料を抜いておいて、その場で調達しようか」

俺はそう言って鞆の中身を整理し直そうとしたが、その手をファルは押しとどめた。

「いえ、嫌というわけではありませんし、前回怖かったのですがまあ、背に腹は変えられません。ケントさんは乱暴なことはいししないと信じていますし、その案で行きましょう」

俺はエルフの里に向け、昨日無駄な魔術の練習をしていた草原を突っ切っていた。なるだけ揺れないように気をつけてはいるが、それでも時速40キロそこそこで走っている。

恰好としては、結局俺は鞆をお腹向きにかけ、背中にはリリーを背負うことにした。ファルはリュックと俺のお腹の間に体を入れ、顔をリュックとの隙間から出している。

しかし、これだけの荷物を担いでもほとんど重さを感じない。魔力を使っていないというのに、筋力の上昇には驚くべきものがある。俺としてはなかなか便利がいいのだけれど、また気持ち悪がられるのは嫌なものだ。

「本当に、足速いですね…。」

「ファル、猫の姿でも喋れるのか？」

「ええ、魔力切れや精神的にきつい状況のときの獣化でなければしゃべれますよ。というか、その時の知能は本当に猫並です。ですから今なら途中で方向の指示もできそうです」

「だったらさ、今の俺ってこの世界じゃどう思われるか分かるよな？異常な感じ？」

俺としてはかなりこれは重要事項だ。どれくらい力を抑えるべきなのか分からないし、目立ちたくないからこそエルフの里に行く前にその辺りの力加減は出来るようになっておく必要がある。

「そうですね…。真竜とばれたら間違いなく怖れられて、下手したら討伐隊が組まれると思います。でも、それがばれないなら達人なのかと思うくらいで済むと思いますよ？昨日に比べて魔力量もかなり少なく感じますし、そのおかげで恐怖感ありません。感じられる量はエルフと同じくらいですし」

「あれ、そう？」

そう言えば、昨日この世界に来た時に比べて魔力がかなり少ない。具体的に言っと、八分の一くらいだろうか。俺としては原因は間違いないく治療だと思うのだが、それを言ったらまたファルが気にするだろうし黙っておこう、と考える。別に魔法が使えないのだから魔力があってもどうってことはない。それに、身体強化は魔力効率が



良すぎるのだ。もう死にかけている誰かを治すほどの魔力は残っていないさそうだが、それでも今の魔力があれば俺自身は問題ない。魔力で覆うのは、魔力消費と違って体と繋がってるからまず減らないし、俺の能力は全部、魔力の使い道がないんだよな。

「ええ、ですが誰かとパーティを組んでSランクにまで到達したら、もうどんな技をふるってもそういうものだとな得されると思っていますよ？」

「パーティ？」

「ええ、この世界はパーティを組むことで、魔物退治などの依頼をこなすんです。パーティが強ければ強いほどランクが上がり、ランクに応じて手に入る情報が違ったりするんです」

「そうか…。ランクって何があるんだ？」

「そうですね、SからGまでありますよ。Bは50組、Aは20組、Sは10組いて、順位が付けられています。Cから下は雑然と並んでいますね。Dランクにいたら宿屋などでかなり良い待遇をしてくれるそうですよ」

「なるほど…」

「ええ、ですからケントさんもリリーをエルフの里まで連れて行ったら、首都に行くといいと思います。そうしたら引く手あまただと思いますし、生活も安定するはずですよ」

「勧誘があるってことか」

「はい」

「まあ、今はファルとエルフの里を目指すことに集中するさ。後のことは後だしな」

「…そうですね、運んでもらっている身ですけどよろしくお願いします」

ファルは色々と話をしてくれたが、俺としたら首都でパーティ勧誘を受けるつもりはない。少なくとも、化物扱いはやめてと言って、それを守ってくれるファルは俺としたら渡辺の次に話を聞いてくれた人なのだ。拒否されないなら、ファルと一緒にパーティを組めると嬉しい、と俺は思った。

そんな感じで数時間走っていると、ファルが眠たそうに欠伸をするのが見えた。

「方向はこっちであってるんだろ？ だったら少しの間寝てるといい。魔力で覆っとくから落ちたりもしないから」

「…ふぁい」

ファルがそのまま眠り込むのをちらりと見て、俺はさらに揺れないよう気をつけながら走った。

リリーはまだ、意識が戻らない。

ケントさんが真竜である、ということには本当にびっくりしました。お話の中では、真竜は横暴を極め、気に入らないことがあつたら周りにその苛立ちをまき散らしていました。

もうこの世にはいない、伝説の存在だったはずなのですがネームプレートは嘘をつきません。私はそんな相手を騙してしまったのだと思うと、横にいたリリーを殺してしまおうと思いました。

それでも、ケントさんは私に話してくれました。口に出したい話ではなかったはずなのに、少し過去のことを話してくれました。

私も、ただ突然毛の色が変わっただけでひどい目に遭わされていたのに、私はケントさんに同じことをしてしまっていたのだと気づきました。

きっと、ケントさんはお話の中の真竜とは違います。作ってくれたお粥は本当に美味しかったですからね。

そんなわけで、私たちはリリーのふるさつであるエルフの里へ向かっています。昨日余りにびっくりして、怖かったのでほとんど眠れていなかったのですが、ケントさんも揺らさず走ってくれるので私はうとうととしてしまいました。

「方向はこっちであつてるんだろ？ だったら少しの間寝るといい。魔力で覆つとくから落ちたりもしないから」

「…ふあい」

辛うじて返事を返し、私は眠り込んでしまったのですが…。

…夢を見ました。

見たことのない服を着た幼い子供たちが駆け回って遊んでいます、露骨に一人が仲間外れにされています。

「…ケントさんだ」

見たことのない風景でしたが、何故かケントさんがどれか分かりました。これはきっと、ケントさんの記憶です。魔力を通じ私に流れできてしまっているのだと思います。だからでしょうか、

「…つらい」

そのときに思ったのであるうつらい思いが伝わってきます。こんなに幼いときにこんな風に避けられたら、ひねくれた人間になってし

まってもおかしくないと思います。でも、ケントさんは真っ直ぐなままなのですから、どれだけ辛かったことでしょうか。私も外見の変化だけで扱いがごろっと変わってしまいましたが、それを経験しながらケントさんにあんな態度をとってしまったことは恥ずかしいです…。

「…あれは、今のケントさん？」

いつの間にか場面が変わり、今着ている服と同じものを着ているケントさんが、よく似たデザインの服を着た可愛い少女と歩いています。その風景は、訳もなく私を刺激しました。

「ここは、ケントさんのいた世界なのでしょうか？あんな可愛らしい女の子と仲がよかったんですね…」

そう呟きながら、ケントさんの思い出の風景を見つめます。これから和やかに少女とデートでもするのだろうかと思ったのですが、目の前で少女は怪我を負い、その場に崩れ落ちました。

そのとたん私に流れ込んできた悲痛な感情は私にとっても余りにつらいものでした。それこそ、幼い頃の思い出とは比べものにならないくらいです。

「…もう、見られませんか?!」

私は目を閉じ耳を押さえて、その場にしゃがみ込んでしまいました。こんなつらい思いをしているなんて、知らなかったのです。もう二度とケントさんにあんな態度をとらない、そしてあの少女の隣にいた時の笑顔を、ケントさんが私の隣でも浮かべられるようにしよう、と心に決めました。

あんな態度をとってしまった、罪滅ぼしに…。

## 第15話（後書き）

100mを9秒で走ったらちょうど時速40キロです。ちなみに謙人はこれより早いペースで数時間走っていることになります。

ポルトもびっくりってやつですね。

05/05 ランクの人数を調整

## 第16話

軽く走つて6時間くらいだろうか。

途中に30分程だけ昼飯を食べて休憩を入れたが、走り続けた結果日が暮れる前にエルフの里に着くことが出来た。ファルも元の姿に戻り、俺の横に立っている。俺の想像していたとおり、エルフの里は森の中にあつたのだが…。

「…でっかいなあ…」

「やはり、いつ見ても世界樹は大きいです」

森の真ん中に先が見えないほどの木が聳えていた。おそらくはスカイツリーより高い。どうやったらそこまで成長するのかはさっぱり分からないが、少なくともあれだけ高い木は前の世界にはなかった。そうやって俺とファルは世界樹を見上げていたが、背中のリリーを治してもらいにきたのである。あまり驚いてばかりではいられない。

「ファル、この中にエルフの集落があるのか？」

「はい、でも部外者は入れません。ですから誰かを呼ぶ必要があるのです」

「どっちやって呼ぶの？」



「…来るまで待つ、しか私は知りません。エルフでない私たちが勝手に入ってはただ森の中で迷うだけなのです。森が魔法で惑わしているのだとか」

「かなり排他的な種族だな。まあでも、このままじゃリリーが衰弱する一方だ。取り敢えずあの世界樹を目指してみるか。世界樹のそばにエルフ集落があるっていうのがセオリーだろうし」

「というか、植物とお話しするんだろうから世界樹にエルフがいないはずがないだろうし。」

俺が目を強化したら魔法での幻惑は見抜ける…と思う。

「迷ってしまいませんか？森の中に入ってしまうと世界樹は見えませんか？」

「今世界樹見えてるんだし、この方角に走り抜ければいいだろ？迷わせるのなら目を閉じればいい」

「…この森の中を目を閉じて歩くのですか？」

「いや、歩くんじゃないって走る」

「否定するのはそこなんですか？まあ、いいですけど…」

ファルは呆れたように俺に言う。まあ、動かない植物くらいなら目を閉じていても避けられるから問題ないと思っていたのだけれど。

「じゃ、もう一度猫になってくれるか？後一息、軽く走るぞ」

「分かりました、お願いします」

ファルは軽い音を立てて再度変身し、リュックと俺の間に潜り込む。しっかり収まったことを確認してから俺は魔力を展開し、全員を覆った。

森はそこそこ広い。ちょうど大阪の埋め立てたテーマパークくらいはあるだろうか。そしてその中心にそびえ立っている世界樹からは、かすかに魔力が感じられていた。ファルは気づいていなかったようだが、それは恐らく世界樹から染み出す魔力である。あの魔力は暖かい感じがしたから、そこに集まらないはずがないと考えたのだが…。

「木が動かないっていうのは大嘘かいつ！」

目を閉じて走っているのだが、森の木々が周りであちこちに移動しているのが分かる。リリーというエルフを連れているからか攻撃はしてこないが、ちょうど壁が動きまくる迷路のようなものである。目を開けていたら一瞬で迷ってしまうに違いない。

「ケントさんっ！エルフが横を走っています！」

ファルの声に、もう少し魔力を使い感覚を広げると、植物の気配に混じって弓をつがえるエルフの気配が分かった。

「いきなり攻撃かよっ！」

そう吐き捨ててジャンプしたとたん、ねらい違わず俺の足のあったところに矢が突き刺さった。

「ファル、リリーの本名何だっけ？」

「リリアーナ・ミルエノンです！」

「ありがとう！」

俺は急停止すると、また目の前を矢が通り抜けていく。気配からすると、どうやら二人増えて三人で俺たちを狙っているようだ。矢をつがえなおしている隙に、俺は叫んだ。

「俺たちはエルフであるリリアーナ・ミルエノンをここに運んできた！彼女は重態で治療は一刻を争う！俺たちでは治せない、エルフなら出来るのではないかと思って連れてきたから、治してくれ！」

それを聞いて、動揺している気配が伝わってくる。そこで俺は彼女にかぶせていた魔力を解いて、エルフたちが潜んでいるらしい木陰

に姿を見せた。

「……！！」

無言の驚愕の気配が分かる。そのまま少し待っていると、ひとりがすごい速さでこの場を去るのが分かった。誰かを呼びにいったのだろうか。そして、残りの二人がこちらに近づいてくる。

「…ファル、エルフが寄ってくるけど人に戻らなくてもいいのか？」

「はい、エルフなら獣人が獣かはすぐに見抜いてしまいますので。そのままでも大丈夫だと思います」

そんな風にファルと話していたら、一人のエルフが姿を見せた。もう一人は隠れて様子をつかがっているらしい。

「そこにいらっしやるのはリリアー又様か？」

「…身体に怪我はありませんが、意識が戻りません。私は彼女の友人のファルシアと申します」

ファルが俺の鞆から降りて挨拶をする。ここからは俺は黙っておこう、ボロが出そうだし。

「…獣人か。銀猫、だな。間違いない、お前たちはリリアー又様の関係者だろう。少し待て、すぐに人が来る」

「…失礼ながら、証明するものは何もありませんのに信じて下さるのですか？」

「銀猫の話はリリアー又様からよく聞いている。その特徴に合っているから話は聞いているが、その男の話は聞いたことがない。だからリリアー又様の友人とはいえ用心させていただく」

「分かりました、リリーをよろしくお願いします」

暇なので俺は森の気配を探っていたが、そこで俺の魔力抜き尽全力くらいで近づいてくるエルフをとらえた。

「ファル、誰か来たぞ」

「えっ、本当ですか？私の鼻では何も分らないですよ？」

「結構な実力者なんじゃないか？ものすごく速いし」

俺がファルに伝えてる内に、そのエルフはもうすぐそばまで近づいていた。どれだけ強いんだろうと身構えると…。

「リリー！リリー！どうしたの！どこなの！」

木が道をあけ、そこをひとりのエルフの女が叫びながら疾走してきていた。それを見た見張り役のエルフは、目を剥いて叫び返す。

「族長っ！！何故貴方が来ているのです！治癒師を呼びに行かせたでしょう！」

「私が治癒師よ！娘を救えない治癒師なんて木と話せないエルフ並よ！」

どうやら母親だったらしいが…。

「リリーってえらいとこの娘だったんだな…」

「私も知りませんでした。リリーはあまりエルフの話をしてくれなかったのです…」

俺とファルが族長という言葉にびっくりしていると、そのエルフは一直線に俺の方へやってきた。髪と目は緑色で、リリーとよく似た容姿をしている。つまりかなりの美人で、娘を心配するあまり俺に迫っているのだろうがちょっとキツイ。怖い。

「運んでいただいてありがとうございます。私はリリアーナの母親のカラン・ミルエノンです。早速ですがリリーを診させてもらいますね」

「はい、お願いします」

俺は数時間ぶりにリリーを下ろす。重かったわけではないけれど、揺らさないように注意し続けるのは少ししんどいものがあった。が、当然口には出さない。だって男だからな、女の子には良い恰好を見せたいじゃないか。

カランさんは俺からリリーを受け取ると、右手を淡く光らせ、体中にかざし始めた。気になるので目に魔力を集めて見てみると、その光はリリーの体に広がり異常を調べる力のような感じだった。暖かい光で、一時期悪魔もどきが発していた魔力とは対照的だ。例えるならカランさんは春の日差しで、悪魔もどきは首筋にこんやくを当てる感じだろう…。  
うまく例えられていないな。まあ、いい感じとやな感じ、というわけだ。

そんなことをつらつらと考えていると、カランさんの手の光が消え、カランさんが口を開いた。

「外傷は完全に治っています。そして命そのものには別状はないので、おそらく精神的なものによる昏睡なのでしょう。今から彼女の心を訪ねます。その間、アルノーは周りを警戒しなさい」

「はいっ！」

これぞリリーの目が覚めると良いのだが…。



## 第17話

治療を始めると言ったカランさんだったが、その前にファルに尋ねた。

「その場にいらっしやったのですよね、ファルシアさん？よろしければ、どのようなことが起こったのか教えていただけますか？」

「あ、はい。投げ組という盗賊団がリリーをさらってきたのは昨日の夕方のことです。私はそこで、何かの魔法陣を起動させる餌として扱われました。私から魔力を奪い取り、その魔力が質を変えて真っ黒になったところまでは覚えているのですが、そこからはあまりの痛みで意識が曖昧になってしまいました。そこからは、ちょっと……」

ファルが申しわけなさそうに説明する。しかし、あの魔法陣は魔力だけではなく、彼女の命すら搾り取るものであったというのに、それだけ覚えていたとは驚くべきことだろう。

「そうですか…、ありがとうございます。そちらの方は何かお気づきになったことはあるでしょうか？」

カランさんが俺にも聞いてくる。俺はどれくらい言おうか悩んだが、言わなかったことでリリーが死んでしまったらファルはひどく悲し

むだろう。あれだけ心配していたのだから、とても仲が良かったに違いない。

「俺はリリアー又さんの友人というわけでもなく、ただの通りすがりです。通りがかったときは儀式らしいものが始まり、二人の少女が苦しみだしてからでした……」

結局、俺は起こったことのほとんどすべてを話した。話さなかったのは自分が真竜であること、そして噛みつかれたときに血と魔力を抜かれたことだけだ。俺が真竜であることをバラしたくなかったのはファルにも分かったらしく、そのあたりは話を合わせてくれた。まあ、血の話はしたら多分正体がばれるんじゃないかなーという勘である。カランさんは俺の話の聞きながら、ずっと眉間にしわを寄せて俺を見つめていた。

「……というのが、俺の知っている起こったことです。お役に立つでしょうか？」

「……ええ、たぶん。少しリリーの心を見てみるから、お二人は少し離れてくれるかしら」

「わかりました、よろしくお願いします」

俺とファルは見張りのエルフ、アルノーさんの隣に移動する。ファルは手を胸の前でぎゅっと握りしめ、神に祈るように目を閉じた。少しふるえるその体が、彼女の思いを雄弁に語っている。

「……リリー、起きてください。話したいことがたくさんあるのですから、ね？」

ひっそりと呟いているのは俺にも、そしてアルノーさんにも聞こえていた。アルノーさんはびっくりしたようにファルを見つめているので、俺は彼に尋ねてみた。

「何か驚くようなことがありますか？」

「ああ、あの銀猫の話はリリアー又様の手紙によく書かれていたのだ。とても仲のよい友人が出来た、とな……。普通、異種族間の絆というのはなかなか育まれるものではない。しかも銀猫の友人だ、驚いたのだよ、我々は」

「友情って良いものですよね……」

「友達のいないぼつちな発言になっているぞ？少年はイジメられてぼつちだったクチか？」

ニヤニヤ笑いながらアルノーさんは言ってくるが、それは俺の心に

グサツと突き刺さる。確かにぼつちだったけれども！そんなに俺があんたの矢を避けまくったのが気に入らんか？

「ええ、一時期はそうでしたよ？というか、エルフだというのに口調が軽いのですね？だから矢も軽かったのですか？」

「っ！俺は里で一番の腕だ、わざとに決まっているだろう？それに、お前はリリアー又様と話したことがないのは本当みたいだな？そんなイメージは一発で消し飛ばすからな」

「ファルの友人なのでしよう、話してみたいですよ」

どうやら矢を外したのも気に入らなかつたようだが、それよりも俺の話の信憑性を疑っていたらしい。それは悪意より、リリアーへの心配から来たものだと思われるので俺は矛を収め、アルノーさんの言葉に言い返しながら、カランさんとリリアーの方を見た。

カランさんはぼーっとした表情で、その瞳には何も映していない。それだけでリリアーの心の中に入っている、ということがぼんやりと分かった。うっすらと魔力がリリアーの方へ流れ込んでいるのもわかるが、その魔力はすぐにどこかへ消えていく。もしかしたら精神の世界へ流れ込んでいるのかもしれない。

そのまま数分がたったのだろうか。

突然、カランさんの周りの地面から緑色のツタが飛び出してきた。そしてそれは小さな椅子を形作り、呆気にとられている俺とファルをよそ目に、カランさんの足下に移動した。そこでカランさんの目

に光が戻ると、カランさんはその椅子に倒れ込むようにして座った。どうやら終わったらしく、ファルは勢い込んで尋ねた。

「カランさん、リリーはっ？リリーはどうなりますかっ？」

「ふふっ、ありがとう。大丈夫みたい、世界樹の木の中で休んだら目が覚めると思うわ」

「よ、良かったよお…」

あまりの安堵にか、少し幼い口調で安心を口にするファル。俺も安心してファルの肩に手を乗せた。

「良かったな」

「ええ、ケントさんのおかげです！ありがとうございます！」

本当に嬉しそうに目を細め、喜びを露わにするファルにアルノーさんもカランさんも嬉しそうだ。

「アルノー、リリーを世界樹の木の中に運んでちょうだい。ハイエルフたちからは離してよ？何を言われるか分かったもんじゃないし」

「はい！」

カランさんの指示でアルノーさんはリリーを背負い、カランさんが歩いてきた方向へ走っていく。やはりその方向の木は道を開けるように動いているので、エルフは森の民なんだなーと俺は納得していた。

「娘にいい友達が出来て本当に良かったわ。あの、ケントさんとおっしゃるんですね？本当にありがとうございます」

突然、カランさんのお礼が俺の方を向いたので慌てながら俺は答える。

「いえいえ、とんでもない。私は運んだだけの、言わばタクシーですよー！」

「たく、しー？」

「ああ、いえいえ違います何でもありませんすみません気のせいですよだからお礼なんて大丈夫です、はい」

あわてすぎて自分でも何を言ってるか分からん。

「えっと……後一日でも到着が遅れていたらおそろくりリーは目覚めなかったのです、それなら私の感謝が分かって下さるでしょう？」

うわ、ぎりぎりじゃん。

本当に、師匠について修行して良かったよ。少なくとも一人、助けられたと胸を張れる。

「ですから、是非お礼をさせて下さい。里に案内しますし、リリースが起きるまでは是非滞在してほしいのです。当然、あれほど仲良くさせていただいているファルシアさんもお願いします」

そう言っただけでカランさんは椅子から立ち上がり、俺たちに頭を下げる。

「あう、あわわわわ…か、カランさん、頭を上げて下さい！是非、滞在させて下さい！こちらからもお願いします！」

ファルも大分慌てていて気付いていないが俺はカランさんが立ち上がるたびに少しふらついたのを見逃さなかった。

「はい、ありがたくお世話になります！ですから大人しく座って下さい、魔力がほとんど無いのでしょうか？」

「すみません。ではお言葉に甘えて…」

そういって、カランさんは再度椅子に座り俺を見た。その緑の目は、魔力の枯渇で朦朧としているわけでもなく真っ直ぐ俺を貫いていた。

俺がその視線にはっとしていると、カランさんは森に呼びかけた。

「メネア？ファルシアさんを世界樹のところにお連れして？」

「はっ、かしこまりました」

ひっそりと近くの木のそばにたたずんでいたエルフが、ファルのそばに現れる。気づいていなかったのかファルがびっくりして飛び上がるが、メネアさんは黙ってあっさり歩き始めた。どうやらついて来いということらしい。

「えっ、ケントさんは？」

「彼は私が案内するわ。少し私の体調が落ち着いたら、ね？」

「分かりました、ではお先に失礼しますね、ケントさん、カランさん」

「ええ！楽しんでね？」

「おう、後でな」

さっさと歩いていくメネアさんについて行こうとファルが小走りです駆けていき、そこを開けていた木が再度閉じた瞬間。

カランさんの体から魔力が迸り、座っていた椅子がほどけて俺の体



を緑色のツタで縛り上げた。

「っ!!」

魔力強化で引きちぎろうとするもあまりに堅く縛られていて身動きがとれない。

それに、何の反応も出来なかった。というか、今もカランさんから殺気は存在しない。もしかしたら、リリーの中にあの気持ち悪い魔力の元凶が残っていて、それがカランさんに取り憑いたとかだろうか？

とりあえず現状を把握しようとしてツタに縛られ宙に浮かされている俺の目と、無表情なまま強烈な魔力を身にまとうカランさんの目があった瞬間、カランさんの口が開いた。

「うちの娘を血塗れにして、あまつさえ娘に初めての巨大なも  
のまでぶち込んで、そんな男を私が見逃すとても？」

はい？

## 第17話（後書き）

話のストックが無くなりそうです…。  
途中で少し間が空くかもしれません。

第18話(前書き)

投稿遅れてしまいました、ごめんなさい！

## 第18話

「ちよつ、ちよつと待って下さい！どういづことですか！」

俺は流石に覚えのないことで攻められるのはごめんである。操られているわけではなく、ただただ激怒しているだけのようであるし、何とか話にならないかなーっと思っただが…。

「今ね、リリーちゃんの心の中に入ったらね、伝わって来た感情があつたの。彼女は今冬眠中みたいなものだからね、心情のイメージしか分からないんだけど、強烈に伝わってきたのが、大きなものが入ってきて、満たされる気持ちよさだったのよ！」

入ってくる？満たされる？俺は彼女を襲ったりなんかしてないはずなんだが。

いや、待てよ。大きなものを注いだって言うけど…。

「それって俺の魔力だよ！あなたの想像のような下世話なことなんかしてねーよっ！」

「はあ？リリーがたかが人間の魔力に充実感覚えるはずが無いでしょ？エルフと人間って魔力の相性最悪よ？」

ああ、人間って思ってるわけだ。まあ、見た目からして人間だし、魔力も格段に減ってるもんな…。でも、どうにかして誤解を解かないと俺間違いない死ぬよな。エルフの族長さまだし。

「エルフと魔力の相性がいい異種族なんて、もうこの世には存在しないのよ？とぼけるのはやめなくちゃ、ね？」

今の話だと、『昔はいた』ということになるだろう。なら、既に生きていないらしい真竜って分かったら信じてくれるだろうか？真竜ということを広めたくはないが、どうしようもないことだってあるだろう。俺もリリーの親を怪我なんてさせたくないし、させられたくもないからな。

「なら、これで信じるよ！ネームプレート！」

縛られた手では掴むことが出来ず、ネームプレートはそのまま地面に落ちた。

「開いてみてみたらいい。それで信じられなかったら、俺は逃げるさ」

「逃がさないわよ？でもまあ、とりあえず」。オープン「

呪文の後は伸ばさないのか。カランさんはそのまま俺のネームプレートを開けたが、そこで固まっている。やっぱり、真竜なら大丈夫だったか？いけなかったか？と心配になったそのとき、カランさんはがばつと顔を上げて言った。

「真竜〜！？真竜がリリーを襲ったの〜？」

「だから襲ってねえ！魔力をリリーに取られたんだよ！その時の気持ちじゃねえのかよ！」

襲った、ということから離れてくれ！

結局、あーでもないこーでもない説明した結果リリーが起きるまで待つということに落ち着いた。ネームプレートを開いたにもかかわらず信じてくれなかったのは残念だが、まあ一旦は矛を収めてくれたのでよしとする。

俺としては、リリーとは実際まだ喋ったこともないのにこんな親とのドンパチを体験するなんて思ってもいなかったのだけれど。

カランさんはエルフの族長で、魔力はエルフ族ピカイチらしい。それでもなぜ欠乏したように見えたのか？と尋ねると、秘密らしく答えてくれなかった。俺としてはこの土地自体に魔力を注いでおくことで、いつでも回収できるようにしていたのではないか、と考えて

いる。いつか秘密を丸裸にしてやろう、腕がパンパンに腫れ上がっていたお返しである。離されたらすぐに治ったものの、痛いものは痛いのだ。

今はカランさんの案内で世界樹の元に向かっているが、そこで俺は気になっていることを聞いた。

「なあ、カランさん。俺が真竜つてわかったのに怯えたりとかしないのか？ファルなんて知ったと勝手に動揺しすぎて変化しちゃったぞ？」

「ん〜？崇めてほしいの〜？」

「いや、ファルには普通にしてくれって頼まないといけなかったけどカランさんにはその必要がないなって」

そう、カランさんは縛り上げてからこっち、一切その間延びした態度を変えていないのである。どうやら間延びした態度の方が素で、あのピシッとした態度はあまり使わないらしい。そもそも俺としたらカランさんみたいだなだけだったらいちいち隠す必要もないからいいんだが、ファルの態度を見るとどうやら真竜という一族はあまり喜ばれないものとして伝わっているような気がする。母親の手紙には『世界最強』とあったし、崇められるのならまだ分かるが恐怖というのは少し…。よっぽど間抜けな真竜がのちに現れたとかそんな感じだろうか。

「そりゃね〜。でも〜、ファルシアちゃんは普通にしてくれって言ったら普通にしてくれたんじゃ〜？この世界じゃそれ通用しない

のよ」

「何だつて？」

「私みたいに驚きも崇めもしない人は、この世にはもう数えるほどしかないわね。真竜と聞いて恐れ慄く人しかもう生きてないと思うわよ？ 恐れ慄いたうえで、話を聞いて、きちんと普通に接してくれるファルシアちゃんはすごくレアものよ」

「人をもの扱いするなよ」

「だから、リリーちゃんじゃなくてファルシアちゃんにしようときなさい？」

「結局そっちに話持っていくのか馬鹿親め」

どうやら何としてもリリーと俺がくつつく可能性をつぶしたいらしい。話したこともないのにここまで言うって、親って普通こういうものなのか？ こんなんだったら絶対異性のお友達はできないよな。

「その話はリリーちゃんが起きてからね。さ、もうすぐ着くわよ」

「棚上げね、まあいいけどさ。あんまり広めるなよ？ 俺が真竜ってこと」

「当然よ？ 一応娘を運んでくれた方だもの。娘の意思を確認するまで広めたりしないわよ。それより、里を見たらびっくりす



るわよ〜?」

「どつどつびっくりするんだ?」

「うふふ〜、秘密よ〜?」

また秘密かよ。

まあすぐ見られるのだから良いのだけれど、わざわざ気を引く必要もないだろうに。

「とつちや〜くっ!」

間延びした声とともに目の前の木がさつと動き、視界が開けてすぐ巨大な木の幹が目に入った。何人でひと抱え出来るか分からないくらいの大さだ。年季を感じさせるその木からは、強化しなくても感じられるほど、暖かな魔力が染み出していた。そこから視線をずらすと、周りは10人くらいでやつと囲めるくらいの大樹が並んでいるが、太い分高さは今まで通り過ぎてきた森の木よりも低い。しかしそれは家のような木となっていた。確かに木のうろに住んでいるようなものではあるけれど、それはリスが住むようなうろではない。畳が10畳ひけるような広さになっていた。維管束はどこ行った!

突っこみたい気分ではあるが。  
しかしそれは見事なまでに幻想的な風景だった。確かに驚き、見られるほどのものである。木を削ったり、切り倒したりすることなく家を作り上げているようなので、きつと森を大事にする種族なのだろうが、この感動は俺は前の世界では見られないものだと確信していた。魔法がどうかではない、ただその自然を愛する心が打算によるものではないとわかるからだ。

「綺麗だ……」

そんな陳腐な言葉しか出ない自分の語彙力に少々呆れつつ、それでもこの風景を表せる言葉なんてないと思いつ返す。

「でしょう？しかし、異種族でエルフの里に入ったことがある者はとても少ないですよ？」

カランさんの口調が折り返し目正しいものになったが、俺は気にする余裕はなかった。

「すごいな……」

「でしょう？」

感動している俺を見て、カランさんは誇らしげに笑う。そして、満面の笑みで言った。

「>里のルン、ルン」

第19話 幕間2 (前書き)

今回は短いです。

## 第19話 幕間2

私は、一くんが病室から出ていったのを見てからそのメモを開いた。何となく、誰にも見せてはいけないような気がしたのだ。何でと聞かれると分からないんだけどね。

紙は普通に病室に置いてあったものだった。そこに書かれていたのは、私がずっと気になっていたことだった。

私が中学一年生の頃のこと。

富士山に家族で観光に行ったときだそうなのだが、男に襲われた記憶があるのだ。実際、そのショックのせいか私はそれよりも前の記憶がない。私の持っている一番古い記憶が男に襲われる寸前なので、あまり自分の良いものではないけれど…。

その時、私はあり得ない現象を体験した。幽体離脱というのだろうか、世界が止まっているような中私だけが体から抜け出してぶかぶか浮いていたのだ。

そこでは男が私を襲う寸前で、ああもうダメだって思ったのだけれど、そこにひとりの少年が飛び込んできて助けてくれたのだ。それを見てほっとしたとたん、強烈な眠気に私は眠り込んでしまったので彼にお礼を言うことすら出来ておらず、それが気になっていたのだ。

私が目覚めたのは二年近く経ってからだし、そのことを人に話すなんて出来るはずもなかった。幽体離脱をしましたなんて、言ったら私は退院どころか別の診療科に移動させられていただろう。だから、誰にも言ったことがないはずだ。

なのに、紙に書いてあったのはその人のことだった。

神野 仁さん。

もう亡くなってしまっているけれど、その人が私の恩人なのだという。親切にもそのメモは、そのお墓の場所まで書いていてくれた。

退院したら、お線香をあげにいこう。

そう私は心に決めたが、ここでふと思う。

この紙を書いたのは誰だろう？そして、なぜ私はこの紙に書いてあることを信じようと思ったのだろう？

普通は信じられないし、ただの悪戯だろうと判断するはずだ。それなのに私はこのお墓へお参りしよう、なんて考えてる。

この紙に書いてあるように、まるで誰かと約束していたかのように……。

絶対に私は何かを忘れている。

私が確信した瞬間だった。

「はい、今日から微分についてやっていく。ここからはかなり『高校数学』って感じになってくるから、ここで出遅れるとかなりつらいことになるぞ？予習はやっているだろうが、まずは教科書からだ。93ページを見ようか…」

私は一週間で退院することができた。しかし、私は昔から体が弱かったと両親から何度も言われていたのに、こんな回復が早いことがあるだろうか？さらにはそもそもどうして私は西高に一人で行ったのだろうか？

混乱しっぱなしの私だけれど、取り敢えず今日は紙にあったお墓に行ってみることにしているのだが…。

「出席番号で当てるからな。37番、一番の問題。25番、二番の問題。28番、三番の問題。はい、前に出て解けよー」

入院してた人に当てるものなの??

まあ、予習は済ませてあるから良いんだけどさ…。

午後3時20分。放課のチャイムがなる時間だ。

「未菜、帰りにカラオケ行かない?せっかくの退院祝いに、どう?」

みんなは私が撃たれたとは知らない。なぜか一くんだけ知ってたけど、彼は言いふらさなかったので知っているのは西高にいた人と、一くんだけなのだ。まあ、一くんは私が西高に行くって知っていたからそこで想像したらしいんだけど。みんなは体の弱い私が軽く入院していたのだろう、というくらいにしか思っていないみたい。

「ごめんね、嬉しいんだけどちょっと行かなきゃいけない場所があるって…。明日、とかじゃダメかな?」



「うん、全然いいよ？予約入れとくから、明日行こうね！駅前のいつものところ！」

「うん！」

仲のいい友達が数人から誘われるけれど、まあお墓参りに先行くつて決めてたし明日に延ばしてもらおう。何歌おうかな？

一人で墓地に向かう。夏も近いとはいえ、夜のお墓に一人で行くのは精神的にキツイものがあるからね…。

行きがけに少し小さいけれどお花を買った。お線香を家から持って来てあるので、きちんと手を合わせるつもりだ。

心持ちはやめに歩きながら、私はお墓の間を縫っていく。そして、歩いて数分後。

紙にあつたお墓の前にたどり着いた。

読み方は分からないけれど何か厳めしい戒名が彫られているけれど、私の目に止まったのはそこじゃなかった。

お墓の足元にあつた小さな額縁。

そこにあつた写真は、間違いなく私を助けてくれた少年の姿だった。

この恩人に感謝の気持ちを伝えよう。そう思って私はお墓の周りに

生え始めていた雑草を抜き、お墓に水をかける。  
持って来たお花をさし、お線香をあげて手を合わせた。

（助けていただきありがとうございます。今は健康…はい、元気な気持ちで過ごしています。生きていらっしやる間にお会いできなかったのは少し残念ですが…。）

今までのことを軽く報告したあと、私は再度お花の角度を整えてここから立ち去ろうとした。

ここまで来たら間違いないだろう。私は確実に誰かを忘れているし、その誰かにこの恩人のことを話している。何か、ではなく誰か、を忘れているんだって。

徐々に空が赤くなる中、私は墓地をあとにする。誰かがいない、という気持ちは強くなる一方だったけれど、そこには何の手がかりもない。そう思いながら歩いていると、出口そばのお墓の横に刻まれている字に目が吸い寄せられた。

### 『辰野家ノ墓』

なんとなく目にとまったお墓はとても目新しかった。つい最近立てたものなのだろう、しみりした気分になる。  
まあ身体が弱いとはいえ、今は今を楽しもう！  
そう切り替えて私は墓地を出る。

(明日は何を歌おうかな?でも予習あったよね…。数学はさっさと終わらせておかないと)  
久々のカラオケに少し胸を弾ませつつも、私は数学の予習に今晚は費やすことにした。

絶対明日当たる気がするんだよね。

## 第20話

美しいエルフの里の風景に言葉を失っていたのは何分くらいだっただろうか。カランさんもニコニコと微笑みながら、俺のフリーズの時間に付き合ってくれていた。

「素晴らしく幻想的だ…」

「うふふ、そうでしょう？ やっぱりうちの里の誇りだからね、この風景は」

ほんと、世界遺産級じゃないか？ 富士山での初日の出より俺は今、感動した気がする。

「えつとね、早ければ明日にもリリーちゃんは起きると思うし、とりあえず今日は休んでおいて。その家が来客用だから、そこでゆっくり休んでちょうだい」

「ああ、ありがとう」

「明日9時くらいには誰か迎えによこすわね。じゃあ良い夜を」

カランさんはそう言って、世界樹の方へと歩いて行った。俺はカラ

ンさんを少しの間見送り、姿が消えたのを見届けてから言われた家に近づいてみる。

「しかし、すごいよなあ。こんな幹が太い木もあまり見たことがないけど、そこに家があるって、なあ……」

つぶやきながら階段を上る。実はこの階段、この家の木の一部である。切りだしたり、取り付けたりしたわけではなく本当にこの家の木の一部なのだ。

(やっぱりここは違う世界なんだな。本当にファンタジーだよ)

昨日一日魔法だの何だの試したり戦ったりしておきながら、ファンタジーを感じたのはエルフの里を見てからのような気がする。結局魔法俺使えないし。

「おおおー……」

玄関の扉を開けると、そこには窓はないようだが柔らかな緑の照明で照らされ明るい部屋があった。靴を脱ぐ場所があったので、この習慣はなぜか日本スタイルだなと苦笑する。扉が三つあって一つは開けっぱなされており、そこには少し大きなベッドが置かれているのが見えた。見た感じふかふかで、スタイルも前の世界のものと同じである。休息への飽くことのない探究は結局どの世界でも同じ

ものになるということだろう。

残り二つの扉は全く同じデザインだった。そこで何気なくベッドの部屋の隣の扉を開けてみた先には。

ファルが全裸で立っていた。

そして流れてくる温かい湯気。

時が止まったかのように感じてしまうこの瞬間。

「…ケント、さん？」

「…この部屋は風呂付か」

俺はさりげなく視線をそらし部屋から退散しようとしたが、その視線の先にはエルフの素晴らしい技術のおかげか曇っていない鏡があり、同じく目を逸らしていたファルと鏡越しにまた目が合う。彼女の尻尾はちょうど背骨の付け根、尾てい骨あたりから顔をのぞかせているようだ…って、違う違う！渡辺のとき以上に今はかなりアウトオツッ！！

「……すまん」

俺が謝罪を口にした途端、ファルは顔を真っ赤にしてしゃがみ込んだ。いやいやと首を振っているせいで綺麗になった銀髪がひらひらとしたかと思うと、ぱふんっと音を立てて猫になってしまった。

(確か、精神的にきつかったら変化しちゃうんだっけ。だが、普通に立派なものが……。)

そんなことを頭の片隅に思い浮かべた瞬間、銀色の塊が顔に跳んできて貼りついた。

「ふがつ!」

思いっきり鼻に衝突されて涙目になったが、その時視界に入ったのは爪を振りかざしていたファルの姿だった。

「ふしゃーーっ!」

ぱりっ。

そういえば、思いがけず変化しちゃったときは猫並なんだった。

俺は頬を思いつきり引つ搔かれながらファルの言葉を思い出していたので、見てしまった罰として甘んじて受けることにした。

しかし、地味に痛い猫の爪。

がりがり引つ搔いてくる数秒を耐えたあと、俺はさっさと風呂のある部屋を抜け出し扉を閉めた。きつと少し時間をおいたら元に戻るだろうし、その時には自分で開けられるだろう。猫のままじゃアドアノブはつかめないだろうしな。

しかしもうすでにファルが案内されていた、という家に俺が案内されたのはただの失敗、手違いだろうか？いや、ありえないな。あのカラんさんのことである。ファルにしておけなどと大真面目に言うくらいだから、こんなハプニングが起こることを期待してこの家に案内したに違いない。

「うん、野宿しよう」

一瞬で俺は決断し、玄関に向かう。一応族長さんらしいからさん付で考えているけれど、やっている内容が幼稚すぎて頭が痛い。馬鹿親にもほどがある。

脳裏に残るファルの姿を振り払い、俺はそそくさとこの家を出ようとしたが…。



「…開かない…」

流石と言うべきか、扉が完全に周りの壁と一体化している。何かの魔法でもない限り、壊さずにはこの家から出られないのだ。そして、俺は魔法が使えないときたものだ。

「はあ……徹底的だな、族長さま」

俺はため息をついた。リリーが起きるのを見たいだろうファルがいるのに、壊して出るという手段はとることができない。しかも、翌朝は起こしに行くと伝えてあるという用意の周到さである。俺にはもう、取れる手立てはなかった。

「ファルに謝って……。気まずいなあ……」

今晚のことを思うと、胃が痛むような気がした。

どうしたらいいのか分からないのでとりあえずベッドの部屋に戻り、

ぼーっとしながらファルが落ち着くのを待つ。すると十数分後には洗面所の扉が開き、ファルが姿を見せたのだが…。

タオルを巻いただけの姿だった。

先ほどの失敗を繰り返さないために俺は亜音速で後ろを向き、見なかった見なかったと頭の中で必死に唱える。

「…ごめんなさい、ケントさん。さっきは無茶苦茶に引っ掻いてしまいました」

「いや、見たのは俺が悪いし」

というか、煩惱にまみれた俺への天罰でしょう、うん。

「それよりも、なんでタオル一枚？ちょっと、その…大胆じゃない？」

「あう、え、あの、それは…」

あ、そういえば…

「…もしかして、替えの服がなかったり？」

「…はい。奴隷が服を複数持つなんてあり得ませんから…」

俺が奴隷の首輪つぶしちゃったからもう奴隷じゃないけど、それでも服を持っているはずがないよな…。

「カランさんに頼んで何か服をもらおう、明日には来てくれるみたいだし」

「じ、実はさっきまで来ていた服はメネアさんに没収されて…。なんか、『ごゆっくりどうぞ』って私をお風呂に入れて去って行かれたんですけど」

「…こりゃ、確信犯だな」

どうやらゴールインまでさせてリリーに虫がつかないようにしようという魂胆だろう。どうせ何か覗く仕組みなんかが完備されているに違いない。

「確信犯、ですか？」

「ああ、カランさんなんだがファルが先に行ってからさ、何か突然俺がリリーにまあ、なんだ、そういう、ちよっかい出したんじゃないかって責めてきたんだよ」

「えっ？でも、異種族間でのそういう関係はあり得ないって聞きま

したけど？」

ファルがびっくりしたように言うが、あり得ないというのはどういうことなんだ？

その疑問をファルに聞くと、ファルは説明してくれた。

「えっと、この世界には人族、獣人族、エルフ族、魔人族の四つの種族がいます。ですが、種族が混じったこどもは生まれることがないんですよ。そもそも種族を超えて魅力を感じるとというのが滅多にたんです。だから私も奴隷の時に無理矢理されることはなかったんです。私は奴隷になるまで知らなかったんですけど、このことはかなり常識の部類に入るそうなので、エルフが知らないなんてことではないと思いますよ？」

確かに子孫を残せないのだから、異種族に魅力を感じないというのは大変らかな理由なんだろうが…。

「俺、ファル見ちゃってかなり魅力的だったのはどういうことなんだ？」

さっきの瞬間に見たのはかなり理想的なプロポーションで撫でてみたかったり…げふんげふん。

今はそっという話じゃなかったとファルの方を見ると、

「……」

ドン引きして俺の方を見ていた。

…今の言葉、かなりヤバイな。本人の前でいうセリフじゃなかった…。

## 第20話（後書き）

投稿遅れました、すみません！

次回からかなり更新ペース落ちてしまいます。色々と仕事を抱え込んでしまってます…。

## 第21話

「えっと、その…ケントさんは私にこ、ここ、こつふ…」

「いや言わなくていいからごめんなさいすみません俺が煩惱にまみれてました」

超速で俺は土下座に移行する。女の子の口からこの状況で出させていけない言葉というものはあるだろう。止めるためなら俺は何でもしよう、と言うか俺が原因だし何でもしなければ。

「…ファルシアさん、その布団にくるまってください是非。そしてら目を合わせて会話できるはずですので」

「え、でもお布団は一つしかないのに…」

「いやお願いしますから是非」

「…はい」

とうるかタオル一枚で男の目の前って…しかも獣娘だぞ？萌えまくる人だったらどうなるんだ、もうおまわりさん呼ばなきゃいけないだろうに。

そんなことを頭の中でぐるぐる回しているうちに、もぞもぞとしていた様子が止まり、ファルが声をかけてくれた。

「はい、もう大丈夫ですから、顔をあげてくださいケントさん」

言われて顔をあげると布団にくるまり、顔だけがぴよんと出ている。

「いや、かなり可愛いよ？何もなければギョツてしたいくらいだし。こついう点では、カランさんの読みは的中したわけだ。鋼のような自制心を要求してくるな…。」

「真竜様ですからね、その四種族とは違うところにあるのかもかもしれませんし…とついでケントさんの人間性を信じます。襲つたりしませんよ、ね？」

「絶対にしない、あくまで合意の上でなければな！」

首をかしげて確認をするファルに俺は堂々と言い放つたが…。  
顔を真っ赤にするファルに俺はまた失言したことに気がついた。俺、さっきからアウトなことしか口に出していないような気がする。

「…まあ、少なくとも今日は合意しませんので落ち着いてくださいね？」

「…ああ、すまん…。そうだな、軽く晩飯作るから待っていてくれ」



まだ晩御飯を食べていないからということでは体良く逃げ出そうとしたのだが…。

「あ、それは私が入りますから是非ケントさんは…」

「布団の中にいてっ！というか俺に落ち着く時間ちょうだいっ！」

布団から出てこようとしたりファルを止める。そこから出られたら俺もう扉壊して野宿するよ。

と、心に決めて数分後、台所の中の食材が分からずにファルを呼ばなければならなかった…。

台所はもう一つの扉にあった。そこは盗賊のアジトとは異なり様々な食材が並んでおり、肉すらも保管庫にあったのである。

ここまで完備されているのに、リュックの中のしょぼい薬草ばかり食べる必要はないだろうしな。

「なあ、これは何だ？」

「えっと…キュトロですね。火を通すと甘くなりますし、きれいな赤色なので生のまま彩りとしても使えるのです」

「…人参だな。名前そのものは違うけどキャベツにキュウリ、大豆にジャガイモって…。少なくとも食文化で痛い目は見なくて済みそうだ」

「ケントさんの世界にもこんな食べ物があったのですか？」

「ああ、このカンリーっていうのはうちではキャベツって呼んでたし、ポガンならジャガイモだ。覚えられるか分らんけど、なるだけ間違えないようにするさ」

名前だけが違うっていうのはそれはそれで会話に不自由するんだけどさ、まあ前の世界と一緒にするのは有り難いことだよ。キャベツ炒め たつもりがバナナ炒めとか御免だし。でもさ……

「何で存在する調理法が、

- 1、ただ火を通す
- 2、水でゆでる
- 3、生で食べる

しかないんだよ！？これだけあつたらもつと贅沢に食えるだろ？お酒も飲んでたじゃん！」

「え？お酒って湧いているものじゃないんですか？」

恵みが豊かすぎて料理というものが発展しなかったのか？それはさすがに論外だよ。

「酒はこの芋…じゃなかった、ポガンからでも作れる…と思う。少なくとも前の世界ではそれで作れた」

「本当ですか？それはすごいです！」

いや、俺からしたらこの料理水準はもったいなさすぎで泣けてくるよ。

「あの『お粥』も水で煮ただけじゃないんですね？」

「煮たというか炊いたと思うんだけど。定義は分からんわ、すまん」

「炊く、ですか…。ケントさんっ、是非料理教えて下さい！そういうおいしい料理を私も作れるようになりたいです！」

「すっごく意欲的になってくれるのは楽しいんだけどさ、今日はダメだ」

「どうしてですか！？」

すごく料理に興味持ってくれるのは嬉しいし、教えるのもやぶさかじゃないけど。

「…今は服を着てないから、かな…」

「あつっ…」

「火も使うから戻っといってくれ、すぐ持つて行くから、な？」

「はい……」

流石に、タオル巻いただけで料理はさせませんよ。俺一回も振り向いてませんよ？見てませんからね？

さて、何を作るかという話だが…。

ただのお粥であれだけ喜んでくれたことを考えると、なるだけおいしいものになりたいなとは思うのだが俺はそこまで料理がデキる子で

はない。

米はさつさと炊いてしまつて、野菜炒めにあんをかけてみようか。味噌汁は味噌作るのになら時間がかかるし、軽く出汁をとつて澄まし汁とかどうだろうね。

トントントンと軽い音を立てて野菜を切り、手早く肉を炒めて投入する。その後さつとでんぷんを溶かしたあんをかけて完成だ。そのころにはご飯が炊きあがっているのだ、完璧である。

「完成だ！よし、手早く完璧」

出来上がったところで、持って行って食べましょうか。

皿に盛つて持つて行くとファルはきちんと布団にくるまっていたので、俺の心臓は跳ね上がることなく話すことが出来た。

「ファル、これはただ炒めただけだけどろみをつけた一品、そしてこっちが話に出ていた『炊いた』米の真骨頂、ご飯だ。どっちも俺の世界の料理だけど美味しいといいんだが」

「わあ、美味しそうですね！これが炒めただけですか？私たちが  
らしたら信じられません！」

「俺も食うから、冷めないうちに、な」

「ええ、いただきます！」

ファルは笑顔で皿を迎えるとスプーンでぱくぱく食べ始めた。俺は  
それを横目で見ながら箸で口に運ぶ。

「お、美味しいです！」

ファルも喜んで食べてくれたけど、自分で食べても確かに悪くない。  
適当に作ったものにしてはそこそこ旨いんじゃないか？

やはり工夫が一番で、ただ切った並べただけというのは料理じゃな  
いことが多い。今のこの世界の料理とは、切ることさえ出来れば料  
理が出来てしまうその恵みの豊かさに胡座をかいているようなもの  
に思える。ちょうどインスタントラーメン並の手軽さなわけだ。

「絶対、絶対に私に料理を教えてくださいね？機会を改めてというこ  
とは必ずする、ということだと信じていますからね？」

そんなことを考えていると、美味しかったのか耳をぴくぴくさせな  
がらファルが言った。

「ああ、取りあえずは俺がこの世界の食材に慣れなきゃだからその後になるけど」

「ふふっ、大丈夫ですが少し急いで慣れて下さいね」

ファルは微笑しながら言ったが、そんな明るい顔を見せられたらなるだけ早く慣れて教えてあげたいな。

「ああ、努力するぞ」

「ありがとうございます、ケントさん。さて、これからどうしますか？」

ファルは手を合わせると食後のことについて聞いてきた。

「…ああ、俺はこの部屋の外で寝るからファルはそこで寝てくれ」

「あの、でもケントさんが走ってくれたのですから疲れているはずですよ！ベッドで寝るべきなのはケントさんですよ！」

「言ってくれるのは分かるから巻いている布団を解くのはやめてくれっ！」

まあ蒸し返されるとは思ってたけど、どっさりってこの攻勢をくぐり  
抜けようかね？



## 第21話（後書き）

申し訳ありませんが、これから更新速度がまた落ちます。戻せるように努力しますが、忙しいのでいつになるかは少し未知数です。本当にすみません！

次回更新は3月28日の予定です。

2015/07/09 誤用を修正

## 第22話

結局俺とファルは同じ部屋で寝ることになった。あれだけ身の危険を感じるような発言を意図せずとはいえしたというのに、同じ部屋で寝るよう強硬に言うとはこれいかに？って感じなんだが…。

「落ち着いて休むべきなのはケントさんです！」

の姿勢を崩してくれなかったので、俺も同じ部屋になった。それどころかベッドを譲ろうとまでしてきたので、風呂場から大量のバスタオルを出してきてこれにくるまって寝ることにしたわけだ。

夜にふと目が覚めるたび、その尻尾がゆらりゆらりと揺れているのを見るわけだけど、まあなんとか夜は無事過ぎていった。

俺の自制心よく頑張った。

朝の5時。たとえ世界が変わっても、俺の起床時間は変わらない。目が覚めて身を起こした時には俺の脳みそはすでに通常運転に復帰

できるのだ。これも師匠による訓練のおかげである。  
ベッドのほうに目をやると、ファルは身体を丸めて寝ているようだった。猫がこたつの中でくるまっている様子を思い出し、ほほえましい気持ちになる。やはり猫の要素を持っているのだろうか？今度のどの下をくすぐってみたい。

そのまま身を起こし、部屋の外に出て毎日の鍛錬をする。軽い筋トレにストレッチだ。特にストレッチは毎日やらないと体が硬くなってしまう。体が柔らかいとスポーツができる、などという話があるがそれは少し違う気がする。体が柔らかいというのは確かに関節の稼働域が広いということではあるのだが、それがスポーツに適性があるということでは必ずしもないだろう。まあ、格闘技においては体が柔らかいというのはかなりのアドバンテージになる。実際、俺は雑技団もびつくりするくらい関節の稼働域が広がったからなあ。

そんなことを考えながら軽くストレッチを済ませ、筋トレをし、朝の日課として瞑想とともに手を合わせる。これで30分そこそこだから後30分で朝飯ができるだろう。6時にはファルも起こして、朝飯を食べておかないとな。

「おかゆに野菜炒めだから…今日は伝統的な和食な朝飯と行きましようか」

米は炊ける。卵もある。なら、卵焼きと焼きじゃけに澄まし汁という感じのメニューで決定だ。実際鮭らしい魚もいたしな、一尾丸ごと冷蔵庫の中に。

そんなこんなで朝飯を作り始めていると、誰かがこの家に向かってやってくる気配がする。昨日の感覚と同じだから、おそらくカランさんだろう。俺は飯を作っているし、結局俺がいたところでドアを開けられるわけでもないのですそのまま鮭を焼くほうに神経を向けるすると、バタンツ！と音を立ててドアを開ける音が聞こえたと思うとひょっこりとこちらをのぞく気配がした。間違いなくカランさんである。

「やつほ、昨夜はお楽しみだった？」

その瞬間、俺は手に持っていたニンジンをその声に向かって投擲していた。右手にあった包丁を投げなかつただけ俺は大変良心的だろう、うん。

「あ、あつぶな、い！なんてことするわけ？」

「あらあらすいませんねカランさん。わざと外してあげたのですが、これは鼻の頭に当ててほしかつたみたいですよ。右手の包丁であたってみますか？」

俺は続いて包丁を投げる姿勢を取る。実際当てるのもなんなので人參は鼻をかすめて台所の扉に刺さっているのだが、普通なら怖いはずだ。

普通の人参なら刺さるわけがないのだから。

「当然、女の子の敵だからでしょう。いくら娘が大事だからって知りもしない女の子をあてがうとか何考えてるんです？」

俺は包丁を構えながら言う。まあ何よりどこも怖そうなそぶりを見せることなくふにゃふにゃしているカランさんが不気味でしょうがないのだがな。

「あらあら、手を出さなかったのでしょうか？ 私は旅の仲間は近くの方がいいと思って、気を利かせただけなのよ？」

嘘つけ、流石にあれだけの親バカっぷり見せられてあんたの言うことを信じる奴がいるかっ！

と言いたいところだが、言っていることを否定する材料がないから反論ができないのが痛い。

「ところで、何でキュトロが木に刺さるのよ？ 普通こんなこと起こらないでしょ？」

「簡単ですよ、キュトロ自体に魔力を込めて強化してるんです」

「…植物に魔力突っ込んで、強化しちゃったなんて聞いたことないわあ」

「じゃあ俺が第一号ということが良いですね、はい」

俺が何かこつちの常識からはかけ離れたことをしているというのは、もう何度もファルに言われてるから大丈夫なので。

こんな言い合いをしている間に俺はさっさとキュトロという人参を回収して澄まし汁を完成させてしまっている。隣の部屋ではファルがそろそろ目を覚ます頃だろうし、ちょうど良い時間帯にできあがったと言えるだろう。俺は台所のすみのテーブルをだし、食器を並べていく。とそこで、カランさんがもぞもぞしながら口を開いた。

「ねえ少年、私にもそのご飯分けてくれな〜い？」

「嫌です」

ま、即答するわな。

族長サマにご飯出さなかつたら怒られるかもしれないけど、俺としては許せないからな。少なくともファルに謝ってくれなきゃ何か親切にしてやるうとは思えないね。

「え、昨日のおかずとかでもいいのに」

「やっぱり覗いていたのですか親バカさん」

「いや、最初はね。でももう、あのとろっとしてるおかずが食べたくて食べたくて」

昨日の時点で様子をのぞいているだろうという想定は出来ていたのだが、カラんさんの話によると五感で感じることの出来るほどの精度の高い探索魔術を使っていたのだという。ところがそのせいで俺の作った飯の香りや見た目に魅了され、食べたくてもふれることすら出来ないという生殺しだったのだとか。結局朝早くにこっちに来て何事もなく食べようと思っっていたらしい。

「甘ちゃんですね。カラんさん、俺が異種族相手の関係をもてないという原則の例外のようなものって分かってたんじゃないですか？」

「え、何のことがしら？」

「とぼけるのはやめて下さい、そうじゃなかったら昨夜はお楽しみだった？とか聞いてきません」

「あらあら、よく分かるわね？」

「ファルにきちんと話して謝って下さい。ファルが受け入れたら、鮭以外は分けてあげますよ」

「ファルシアちゃん！」

「……はやつ」

俺がファルに謝るように言ったとたん、カラんさんは隣の部屋へ行ってファルのもとに飛び込んでいった。

「ファルシアちゃん！ごめんね？」

「えっ！どうして族長様がいらっしやるのですか？」

「細かいことはいいのいいの。何よりね、知らない馬の骨にリリーちゃんを渡すのが嫌だったの。だから、閉じこめちゃってごめんなさいね」

はしょったな。

まあ、ちゃんと謝ってるしいいんだけど。

「ええ、何もなかったですしいいですけど……。ケントさんと私にそういう関係を強いたかったですか？異種族だというのに、そんなことが成立するのですか？」

「それはね……。リリーちゃんや少年にも言わなきゃいけないから、一緒にいい？あ、リリーちゃんも起きたわよ。体はあまりうごかないみたいだけどね」

「ほんとですか！！会わせて下さいっ！」

「その前に、服と朝ご飯ね。リリーちゃんも昏睡から起きた後一旦睡眠に移行してるし、あと一時間後には起きるわ」

「そうですか……。わかりました、待ちます」



「ありがとうね〜。服は…これとかで〜」

「えっ、こんな上等なものを！ダメですっ、普通でいいです！」

「ダメ、私からのプレゼントなのよ？受け取りなさい、エルフ族長として命令します」

「は、はい…。ありがたう、頂きます…」

無理やりすぎるがまあ、説明の義務を果たすつもりはあるらしいしここはこれでいいだろう。澄まし汁は足りるしご飯も十分だ。鮭無しも淋しいから何か足そうかな…。

「かわいいわよ〜、ファルシアちゃん！」

「あ、ありがとうございます…」

「さあ、ご飯ね〜！一緒にもいいかしら〜？」

「あ、ケントさんが作ってくれているので…。私個人としては恐れおおいことではあるのですが、作っている人に聞いていただければ…」

「やった〜！少年〜、私にも〜！」

まあ、服もあげたなら許してやろう。軽く目玉焼きでも作るうかと思っただが、まあいいや。

「はいはい、もう出来たから持って行きますよ」

「えっ！ちょっと待って！」

その制止の声はドアを開けたその瞬間だった。  
そして俺の目に映ったのはファルのお着替えシーンである。

「あ、あう、あ……」

顔を真っ赤にして口をパクパクさせるファル。  
真顔なカランさんを見ればわかるが、どうやら計算でやったことではなく俺のフォルトなようだ。

「ついてねえなあ、俺……」

## 第22話（後書き）

次回投稿は3月30日の予定です。

野菜が魔力を込められて堅くなっていますが、こんなので出来るのは  
謙人だけです。

## 第23話

ファルのお着替えシーンはちょうど下着をつけただけというある意味超完璧なタイミングだった。

お巡りさん、俺逮捕されますね。

さて、昨日の轍を踏まぬよう一旦亜音速で台所にもどり、ドアを閉める。そしてドア越しにファルに呼びかけた。

「ファルシアさんごめんなさい。着替え終わったらきちんと謝りますので、一旦着替え終わったら言ってお下さい」

もちろん、持っていた盆は流しの台の上に置き、きちんと正座して頭を下げている。ちなみに土下座とは違うんだぞ？きちんと正座して礼をするというのは。

「少年、ファルシアちゃん今猫よ？」

「…元に戻ったら言ってお下さい、カランさん」

「ええ、いいわよ。でも、こんな簡単に変化しちゃう獣人って、初めて見たわ」

「どうやらまた猫になってしまったらしい。しかし、ファルの変身の頻度は普通じゃないのか？」

「どづいづことですか？」

「変身して、動物の姿になる。これかなり魔力使うのよ。ましてや無意識なんて、普通の獣人には年に一度レベルじゃないかしら」

「でも昨日もファルは…」

「そうなのよね。すごい魔力持っているんじゃないかしら？」

「それは本人に聞きましょう。余裕が出来たので今からおかず増やしますよ」

「あら、食べ物で釣るのかしら？」

「……」

はい、そのつもりでした。図星すぎて返事は出来ないが、ご飯一品増えるのはそれはそれでよいことだ。まあ、とりあえず酢の物でも作ってみようか。

……流石に怒られるだろうな、うん。二度目だし。

後で謝るけど、それでもご飯で幸せになってもらうという事で埋

め合わせをしよう。

さて、20分後である。

俺はきゆうりとわかめの酢の物……こっちではシユレとウイースの……酢って何だっけ。

でも、ほんとこの世界はすごいな。酢や酒は湧いている泉があるらしいし、醤油はないみたいだが塩と胡椒は木になるらしい。胡椒はまだしも、塩が木になるっていうのはかなり興味深い。まあ、味見をしたところ『NaCl』って感じでマグネシウムとかも含む、海水から作った塩よりは美味しくないんだけどさ。魔法なんてものがあるのだから、煮詰める作業とか簡単にできそうな気がするのだがどうしてしないんだらうね。

さて、話はずれてしまったが目的は酢の物である。出来上がった酢の物はかなり美味しかった。どうやら酢がいい物だったみたいだが、これならきつとファルも喜んでくれる……はず。

「カランさん、ファルはどうですか？」

「ええ、ついさっき元に戻ったけど見られたのが恥ずかしくて布団の中に潜っちゃったわ」

「今なら入っても？」

「ええ、服も着てるし大丈夫よ」

きちんと確認をとってから中に入る。こっそりと中を覗き込むと、ファルはどうやら布団の中で丸まっているらしい。きちんとノックしないからこんなことになるんだよね…。姉も妹もいなかったし、思春期の女子とこんなドアがどうこうって気をつけないといけないかったことなんてなかったよ…。いや、一度だけ渡辺がうちに来たことがあったな。その時は委員長がラッキースケベを期待して色々仕掛けてきたからな。これからはあの時並みに気をつけよう。

「ファル、ほんとにごめん。二回目のノックなしだった。てっきり着替え終わったから似合ってるとかどうとか言ってるんだと思ったんだ。申し訳ない」

俺はすっかり頭を下げる。何ていうか、前読んだ本じゃ主人公は覗いてしまってもなあなあで済ましてしまうことが多かったけれど…。普通お巡りさんに突き出されても文句言えないのだからしっかりと頭下げるべきだよな？

「それはね、ファルシアちゃんへの下着のことよ。これがとつても、似合ってるって感動したのよ。少年、感想は？」

「そんなこと言わなくていいですっ！」

「おや、カランさんはご飯が要らないようですね」

横から無駄口を挟んだカランさんに、布団から顔を出したファルと俺とが口々に言った。

「ごめん少年、でもこのままじゃファルシアちゃん顔出さないでしょ？まあ、顔出したから良いことにしてよ」

ただ変な茶々を入れただけではなく、きちんとくるまっていた布団を押さえて、また布団に隠れてしまわないようにしているあたり本当にご飯が食べたいらしい。

「ファルごめん、怒ってるよな？」

「…いえ、怒ってはいませんよ。ただ、とても恥ずかしいんです。親以外誰にも裸とか下着とか見せたことありませんから」

「ごめん、これからは絶対ノックするし。二度とこんな事態を起こさないと約束する」

「はい、お願いします…」

布団の中に引つ込めずに顔を真っ赤にしたまま、ぽつっというファル。そこに、カランさんが更なる爆弾を投下してきた。



「何かしてもらったら？女の子の裸を見た罪は重いわよ？」

「ちよっ！カランさんが言います…か……」

抗議をしようとしたが、ファルの膨れた頬とむすつとした顔つきに俺の言葉は尻すぼみになってしまった。

「…ケントさん、してくれないんですか？」

……このファルの顔に断れる奴は最低だと思う。いや、その裸とか覗いている俺はもつと最低か。

「ああ、出来る範囲なら何でもやるよ、約束だ」

「じゃあ、何か一つ考えておきますね！」

一気にファルが笑顔になってくれたので良しとするが……。何頼まれるんだろっね。

「どちらかっていうと、今布団の中にいるのって、着ている服が可愛すぎるからかしら？」

「あ、あっ……」

「……」

俺は反応に困る。そんなこと言われても、ファルが顔真っ赤にしてたら無理に引つ張り出せないしな。

これ以上は話をずらしてしまつに限る、さっさと飯の用意にしまおう。そう考えて俺は二人に言った。

「飯の準備はもう出来ているから、食べよう。酢の物はそこそこ上手いと思つぞ」

「スノモノ〜？何かしら〜？」

「昨日とはメニューが違うのですか！」

二人で食いつくところが違うのね……。

「美味しいですっ！さすがケントさんですっ！」

「……」

「それは良かった、これぐらいならすぐ出来るから教えてやれると

思ひぞ?」

「嬉しいです!」

「……」

フルは昨日と同様料理に意欲を燃やしているが、まだ布団を巻いたままだ。そんなに恥ずかしいんだろうか?ある意味、着ている服が気になる。一方、カランさんは食べ始めてから完全に無口である。食べる量も半端ではないが、何となく断れる雰囲気でもないからそのままよそついている。なんか怖い。と、口の中をこつくんと飲み込んでカランさんが口を開いた。

「……少年」

「な、なんですかカランさん」

「このエルフの里で、コックにならな〜い?」

「…そんなに美味しかったですか?」

「ええ〜、これならリリーちゃんあげてもいいわ〜」

「何言ってますかアンタ」

あまりの話の正反对つぷりに俺は呆れながら言い返す。昨日の態度から考えたら論外だろう、俺の眉毛がピクピク動いているのが分か

る。

そのとき、カタツという音が聞こえ横を見ると、ファルがうつむいて持っていたスプーンをテーブルの上に置いている。周りが少し黒いオーラを纏っているのは気のせいだよな？

(カランさん何言ってるんですか！)

(い、いや、ファルシアちゃんがここまで怒るとは予想以上なのよ。周りはすごい魔力よ、何であの子こんなに魔力あるのよ。)

俺が小声でカランさんに抗議すると、意外と本気な感じで泣きついてきていた。どうやら周りの黒いオーラは魔力の固まりらしい。

「……ケントさん。リリーと結婚でもするおつもりですか？」

「い、いやそういつわけじゃ……」

「でも、今の話ってそういつことですよな？」

「あ、それは……」

ファルは何も動いていないんだが、鬼気迫るものを感じて俺は後ずさる。

俺、何も悪くないよね？  
何でこんなことになるかね？

## 第23話（後書き）

次回は4月1日投稿予定です。

嘘じゃないですよ!!

## 第24話

「そういえば、私ケントさんに一つお願いできるんですけどよね……」

い、今このタイミングでその話を持ち出してきますかっ!?

「いや俺もそりゃファルと仲良しらしいリリーとは話してみたいけどさ、未だに話したことのない相手と結婚ってあり得ないでしょ、ね？」

必死である。わたたと手を振り、冷や汗をたらたら流しながら俺は言うが、それはなかなかファルには通じなかった。

「そうですか、リリーは可愛いですからね……」

「俺そんなこと言ってないよねっ!」

俺の悲痛な叫びもあまり耳に届いていないらしい。ちなみに、この状況を生んだ張本人はまたもぐもぐとご飯を口に運んでいるし、俺の鮭もちやつかりと奪っている。ファルシアさん悪の権化はこっちです!

「……決めました」

「な、何でしょうか？」

ファルはぱつと顔を上げて言う。その表情は想像していた無表情とか、笑っていない笑顔とかではなかった。思いついた！とばかりにきらきらして笑っているのである。

「私がケントさんに勝てるようになるまで、私に修行をつけてもらいます！」

「え？」

かなり突拍子もないアイデアらしいものが出てきた。修行って、どういうことなんだ？

「いや、それはいいけど何で修行なの？」

「それは後です！受けてくれますか？」

「は、はいっ！承りましたっ！」

気迫に圧されて明確に返事をしたときだった。俺の体からそこその量の魔力が飛び出した。その魔力は虹色に輝きながらファルの方へと飛び、ファルの中に入っていく。一方ファ



ルの方からも虹色の魔力が俺の中に飛び込んできた。それは俺の体に何か悪影響を与える様子もなく、ちょうど心臓の近くで暖かい波動を放ち始める。そこにあることが別に苦痛ではないけれど、そこにいるということを明確に主張する感じだった。

「……………これ、何？ファル、分かる？」

「い、いえ…。私も何がなんだか…」

混乱している俺たちに、カランさんが箸を置いてこちらの方を向く。ちなみに俺の鮭はほんの一口しか残っていない。食べすぎじゃね？

「ごちそうさま～。さてあなたたち、契約魔術なんてすごいもの持ち出すわね～」

「「契約魔術？」」

また物騒な単語が出てきたよ。

それからカランさんは契約魔術について説明してくれたが、あの間延びした口調だったので理解するのにかなり時間が掛かった。俺も

ファルも理解した時には、もうすぐリリースの起きる時間になったのだ。

契約魔術とは、人と人との間にした約束を守らせるための魔術だ。高額な買い物、特に武器や家なんかを買うときに使われるらしい。契約魔術には三種類あって、一つがそういう買い物なんかで使う軽い契約。この時は使う魔力量も小さく、効果はほんの小さなものだ。例えば、支払いの期日には必ずどここの広場に来ること、とからしい。

二つ目が今回俺たちの間に出来たもので、約束の中でもかなり重めの契約。使う魔力量は多めだが、必ず守って欲しい時に使われるそう。そして効果は……。

「約束を破っていると痛みが走る、か…」

「ケントさん、ごめんなさい…」

「いや、約束を破らなければいい話だから、な？」

ファルは気にしているようだが、カランさんによるとこれは軽いものらしい。双方の合意が有れば痛みもある程度抑えられるし、あまりに遂行に差し障りがあるとき、例えば突然誘拐監禁された、とかだったら痛みが走らない、という空気を読める仕様なのだ。当然、約束を守るといふ強い意思が前提だが。誰がそんなふうに決めているのか？と聞いたら、「世界の意味よ」と返ってきた。うん、もう気にしないでおう。

そして、三つ目が完全な契約である。破れば即死、それも約束した

もの全員である。これは本当に愛し合っている夫婦とかがたまにするらしい。

「魔術を発動させたのはファルちゃんだけごと、その自覚はなかったのよね〜」

「はい、すみません……」

「いや〜、でも魔力的には三つ目の契約になってもおかしくなかったのよ〜。実際魔力量は少年より多いし〜」

「そつえば、俺より多いなあ」

言われて目を魔力で強化してみれば、魔力量は普通に俺を上回っていた。それはまあ、お腹のあたりに魔力の光があるんだがそれが俺よりも大きくて明るいのだ。ちなみに、カランさんは俺と同じくらいである。

「少年も〜、世界で珍しいくらい多いけど〜、まあ〜種族として当たり前かしら〜」

「まあ良かったよ、大事にならなくて。な、ファル？」

「…私、魔力の制御も魔法についても習ったことなかったの……。これからどうしたら良いのでしょうか?」

心配そうな顔でファルが言う。確かに、突然魔力がどうとかなったから大変だろうしな。俺はまあ、種族適性というか使い方がすぐ何となく分かったから良かったものの、これからは色々と修行していかなければならないのだろう。

「少年に教わるしかないわね。彼が先生になってくれるわよ？  
真竜様なんて、この上なく贅沢な先生役よ？」

……そういえば、先生は俺がする約束でしたね。

「さて、話も終わったところでリリーちゃんも起きる頃だし、移動しましょうか？」

「じゃ食器だけ片付けてからな。あと数分くらい待てるだろ、カラ  
ンさん？」

話をカランさんが切り上げたので、俺も食器を洗おうと立ち上がる。鮭を焼いたからか、かなり皿も魚の油が付いてしまっているし早めに洗ってしまったほうがいいだろう。それを聞いたファルも包まっていた布団から慌てて立ち上がった。朝からずっと隠していた布団が解け、服が見えたのだが…。

「あ、私が洗いますよ！ご馳走になりましたから……ケントさん？」

俺は言葉を失った。

きちんと風呂に入り、食べて寝たお陰で髪はつややかな銀色。そこに可愛らしい耳がのぞく。そこまではずっと見ていた様子であり、そこに驚いたわけではない。

ファルが着ていたのは、真っ白のワンピースだった。

エルフの技術か、布団にくるまっていたのにシワ一つない。全く余計な装飾はなく、胸元には明るい水色のリボンがあしらわれているだけだったが、それこそが最高の選択だろう。

「……あう……そこまで無言で見つめられると恥ずかしいです……」

「少年、女の子に視線で穴を開ける気かしら？」

「ご、ごめん。でも……最高に似合ってると思う、うん」

何とか再起動したが、これは凄い。日本のミスコンにでも出したら一発で優勝だ。あ、でも耳と尻尾は意見が分かれるところかもしれないな。

「……じゃっ、私片付けますねっ！」

ファルは未だにフリーズ気味の俺からささつと食器を奪って、台所に逃げこんだ。顔が真っ赤だったけど……俺のせいだよな、うん。

「少年、女の子泣かすんじゃないのよ」

「カランさんもたまにはまともですね」

「あらあら、失礼ね」

そりゃ女の子に限らず、友人は一人も泣かしたくないよね。つい最近でも渡辺を泣かしてるからなあ、きちんと泣かさないように振る舞わないと。

「どうかしら？リリーちゃん諦めてファルシアちゃんにしく気になった？」

「やはりまともじゃなかったですねカランさん」

食えたから良かったのか、またもや食事前の話に一気に立場を元通りにしたカランさん。やはりご飯あげなければよかったかなとも思うけれど、俺は寛大な心で許してやる。

そうこうして数分が経てば、もう食器洗いも終わる。

「もう行けます、お待たせしました!」

ファルが顔だけ出して台所から言う。恥ずかしいからか俺の後ろからファルは来るらしい。ごめんなさい、ビビらせてまして。

「じゃあ、ついてきてね」

やっとリリーと会えるということでファルもそわそわとしている。何というか、見慣れないおもちゃの前の猫のようで少し心が和む。と、ファルがカランさんに尋ねた。

「どこに行くのですか?」

「もちろん、世界樹よ」

## 第24話（後書き）

新年度がスタートですね！

もうニュースとかだったら雰囲気変わってるところもありましたけど。

今回は4月4日土曜日の更新予定です。

2015/07/09 微修正



## 第25話

俺とファルはカランさんの後についてエルフの里の中を歩いていた。木の家というより、家の木が立ち並ぶ幻想的な風景に、その窓からこっそりとのぞいているエルフたちの姿がまじる。どうやら髪の色は様々らしく、緑に青、ピンクまであったがそれぞれに共通するのは、透明度の高い髪の色であるということだった。そもそも髪は日光を遮るはずなのになぜ透明度が高いのか……。やはりファンタジーは地球とは違うらしい。たぶんそのあたりを気にしてはいけなのだ。

足元にはしっかりとした土があり、石などで舗装をされているわけでもないのに歩きやすい。一度舗装してしまうと木にとっては生きにくい、水が表面で流れてしまう状態が出来上がってしまうからなきっとそんな関係で舗装をしてないのだろう。

エルフたちは遠目でのぞいているらしいが、どんな人たちなのか魔力強化した目で見渡してみる。向こうも何らかの形でこつちを見ているのだろうし。

「エルフとは言っても、やっぱりカランさんは別格なんだな。他のエルフたちは魔力量そんなに多くないし」

「え、ケントさんはそんなことまで分かるんですか？私見ても魔力どころか、エルフさんたちの場所もわからないですけど……」

ぼそりと呟いた俺の一言に、横を歩いていたファルが驚いたように言った。ファルはキョロキョロ辺りを見回しているが、まずエルフ

たちを見つけることから苦戦しているらしい。

「魔力を目に通したら普通に見えるぞ？」

「魔力を、目に……？」

俺はあの草原で練習してて出来たと言えるのはこの魔力強化だけだしな……。なんていうか、俺あの学校で普通に賢かったのに何で能力は脳筋っばいんだろうね。俺、高校三年生の分まで勉強終わらせてたよ？ほんとだよ？まあ、渡辺には勝てなかったけどさ。

そんなことを思ってたら、カランさんが振り向いて、呆れたような表情でファルに言う。

「ファルシアちゃん、悪いことは言わないから試さない方がいいわよ？」

「えっ？どうしてですか？」

「こめる魔力の量が難しいからよ。治療師のいないところでやったら、死ぬわよ」

「お、俺ひとりで適当にやったぞ？」

死ぬ可能性あったのかよ。でも、そんなに難しいことだろうか？実際、俺は目の強化の時は魔力を網膜にこめることで魔力が見えるようにしてるし、身体の強化は至って簡単、細胞一つ一つに魔力を染

み渡らせるイメージで強化している。そんなに難しいことではないと思うのだが。

「少年は極端な例外だわ。普通く、腕を強化しようとしてく、数十回自分の腕爆散させてく、やっと身につくとも言われているもの」

「そ、そうですね……」

それを聞いたファルは顔がひきつっているが、似たような顔をしている自覚が俺にもあった。っていうか、それを俺はファルに教えるんだろ？教えられる気がどんどんなくなってきたぞ……。

「魔力の操作って所詮イメージだからね。少年はく自分の体や他の物質についてくしっかりとしたイメージがあるってことね」

「イメージ、ですか……。すごいんですね、ケントさん！私も追い付けるように頑張りますっ！」

「ああ、頑張ろうか……」

イメージ、か……。それなら、かなり教えやすくなるぞ？なんてたってアリストテレスから始まる物理の知識が俺の中にはあるのだから……。って言っても、高校までで習う科学知識ということだけです。でも、この世界でも基本的な物理法則は同じだ。なら、魔力という概念だけをどのように当てはめるか考えればいいだけなのだろう……。

難しそうだな。

「族長様、リリーの容態はどうなんでしょうか？」

ファルがカランさんに聞いたのは、カランさんがあと十分ほど到着すると言ったときだった。やはりずっと心配だったらしい。俺の飯で楽しんでくれたものの、心配なものは心配なだろう。

「そうねえ、身体には問題はなかったわ。問題だったのは精神の部分よ」

「精神、ですか？」

何でもないようなトーンで言ったカランさんに、ファルが聞き返す。前を歩いていたカランさんは、振り向くことなく話を続けた。

「エルフはね、世界樹から生まれたのよ。だから、世界樹の中には全員の精神それぞれの雛形があるのよ。で、リリーちゃんも精神が中でばらばらのピースになっちゃって」

「……………」

なんでもないように言っではいるが、これはきつと大変なことだったのではないだろうか。自分の精神がばらばらに引き裂かれる、ということ想像するだけで背筋が寒くなる。リリーはその状態で一日半は耐えたのだ。

「実際危ないところだったわ。一つ一つのピースのうち、一つでも死んでしまつてたらそこで再起不能だったもの。そこでは少年に感謝してるのよ」

「俺はそんなこと知らなかったですよ？だから適切な処置なんて一つも…」

「いいえ、魔力を注いでくれたみたいじゃない。その魔力が精神のピース一つ一つを繋いで、守ってくれてたのよ」

カランさんの話は驚くべき内容だった。何も知らなかったし、俺が与えたわけでもないけれど、助けたいと思いつながら戦い、魔力を引っこ抜かれたあの瞬間が命をつないでいたとは…。あの悪魔もどきもひよんな事で役に立ったみたいだなあ。  
と、カランさんが突然振り向いてニヤニヤしながら言った。

「普通他人の魔力つてね、何かするまでもなく拒絶するのよね。それは真竜といつても同じなの。だから、疑っているわけ」

「……と、言いますと？」

「どづいご事ですか？」

俺もファルもさっぱり分からない。首を傾げる俺達に、カランさんはとんでもないことをぶっ放した。

「どつちかが相手に自らの身を捧げる覚悟がない限りね」

「はい？」

リリーの中に俺の魔力があったのなら、リリーが俺に全てを捧げる気だったということになるが……。って何だって？！

「リリーとケントさんの間にそんな関係起こるはずがないと思います！だって、まともな状態で会話したこともないって言っていましたよ？」

全くだ。あんなキモい髪型で蛇まみれだったんだぞ？そんな奴から身を捧げられても怖いだけだよ。まあ、口には出さないけど。そんなことを口にしたらうちの娘にっ！ってカランさんがキレそう。なので、代わりの質問をする。

「どうしてカランさんはそんなことを知ってるんです？俺が知らないだけの、こっちの世界の一般常識ですか？」

「私もそんなこと知りませんでした…」

ファルは知らなかったみたいだが、俺はきつとカランさんだけが知ってる特殊な知識だと踏んでいたのだが…。

カランさんは突然立ち止まった。俺達もそれに合わせて立ち止まったが、カランさんの目には今までにないくらい真面目な光が浮かんでいた。

「ええ、普通の知識ではないけれど、私は知っているの」

突然、返事のトーンが変わる。ふにゃふにゃと話していい内容ではないのだろうか。俺はさらに踏み込んで尋ねる。

「どこかで習ったとか、そういうことですか？」

「いいえ、私はある真竜と一緒に魔術を極めようとしていた、そのときに知ったことです」

「真竜って、三百年前に滅びたんじゃないんですか？」

びっくりしたように聞き返すファルに、カランさんはゆっくりと頷いてみせた。

「そう、三百年前に滅びてしまっています。そして三百年前、私はある真竜と獣人の三人でパーティーを組んでいたのです」

そこで、カラんさんの目は俺の方を向いた。そこにあつた感情は、深い悲しみ、だろうか……。

「私のパーティーにいた真竜の名前、それがシャルナです」

「シャル、ナ……?」

「そう、向こうの世界では『辰野蒼子』でしたか?あなたの、母親です」



## 第25話（後書き）

次回は4月7日更新の予定です。

2015/07/05 文字化けしていたカランのセリフを修正

## 第26話

「……………母さん、だつて？」

その衝撃的な一言に俺は完全に呆然としていた。そもそも会ったことのない同族が死に絶えている、と聞いてもそこまで衝撃ではなかったが、目の前のエルフ族長が母さんの大切なパーティーメンバーだったとは……………。世界とは思いがけないことで満ち溢れているということなのだろう。

「続けますよ？私のパーティーは獣人一人、私、シャルナの三人パーティーでした。あの大战の時、獣人はシャルナを異世界に送るために命を落としました。」

私は悪魔たちの呪いを受け、その時から私は族長でしたので、エルフたちは他の種族から妬まれ、疎んじられるようになりました。その日以来、エルフたちを奴隷にしようというものたちがこぞって私を襲いに来ました。

族長という存在は独特で、その結果が同族全体に響くのです。私は悪意ある者達に負けるわけにはいかなかったのですが、パーティーが壊滅状態では何が起こるかわからない。そこでこの森にこもり、迷わせる結界を張って来られないようにしたのです」

カランさんはまた前に向き直り、歩きだした。そこに浮かぶ表情は分からないが、俺には鼻をすする音が聞こえた気がした。

「そして、この三百年。私のパーティーメンバーはネームプレートによると一人が死亡、一人が不明扱いになっていました。ネームプレートで不明なんて出た例を聞いたことがありません。そこに一縷の望みをかけていましたが、昨日でしたか、ネームプレートを見たら『死亡』となっていました」

多分俺が来た時のことだろう。この世界の管理者さんが俺の情報を読み込んで、適応できる情報を入れたのだ。三百年の間を耐えてきたカランさんの気持ちは、俺には到底計り知れないものだった。カランさんはまた、話し続ける。

「時を同じくして、リリーちゃんからの連絡も突然切れました。こちらは生きているのはわかったものの、何が起きているのかはさっぱりわからなかったのです。

そんな状態でしたから、かなり私も思う存分やりました。特にケント、あなたにはひどい目に合わせましたし……。

お二人には大変ご迷惑をお掛けしました、申し訳ありません」

「……えつと……。族長様は、三百歳を優に超えていらつしやる、ということですか？」

ファルが、おそろおそろ尋ねる。女性にとっての年齢のお話ってかなりデリケートなんだろうに、大丈夫か？と思うのだが。その質問にカランさんはにこつと微笑んで言う。

「そうですね、今年で483歳になります」

長老だ……。

でもそう考えると、うちの母親も寿命で死んだわけではないからそういう点ではこの人とそう変わらない年だったんだよな。関ヶ原の戦いよりも前から生きている、と考えたら強烈だね。ザビエルくらいだな、時代的に。

そんな感じでびっくりな内容が立て続けに起こっているところに、ファルの耳がピクツと動いた。それと同時にファルが上を向くので、俺も見上げてみると、いつの間にか世界樹に着いており先の見えないくらいの高さに聳えていた。そして……。

「ママー！早くファルちゃんたち連れてきてほしいのっ！！」

上から元気な声が降ってくる。それを聞いた瞬間、ファルの顔は太陽のように満面の笑顔で輝き、その方向めがけて叫んだ。

「リリーッ！！！！」

ファルはすぐにぱふんつと音を立てて猫になり、猛然と木登りを始めた。あまりに勢いづいていたので止められなかった。というか、あの瞬間のファルを止められるだろうか。大切な友人の意識の戻った瞬間である、気が急かないほうがおかしい。

俺とカランさんは置いてけぼりを食らった形だが、心の温まる様子を見て満足だった。

「さて少年、私たちも行きましようか」

「ええ、でも行き方ってあるんですか？」

「ええ、変わらず一つだけよ」

「まさか……」

「そう、いざ、木登りよ」

ファルみたいに变身できない俺は、この体で登らなければならないのか…。

「魔法は使えないから、身体強化だけで乗り切ってね。あと、葉っぱならまだしも、枝なんか折ったら、世界樹の魔力が少年に襲いかかるから気をつけてね」

そうカランさんは言い残すと、身軽にひよいひよい登っていく。ズボンだから思う存分下から見上げて、どの枝を使っているか確認しようとしたが、あんぐりと口を開けることになった。

五メートルくらい上の枝を直上とびで掴んだかと思うと、鉄棒の要領で大車輪のように体を回転させ、そのまま上に飛び上がってまた五メートル上の枝に掴まるのだ。当然、その間には他の枝や木の葉

が茂っているというのに、体は一切それらに触れていないのだ。

「あれどうやってんだよ……」

啞然としているとカランさんはもう着いていた。途中でファルも追  
い抜いているだろうが、もう目的地らしい枝の上で手を振っている。

ざっと五十メートルか。

それを十秒かからないくらいで登ってしまったているのだ。

まあ俺も蹴って上がっていくぶんには問題ない距離である。が、枝  
を折らずに登れるかという……。

魔力強化の弊害をうまく抑えているわけではない今、そんなことを  
して辺り一体の世界樹の魔力が俺に襲ってきたら簡単に死ぬる。真  
竜だというのなら、翼くらい欲しいものだが、ないものをねだった  
ところで何にもならないのだ。

「五十メートル……。魔法飛んでくるより落ちるほうがマシだし、  
気合で飛び上がるか」

決定内容がやはり脳筋で自分で悲しくなる。だがそれしか手はない  
わけだし、やりますか！

まずは丹田あたりの魔力溜まりを意識して、体中にぐるぐる回し

ていく。その後、体を作っている一つ一つの細胞に魔力を通していくイメージで強化していくのだ。前自分で掘った穴よりも遥かに高いので、ひとまず全力で体中を強化したところで気付いた。

「このまま跳んだら地面砕け散るよなあ……。地面も強化しないと……はあ」

別のものにこめた魔力が戻ってこないのは実験済みだ。無駄な出費に心を痛めつつ、周囲五メートル四方くらいをガツチガチに固めておく。

「よし、さん、に、いち……。だあっ！」

変な掛け声になってしまったが、俺は全力で地面を蹴った。上に何も無いところまで移動してからの垂直跳びだったのだが、蹴り上げた瞬間俺は焦った。

魔力が蹴り出す直前、地面にかなり吸い込まれたのだ。おかげでほぼ枯渴状態にまで減ってしまったている。

「やっべ、初速足りてないっ！」

それだけならまだしも、吸い込まれた魔力が思いの外多く、蹴り出すための魔力が足りなかったのだ。このままでは間違いなくあの枝

に届かないが、他になすすべもない。

「とりあえずっ…届けっ！」

祈ることにした。

グイグイ横の風景が流れていくこと数秒。  
ところが当然ながら物理法則は無情である。俺の目の前後三メートルくらいで上昇が止まった。

「……無理だったか…」

このまま落ちたらそこそこのクレーターを作るだろう。魔法で襲われるかなーと落ちた後を考えてその時。  
目指していた枝からひょいっと顔をのぞかせたのは、緑の髪の毛のエルフ、リリーだった。

「微妙に足りないの。世界樹様、助けてあげてほしいの」

そんな声が聞こえた瞬間、上から一本の枝が伸びてきて俺を引っ掛け、残り数メートルを引っ張り上げた。

が、俺の脚の間を通して引っ掛けて俺を持ち上げたので、木の枝は俺の局所に大ダメージを与え、俺は枝の上で押さえながら七転八倒する羽目になる。



「っ！っ！っ！」

声にならない痛み。固く目をつぶり痛みをやり過ごす。これを男性諸君なら分かってくれるだろうか。

ようやく痛みも引きはじめ、薄目を開けた先にはにやにやしているカランさんと、それによく似たリリーがいて、リリーが俺の目が開いたのを見て話しかけてきた。

「ごめんなさいなの、そこまで痛いとは思わなかったの」

「…ああ、気にするな、大丈夫だ……」

俺とリリーとの対面は、なんとも締まりのない形で始まったのだっ  
た。

## 第26話（後書き）

幕間を挟んで三章はおしまいです。  
次回は4月11日更新の予定です。

## 第27話 幕間3

お墓参りに行った翌日のこと。

学校で私は友だちと昼ごはんを食べていた。四時間目は数学だったのだが、案の定私は2日連続当選、それもそこそ難しい奴だった。厳しい先生で、たかが一週間の入院で生徒を当てるくじから私を外しておいたりはしてくれないのだ。

「未菜ってすごいよねー。あんだだけ休んでるのに、あんな難しい問題あつさり解いちゃうんだもん」

「えへへ、ありがとう。でも、私は数学は得意だけど社会は苦手だよ？特に世界史は全然出来なかつたから今地理を選択してるんだし」

「うん、まあ……。去年の成績は世界史だけ大穴だったもんね……。クラス中が『あの渡辺がつ！？』ってなつたからね」

他愛もない話をしながら箸をすすめる。あ、ほんとに世界史は苦手です。あまりに一回目は点数がひどかつたのでそれ以来世界史に努力を費やしたけど、入院のたびに記憶から抜けていったので最高でも平均。ダメだこりゃ、って見切りをつけてしまいました。二年になつて地理を選択したら、点数も良くなっているからきつと世界史は私ダメだったんだよ、うん。

「あ、放課後空いてるよね？もう駅前のカラオケ取ってあるよ！」

「もちろん！今日の門限は8時だからね、かなりしっかり歌えるのだっ！」

いえーいつ、と手をあわせる私たち。入院が一週間で済んで、8日目からカラオケにだって行ける。そんな元気？な生活が送れていると思うと大変嬉しいのだ。午後からの授業は英語と地理だ、予習は済ませてあるから余裕があるし、授業ものんびり受けられるだろう。

昼休みのあとはそんな感じで50分授業を黙々とこなし地理の授業が終わる。

「きりーっ、れーい」

あまりやる気のない日直の号令にあわせ、立って礼をすれば今日の授業はおしまいだ。楽しみにしていたカラオケへいざ、とかばんを片付けていると、一くんが声をかけてきた。

「おーい、姫ーっ！放課後、空いてる？」

「ん？カラオケへ行くつもりだったんだけど」

「ああ……うん、頼みづらいんだが中庭に行ってやってくれないか？」

「くんのこの顔には去年から何度か遭遇している。と、いうことは……。」

「……また？」

「ああ。前は入院前だったか」

「うん、そう。まあ、きちんと返事してくるね」

せつかくのお楽しみの前に、少し心の重い話ができってしまったなあ。誘ってくれた友だちに一言遅れると伝えに行ったら、苦笑して「待ってる」と言ってくれた。ほんと、ごめんね。

中庭にて。

私を待っていたのは見かけたことはあっても、喋ったことのない男の子だった。名前も知らないので、おそらく他のクラスなのだろう。

「渡辺さんっ、あの……俺と付き合ってくださいっ！」

私がそばまで行くと、いきなり少年は頭を下げてきた。おかげでどんな人かじっくりとも見られなかった。いや、だから名前も知らないんだって。

「俺去年から何ていうか…一目惚れみたいな感じだっ」

顔見えない状態で馴れ初めを語られましても。

「お願いしますっ!」

一向に頭を上げない少年に、私はため息をつきながら返答する。

「はあ……。ごめん、無理です」

「……」

即答すぎたせいか、少年は頭を下げてままだまフリーズしている。思いの外、冷たい声色になってしまったかもしれない。少し慌てて付け加える。

「いや、私、あなたの名前も知らないの。そんな人に突然言われても、ちよっと…ね?」

「……」

なんの返答も返ってこないっていうのは困るなあ。とりあえず私は続ける。

「ごめんね、お断りさせてください」

そう言っつて私も軽く頭を下げる。断つてばかりで申し訳ないという  
と申し訳ないのだけれど、やっぱり好きな人と付き合いたいし。  
そのまま中庭を出ようと歩きだしたその時、少年がぽつりと言った。

「やっぱり……好きな人がいるっていうのは本当なんですか？」

その言葉が耳に入った瞬間。

私の心の中でなんと表現し難い感情の暴風が吹き荒れた。  
心の中に甘く切ない想いが広がるのに、その対象は淡い霧に包まれ  
たかのようにはっきりしない。つい最近生まれたようなものではな  
いこの感情に、私は戸惑った。

「えっ……」

気がついたら私の頬からは涙が零れていた。それに触れて私も呆然とする。

「う、ごめんなさいっ！」

私はそのまま駆け出してしまった。後ろに訳の分からない様子で立ち尽くしている少年を残したまま。

校門の前で待っていてくれた友だちに、『どうしたの!?!』と驚かされた。なんでもないと誤魔化しながらカラオケへと向かう。勢い良く走ってきたから私の剣幕に驚いていたらしい。その頃には溢れ出した涙も止まっていた。

でも、一緒にカラオケに行っても私は相談することができなかった。仲良しではあるけれど、こんなことは聞けないから。

誰か知り合いがいなくなっ  
ていないか、なんて。



某所にて。

「ああ、何でっ!!」

感情の削除だけ彼女はうまくいかない!他の人たちは問題なく因果の消滅を完了しているのに……。

痕跡消去は百パーセント完了、記憶消去は九十五パーセント、感情消去も同値……。

渡辺末菜、彼女を中心に因果律に歪みが出始めてるっ!

やはり最後の治療のせいか?父上の言ったことに従うのではなかったか……。

このままでは他の人の因果律までも乱してしまう!!」

「みーくん、忙しそうじゃのう?」

「ええ、忙しいですよ。父上は仕事しながらこちらへコールですか?」

「そうじゃ、面白そうになってきたからのう」

「なっ、父上っ!こうなることが分かってて謙人を唆しましたねっ!」

「そりゃ、分かつたわい」

「どうするんです、このままじゃ彼女を異物と判断して世界が勝手に彼女をはじき出してしまいますよっ!??」

「慌てるでないみーくん。お主の痕跡消去、それは完璧じゃよ。それに抗う可能性を彼女が持っていたというのも事実じゃ。しかし、

抗うと決めているのは彼女自身なのじゃよ」

「彼女はこの世界の人間ですよ！謙人とは違うのです、世界移動なんて出来るはずがないでしょう！」

「やってみなければ分かるまいて。というか、今渡るのにちょうどいいものがあるからろう」

「どういことですか？」

「今あつちの世界では召喚術が試みられておる。それに便乗して送ってやればよからう」

「召喚ですって？はあ、向こうの世界は何を企んでいるのやら……」

「悪魔を呼ぶらしい。面白からう、ハッハッハッ！」

「別の世界ですから、私には関係ありませんが……。それなら、送ってあげられるでしょうね。でも、送る前に私は彼女と話しますからね。あなたの悪行を伝えておきましょう」

「なっ！義理の孫にそんなことを吹き込むでないっ！」

「自業自得ですよバカジジイ。では、召喚魔術があつたら送りますから、そのつもりで」

「あ、そうそうみーくんよ。召喚術は多分今夜だし、頑張るのじゃよ？ではなっ」

「なんですと?!」



## 第27話 幕間3（後書き）

ブラック企業に勤めている光弘おじさんですね！

尚、マイパソがクラッシュしたので執筆速度が落ち、ストックが大変心許ない状況になってしまいました。  
次章の更新まで少しお待ち下さい……。

04/13 タイトル修正  
08/14 ルビの修正

第28話（前書き）

お待ちせしましたっ！

## 第28話

股間を押さえのたうち回るといふ大変目の毒な光景をお見せすると数分。

その間にファルも登ってきていたらしく、俺が復活した頃にはリリーと抱き合っていた。うん、微笑ましいね。

「こちらにどうぞなの!」

「外でお話も辛いく、中に入ってちょうだい」

カランさんとリリーの声に従い、俺とファルも世界樹のうろの中に入る。

中には俺たちが昨夜泊まった木の家の広さくらいの、大きな居間が広がっていた。

俺たちはそのテーブルに座り、カランさんの出してくれたお茶を飲んでいた。紅茶っぽい味がするのだが、これもエルフの里で湧いているのだという。茶葉くらいお湯に通すこと考えようよ…。

「あなたが、リリーを助けてくれた人なの?」

リリーが俺に尋ねた。俺はそれに頷く。

「ああ、辰野謙人だ。謙人と呼んでくれたらいい。助けたというか、本来なら魔法が発動する前に助けられればよかったんだが……。間に合わなくて、本当に申し訳ない」

頭を下げると、リリーは慌てて手を振った。

「いやいやいやいや、助けてくれただけで十分すぎるくらいありがとうなの。ファルも無事みだし、ケントに本当に感謝してるの」

「んー……なら、もうお礼合戦はやめて俺と友達になってくれ。俺こっちに来て全然日がないから、友人が欲しいな」

「是非、なの！異世界人で真竜って、面白い友達になれそうなのっ！」

お礼合戦を止めるつもりで友人が欲しいなどと言ってしまったが、リリーはうきうきとそれに応じてくれた。向こうの世界でこんなこと言ったら間違いなく引かれるね、ドン引きだね。

「二次元では『友達になって？』が多かったが、三次元ではそれを言ったところで友だちは出来んっ！！」

そう叫んだのは一だったか？あいつはオタクと言われる部類だったからな、見た目は別に悪くないのに。

まあ、俺は『言わなきゃ始まんっ!』派だ。どうでもいいけど。

「とりあえず……何だ、ネームプレート見せるわ。他の二人にはもう見せてるから」

「なら、リリーのネームプレートも見せるのっ!良い機会だから、三人でネームプレート交換会なのっ!」

何故かネームプレートを見せるのに乗り気なリリーに、ファルが慌てて止めに入る。

「リリー、ネームプレートは人にみだりに見せるものではないのでは?私がリリーのを見るなんて、族長様の娘という肩書もあるでしょう、いろいろと不都合が生まれませんか?」

「だから、ママは除外してるの。普通は同じパーティーになったら、仲間のネームプレートは軽く暗記してるの。きつとケントとファルはパーティーを組むんだろっし、そこにリリーも入れさせてもらう魂胆なのっ!」

「いつも通りちゃっかりしていますね、リリーは」

得意げに言い放ったりリリーに対し、ファルは苦笑して返した。リリーは胸を張っているが、俺とファルがおなじパーティーになるって?俺、言っただけじゃなかったはずなんだが……。



「ネームプレート、なの！」

リリーは右手を突き出して言い放つ。せつかく見せてくれるのだから、信頼の証として俺も受け取るべきなんだろうな……って、ん？

「リリーに、俺のネームプレート見せてないよな？」

「ママに教えてもらったの！」

おいカランさん、プライバシー保護法っていうのを教えて差し上げましょうか？

ちなみに、俺のジト目に気づいていないかのようにカランさんは微笑んでいる。

「……なら、失礼して……。オープンっ！」

リリーの手からネームプレートを受け取り開けてみると、ひっそりとファルものぞき込んだ。

名

リリアーナ ミルエノン(16)

パーティ

無所属

出生地

エルフの里

種族

エルフ

父親

レアール・ミルエノン

母親

カラン・ミルエノン

住所

エルフの里 世界樹

職業

無職

……みんな無職だな。

さらっと目を通すと、ファルも見終えていたらしくそのままリリー

に返す。

「ありがとう、見た……って、ほかになんか言うことあるんだろうか？」

「別にいいの、何か重要なことが書いてあるわけでもないの」

そうリリーはあっさり言うとな自分のネームプレートを消す。ところで、俺はリリーたちが連れてこられた時からしか知らないことになると気づく。

「リリー、どうしてあんな盗賊団連中に捕まっていたんだ？あいつら、リリーをもともと狙っていた、みたいな感じの話しぶりだったけど」

「それは私も聞きたいわ、リリーちゃんなら捕まるわけないと思ってたのだけど〜」

カランさんも続けて言う。ファルも口には出していないが、首を縦に振っていた。どうやらファルはかなりの手練れらしい。

「……頭に血が上ってたの……。一生の不覚だったの……」

絞り出すようにそう言うリリー。俺には、そこに悔しさの色を感じ

取る。リリーはそのまま、ゆっくりと話し始めた。

リリーはもともと、光属性の魔術が得意だった。というか、それしか使えなかったらしい。そこでエルフの里の外に出て、治療術の技をあげることによってこれから生きていけるようにしようとしたのだという。

「エルフの里ではみんな怪我しないの。魔物も一瞬で駆除されちゃうから光魔法も使う暇がないの」

「……優秀なのも少し、大変ですね……」

ファルがぼつりと呟き、リリーがそれにうなづく。

「だからエルフの里からはそこそこ離れたところで、お安く治療師として活動するようにしたの」

そこで訪れたのがファルの村であり、ファルと出会ったのだ。ファルとは意気投合し、仲良くなってしばらくして、ファルが銀猫として突如毛色が変わったのである。最初は自分が原因かと思って慌てたが、カランさんからの返事でなんの関係もないと分かったらしい。どンドン冷たくなる村の人の態度に心を痛めながらも、仕事として少し遠くの村に半月ほどの日程で出張に行つて、帰ってきたらリリーがいなかったという。

「帰った瞬間に分かったの。周りの人に聞くと奴隷にしたって言うてたから怒髪天を突いたの」

事情を知ると即、村長の家の扉を蹴破りファルの売り先を吐かせようとしたリリーだったが、そこで家の屋上に潜んでいた盗賊に麻痺毒の付いたナイフで刺されたのだった。

「村長と盗賊はグルだったらしいの。でも、リリーが麻痺で倒れるうちに盗賊団がやってきて村中を略奪してまわっていたの。そのせいで、ドレア村は壊滅なの……」

「……そうだったんですか……」

呆然とした様子でファルがつぶやく。俺も言葉にならなかった。しかし、ここでふと気づく。

「なあ、ファルのお母さんってネームプレートには苗字のついたまま、死亡とも書いてなかったよな？ だったら、ファルのお母さんはどこかで生きてるんじゃないか？」

「っ！」

「そうなの！ 奴隷にもなっていないなら探しに行くべきなの！ 私たちのパーティーの最初の目的地はドレア村周辺なの！」

俺たちがパーティーを組むとはまだ決まっていなかったけどな。まあ全員乗り気なら全然大丈夫だろうし、お母さんは早く見つけてあげられるに越したことはないだろう。

と、ここでずっと黙っていたカランさんが口を開いた。

「リリーちゃんが外に出るのには反対よ。死にかけてばかりなのだから、少し謹慎処分かしら？」

第28話（後書き）

次回は20日更新の予定です。

## 第29話

「な、そ、それは……嫌なのっ！」

抵抗する理由がすぐには思いつかなかつたんだな。  
少し抜けてる感のある言葉に、ファルも苦笑気味だ。

「仕方ないでしょ。一つの属性しか使えないエルフとはいえず、エルフであることには間違いないのよ。エルフが狙われるのに、看過できるわけがないじゃない？」

一方のカランさんは完全に理論武装しているが、俺の予想からすると……

「……本音は？」

「リリーちゃんのお婿には、少年は認められないわ」

……おい。

さっきの騒動を思い出してファルの方を窺うと、ファルはにこにこ  
と微笑んでいる。

が、目は笑っておらず、その視線の先のカランさんが凍り付きそ  
うな温度で見つめていた。



カランさんもその視線が突き刺さっているせいか、顔がひきつっている。

「……じ、冗談よ。ひとまずリリーちゃんは世界樹さまとお話  
しできるまで」

「はあ、世界樹さま、ですか？」

ファルが聞き返すが、それに答えたのはカランさんではなくリリー  
だった。

「世界樹に宿っておられる聖霊さまなの。エルフの魔力に、気が向  
いたら答えてくれるの。今生きているエルフでお話しできるのは…

…」

とここでリリーが言葉を切り、うんざりした目つきでカランさんの  
方を見る。

「私だけね。来ていただけたら旅に出ても良いわよ」

「不可能なことじゃないんですよね？」

「もちろんよー！」

魔力の感じではなんか、うずうずしているように思えるのは俺だけだろうか？

さっきから外の魔力の光がこっちに寄って見えるし、『光が踊る』を体現してるように見えるが……。

そうこうしているうちにリリーは腕をまくり、気合い十分になっているようだ。

「絶対一緒なの！絶対成功させるの！」

そう言うと部屋の真ん中に立ち、リリーは目を閉じる。ゆっくりとリリーの魔力が体から染み出してくる。

その色は薄く青みのかかった緑色で、それはこの部屋の中いっぱいに広がった。

触れる魔力は温かく、澄んだ気持ち伝わってきた。

「っー！」

「あらあら、本当なの〜？」

突然リリーのそばに広がっていた魔力が収束を始め、部屋に風が吹いた。

俺が息をのんだ横でファルは一心にリリーを見つめ、カランさんは口調こそ変わらないものの、少し声色が真面目なものに変わる。

そして、部屋にカツと白い光が溢れた。

「くっ……この光は？」

「間違いないですね、世界樹さまです。まさかりリーちゃんが成功させるとは……少し驚きです」

流石に成功したとわかったら、のんびり口調のままではいられないらしく、カランさんが真面目な口調へと変わる。

俺も魔力を目にこめて強化し光の源を覗いてみるが、ただ眩い魔力が目映るだけで何が起こっているかはわからない。

少し目を細めたまま待っていると徐々に光が弱まりはじめ、人影が二つ見えてくる。

そこには、背中に一對の透明な羽を持つ少女と、その腕に抱かれているリリーの姿があった。脱力はしているものの、リリーの意識はあるようだ。

「リリーっ！」

「心が弾みすぎてこの子から魔力を吸いすぎたわい。妾も少し焦りすぎたのっ」

ファルの声に応えたのは、その羽の持つ少女だった。

「お久しぶりです、聖霊さま」

「そうじゃの、姿をとったのはお主の結婚式以来じゃったか。変わるんの、カラン」

見た目若いのに、喋り方が古いな。さすが世界樹とやらだ。

「そのガキ、妾に失礼ではないかの？」

「……」

おお、怖い怖い。俺の頭の中を正確に想像して言い当ててきたよ。なんか、この世界の女性って本当に強いよなあ。

「妾がこの世界樹の聖霊じゃ。エルフたちに呼ばれたら出てきて話相手にさせておるからの、暇なんじゃよ」

あっさりテーブルのそばに座ると、そのまま紅茶を飲みだす聖霊さま。

……全く神聖な感じしないな。

リリーはどうかやら魔力の使いすぎだったらしい。  
今はファルに膝枕をしてもらって思う存分甘えている。

綺麗なワンピースを着た銀の髪の子猫少女に、緑の髪のエルフの少女が戯れる風景。

「お疲れさま、リリー」

「ふにゃ〜、がんばったの〜」

……和むわあ。

と、紅茶を飲んでいた聖霊さまがこちらを見た瞬間、ギンツと音を立てたかと思うと……。

「な……なに？」

世界が、止まった。

カランさんはティーカップを口に運ぶ途中で固まっているし、リリーとファルは戯れた瞬間で石のように動かない。

俺が息を呑んでいると、目の前の聖霊さまが口を開いた。

「妾たちふたりが加速しているだけじゃ。彼女らにはなんの問題も

ない」

「……流石、聖霊さまですね。何でもありですか」

少し常識外れな状況に、俺は軽い皮肉しか返すことができなかった。そんな皮肉など何処吹く風で、聖霊さまは続ける。

「お主が異世界からの真竜の末裔か。シャルナ嬢ちゃんによつ似てるの」

「そうですか？」

向こうの世界で似ているって言われた記憶はない。

そんなに似ているとは写真を見て思ったことがなかったし、光弘叔父さんもそんなことを口にしたことはなかった。

「うむ、魔力の色がそっくりじゃ。しかし……」

「しかし、とは？」

突然眉間にシワを寄せ、穴のあくほど俺をじっと見つめる聖霊さま。そこまでじっと見つめられるとかなり居心地悪いです。

「お主、本当に真竜か？能力の一切が見当たらんぞ？」

「――何だと？」

能力まで覗かれていることを言われ、俺は警戒態勢に入る。

一旦体の周りに魔力をまとい、すぐに脱出出来るように身構えたところで、聖霊から呆れたような声がかげられた。

「妾はこの世界の管理者じゃよ。さすがに妾の作ったネームプレイヤー  
トヤ、持っている能力くらい勝手に読めるわい」

「……それを、信じられるとでも？」

「はあ……お主、こっちに来るときに会っておるじゃろう？妾の父親があ  
のクソジジイじゃよ。妾の名はシーレ。当然、あのジジイの呼び方は想像が  
つくじゃろう？」

光弘叔父さんがみーくんなら……。

「……シーちゃん？」

「そういうことじゃ。なら、お主の父親も呼ばれ方も分かるじゃろう  
っ？」

たつの にひろ  
辰野丹弘

「……にーくん、でしょうね……」

「大正解じゃよ。つまり、にーくん、みーくん、しーちゃん。ついでに長男のイルスでいーくんの、四兄妹じゃよ」

いち、に、さん、よん！というわけだ。

「父さんと叔父さんだけ名前が違う感じですね」

「ああ、あのジジイが漢字を作るのにハマってた時期じゃったからな。ああ、兄弟間で百年単位の年齢差があるからの？その間にハマってたという残念組なのじゃよ、二人は」

……父さんも苦労したんだなあ。

「分かりました、信じましょう。確かに、話しぶりからして間違いなさそうです。では、初めましてしーレ叔母さん」

「そういうことじゃ、まあ丹弘兄が子供をつくるとは思わなんだがなあ……」

あの爺さんと血のつながりがあるということを考えて、何となくこのしゃべり方によく似た部分があることが分かる。だが、さっきしーレ叔母さんの言っていた……



「能力の一切が見当たらない、とは一体全体どうということなんですか？」

「うむ、真竜というと必ずある能力を持つんじゃない。その能力が三つあってな、お主は持っておらん。ネームプレートにあるのだから一応は真竜で間違いないのじゃろうが、そういう意味では、お主は真竜ではないのじゃ。持つ能力が弱すぎる」

「ー何だって!？」

その叔母さんの言葉は、少なくとも衝撃を俺に与えた。

それは、俺を異世界に飛ばした爺さんと叔父さんの言葉、そして母さんの手紙とは真っ向から対立する内容だったのである。

## 第29話（後書き）

次回更新は木曜日の予定です。

第30話(前書き)

風邪引きまして寝込んでおります……

### 第30話

固まっている俺に対し、叔母さんは淡々と続ける。

「竜息吹、重量操作、超回復。この三つが真竜の持っておった固有能力じゃ。お主からは超回復の欠片くらいしか能力を感じん。それくらいなら、普通こちらの世界に飛ばす必要はないはずじゃぞ?」

「え、でも俺向こうの世界でも怪我は一瞬で治るだけだったけど」

まあ、それも向こうの世界では十分異様なものだけども。

「ふむ……。となると、妾がこちらを担当するようになってからあの世界もかなり進歩したのかもしれない。昔ならお主はこちらに来てなくて良かったはずじゃ」

「……どれくらい昔?」

「うむ、人間換算でおよそ一万年前じゃの。その頃は向こうの世界もこちらとの差が少なかったわい」

「……」

一万年前って、新石器時代のはじまりですよ?

ちなみに、完新世のスタートでもあるが、これは世界史で習うんだよな。

世界史なら渡辺にぼる勝ちしたけど、二年になって地理になってから勝てなくなっただなあ……。

まあ、中世だったらまじめに魔女裁判も行われていたわけだし、こういう『イレギュラー』にもそこそこ寛容だったのだろうけど、現代になったらそういう『イレギュラー』ってあり得ないしな。

現代だったら俺の治癒能力は大変イレギュラーだったから、十分俺は放り出されただろうな。

「さて、お主が真竜なら少し話があるのじゃ。この世界のパーティー制を知っておるか？」

「ええ、パーティーを組んでランク分けや順位付けがされているとか」

「ファルから話を聞きましたけど、今の俺はパーティー無所属、職業なしですからね。」

「今捕まったらテレビで『無職少年（17）』ってテロップが出ると思うよ……。」

「そういえば近所の浪人生が自嘲混じりに同じことを言ってたなあ。」

「それでじゃ、妾としてはお主がSランクの5番以内に達したら妾からの依頼を受けてほしいのじゃ」

「管理者サマが一民間人に依頼するわけですか？」

「妾という一個人が一真竜に依頼するのじゃよ」

……この加速みたいな感じの『手っ取り早い能力』で自分で解決したらいいじゃん。

「管理者権限でなんかしたらいいじゃないですか」

その思いを込めて面倒くさい思いのまま俺は口にするが、叔母さんは軽く手を振って言う。

「妾はこの世界の流れそのものには干渉できぬ。妾はただの管理者じゃよ。考えてみるがよい、マンションの管理人はマンションを勝手に改築できる権限を持つておるのか？」

「…持つていないね」

とというか、よくマンションなんて言う単語を知ってるな。

まあ、叔父さんとかと喋る機会くらいはあるのだろう、管理者ホットライン的な感じの。

「つまり、Sランクの5番以内ならエルフでなくとも妾と話すことができ、妾も心配することなく話すことができるのじゃ」

「今話したらいいんじゃないのか？」

「実力者でないと妾は情報を渡すことができないのじゃよ。カランはS-3じゃったから何でも話せたが、シャルナの死亡がわかったからの…。カランのパーティーはカランのみになったからパーティーは解散扱いなのじゃ」

俺が来たせいで分かってしまったのか…。

というか、カランさんや母さんって世界第三位っていうことだよな、強すぎだろ…。

いや、解散扱いだから『元』ってついてしまうのか…。

「つまり、俺に依頼を出したいからパーティーを組んでさっさと強くなれということですか」

「そういうことじゃ。あ、メンバーならあの獣人とエルフの嬢ちゃんたちがいいじゃろう。彼女たちの隠れた素質は見方によってはお主以上のものがあるように見えるわい。あと一人は自分でいろいろと考えるとよいじゃろ、もう一人も女にすればあれじゃ、ええと…『はーれむ』？じゃろ？」

……なんでそういう話になるんですかね。

カランさんが止まっているとはいえ、目の前で俺そんなこと言い出せませんよ。

「…つまり、リリーの参加を叔母さんは認めるんですね？」

「そうじゃの、大丈夫じゃ。カランは妾が言ったらうんと言わざるを得んじやろっ」

さっすがリリー、世界樹さまも認めてくれているじゃん。

俺としたらこういう明るい二人とパーティーを組めるならそれが一番だし、叔母さんの後押しなら完璧だろうな。

「うむ？そろそろ加速の時間切れじゃ。そうそう、妾がお主の叔母とか言うのは秘密じゃ、聖霊さまと呼んでおくのじゃぞ」

「ええ、分かっていますよ」

……そんなに目立つようなこと誰が好きこのんでやるっていうんですかね。

俺が瞬きをした瞬間、世界のスピードは元の速さに戻ったようである。

元通りリリーとファルが戯れ、カランさんが紅茶を飲んでいるままだった。

ここで、カランさんが口を開く。



「聖霊さま、今『加速』なさっておいででしたよね？」

「ええ、さあ、何のことじゃろうかの？」

「ー思いっきりばれてんじゃん！」

という俺の心の中の突っ込みは置いておいて。

「まあ、聖霊さまの気まぐれは分かりませんので」

「…それはそれでひどくないのか？」

どうやら、そういうのはっちゃけたことをするのはいつものことらしい。

しかし、加速に気づくとは流石世界第三位というわけですか……と俺はポーカークフェイスを保ちながら紅茶を飲む。

「ー俺と一緒に加速してお話した内容を聞かれると困るからねっ！」

「あ、ママ！リリーも世界樹さま呼べたの！」

「それはそうね、でもあなたは自分の身を守るすべを持たないでしょっ！」

「光魔法は使えるの！」

「光魔法は魔物にも人間にも効果が薄いのは分かっているでしょう。治癒しかできないと言っても過言ではないではありませんか」

「……カランさんがマジメ口調で話すと大変居心地が悪いのは俺だけだろうか？」

「族長さま、さきほど世界樹の聖霊さまを呼べたらっておっしゃってましたよ？」

「ケントは普通に強いからお主の愛娘はきちんと守ってくれと思うがの」

「ファルと叔母……聖霊さまからの援護射撃も入り、見るからにカランさんは劣勢である。」

カランさんは唇をぎゅっとかみしめると、ぐるりと俺の方を見た。

「私の娘が少年より先に死んだら少年を殺します」

「は、はい……」

「あと、私の娘を置いて先に死んでも少年を殺します」

「……え、でも俺それだったら死んで……」

「殺します」

「いや、だから……」

「殺します」

「……はい……」

有無を言わせぬ口調と強烈な眼光に、俺は首を縦に振るほかなかった。

「……つまり死ぬときも一緒にすることだねっ！」

なんて軽口は言えない、言わないよ。

「……殺されるし。」

結局、カランさんはリーの旅に同意をせざるを得なかった。自分の言っていたことを守れというファルの強烈な視線に屈したようである。

しかし、ファルの言葉遣いは完全に敬語であったし俺から見れば作法に脅迫する動作が含まれていたわけでもない。

強烈な視線と天使の微笑みでカランさんを屈服させたのだ。

「……おそらく世界最強の女性はファルかもしれない。」

今、リリーとファルは持っていく荷物を整理中である。  
叔母さんは仕事があるといって早々に光になって消えていたので、  
おそらく世界樹のなかで仕事に忙殺されていることだろう。  
俺は荷物の用意からは自主的に退場し、カランさんは途中で放り出  
されていた。

世界樹の根っこに俺とカランさんは並んで腰を下ろしていた。  
チチチ…と小鳥が鳴き、木漏れ日があたりを照らしている。

「ねえ、少年」

「…なんですか？」

完全にまじめモードであるカランさんに、俺も少し姿勢を正して返  
事をする。

「一つだけ約束してほしいことがあります」

「はい、なんでしょう？」

「『加減』はしても、『容赦』はしないでください」

「…どつという意味でしょうか」

カランさんはこちらを向いてはいない。

しかし、その声色は真剣そのものであった。

第30話（後書き）

次回投稿は27日予定です

### 第31話

突然出てきた言葉に俺は少し困惑する。

カランさんは前を向いたまま、俺の方を見ずに続ける。

「あなたは盗賊たちを殺さなかったと聞きました。あなたが一人の時には別にあなたが何をしようがかまいません、しかしリリーは攻撃能力をほとんど持たないのです。あなたの甘さのせいで危険にさらされた、というのは嫌すぎます」

「……」

「光魔法は、回復には大変大きな効果を発揮します。リリーはおそらく、この世界で一番の治癒師になるといえるでしょう。しかし、光魔法の攻撃はゾンビなどのアンデッド系にしか効果をほとんど発揮しません。そういう意味では、彼女の戦闘力はほぼゼロです。フアルシアちゃんもまだ、ほとんど戦闘はできないでしょう。あなたが唯一のアタッカーなのです」

確かに、フアルはまだまだこれからだろう。

まだ彼女の能力を俺はほとんど知らないのだから。

「あなたの前の世界はきつと大変平和な世界だったのでしよう。しかしここは別の世界です、いつまでもぬるま湯に浸かっている気分でいてほしくはない」

「……はい」

「加減はできるでしょう。でも、敵に情け容赦をかけているようでは愛娘を預けられません。あなたは強いですが、でもこの世界で生き抜くには甘すぎます。優しさには需要がありますが、甘さはいりません。肝に銘じておいてください」

カランさんは立ち上がると、そのままエルフの里の方へと歩いていく。

俺は何一つ言い返すことができなかった。

完全な真実であったからである。

カランさんが立ち去った後も、俺はそのまま根元に座ったままだった。

俺がこの三日間の激動の生活は、今までに誰も経験したことのないようなものだろう。

異世界にやってきて、早々にイッてる集団から女の子を二人助け出す。

そしてエルフの母親に締め上げられ、叔母さんと挨拶を交わしているのである。



――俺は、酔っていなかっただろうか。

異世界という有り得ないような新しい環境に、そして俺の力がむりなく使えるという奇跡のような状況に。

こちらの世界はよほど地球よりシビアなのである。

犯罪があつたからと言つても被告人に弁護士がつくような環境ではないだろう。

――衣食住に足りていた日本という国は地球でも異端な存在であつたはずなのに、俺は甘えていなかったか？

この世界でも通用するそこそこの力。  
助けた少女からの温かな信頼。

それらに胡座をかいて、俺は驕り、甘えていたのである。

だからこそ、カランさんに指摘されたことに何も言えなかつたのである。

何か言つてしまうようなみっともない人間にまで墮落していなかつたのがまだ救いか……。

俺がすべきなのは驕らず努力することであり、墮落することではないのだ。

俺は決意を新たにして立ち上がる。

上を見上げれば、肩に猫のフアルを載せたリリーが身軽に木をつたって降りてくるところだつた。

「ケント、準備できたのー！おまたせなのー！」

「お、了解だ。どこに向かうのか、予定は何かあるのか？」

リリーは地面に降り立つと明るいい声で俺に言う。

「ファルもリリーの肩から降りて元の姿に戻ったところで、俺が尋ねる。」

「もちろん、ファルのママを探すのー！」

「私事ですが、とても心配なんです……。いいでしょうか？」

「私事じゃないさ、パーティーの仲間だ、当たり前のことだって」

「そうなの、ファルはもっと堂々とすべきなのー！リリーがファルの悩みを助けない訳が無いのー！」

遠慮がちに言うファルに、俺もリリーも口々に答えた。

「ーあの盗賊団から逃げるのは大変だろう、急がないと。」

ふと目のあったリリーと、同じ考えを共有する。

「どこか、お母さんのいそうなところに心当たりはある？」

「えっと……。おそらく、あの村のそばにある山に逃げ込んでいるん

だと思えます。何かあった時の村の避難場所なんです」

「ミシエルさんはあんまり戦いにつよくなかったはずなの。急いだ方がいいの!」

「リリー、ちょっと待ってくれ。あれは聖霊さまじゃないか?」

意気込んで出発しようとするリリーを俺はとめ、上を指す。

軽く広げていた魔力探知に、他とは異なる魔力を見つけたのである。すこしすると、ひらひらと世界樹からの魔力の光が上から降ってきた。

その光はリリーの肩に止まり、柔らかく数度点滅する。

リリーは目を閉じていて、何かに耳を澄ましているようだった。

「……ファル、ミシエルさんは無事なの! 20人くらいでその山頂の建物にいるらしいの」

「村の五分の一……。私のせいで「ファルのせいじゃない」」

少なすぎると思われたのか、ファルがつぶやく内容に自分を責める色が混じったのを感じ取り、俺はそれを止めた。

ファルの顔を見るのが色々と仕出かして照れくさかったりばつが悪かったりするのには確かだが、ここでまっすぐ言えなかったら人としてダメだと思う。

「村を襲ったのは投げ組で、悪いのはそいつらだろ?」

「そ、それはそうですね……」

ファルが俯き、まだ責める色は消えない。  
ここで、リリーがファルに言い放った。

「ファルが悪かったら村が襲われた原因はリリーになるはずなの。  
でもそんなのはちゃんちゃらゴメンなの」

「リリー……」

どうやら会って数日の俺よりは効果がありそうだ。

リリーの励ます意図がよくわかり、俺はリリーに後の言葉を譲った。

「ファルは優しいの。村の連中に追放までされたのに、ファルはま  
だやつらを心配しちゃうの。でもそういう優しいファルがリリーは  
大好きなの、だからそんな風に責める馬鹿がいたらリリーは怒るの  
」！

「……うん」

「それが本人であつても、なの」

「……うう、ありがとう」

「どづいたしまして、なの」

頭をよしよしと撫でながらリリーは言った。  
「ファルも撫でられながら、泣きそうな顔をリリーの胸に埋めていた。」

……優しいのは2人ともだよ。

俺は二人が眩しい。

あそこまで仲の良い友人はいなかった。

一とはあまり深い話をしたことがなかったから……いや。

同じように怒ってくれたのは渡辺だったか。

優しくかった彼女に大したお別れの挨拶もせずに出てきた事に少し心が痛む。

と、リリーが切り出した。

「聖霊さまの話はそれだけじゃなかったの」

「何だって？」

「魔物の群れが、直撃しそうなもの」

「ええっ！」

それを聞いたファルが飛び上がる。

「ゴブリンの群三百匹くらいで、寄ってくる原因は……」

「……村での、血の匂いか」

「……なの」

「……そんなあ……、遠すぎるよ……」

ファルがその場に入たりこむが、俺はさらにリリーに尋ねた。

「山の方角は？」

「こっちに歩いて5日なの……」

「魔物が来るまでには？」

「……あと、3時間ないらしいの……」

盗賊たちのいた山の方角と反対側である。

盗賊たちはきつと転移とかなんとか、ファンタジーなことをしたの  
だろう。

それより、220キロを三時間か……。

「俺一人なら間に合う。二人は荷物持って後から来てくれ」

「だ、ダメですっ！危ないのにつ！」

「それは無理な話過ぎるの！遠すぎるの！」

「大丈夫、間に合わせるさ」

俺はリュックサックをリリーに渡す。

リリーもファルも止めようとするが、俺はやめる気はなかった。

「私も行きますっ！猫になれば何とか……」

「いや、今はファルは戦闘力が足りない。リリーは……？」

「弓矢は少し使えるけど、そんなに速く走れるわけが無いの……」

「流石に俺も一人担いでいくのはその速さでは無理だ。だから後から来てくれ、終わらせ次第迎えに行く」

俺が言い切ると、ファルもリリーも心を決めたのか俺に頭を下げた。

「……はい、ケントさん、みんなをよろしく願いますっ！」

「村までは道があるの。そこを道なりに行ったら明らかに一つ山がある。そこが多分、その山なの」

「任せとけ！」

俺は胸を張ってその期待に応えよう。

全力を尽くすのは当たり前だ、今度こそ守ってみせる。  
仲間からの期待に、応えられないはずがない！

俺はリリーの言った方向に目掛けて、森の中へ突っ込んでいった。



第31話（後書き）

次回投稿は木曜日です！

### 第32話

エルフの里の森を真っ直ぐ抜け、そこに延びていた道に入る。

カランさんが手回しでもしてきてくれたのだろうか、はたまた叔母さんのお陰だろうか、エルフの里の森は道を開けてくれていたのである。

ファルを抱えていたときにはあまり揺らさないように手加減して走っていたが、今回はそうする必要がない。

少し早めに着いて魔物たちの様子を確認しておきたいこともあり、俺はかなり飛ばしていた。

具体的には時速100キロ近くで走っているのである。

魔力強化なしでは瞬間速度で時速80キロが限界だったが、魔力強化をふんだんに使って走っていたら100キロ出しても余裕がある。

……まあ、向こうについて魔力が十分残る程度の強化だから余裕があるのだけだ。

さて、普通なら三百匹の魔物に一人で対峙するのはただのアホだと思っただろう。

しかし相手はゴブリンなのである。

ゴブリンの習性によると、好物は人肉であるらしいのだが、味方であるうがなんであるうが、死肉があればよく食べるといふことである。

しかし、その死体に含まれている魔力を自分のものにする事ができるウルゴブリンは厄介らしいが……。

そいつの有無を探りに行っておきたいのである。

「……ほんと、魔物の知識は言葉と一緒にインストールしてくれたみたいなのに何で食物の名前とかを入れてくれないんだよ」

リリーにとりついていたのは魔物ではなかったのか見ても何も分からなかったが、エルフの里まで走っている間に鉢合わせた魔物を見たときに気づいたのだ。

流石に弱点まで分かるわけではないが、習性が分かるのはかなり使い勝手がよい。

……覚えた記憶がないのに覚えているって言う時点で、受験生への冒涇だとは思うが。

だって、魔物の知識だけで理科や社会一教科分の知識を優に越えるのである。

命に関わる知識だからいいんだけどさ、うん。

さて、高速道路の車並の速さで、東京ー静岡間を駆け抜けた俺は二時間後、山登りをしていた。

避難している人たちがいるという山である。

流石に100キロでは走れないが、それでもなるだけ速く走って山頂を目指すこと10分ほどで、しっかりとした建物が目に入った。

魔力で気配を探ってみると、人数は18人。

確かにリリーの言っていた話と同じだ。

俺は小屋に近づくと、扉をノックし名乗る。

「すみません、俺はエルフの里から救援にやってきました、ケント・タツノです！中に入れていただけないでしょうか？」

少し待つと、ゆっくりと扉が開き人族の男性が顔を出した。露骨に不信感を顔に出し、その男が言う。

「あんた、どこからどう見ても人族じゃないか。冗談につきあつて暇はないんだ、魔物が来てるんだよ！」

「いや、ですからその退治をですね……」

「うるさいうるさいっ！私たちは荷物を持ってここから離れるんだ！魔物の相手なら勝手にやってくれっ！この小屋にいる人はみんな逃げるからな！」

とりつく島もないとはこういうことである。

その男性は目を血走らせながら口汚く小屋の中に怒鳴った。

「クソっ、早く支度しろっ！あの亜人どもが時間を稼いでもおそろくは30分ほどだぞ！」

「……亜人、だと？」

聞き捨てならない単語に俺は聞き返した。

『亜人』の意味が俺の知っている内容と同じなら……。

「ああ、この元凶になったクソ猫の母親たちだよっ！だから獣人な  
んざ人なんて呼ぶのもおこがましいんだっ！」

どうやらこいつらは村の獣人の生き残りを生贄に逃げ出すつもりだ  
ったらしい。

ギヤーギヤーと口汚くファル達を罵る男の声に、俺はますます腹が  
立つ。

が、ファルからは母親だけじゃない、『村の人』を助けてと言われ  
ている。

腹が立つても見捨てるということとはしないけれど……。

「だからあんな亜人どもは撲滅しておくべきで……」

「黙れよ人でなし」

「っ、なっ！」

「そこをどけ、伝言だけはする」

俺は男を扉から引きはがし、中に入る。

中には人族だけがあわてて逃げる支度をしており、獣人は一人もい  
ない。

子供も数人いて、震えるようにして身を寄せ合っているようだ。

「俺はエルフの里から来た。今から魔物を潰してくるから、確実に生き残りたい奴はこの小屋に居とけ。外に出られると守るのが難しいから安全の保障はしないぞ」

「に、二百匹もいるのあなた一人なんて無理よ！なら少しでも遠くに離れなきゃ！」

子供の母親があきらめの色を浮かべながら言う。

だが、実際今からどこかに移動したところで、逃げ切れる可能性はかなり低い。

もともと大量に殺された村人達の血のにおいで寄ってきた魔物だが、生きた人間のにおいをかぎつけてこちらに進路を変えてきている。

「俺はファルシア、リリアーヌの二人から頼まれている。だから全力でみんなを守るし、俺個人としては大変いやだがそのおっさんであっても、この小屋の中にいたならば絶対死なせないさ」

やったこともないから不安はあるが、ここでそれを口にするわけにはいかない。

まあ、犠牲者は一人も出すつもりはないが。

「…………お兄ちゃんはファルねえの知り合いなの？」

震えていた幼い子供の一人が俺に聞いてくる。

「ああ、そつだ」

「ファルねえ、どこ？ママに聞いても旅行に行つて当分帰つてこないつて……」

露骨に顔を背けた別の女性を、俺は思いっきりにらみつけた。  
子供達の人間性を見習いやがれっ！

「……お兄ちゃん？」

「ああ、後から来るつて言つてたぞ？明後日には会えるかもな？」

「ほんとっ！やった！」

「ファルねえつてことは、リリーねえも？」

「ああ、もちろん」

「……わーいっ！」「」

子供達がわいわいと喜ぶ。

——とつても好かれてるみたいじゃないか、二人とも。

「だから、この小屋の中で少し待っててくれよ。お兄ちゃんが魔物をお掃除してくるからな」

「うんっ!」

子供達はさっきまで震えていたのが嘘みたいにうきうきとしている。

「おいっ、あんた!何勝手なこと子供に吹き込んで!おまえ達もだ、早く逃げるぞ!」

「おっちゃんの言うこと聞くよりファルねえ達待つ方がいい!」

「おっちゃんたちの言うことって何かアレだよな、ウソくさい」

「っ、なっ、何をっ!」

子どもたちから思いつきり不信感を露わにされ、二の句が継げない男に俺も少し溜飲を下げる。

「それでは、俺は行きますんで」

「頑張れー、お兄ちゃん!」

声を上げた子どもたちに手を挙げて応え、俺は小屋を出ようとした



ところで腕を掴まれる。

見れば子供達にはっさり言われた男が俺を引き留めようとしていた。

「わ、わかったから！あんたはここで子供達を守ってやれ！わざわざ離れるよりその方がいいだろうっ？」

「魔物の様子もきちんと探っておきたいからな。それにここで暴れたら小屋が壊れる」

地面も壊したし。

話しながら魔力で辺りを探っていたので、ミシエルさんらしき人は見つけてある。

山から真っ直ぐ降り、魔物との直線距離が最短の場所。

そこに4人の反応があったが、その場からいつさい動いていない。

「な、なら私が偵察にいくつ、離れないでやってくれっ！」

思いつきり手のひらを返した態度に俺は眉をひそめる。

「まさか、獣人の人たちに何かしているのか？」

「い、いや別につ、そんなんっ！」

——怪我してるとか、そういうのじゃないだろうなっ！

俺は腕を振り払って男を小屋に蹴込み、小屋の扉を閉めて駆け出し、4人の反応めがけて急いで山を駆け下りる。

魔力で気配を探るのはそんなに疲れないうし魔力の消費も微々たるものだが、しかしあの雰囲気では何人かは小屋を出るだろう。

……『感知』とでも名前を付けようか。

感知を入れっぱなしにしておいて小屋の人をリアルタイムで把握しつつ、俺は山を数十秒で駆け下りる。

……いや、駆け落ちると言う方が正確かもしれない。

そして、その先にあったのは麻痺毒に身を震わせる三人の子供と一人の大人の姿だった。

第32話（後書き）

次回投稿は月曜日です。

### 第33話（前書き）

ブックマ100件、本当にありがとうございます！！

あまり上手くないとは思いますが、読んでいただけてると思つて本当に嬉しいです！

### 第33話

「だいじょうぶですかっ！」

俺はあわてて四人の元に駆け寄る。

魔力強化で確認するが、体には後遺症の残りそうなほど魔力が乱れているわけではないようだ。

それでも麻痺させられているせいか、変身や会話もままならないようであるのに、麻痺毒を解毒できる持ち合わせがない。

頭に詰め込まれた薬草の名前からあちこちを見回して解毒に使えそうな草を探していると、おそらくミシエルさんであろう大人が何か口を開こうとしているのに気づき、俺は耳を寄せた。

「……………まものが……………きます……………子どもたちを……………私はおいていつて……………」

「ダメです、俺は魔物を掃除しにきたんですよ。子供達も、あなたも俺は守ります」

「……………でも……………」

「でもクソもないです、今俺は解毒系のことは何も出来な……………」

いや。

俺の血がある。

血を使えばかなりの魔力を消費し、ろくに回復しないのは実証済みではあるのだが、麻痺を治すくらいなら出来るだろうか？

「……ただの麻痺毒ですから……後回しにして……あなたの魔力はあなたが……」

「でも……」

「……お強いのでしたら……魔物に使って……」

「……すいません、後で必ず」

……大変心苦しくはあるが戦闘前である。

後遺症の無さそうなことは魔力強化で分かっているし、ここは我慢してもらおうことにしよう。

本当に申し訳ない。

とりあえず、四人が倒れているところから少し離れたところに穴を掘る。

魔力強化で掘ること数十秒、L字形に完成した。

「皆さんはとりあえずこの穴に。俺は上で魔物を一掃します」

「……でも……」

「こちらにも、山の小屋にも、一匹たりとも魔物は通しません」

「……お願い……します……」

「はいっ！」

子ども達は麻痺に加え意識も失っているようである。

異常は……麻痺以外にはないようなので一応揺すって起こしておく。

「今から魔物退治してくるから、この穴に隠れておいてくれよ？」

「……う……ん……」

みんな舌を動かすのもしんどそうだ。

一刻も早く解毒が出来るように、魔物はさっさと退治してしまおう。

四人を穴に寝かせて、俺は一人外に出る。

『感知』には一キロ先に三百の魔物がある。

そばには獣人が隠れていて、後ろには18人の村人。

「さあ、上等だっ！かかってきやがれ魔物どもっ！」

三百匹ものゴブリンが走ってくる姿はそこそに見物である。

彼らの特徴としては、姿はゲームで出てくるようなもので、醜い。あと、臭い。

俺と奴らとの距離は500メートルはあるのに悪臭が鼻につくし、においだけでも武器になりそうな気がするのは俺だけだろうか。さらに血のにおいに敏感で、森の中で怪我などしたらすぐに群をなして寄ってくるのだ。

……これだけ聞くと大変脅威に思えるのだが、実はゴブリンは五匹くらいなら村人ひとりで退治できるのだ。

雑魚の代表格、とでも言うべきだろうか。

とにかく知能が低い。

血のにおいに寄っていくので途中の川に溺れて死んだり。

血のにおいを追っている最中に別の血のにおいをかぎつけ、それを追っている最中にまた別の……と繰り返して飢え死にしたり。

まあ、ウルゴブリンはもう少し賢いらしいが……。

——詰め込まれた知識は膨大ですな。

辞書形式、というより見た瞬間にそれについての情報が山ほど浮かぶ、という感じである。

見ていないものを調べることが出来なかったので、イメージはポンのずかんだろうか。

なお、『ゴブリンの知能が低い』というのは弱点ではなく習性・特徴に当てはまるようだ。

区別は案外適当に思えるのは俺だけなのでしょうかね。



さて、そういうわけで俺はこの魔物掃除の役目を引き受けたのである。

その結果、三百匹のゴブリンのうち少し違う個体が20匹くらい混じっており、それがエルフの里に向かうまでに見たウルゴブリンだった、というわけだ。

一匹たりとも後ろに行かさないように、最初はウルゴブリンを狙う。一体一体は散らばっていて消しにくい。俺は足元からしっかりした石を拾ってみる。

「まずは一発っ!!!」

真ん中にいたウルゴブリン目掛けて全力で投げつける。

唸りをあげて飛んでいった石は、距離200、間にいた6匹のゴブリンを巻き添えにして狙ったウルゴブリンの頭を爆砕した。

「雑魚の代表格、ね……。ごめんよゴブリン、今日のお前らは蹂躪されるだけだ」

これで大分足止めできると思ったのだが、半分以上のゴブリンはまだまだこちらへ向かってくる。

石を投げてもいいのだが、それで全員は足止めできそうにはないの諦める。

「さて、簡単なお掃除ですよ」

今度は体を強化するのに魔力を使う。俺のイメージに従い体中に魔力が行き届き、体のスペックをもう一段階引き上げる。さらに手と足を覆う魔力を薄く、鋭いものにして触ったら切れ落ちってしまうほどに研ぎ澄ます。

そして俺はそのまま、ゴブリンのムレの中に突っ込んだ。

「ググツ、グギヤアツ！」

良く分からない音を喉から絞り出しながら、ゴブリンは俺の方へと手を伸ばしてくる。

俺は身を傾けてよけると、通り過ぎざまにその首を一閃する。

断末魔をあげることもできずにこと切れたゴブリンの体から青い血が吹き出したが、その時には俺の姿はそのそばにはいないだけでなく、周りのゴブリンにも首がなくなっている。

十匹くらいのゴブリンを始末すると俺はゴブリンの群れの後ろに出た。てしまっていた。

ゴブリンの血のにおいがあたりに漂い、今度こそ全てのゴブリンの注意が真ん中の血だまりに向いた。

普通のゴブリンは仲間の死体目掛けて殺到するが、ゴブリンの群れは全体的に横に広がっているせいで、ウルゴブリンはさらに進み続けている。

が、これでウルゴブリンは分離できたのでそいつらを一体ずつ殺してまわるのである。

「……………つらあっ！」

小さな気合とともに腕を振るうと、気づいたウルゴブリンは持っていた剣をかざして防御しようとする。

……防御行動が取れるっていうのはそれはそれで知能があるよね、剣も振れるんだし。

「ググツ、グギャギャッ！」

俺の腕とゴブリンの持つ剣が交差するコース。

切断できると思い、勝ち誇った鳴き声を上げるウルゴブリンだったが、俺は動じることはない。

「……………ガア？」

俺の腕が剣を切断し、ついでにその首も飛ばす。

「ふつ、そんな鈍刀なまくらで俺の腕が落ちるかよ」

「いや、だって俺は音速に近い速度で山に突っ込んで無傷だぜ？飛行機より硬いと思うわけですよ。」

そう呟きながら俺は次のターゲットに向かう。

上位種のウルゴブリンとはいえ、所詮はゴブリンのようだが、そこそこ頭が回る。  
人間の死体を食べた方が魔力が多く取れるので、奴らは散らばって村の方へ駆け出しているのだ。  
ただ、その先にはミシエルさんたちがいるのでそれ以上通すわけには行かない。

ドガアンツ！と大音響を立てて走り出し、一瞬で一番遠くまで走っていたウルゴブリンの元にたどり着くと、後ろから首を掴んでその骨を折る。  
そして振り向きざま、持っていた死体を駆けてくる奴めがけて全力で投げつけた。

ドパアンツ！と音速を超えたとき特有の音を立てて飛んだブツは、数匹を巻き添えにし群がっているゴブリンのところまで吹き飛んだ。柔らかすぎて途中で爆散したのである。

すぐさま群れに飲まれたので、おそらく共食いになっているだろう。  
残りのウルゴブリンは『襲ってはいけない相手』を判断したらしく、背中を見せて逃走を図る。  
判断が遅すぎるものの、逃げの手を打てるというのはそこそこ賢いのだろう。

……逃げがさないけど。

### 第33話（後書き）

かなり嬉しかったので書きだめを今日から4日連続で更新しますっ！

## 第34話(前書き)

前回で100,000字越えでした！

### 第34話

逃げたウルゴブリンを始末してしまったら、あとは雑魚の普通のゴブリンだけである。

俺の持つ手段では三百匹もの（さっき消したからもうちょっと少ないけれど）ゴブリンを一挙に討伐することができない。

……ちまちまと一匹ずつ倒していけないといけないらしい。

「少し時間がかかるか……」

まだ仲間の死体に群がっている奴らに顔をしかめながら、俺は再度魔力強化を確かめて群れの中に切り込んだ。

戦うこと十五分。

完全に始末がついたので俺は穴を掘り、死体を埋めることにする。街道のそばが血まみれなのは嫌だろうしね。

穴を掘るのは面倒だったので、魔力強化した足で地面を蹴り飛ばしてつくった。

ゴブリンの掃除より後始末に多くの魔力を使ってしまったのである。

……何やってんだか、俺。

魔力はイメージだというのに、火も水も出ないこの感じはなんだろうね。

魔力強化しか使えないって、何ていうか脳筋な感じがするとか……。

しかし、穴を掘ったら『ガネンの根』という薬草も見つけた。

麻痺の解毒にいいらしい（頭の知識による）。

そのまま食べられるらしいので、ガネンの根を川でささっと洗い、ミシエルさんの所へと持っていく。

し穴の中を覗いてみると、ミシエルさんが子供たちの頭を撫でていた。

麻痺毒の効果が切れているみたいだ。

ただ、子供たちはまだ動けない様子である。

ガネンの根、見つかってよかった……。

「すみませーん……、お掃除終わりましたよー」

俺は軽い調子で声をかけると、ミシエルさんはビクツと耳やしっぱを逆立たせてこちらを向く。

「ービククリさせたらしい、ごめんなさい。」

「……あつ、さっきの方ですね？お助けいただき本当にありがとうございます。ございました。お怪我はありませんか？」

「ええ、なんの怪我もなくピンピンしてます。ミシエルさん……であっていますか？」



「……はい、ミシエル・ニネルナーですが……どこかでお会いしましたか？」

首をかしげる仕草はファルにそっくりである。  
親子なんだなあと思いつつ、俺は説明した。

「いえ、ファルシアさんから聞きましたので……ファルもこちらへ向かっています。エルフのリリーもおそらく、こちらへ向かっている筈です」

「本当っ！ 奴隷じゃなくなったのね、よかったあ……」

「ええ、ですからまずはこの……ガネンの根？ を子供たちに渡しましょう。ミシエルさんは毒の効果の切れるのが早かったのですね」

植物名に？ がつくのはご愛嬌ということ。

……だって、実感はないんだからな！

「ええ、大人の方が耐性が強いので……。このガネンの根、頂けるのかしら？」

「ええ、まだ子供の麻痺は取れていなさそうですし食べさせてあげてください」

「あ、ありがとう！」

ミシエルさんはガネンの根を自分の口に含むと、口の中でよくかんで子供達に流し込む。

少し眉が顰められたのはガネンの根が不味かったからか。

食べさせて少しすると、子供達もかなり体が動くようになってきたようである。

辺りにはもう魔物が居なくなっていることを確認して、俺たちは穴からはいだした。

――早く戻った方がいいだろうし。

子供達に合わせてゆっくり歩きながら、俺たちは山の小屋へと向かう。

子供達は安心できたのかまた寝入ってしまったので俺が二人、ミシエルさんが一人背負っているのである。

俺は揺らさないように歩きつつミシエルさんに尋ねた。

「……どうして麻痺毒にやられていたか、おききしても？」

「……ええ。私たちはドレア村の獣人の生き残りでね、まあ子供は全部助けられたのはいいものの、村一番の地主が言いやがったの。

『もともと獣人がいたせいで襲ってきたんだ、お前が時間稼いで来

い』って」

「……………最低ですね」

間違いなく、俺に絡んできた男だろう。

……………そんなことならもっと殴っておけばよかった。

ミシエルさんも冷たい目をして続ける。

「ほかの村人たちは最初は反対したんだけどね、地主が土地の権利を盾に脅いたらみんな賛成に回ったのよ。まあ農民だからそれを取られたらどうしようもないしね」

「ゴミみたいな奴ですね。もっと殴っておけばよかったです」

思わず口に出た。

魔力探知ではどうやら小屋の外にいるらしい。

離れてはいないみたいだが一体どうするか。

「あら、殴ってくれたの？うふふ、それは嬉しいわ……………まあ、それで私が行こうとしたら子供達がついていくって言い出してね。三百匹なんて倒せるわけが無いし、この子達も変身したらゴブリンからは逃げられるかと思っていたのよ」

「なるほど……………それは分かります。ファルも変身したらすごく素早

「いすしね」

「ええ、そうなの。で、その魔物のそばへ地主が案内したんだけど、そしたらあのクソ野郎、道がけに動物の狩り用の麻痺毒入りのお菓子を子供に食わせやがったのっ！」

「んなっ！何考えてるんですか、そいつ！」

「そう！それであいつが子供を人質にとつて残りのわたし達にもそのお菓子を食べるように言い出して、食べて麻痺して転がっていた、っていうところ」

……掃除しないといけない魔物がまだいたらしいな。

「……まあ、仕方ないのよ、彼は帝国からの移民の一人だから」

「帝国、ですか？」

「そう、知らない？ヴァイス帝国の人は総じて人族至上主義なのよ。まあ、種族別に固まりやすいっていうのは多いんだけど、帝国では特別なことがないかぎり国内の人族以外はみんな奴隷なの」

「うわぁ……」

「もともと人族の人口は獣人やエルフとは比べものにならないくらい多いから、そういう考えにもなりやすいのかもしれないわね」

そう言つて寂しげに笑うミシエルさんの顔は、見たことのないような同じ種族の獣人たちを氣遣つてのものだった。

「いっそ、全種族を真竜さまが断罪してくれたりしないかしらうってね」

冗談のつもりで言っているのだろうが、俺にとっては笑い事ではない。

……先祖も母親も、一体何をやった!?

しかし、今の話では意外とミシエルさんには村人は友好的人が多いらしい。

なら、なぜファルは奴隷になったのだろうか？

さて、山を登るところにさしかかり、ミシエルさんたちの姿も普通の人でも小屋から見える距離になった。  
その瞬間、外に出ていた地主だという男が動き出す。

「あ、地主が動き出しました! 思いつきり俺たちから遠ざかってますね」

「麻痺させたっていうのは流石に村の掟を破ってるからね、逃げたんでしょ。カバンの中にはかなりの金貨が入ってるみたいだしね」  
あつさり吐き捨てたミシエルさんの言葉には、間違いなく待ち針が数千本刺さっていた。  
当人にとつたらぐつさぐさに心に突き刺さる痛みじゃね？

「追います?」

「いいわ、別に。無傷だったし、あいつと顔も合わせたくないわ」

「なら、約束の完了だけ伝えて終了ということだ」

そうやって俺はまたその男を『感知』で追跡しなおす。  
一段落ついたらお話し合いをするつもりなのだ。  
ミシエルさんの依頼でなく、俺の勝手で。

そうして歩くこと二十分ほどで、小屋のすぐそばまでたどり着いた。  
行きは数十秒で降りてきているわけだが、注意した甲斐あって背中の子供たちはまだまだおねんねである。

……俺、頑張った!!

小屋の戸をゆっくりと開けるミシエルさん。

「ただいま、ですね」

ガバツと座り込んでいた人たちが顔を上げ、ミシエルさんの姿を目にする顔は明るくさせた。

「ミシエルさんっ！無事だったんですねっ！！」  
「ごめんなさいっ、止められなくて本当につ！」

何人かはミシエルさんに飛びついていつている。

「みんな、ただいまっ！」

「帰ってきた！大丈夫そうだな！」

「うん、あのお兄ちゃんが助けてくれたのっ！」

「あのお兄ちゃんな、ファルねえとリリーねえを連れてきてくれるらしいぜ」

「ほんとっ！さすがお兄ちゃんっ！」

子ども達はきらきらした目を俺に向けてくる。

……落ち着いたら二人を迎えにいこうか。

子ども達のきらきら視線にあたふたしていると、小屋の中での一番年を取っているらしきお婆さんが声をかけてきた。

「ドレア村の生き残りが助かったのは坊やおかげじゃ、ありがとうな」

お婆さんはゆっくりと、しかし深く頭を下げる。

それに合わせてほかの大人も頭を下げ、それをみた子ども達も分からないながら真似をする。

……ああ、恥ずかしいぞこれはっ！



第34話（後書き）

明日も投稿がんばります！

### 第35話

頭を下げてくる村人の前でおたおたとすること数分。

やっと頭を上げてくれた村人達に今後の方針を聞くと、やはり村の再建だという。

20人そこそこしか残っていないが、公都に行けば仕事を求めている人たちを回してくれるらしい。

「あの地主って、村の土地を持っていたんですか？」

ミシエルさんに聞くと、困ったように彼女はうなずく。

「そうなのよ、村の土地そのもののほとんどはあいつの物のままなのよね……」

「なら、新たに開墾するとかは駄目なんでしょうか？」

「開墾は無理よ！どれだけの土地を耕さないといけないと……って、もしかして……」

俺はにやっと笑って言う。

「ここに無駄に力が有り余ってる人間がいますよ」

「しかしじゃ、そこまでさせるわけにはいかん。坊やは我々の恩人なんじゃ」

お婆さんも話に入ってきた。

大人達もこれからの話らしいと寄ってくるので、俺はちょうど良いと思って話し出す。

「どうせ公都から人が移住してくるんですよね？なら、俺も移住させて下さい！今俺は家がないんです……」

「そうなのか？腕前としてはCランクパーティーくらいはあるじゃろ？」

「まあ……見てもらった方が早いでしょうし。『ネームカード』」

流石にネームプレートは出さないように気をつける。

俺だって言いふらすつもりは全くないしね。

ただ、お婆さん的には俺はCランクか……。

辰野 謙人（17）

パーティー

無所属

住所

なし

職業

無職

「あらあら、ほんとに住所なしなのね……。良いじゃないですか、お婆さん。新生ドレア村の移民第一号はケントくんで」

「うーむ……。よし、なら村最長老ゲルの名において、ケントをドレア村の民と認めようと思うが、どうじゃ？」

「いいんじゃないの？子ども達も懐いてるし、何より恩人だ。逃げ出すような地主と同じような人でなしにはなりたくねえや」

よく日焼けしたおじさんが話に乗ってくる。

陽気に賛成してくれるし、周りの人達も同様であった。

しかしネームカードの証明レベルってすごいな。

見せたら信じてくれた、良かったよ。

せっかくだからファルを鍛える場所もほしかったし、そういう意味でドレア村がいい、という計算があるにはあるが……。

地主以外全員良い人みたいだしね！

いつそう何でファルが奴隷になったのか分からない。

「じゃあ、そういうわけでこれからどうします？とりあえず、今夜はここで休んで明日からここを拠点に開墾かしら」

ミシエルさんが意気込んで言うが、俺はそこで一つ提案する。

「今から、リリーとファルを迎えに行ってもいいでしょうか？俺が迎えに行くほうが早く合流できますし、安全ですから」

「あ、二人がこっちに向かっているんだったわね。今どの辺りにいるかわかるの？」

「ええ、おそらくはエルフの里のそばかと」

「ということは……1週間くらいかかる？」

「そこまでかかりません、明日には着きますから」

「……早いね。でも、少しご飯にしたらにしましょう。黒ドレットがあるから、みんな食べてから、ね」

……黒ドレットは黒パンでした。

白ドレットはレア物だそうです。

パンが木になる異世界クオリティ、植物は子孫をどうやって育てるんだよ……。

さて、黒ドレットを食べ終わってから『感知』を使うと、どうやら地主は元の村に戻っているらしい。  
何人が別の人もいるようだがそれは誰かわからない。

面倒ごとを起こさないように釘を刺すことも考えたが、別のところを開拓するのだから関係ないと割り切った。  
新生ドレア村にやってきたら考えよう。

さて、今俺はエルフの里目掛けて走っている。  
リリーもファルも心配しているだろうし、あまり無理もさせたくない。

あまり強い魔物は出ないから安全なのだろうが、早くファルをミシエルさんに会わせてあげたいし。

途中で会えると思っていたので走ること2時間。

『感知』に二人の反応が映る。  
元気にこちら目掛けて歩いていているらしい。  
少しすると遠くに姿が見える。

向こうも俺が立てている土煙に気付き、手を振っているようだった。

「ケント〜!」

「ケントさん!村はどうでしたか!」

二人が駆け寄って聞いてくる。  
俺はそんなに全力で走ったわけでもないのに、息を切らすことなくその質問に答えた。

「平気だ、ミシエルさんも無事だよ。みんなが待ってるし、急いで村に向かおうか」

「お母さんも無事でしたか、良かった〜……ありがとうございますっ！」

「ファル！良かったね、なの！」

「ああ、気にしないで。ゴブリンしかいなかったし、俺でなくともきちんと準備があれば村人達も撃退できたと思うぞ」

「いえ、それでも助けてくれたのはケントさんですから！走らせてばかりでごめんなさい……」

「それこそ気にするな、そのうち修行が終わったら走れるようになる……んじゃないか、たぶん。さて、村まで行くから、ファルは変身してくれるか？俺がリリーを背負って、ファルはリリーの方の上にも乗ってけると……」

話が進みそうにないので少し強引に話を打ち切り、走る準備をする。と、俺のリュックサックが見当たらないのに気づきそれどころか、二人が荷物をいっさい持っていないことが分かる。

「二人とも……荷物は？」

「ママがリリーに腕輪くれたの。無限収納の腕輪で、荷物は全部その中なの」

少し嬉しそうに左腕を見せるリリー。

っていうか、アイテムボックスが存在するとはね……。  
ますますファンタジーだな、うん。

さて、リリーとファル（猫）を背負って走りながら、道々で今までの状況を報告する。

「……というわけですよ。まあ、ゴブリン自体は全く手こずらなかつたしな。お婆さんからCランクと言われたんだが、ランクごとの強さってどんな感じなんだ？」

「んー……そこそこ強い魔物の単独討伐と、弱い魔物の大群が処理できたらCランクなの」

「でも、ケントさんは『投げ組』潰してましたし、Bランクでもおかしくはないと思います」

「あの盗賊たちは俺が不意打ちしてるからな……。AランクやSランクは凄いな」

「そういう人たちは国家の虎の子、なの。エルフの里はAランクが



ゴロゴロいるから、侵略されることが滅多にないの」

そう考えると、カランさんには凄く手加減されていたらしい。誠実に返答しなかったら容赦なく潰されてたんだろっな……。

「まあ、その話は置いておいて。村の話だけど、今のところ新しく村を開墾して、新しい村を作ることと決まってる。新しい村人は公都に伝えて回してもらうらしい。俺としてはファルと修行する場所もほしいし、開墾を手伝うつもりなんだけど……。勝手に決めて大丈夫だった？」

「それくらい、全然平気ですよ。それより、私の村のことでそんなに骨を折ってもらってて申し訳ないです……。」

「リリーは全然大丈夫なの。話の内容から、生き残ったのは優しい村人さん達みたいなの。ファルをいじめないならそれでいいの」

そこで、俺は気になっていたことをファルに聞いてみる。

「何でファルは奴隷になったんだ？ファルが帰ってくるって聞いたらほとんどみんな喜んでたぞ？」

「生き残ったのは……土地を持たない人たちだと思うんです」

「……とっしょっ？」

「地主に土地を買い上げられて小作人になっていた人たちは、みんな村の郊外で地主の畑を耕してたんです。たぶんそれで、襲撃の時に逃げられたんだと思います」

「そういえば、郊外に住んでた人たちは村会議に出たことなかったの。村の中心に住んでた人たち、いけすかなくて嫌いだったの」

「そう、だから小作人たちには会議に参加できないので……賛成多数で奴隷にされたんです」

「……銀色、超きれいなものな。俺は前の色知らないけど、普通に良いと思うぞ？」

「はづ……ありがとうございます……」

何か口説いたみたいになってることに気づいたが、後の祭りである。照れ隠しなのか、ファルは体を丸めると俺の耳を噛んできた。

……ファル、ちょっと痛い……。

「リリーは前の茶色も好きだけど、銀色も好きなの。ミシエルさんもそう言ったの」

「ミシエルさんもそう言ったのか。母はやっぱり強いんだな」

「うーん、ママは別格なの。五年前にお姉ちゃんが消息を絶ってから過保護すぎるの」

「お姉さんがいるのか？」

「いるの。フィオレンティナ・ミルエノン、なの」

「エルフは長命だからリリーは気にしてないの。さびしいけど……」

後ろを向けないが、少し寂しそうな声になるリリー。

「またすぐに会えるさ、な？」

「私もお姉さんにはお会いしたいです」

「……ありがとう、なの」

俺とファルの言葉に、リリーも少し元気が出たようだった。

村までの数時間は、そうやって話をしながら和やかに過ぎていった。

第35話（後書き）

明日も投稿しますよ！

第36話 幕間(前書き)

おなじみ未菜の視点です。

### 第36話 幕間

カラオケに行った帰りのこと。

駅から家に向かうまでの薄暗い道を早足で歩く。

最近駅のそばにパチンコができて、うるさいものの夜が明るくなつた。

今までは街灯が少なすぎてふつうに歩きにくかったことを考えると、少しありがたい。

しかも目の前に交番があるから、滅多なことでは事件に巻き込まれないしね。

今日もにぎわっているパチンコと居酒屋を通り過ぎ、少し行ったところが私の家だ。

退院してはいるものの、いつも後で体調を崩すのでお母さんが家にいてくれている。

なかなか友だちと遊べなかったこともあって、お母さんが今日の遊びを許してくれた。

お父さんはダメって即答するんだけど……。

「ただいまー。遅かったかな？」

リビングに顔を出すと、お母さんはのんびりストレッチ中だった。ちょうど風呂上がりだったらしく、開脚して体を前に倒している。

……柔らかすぎでしょ、胸が床についてるし。

「ううん、間に合ってるわよ。先にお風呂に入ってきたさい、浴室が今なら温かいわ」

「うん、ありがとう。荷物おいたら入ってくるね」

私はそう言って自分の部屋に向かう。

二階の部屋で鞆の中身を出しつつ、カラオケの前の違和感に首をひねる。

(思い出せないけど、誰かがいなくなってる気がするんだよね……。晩ご飯食べ終わったら、アルバムをひっくり返してみようかな)

「……………痛っ！」

そんなことを考えていたら、突然ズキッと頭が痛んだ。

そのまま考え続けたら痛みがどんどん増していく気がして、私はいつたん考えるのをやめた。

これくらいの痛みなら耐えられるけど、お母さんに痛がってるそぶりを見せるわけにはいかない。

お母さん勘が鋭いし、速攻入院させられちゃうだろうからね。

さて、風呂とご飯をすませてまた自分の部屋に戻ってきたんだけど……。

今の時間は九時半、予習はもう済ませてあるから二時間ほどはアルバム探しができるわけです。

何かを忘れてる、誰かを忘れてると思ったときに私の心に吹き荒れる感情と、思い出そうとすればするほど痛む頭。

間違いなく誰かの仕業だと思う。

どんどん痛くなる頭を抑えつつ、私はアルバムをめくる。

幼稚園、小学校……とめくっていくが、心に響くような写真は見当たらない。

中学校の時の写真はほとんどない。  
病室でお見舞いに来てくれた友達と笑ってる写真が何枚かあるくらいだ。

そして、高校入学の入学式時点でアルバムのページは終わっていた。  
私の頭痛も、もう半端じゃないレベルになっており、目の前がかすむほどだった。

「……ふふっ、これ以上はマズいかもしれない……」

そう言ってアルバムを片づけようと持ち上げたとき、数枚の写真が隙間から落ちた。

「……ああ、ページがなくなってるから一旦挟んどいたんだっけ……」



…」

その写真は高校一年の時のものだった。合唱コンクールの写真や、校外学習の写真だ。

学校が売ってくれる写真や、友達と交換した写真があった。

パラパラとめくっていくと、最後の一枚が学園祭の写真だった。

去年のクラス全員で撮った写真だ。

私はあまり学校に行けてなかったので、クラス写真というものをあまり買おうとしない。

それでも、この学園祭の時期の体調は良かったので一生懸命参加した記憶がある。

私は出し物の飾りづくりだったけど……と、去年のことを思い出そうとした瞬間。

「…っ！があうっ！」

今までに一番の痛みが襲い、私は床に倒れ込んだ。

徐々に視界が赤く染まり始め、体がほとんど動かせなくなる。

そんな中、ゆっくりとだが声が頭の中に広がってくる。

『飾りづくりなあ……。すまん、いろいろとクラスストップな渡辺と二人とか、足引っ張る気しかないんだよな。俺、こういう可愛い細工とかやったことないぞ？』

『あ、こうするのか。意外とおもしろいんだな』

『また告られたのか？本当モテるな、渡辺は』

『あ、また負けたーっ！世界史しくってるのに、何で総合で勝ってくるんだよ？』

『二年も一緒か、よろしくな、渡辺』

『ああ、分かるよ…。そりゃこれを頼めるのは俺くらいなんだろうけど…』

『怪我が一瞬で治る化け物じみた人間ですよ、俺』

『渡辺、大丈夫？』

少し低めで、聞いていてなぜか安心したこの声。

好きだったけど、恩人の神野さんに挨拶に行ってからにする、と決めていたんだ。

けじめをつけてから、そう決めていたはずだったのに。

もう私の目はほとんど見えていない。

頭痛も酷すぎて逆に痛みを感じなくなってきた。

それでも、この名前を思い出せた分、私は満足だ。

「……………謙人……………くん……………」

その瞬間、私の意識は暗転した。

ふと、目が覚めたら全く違うところに寝っ転がっていた。頭痛もすっかり消えて視界も良好、体の節々も痛まない。死んじゃったりしたのかな？なんて思いつつ身を起こすと、部屋の隅の机でパソコンをたたいている人がいた。

「……因果律エラー5パーセント、発生地インド、危険度C、生まれればかりの男の子か。来たのはどうやら虫系か？記憶消去作業と基本スペックの回復、周りの因果律の緩和もいる……」

「……あのー、すみません……」

「空間のゆがみ率3パーセント、つながり予定は後30分後。接続元は三番目、シーラの認証の上での接続確認。魔術の完成まで20分予定、接続ポートは15番で……」

「すみませんっ、ここはどこですかっ！」

「っ！ああ、起きられたかい？どこか体に異常はないかな？」

二回目で少し大きな声を出したら、驚いて男の人は振り返ってくれた。

仕事中で驚かせてしまったかもしれない、ごめんなさい。

「ええ、体調は大丈夫なんですけど……。ここはどこですか？そして、あなたは誰なんでしょう？どこかでお会いしましたか？」

「うーん、まず一つだけ確認させて。君は渡辺未菜ちゃん、16歳、女性。東高校二年生で合ってるかな？」

「え、はい。その通りです」

軽い私のプロフィールを完全に把握しているようである男の人は、ここで突然頭を下げた。

「ごめん、未菜ちゃん。君の記憶をいじくっていたのは僕だ。僕の名前は辰野光弘。謙人の叔父で、保護者だった」

衝撃の告白だった。

今なら容易に謙人くんのことを思い出せるし、持っていた気持ちもそのまま浮かんでくる。

それでも、突然このように記憶が消えたこと、そして頭痛におそわれ続けたことは困ったことだった。

「……どうしてなのか、お聞きしても良いですか？」

「もちろん。僕が君を呼んだのは、それが目的なんだから」

そう言つて辰野さんが話した内容は、余りに現実離れた内容だった。

謙人くんのお母さんは異世界の竜だったこと。

そのため謙人くんもその能力を強く受け継ぎ、この世界には適応しきれなくなつてきたこと。

そのため、17歳になつたことを機に異世界へと動き、その因果の調整のせいでこの世界から『謙人くん』が消えたこと。

それでも思い出そうとし続けた私が因果律を乱し、強制力に晒されていたこと。

「……そういうわけで、この世界の管理をしている僕から2つ、提案がある。

一つ目が、記憶を僕の手で完全に消してこの世界にとどまること。

残念だけど、謙人の記憶は君から完全に消さないといけない。

二つ目が、君も謙人と同じ世界に移ることだ。普通ならこちらの人間を送ろうとすると死んじゃうんだけど、今は向こうから召還術のルートが開いてる。死なずに送れるけど、今度はこちらの世界で『君』が消える。

普通の人にこんなことを強いるのは申し訳ないんだ、でもどちらか決めてくれないか？」

「そんな……」



### 第36話 幕間（後書き）

更新やりきりました！

次から次章スタートです。

けどストック尽きかけてます……。

次回更新は月曜日です。

### 第37話（前書き）

投稿時間を変更してみました。

あと、いつの間にかユニーク10000を超えました！  
読んでいただきありがとうございます。



### 第37話

のんびりと、でも普通の人の何倍もの速度で走って俺たちは山小屋まで戻ってきた。

そこでファルを見た村人たちの喜びっぷりや、リリーにくつつく子ども達の嬉しい表情を見ると、間に合って良かったと本当に思う。

もう日が暮れてしまつて、子ども達はすでに眠っている。

大人たちと俺、ファル、リリーは新しい村づくりについて相談していた。

「ドレットを育てたり、家畜を放牧したりしているわ。税金は『糸の実』を育てて納めるからその畑も必要ね」

「どうせ農地を作るのなら新しい作物を育ててみたらどうでい？」  
「こには色々の実があるんだしよ」

「……それは良い考えじゃが、人数が少なすぎてそれは無理じゃな。都からこつちに人が移住してきてからじゃろっ」

大人たちが活発に意見を交わし合う。

俺もファルも、こんな会議は初めてなので慣れておらず、意見がぐるぐる回る様子を圧倒されていた。

俺は師匠のところに行ったときに自分で畑を作ったから、作業そのものは出来るけどこつという計画は無理がある。

一方のファルはいろいろと考えはあるようだが、どうやら発言の機会をつかめないようだ。

……リリーはうたた寝中だ、エルフとはいえ農作業は一切しないらしくこういうところは役立たずらしい。

少し気を引き締めて俺も発言してみる。

「農地を耕すのは、この小屋の床面積ぐらいなら一時間程度で出来ます。ですから、どれくらいの高さの村にするか、家はどの辺りに作るか、魔物対策はどうするか……といったところを先に決めませんか？」

「おう、そうだな！家作らねえと子ども達がかわいそうだ！」

「広さか……。所詮村じゃからの、三百人を越えると別のところに行つて新たな村を作らねばならんからな。まずは百人規模、元の村の規模をめざせはよかるう」

「なら、農地は今の人数で出来る広さにして、その外側に魔物よけの壁を作つたら良いじゃない！」

ミシエルさんはどうやら小作人たちのなかではかなり発言力があつたらしい。

というか、話してる内容が一番まとまつてる。

かなり賢いんじゃないか？多分、お婆さんの次くらいに。

「あの……」

「ん？どしたのファル？」

「……えつと……」

おずおずとだが、ファルが手を挙げた。

ミシエルさんが発言を促すが、少し言いづらいのか思い切りが良くない。

「ほら、しゃきつとしなさい！会議に参加してるんだから言うときはばしつと言うのー！」

「う、うん……。えつと、場所は川から少し離れたところだとは思いますが、私としては水路を作って畑の周りを通したらいいと思います。雨が少ない時期に川から水をくんで運ぶっていうしんどい毎日子ども達も含め村人総出でやるのはしんどいかと……」

え。

農水路っていう概念がなかったことに俺は驚きである。

まあ、魔力というファンタジーパワーがあつて、酒も茶も泉で湧く世の中だしそういうものなのか。

……なら、地力という概念もないんじゃないか？

「それは良い考えじゃ、だが洪水の時はどうする？」

「川とつながる位置に門を作って、雨の時には閉めておくのではどうでしょう?」

「それなら出来るかしら……。どう思う、他の人?」

「良いと思うわ、かなり作業が楽になるんじゃないかしら」

「良いと思うぜ?ただ、それ作るのにどれくらいかかるか、だな」

「よく考えついたの、ファル嬢ちゃん。流石じゃ」

みんな乗り気らしい。

俺も懸念事項をなくしておくべく、隣でうつらうつらしているリリーに聞く。

「なあ、リリー。村って移動することはあるのか?」

「……ん?村の移動は普通しないの」

「でも、収穫量は年々減ってしまっただろ?最終的に植えても何も育たない土地になってしまったりはしないのか?」

「んんー……。何もしなかったらそうなるの。だいたい六年、何もしなかったら作物が育たなくなるの。だから、三年経ったら半端じゃなく高いお金を払って、外国の神父に魔法を使ってもらおうの」

「……その負担がなくなったら楽になるよな?」

「ええ、おそらくはそうなの」

肥料という概念は魔法でカバーするらしい。  
しかもそれが使えるのは国外の人間ですか、そりゃ大変だ。

「えつと……神父にお金を払わなくて済むアイデアがあるのですが」  
「……いや、ケントくん。それは無理じゃないかしら？何故作物が育たなくなるのか、それも分かってないのよ？」

そうなのか、まあ分かってたら対策も思いつくか。  
ただ、俺が説明できるか心配だ……。

「作物が育たなくなるのは、地面に栄養が足りなくなるからです。  
育つという事は、根から水とともにさまざまな栄養とともに吸収する、ということですよ。なら、そのまま育て続けたら土地の中にある栄養が枯渇する、という理屈です」

「土地の中に栄養ですって？理屈は通ってるけど……信用しづらいわよ？」

思いつきりミシエルさんに不信感を露わにされる。  
まあ、ない概念をとにかく言っても仕方ないのだ、とりあえずは三圃制は通しておきたいな。

「信用は、成功してからで構わないんです。ただ、とても簡単な方

法です。土地を三つに分けて、『畑・放牧地・休耕地』に分けるんです。そして、一年ごとに交代していきます」

「おうおう、確かに簡単な方法じゃねえか」

村づくりの会議は夜中つづいている中、リリーは早々に爆睡してる。その凶太さ、うらやましいね……。

こうして、ドレア村再建計画はスタートした。

俺は土木系の仕事で、ファルは竜の山（小屋のあった山はそういう名前らしい）で家用の木の伐採作業をしている。

リリーは魔物よけや血のにおいが外に広がらないようにするための魔法陣を作ってくれている。

リリーは光魔法しか使えなかった分魔法陣でカバーできないかがんばっていたらしく、現時点で世界最高の魔法陣の『陣土』らしい。

山ではカーン、カーンという音が鳴り響いている。

修行の一環として、ファルは今頃山中走り回っているはずだ。

一方リリーは魔法陣の下書きを小屋の中でやっている。

これには集中力がいるらしく、下書きを始めたリリーはまさにプロ感溢れていた。

俺はまず村の周りに堀と壁を作ることと魔物対策をする。

土を掘るのは意外と大変だったが、途中から魔力を使う練習をかねてやっていたらすぐに終わった。

自分の体を強化して、気合いで蹴りつけることで穴を掘り、穴の横に掘った土を盛っていく。

こめる魔力を調整し、同じ深さにするように心がけていたら意外と難しく、熱中してしまった。

その後は盛った土を固めていくのだが……

「ケンにい！何か俺たちにもやらせるよー！」

「あたしも！あたしも何かする！」

子ども達が数人寄ってきた。

獣人の子も人族の子も混じって仲良くしているみたいだ。

元気に騒ぎながら俺に構ってくれとくつついてくる。

「そうだな……。大人たちからスコップを借りてきて、この辺りの土をぺたぺた固めてくれるか？」

「分かった！じゃあスコップもらってくる！」

わらわらと走っていく子ども達を見送り、俺は隣の土山を固めようと魔力強化した手でポンと叩いた。

そのとたん……。

「んなっ！」

ドオンッ!と爆音をたてて土が吹き飛んだ。

一番弱めで叩いたのだが、このやり方だと固められないらしい。

呆然として固まった俺に対し、スコップを持ってきた子ども達は言  
った。

「ケンにい、アホなの？」

……子供は、時に残酷だ。



### 第37話（後書き）

この話は前の章の方が良かったかも……。

次回更新は木曜日です。

### 第38話

こちらの世界にやってきてから今日で三ヶ月目だ。

とうにドリア村は軌道に乗り、公都から回されてきた人たちも元気に働いてくれているのである。

人口はちょうど150人、子どもも結構いるし、みんな生き生きとしているのは嬉しい。

なお、俺が村の開拓を手伝って家をもらったら、ネームプレートの住所がきちんと『新ドレア村』になっていた。

職業は……まあ、変わらない。

俺は農作業を手伝うと言っているのに、村人たちはそれだけは断固として拒否するのだ。

「ケントくんは村人になるより、パーティーを組んで有名にならなくっちゃ！」

とはミシエルさんである。

まあ、そういうわけで俺はファルヤリリーと修行をする日々を過ごしていた。

朝、日の出と同時に起き出して軽くストレッチをしていると、隣の家から少し寝癖をつけている状態のままファルが顔を出す。

「ケントさん、もう出ますか？」

「ああ、数分後には出るよ」

「リリーはどうしましょう？あと数分だったらたぶん起きないですけど……」

「まあ、リリーの要る体力はそこそこでいいからな。寝かせておいてやろうか、昨日は結構魔法陣作成で神経使ったみたいだし」

「分かりました。私も少し整えてきますね」

そう言って顔を引っ込めるファル。

数分後出てきたファルの髪には、寝癖はついていなかった。

村から竜の山まで走り、山を登って駆け下り、村まで戻るのを一周にして、四周全力で走る。

総距離はちょうど50キロくらいだろうか。

魔力強化を抜きにして純粋な体力で走るのだが、隣をファルが走るのである。

最初のうちはファルは俺の周回遅れになっていたが、1ヶ月で俺と一緒に走れるようになり、最近では俺より先行出来そうなくらいになっている。

まさかこれほどまでに成長が早いとは思っていなかったので嬉しい

ものである。

走り終わると、少し休憩を挟んだ後家の前で戦いの練習である。俺は徒手空拳の格闘術が一番強いけれど、その他の戦い方もそこそこ出来る。

そこで試してみたところ、ファルにあう戦い方は棒術だった。慣れない棒の振り回しに手こずったのもやはり最初の1ヶ月だけである。

最近では魔力強化も上手く使えるようになってきて、最近村を襲った熊はファルが一撃で爆散させており、ミシエルさんに肉がとれなかったと怒られていた。

「……ていつ！」

「よっ……と！」

ファルが斜め上から棒を振り下ろしてきたのを、俺は身体をずらしてよける。

その際に右足で棒を持っている腕を蹴り上げようとすると、向こうは半歩回りながら下がることでもやり過ぎ、視界に長い髪が広がる。追撃しようとするふみこんだところにファルの振り向きざまの一撃が飛んできて、身を反らせて避けようとしたとき。

「エイッ！！」

「……っ！」

襲ってくる棒が伸びた。  
種は簡単、棒を持つ場所を変えただけではあるのだが、戦ってる最中にそれをされると間合いがずれて大変やりにくい。  
その分難しいのだがやってのけたファルはすごい……と感心している間にも棒は俺の首に向かってくる。

「……よつと！」

俺はさらに体を倒し、手を突いてブリッジのような姿勢で棒をやり過ごす。

そして、避けようとした俺を追って体が伸び、不安定な姿勢になっているファル。

「さすがファルだ……なつ！」

ファルの技術の向上を褒めつつ、ブリッジから振り上げた足でファルのあごを蹴り抜いた。

「う……あつ……」

不安定な姿勢ながらも後ろに跳んだのか、気絶させるつもりだったがまだファルは意識を保っている。

しかし、急所に一撃をもらったのにはまちががなく、ファルは脳を

揺らされてまともに動けなくなっていた。

「…………お疲れさん」

そう言っただけは後ろから首をたたき、ファルの意識を落とした。

「うーん、間違いなくファルは強いな。これは俺、抜かれるだろうなあ」

純粹な分析で、俺はファルに実力で抜かれるだろうと思っただけ少し落ち込むのだった。

早ければ…………数ヶ月で俺が打ち込めなくなるだろう。

今でも経験だけで何とかまわしているようなものだ、次回にはブリッジ攻撃も通用しないだろうし、着実に俺の戦い方の引き出しは潰されつつある。

魔力強化をすればおそらく勝てるだろうが。

「はあ…………練習はしてるんだけど……………」

「…………朝から元気すぎるの……………」

呟きに眠そうな声を返したのは、家の扉から髪の毛がぼさぼさのまま顔を出したリリーだった。

どうやら俺たちの練習で目が覚めてしまったらしい。  
リリーはそのままぼてぼてと歩いてくると、目をこすりながらファ  
ルの額に手をかざす。

「……軽い脳震盪なの。少し寝たら治るように、三半規管とかのふ  
らふらも治しておいたの」

「ああ、ありがとう」

「無茶はしないように、なの。じゃリリーはもう一回寝る……」

「じゃあ朝ご飯は要らないな？今日は俺が作るけど」

「わけがないのっ！食べるの！」

一発で覚醒。

リリーは大急ぎで小屋に戻り、俺もファルを運んだ。

リリーは早々に部屋に戻り、俺は台所で朝食づくりだ。

今日は白ドレットでフレンチトーストに挑戦してみようか。

少ししたら起き出してきたファルと一緒に朝食を作る。  
倒れてた時間は15分、復活が早すぎると思うんだが。

「わあ、美味しそうですね！白ドレットって柔らかいけどあんまり味がないのに、こんな綺麗な狐色になるなんて！」

「味がないか？十分素でもいける味だが」

見た目は白いリンゴだが、味はまんま食パンだ。生だけ。

「そのままでは少し物足りなく思うのが普通ですよ？貴族様だと、汲んできたワインに浸けて食べる方もいらっしやるとか」

「……………うわあ……………」

料理技術が貧相なのは困るよね。

まあ、貴族なんかには絶対レシピ教えないけどさ。

そうこうしているうちに出来上がり、三人で朝食を取るのがいつもの風景だ。

俺が何かを作り、ファルがそれを横で学んで、リリーは食べまくる。

ああ、リリーは意外とたくさん食べる。

見た目は一番小さいのに、俺の食べる量の二倍は涼しい顔でペロリと食べてしまうのだ。



「ごちそうさまなの！さすがケントなの、最高の」

「ははっ、ありがとな」

今度は何を作ってみようかな。

食後は俺はリリーに科学知識を教えることになっている。

そもそもの発端は修行で頑張るファルに触発されてだったようだが、あまり体力的に強い方ではなく、適性も薄かったので魔力強化が使えるようになったあたりでやめている。

まあ、魔力の回復がピカイチで早いのはリリーなので、時速70キロそこそこで6時間は走れるようになっていた。

たぶん十分だろう、治癒師だし。

その結果、光魔法しか使えないリリーに対し、『魔法はイメージ』を成功させるべく光の物理法則や、回復に役立つ肉体についての生物知識とかを教えているのである。

その間、ファルは自主練したり子どもと遊んであげたりしている。一回授業に参加したが、ものの数分で夢の世界へと旅立っていたからだ。

真面目な彼女だが、どうしても科学知識を習うのには向いていないようだ。

……別途で教える時間をとろうかな。

「……さて、そういうわけで光ってというのは物理的に考えると人間の手に負えるものじゃないだろうなって俺は思う。でも、この世界には魔法がある。魔法はイメージというのなら、生み出した光を完全に重ねることで強烈なエネルギーをもつ光線になったりするんじゃないかな、とか思うんだけどね」

「ありとあらゆる波の性質を同じに設定するってことなの？」

「ああ、しかもそれを空気のちりとかで散乱しないレベルにまで圧縮しないといけないから、きつと実現不可能なんだろうけど……。まあ、異世界にいた人間の夢みたいなものだよ、忘れて忘れて」

男の子なら憧れる時期あったよね。

ガ ダムのビームライフルとか、魔 光殺砲とか。  
かめ め波は少し原理が違うかな？

「さて、次は生物知識だね……」

俺とリリーの勉強会はもうしばらく続く。

### 第38話（後書き）

数ヶ月で急成長するファルたち。

謙人もがんばってはいるんですけどね。

次回は月曜日です。

第39話（前書き）

時間帯がぶれてすみません。

### 第39話

午前中いっぱいはいりりーに科学知識を教えるのに費やされる。

三ヶ月も勉強したら大抵の知識をりりーは吸収してしまっていたが、生半可に前の世界で勉強していたわけではない。

東高二位は伊達ではないのだ……一位には敵わないけど、ぼろ負けだし。

俺もこれまでにこちらの世界の常識をいろいろと教わった。

通貨は銅貨、大銅貨、小銀貨、銀貨、大銀貨、金貨の六種類で、それぞれ二十枚ごとに上の通貨と両替できる。

パーティーはSからGまであるものの、Cランクに達するまではネームプレートに反映されることはない。

またパーティーの順位や入れ替え戦の管理をするのは『ホール』というところだ。

入れ替え戦で上のランクの人を倒し、ホールの審判員がそれを認めれば順位の変更が行われる。

また、ここはエルシオ大陸で、ヴァイス帝国、カルティナ公国、シーレイア皇国の三国が存在する。

ヴァイス帝国は国内のすべての人族以外の種族を『奴隷』として扱っているが、その発端はシーレイア皇国の国教、シーレイア教によるものだ。

シーレイア教は人族以外の種族を完全に見下していて、信者のほとんどは他の種族を亜人扱いをしてはばからないのである。

ただ、カルティナ公国は他種族も平等に扱っている。

ドレア村もカルティナ公国の村の一つで、移民を手配してくれたりしてくれた。

ところが、領土は小さいため帝国と皇国の両国に睨まれ、魔物の発生率もこの国は高く、てんでこ舞いの状態だという。今でこそ皇国と帝国が仲が悪く、しかも両国に続く道は険しい自然の要塞となっているのでなんとか平和が保たれているのだ。どこの世界も他国とは仲が悪いのね。

一方、俺はこの三ヶ月で自分の能力について再確認をしていた。その結果分かったのは、俺には魔法を使う素養はない、ということだ。

リリーが測定してくれたのだが、ファルと俺には通常魔法の素養はないようだ。

特別魔法に開眼する可能性はあるらしいのだが、期待しない方がいいとも言われた。

……ファンタジーの夢一つ目はあっさり崩壊。

あと、言語についても分かったことがある。

俺が話しているのは日本語のつもりだったのに、口に出るまでの間にこの世界の大陸共通語に翻訳されているのだ。

おそらくそういう魔法でもかけられたんだろうが、植物名とか料理名とかで両言語のすりあわせが上手くいかないエラーを起こすらしい。

生活が上手く送れないので、貰った翻訳機能をオフにして必死に共通語を覚えた。

その甲斐あって、日本語とのすりあわせエラーが激減した。

キュトロとか、人参って言ったら翻訳してくれるようになったのだ。

最近になってその勉強も終わり、今度は午後の時間を村の子ども達にも勉強を教えることになっていた。

……俺、異世界人なんですけど？

「今日は九九だ。これを覚えておくとかかなり計算が楽ちんになる。昨日までに足し算引き算はみんな出来るようになったな。まずは一の段から……」

「九九？」

「ああ、この点の数は何個分かるか？九九を覚えれば、こんなのを全部数える必要がなくなるんだ」

俺はそう言っつて  $7 \times 4 = 28$  個の点を見せる。

「おおおーっ！すげーっ！」

テンションのあがる子ども達。

日本の高校生より勉強意欲あるんじゃない？

そうやって二時間くらい教えたら流石に子供も疲れてくるので、勉強会はお開きである。

子ども達は外で楽しく遊んでいるようなので、俺も自分の鍛錬をすべくひとりで竜の山に向かう。

こちらの世界に来て以来、俺の実力の把握に勤めてきたわけだが、間違いなく今のままではSランクなどほど遠いだろう。

俺のやれることといったら、魔力強化と魔力を纏うことだけだ。

「出来ない……」

体術は別に世界一レベルなわけではないが、それを高めるのと同時にジャストのタイミングによる強化を挟んでいこう、と考えて練習しているのだ。

決め手となる、必殺技的なものを。

そのために竜の山に一人でこもり、何度も何度も大きな岩を殴っているのだが、全く成功しない。

魔力強化で殴っているわけではないので、いつも右手は血まみれになってしまうのだが、治癒力があって本当によかった。

その治癒力もかなり弱っているようで、一瞬で治っていた切り傷も十秒くらいかかる。

……本当に、何か決め手を作らないと俺がファルやリリーたちについていけない。

その後も俺は岩を殴り続けたが、何もつかむことは出来なかった。



その夜。

家で晩飯を食べてのんびりとしていたところにリリーがやってきた。今日はファルが意気込んでオムレツを作っていたはずだが、どうしたんだろうか。

「ケント、見て欲しいものがあるの」

「ん？ファルがなんか焦がしたか？」

「それは違うの、オムレツは最高だったの。見せたいのはあれなの、光についてなの」

「ああ、分かった。夜だし実験にはちょうど良いな」

どうやら今日の授業のあと何か閃いたらしい。

ファルがついてくることが多いのだが、今回はリリー一人のようである。

「ファルは来てないのか？」

「ファル、昼間に棒を振りすぎて食べ終わったら寝ちゃったの。オムレツ作ってるときに、『明日は勝てそうっ！』って言ったの」

……もう、か。

しかし、何をされるのだろうか。

カランさんを圧倒するほどの殺気を放てるファルにそんなこと言われたら……って、弱気すぎる、いかんいかん。

「ああ、それは怖いな……。さて、リリーは何をひらめいたんだ？」

家のすぐ外のベンチに座りながらリリーに尋ねると、リリーは誇らしげに胸を張って言った。

「今朝言ってた、あのエネルギーを高めた光についてなの」

「……まさか」

「そう、そのまさかなの。できちゃったの」

「……」

何も言えない。

科学知識を学びはじめたたった三ヶ月。

魔力という助けを借りながらも、リリーは地球の最先端技術に追いつきました、はい。

「やるの。『スマッシュユライト』」

リリーが魔法名を口にすると手のひらの上に小さな光の玉が生まれる。

しかし……

「『スマツシユライト』って目くらましの魔法じゃないか？」

「リリーが一番使つてて、分かりやすい魔法なの。だからイメージで軽く圧縮した状態で魔法を呼び出してるの。でも、これでも威力は強かったの。『圧縮』」

そして、手のひら大だった光の玉がビー玉サイズにまで小さくなり、あふれる光も少なくなる。

「これで、ラストなの。『発射』」

そういつた瞬間。

ビー玉からその太さで一直線に光線が走る。

俺の方に。

「ち、ちよまつ！」

反射的に横に身を投げ出し、その光をよける。  
魔力強化していなければその兆候をキャッチできなかっただろう。  
なんて言っただけで光なのだ、今でも間一髪である。

「うおい！俺になんか恨みがあるのかよっ！」

驚いて叫ぶと、リリーは頭をかきながら言った。

「もちろん、ないの。ただ、これができたことの自慢なの！」

「じゃ、俺の方に飛ばさないでくれよ……」

「てへっ、どこに飛ぶかはリリーにも分からないの！」

「そんな風に言ってもやばいことしてるのに変わらないからっ！」

俺とリリーはひとしきり騒ぐ。

ただの光ならよけなくても良かったんだが、目くらましが元の魔法  
とはいえ、こちらに飛んでくるときの悪寒は半端じゃなかった。

「ベンチはどうなった……？」

「多分、撃ち抜くくらいの威力はあったと思うの」

「あ、危なすぎだろ……」

物騒さに身を震わせながらベンチを確認すると、ビー玉大の穴が空いている。

「うわあ……」

「やったの、大成功なの！」

「なありりー、今のってどれくらい力を込めたんだ？」

「んー……魔力はほんの少しだけど、イメージを練るのにかなりの精神力を使うの」

……ほんの少しで一センチの厚さの木の板を撃ち抜きますか。

「明日からは狙いを定めるイメージも練習に追加してくれ。今のままじゃ怖すぎる」

「……頑張るの」

本日。

攻撃力がない、とカランさんが心配していたりりーが超強力な魔術を発明しました。

……明日から光を避ける練習が要りそうだ。

### 第39話（後書き）

次は17時更新でいきたいと思います。

次は木曜日です。

## 第40話(前書き)

前回、1日更新ミスりました。  
申し訳ありません。



## 第40話

翌朝。

俺とファルは家の前で向かい合っていた。

リリーも昨夜穴をあけたベンチに座ってこちらを見ている。日が出たばかりの早朝、どこかで小鳥の鳴く声も聞こえる。

「……………」

「やあっ！」

ほとんど同時に動き出した俺たちだったが、ファルのみ小さな気合いを声に出す。

俺は声を出さずに戦うのがスタイルなので……。

「ていつ！やあっ！」

「……………」

可愛らしいファルの声だけが響くことになる。

ファルの振る棒の全てを避け、いなし、隙をつこうと腕を伸ばす。

一方のファルも俺の伸ばす腕の悉くを打ち落とし、獣人の運動能力を十分に発揮して俺の周りを跳び回る。

ドガガガッ！という腕と棒の打ち当たる音が高速で鳴り響き、俺とファルの姿も目まぐるしく入れ替わる。

「やあっ！」

どれだけ打ち合っただろうか。

ファルが大きく俺の方に棒を振り下ろしてきた。

追撃を仕掛けようとしていたところだったが断念し、後ろに軽く跳び下がる。

……昨日と同じ技かっ！

俺はファルが回転してくる瞬間を狙って拳を放つべく力を込めるが……。

「せいやあっっ！！」

ファルはそのまま地面に棒を振り下ろした。

「…なっ！」

俺も驚愕に一瞬動きを止めたが、ファルは棒をそのまま地面に打ち付け、反動で一回転してこちらの方へ跳び蹴りを放ってきた。

「……っ！」

目の前でクロスしてその跳び蹴りを受け止めた直後。  
もう反対側の足が俺のわき腹に直撃する。

「たあっ！」

「ぐっっ！」

そして。

反撃で伸ばした貫手は間一髪でよけられ、ファルの棒が喉元にピタリと当てられていた。

「……負けだ、完璧に一本取られた」

「ありがとうございますっ！あの、お腹は大丈夫ですか？」

「ああ、クリーンヒットを貰ったから少しダメージが通ってるけどこれくらいは平気だ。それより、あんな無茶な拳動して大丈夫か？」

あんな拳動をしたら、俺なら魔力強化をしても体を痛めてしまいうだ

ファルは流れるように体と地面、棒を魔力強化していたから大丈夫だとは思っただが。

俺がやったら間違いなく地面を叩き割るので、その繊細な魔力調整をずっと練習していたのだろう。そう言えば、ファルは最近の練習で足元にひびを作ることがなくなっていた。

「はい、これを身につけるまでに何度もリリーの回復魔法のお世話になりましたけど……」

「そうなの。全く無茶すぎなの」

少しきまりが悪そうにファルが言うと、座っていたリリーがこちらにやってきて言った。

「この繊細な魔力強化の練習を始めてからの怪我は多すぎるの。この1ヶ月で筋断裂を20回近くやってるの。多いときには1日2回やっちゃってるの」

「……おいおい……」

あまりの無茶っぷりにあきれた声しか出ない。ただ今日はファルの魔力強化が俺の腕を上回っていて、骨に響く打撃が何本もあった。

……二人とも間違いなく進歩している、俺もがんばらないと！

にこにこ笑っているものの、俺の心の中は焦りでいっぱいだった。

そこへ、リリーが俺たち二人に言い放つ。

「一時間半も打ち合ってたの。リリーはお腹ぺこぺこなの」

「うん、ごめんなさい」

午後からは俺はいつもの竜の山ではなく、村から少し離れた『魔の森』へ向かった。  
シーレイアとの国境そばにある魔物が多数住み着いている森である。ファルに一本取られたあと、本気で昨日練習していた技の練習に取り組んだら成功したのだ。

『崩壊』。

物質全体に俺の魔力を浸透させ、俺の与える衝撃をトリガーにして分子間力を極小化し、それと同時に衝撃によって分子レベルで物質を分解する。

リリーに通常魔法の素養はないと言われて以来、魔力の使い道に悩んでいた。

もともとは身体強化だけでいいだろうと思っていたのだが、ファルの成長率はものすごいものがあり、このままではファルに抜かれるかもしれないと思ったのだ。

叔母さんに頼まれているのに、強さへの貪欲さを持っていないことを反省し、魔力の使い道を考え始めたのである。

『崩壊』を思いついたきっかけはエルフの里でのカランさんの言葉だった。

『…植物に魔力突っ込んで、強化しちゃったなんて聞いたことないわあ〜』

俺がキュトロ……人参を目の前に突き刺したときの反応である。

あの時、俺は魔力を人参の細胞一つ一つに染み入らせる感覚で強化していた。

細胞説、というものがきちんと知識としてあったおかげなのだろう。どうやら強化は自分の体にかえられるようになってランク、なじみの武器にかえられるようになったら十分一流らしい。

全てイメージがものを言う魔法では、普通にやろうと思ったならかなりの修練を必要とするだろう……っと、話がずれた。

俺は細胞一つ一つを強化する事ができた。

なら、一つ一つの分子にまでサイズを縮め干渉することはできないか？と考えたのである。

ようやく魔力を持たないものを『崩壊』させることが出来るようになったので、次は魔力を持つ魔物相手に戦うつもりなのである。

この三ヶ月で何回も魔物と戦ってきたが、魔力を浸透させようと思ったら相手のイメージを超えて俺の魔力を流し込まねばならないことは分かっている。

これさえ出来たら、決め手に欠ける今の状況を変えることが出来

るはずだ。

魔の森は昼間でも薄暗い。

鬱蒼と茂る木々が見通しを悪くし、魔物たちに利する地形を作り出す。

普通なら。

俺は感知があり、加えて目を強化すれば魔力の光を視認する事が出来る。

待ち伏せは完全に無効化するのだ。

まあ、魔力を遮断するアイテムみたいなものもどこかにあるかもしれないから油断はしないけれど。

さて、少し先の木の上に体長三メートル級の百足っぽい魔物がいる。名前は……百足でいいや。

色々調べてた魔物の種類は、言語を覚えているうちにどんどん日本語っぽくなってきたのだ。

間違はなくこの贈り物をくれたのは祖父さんの方だ、叔父さんじゃない。

さて、百足は俺が通り過ぎるのを狙っているようである。

おそらく頭の上に降ってきて、自重に加えて毒で相手をボタンキユーさせる作戦なのだろう。

気付いていれば対策の取りようはあるし、練習でなければここでジャンプしてしとめるのだが。

俺はそのまま通り過ぎることを選択した。

カサツカサツと音を立てながら、百足に全く気付いていないかのよう  
に振舞う。

（降って来い、そのまま狙ってこいっ！！）

心の中で念じ、勘を研ぎ澄ませて落ちてきた瞬間に避けられるように  
魔力を体全体に行き渡らせる。  
とてつもなく長く感じた数秒が過ぎ。

（来たっ！！）

ガサツという音と共に殺気が降ってきた。  
ぱつと後ろに跳び下がり落ちてきたものから距離をとって相手の様  
子をつかがう。

『感知』で場所は分かっていたし、強化でサイズも分かっていたが、  
きちんと目で見るとやはり気持ち悪い。

地球にいた百足と形は同じだが、サイズは三メートル、色はどす黒  
い緑色だ。

木の葉の間に潜むから似た色を体色に採用しているのだろう。

……半端なく気色悪いが。

「キシヤアアアアッ！！」

「おいおい、昆虫のくせにどこからそんな鳴き声出してるんだよ」

通常の狩りの方法で倒そうとした獲物にあっさり避けられたあげく、  
なめた態度で挑発された百足はさらに激昂したのか、持つ足をわし



やわしやと動かす。

あまり時間をかけていられるわけでもないし、早々に腕に軽く魔力を集める。

（おそらく、急所のみを分解すれば事足りるはずだ。こんな体の全部を分解しようと思ったらたぶん魔力が足りないな）

自分の魔力と、魔物の持つ魔力とを比べて考える。

魔物の急所は体の中の魔石だが、それを粉にしてしまうとホールに買い取ってもらえないからな。

取りあえず、頭の部位を『崩壊』することを目標にやっついていこうか。

第40話（後書き）

次回更新は月曜日17時です。

## 第41話

百足は落ちた葉の上をカサカサと這い回りながら、そのでかい体で俺を包囲しようとしてくる……が、三メートルしかないなのでその分延々と回り続けている。

間抜けた包囲だよな。

俺はその場で軽く跳躍すると、百足の頭の上に着地する。

この百足が毒を持っている部位は口と足。

つまり、背中の上ならほとんどの攻撃をやり過ごすことができるのだ。

つるつるする外殻をもとせずに、体の節を無理矢理握って振り落とされないようにしっかりと捕まる。

「ふんっ!!」

気合いを込めて魔力を百足に注ぎ込むと、ものすごい反発力に魔力が押し負けそうになる。

無理やり詰め込もうとすると、反発して漏れた魔力がパチパチと音を立てて弾けた。

それと同時に周りの温度が急上昇し、落ち葉に火花が飛んで発火するものまで出てきた。

一方の百足は体をくねらせて大暴れし、俺は振り落とされそうになる。

「あぶねえなっ！大人しくしろっ！！」

「キシヤアアアッ！！」

さらなる魔力の固まりをぶち込むと、反発していたものを突き抜けた感触があり、俺の魔力が浸透した感覚があった。

すると百足は苦悶の声を上げ、苦し紛れにか下半身を振り回し始めた。

腕で弾いたものの、その衝撃に背中の上から吹き飛ばされる。

追撃されるのはご遠慮なので取りあえず背中からは離れたところで再度跳躍する。

目を強化して百足の魔力を確認すると、俺の魔力が頭部へと集中している。

「キア……キイイイツッ！」

もうすでに百足はグロッキー状態っぽい。

俺の魔力が自分のものと反発して『魔力酔い』みたいなものになったんだろうな。

「じゃあな、キモ百足」

フラフラしている百足に対し、今度は跳び蹴りを食らわせる。

俺の足は頭部の真ん中に突き刺さり、その衝撃は速やかに俺の魔力に伝わる。

「ギ……ギギギ……」

微かに鳴き声をあげた直後。

百足の頭は粉となって風に乗って飛んでいった。

三メートルの体のほとんどが無傷で手に入ったことになる。

「完璧な手際だったけど……無理だな、生きものに魔力をつっこむのは。魔力消費が桁違いすぎる」

百足の体内の魔石を取り除きながらぼつりとつぶやく。

殴ればそれだけで倒せる相手に使ってみたが、魔力がほとんどすっからかんになっている。

何とか技を生み出したものの、無生物限定な技になってしまった。たかだか百足にこれだけの魔力を消費しては非効率甚だしく、しかも魔力を相手につきこむのはそれだけで相手を魔力酔いにさせ無力化させてしまう。

多分『崩壊』は攻城戦とかには役立つんだろうな……。せつかく完成した『崩壊』だったが、これはまた他の技を考えないといけないようである。

村に帰ると、もう日暮れも近かった。

ほとんど魔力をすっからかんにした状態でぼんやりと夕食のメニューを考えていると、ドンドンドンツ！と玄関の扉が叩かれた。

リリーはノックなんかすることなく入ってくるし、それに影響されてファルもここ最近ノックをすることがとんとないから、誰か村の人だろうか。

「はいはい、なんですか……っつと、お婆さんですか」

「うむ、ケン坊。ちょっと頼みがあるのじゃ」

「どうかしましたか？」

俺はその時、晩ご飯を分けてくれとかそのあたりの軽いお願いだろうと思っていたが、次の一言でその余裕は吹き飛んだ。

「この時間になっっているというのに、子どもが一人おらんのだ。」

「ニシエルという子じゃが、探せぬか？」

「えっ！分かりました、今すぐ俺もお手伝いします！」

「うむ、すまぬな。まず、村の中に隠れておったりはせんか？」

俺はお婆さんの言葉に応じて『感知』を村中に広げる。  
一つ一つの魔力を完全に誰か判別できるのは丁度村くらいなのである。

この三ヶ月でぐんと精度がのびたものの一つがこの『感知』である。  
ニシエルは特に、ニシエルさんと一緒に麻痺毒を飲まれた子ども  
の一人だったので魔力の傾向は覚えているのだが……。

「いえ、この村にはいません。少なくとも俺の『感知』には引つかからないです」

「そうか……どこへ行ったのじゃ、危ないというのに！」

日暮れ時は最も魔物が多く出てくるときである。

昼行性のものは自らのねぐらに帰り、夜行性のものはそれらを狙ってねぐらから出てくる。

どいつもこいつも腹を空かしていることが多いため、かなり危険な時間帯なのだ。

「……ん？誰か村の外からやってきてますね。馬に乗っている速度  
でしょうか」

「ニシエルかの？」

「いえ、知らない魔力です。門まで行きましょう、乗ってください」

俺は急いで上着を着ておばあさんを背負い、村の入り口まで走った。

『感知』ではリリーやファルもそこにいるらしい。大人たちもかなりの数そこに集まっているようだが、子ども達は家の中だ。

二次被害というか、ミイラ取りがミイラになる的な状況にはなっていないようである。

「すみません……俺、何かタイミング悪かったですかね？」

門のところに行ったのは若い行商人だった。

いつもドレア村に商品を持ってきてくれていた男だが、明日到着予定だったのに少し早い到着だったようだ。

俺はゆっくりとお婆さんを下ろすと、お婆さんが口を開いた。

「いや、少し内輪ごとじゃよ。しかしお主、到着は明日だと文をよこしたじゃろうに。どうしたのじゃ？」

お婆さんが尋ねると、やれやれといったように首をすくめて男は言う。

「いやね、道中に子どもを背負った男に会ってね。今日中にこの手紙を黒髪の若い人に渡せば、その人がかなりの金を渡してくれるっていうのですね。この村に黒い髪ってケントさんでしたっけ、あなたしかいないじゃないですか。きな臭い匂いがしたんで急いだんですよ」



そう言つて男は折り畳まれた紙を俺の方へ渡してきた。確かに子どもを連れた男というのは気になる。紙を開くと、少し見過ごせない内容も書かれていた。

「真竜のガキへ」

日が沈みきるまでに竜の山の小屋に來い

さもなくば亜人のガキの命はない」

……真竜、だと？

ファルとリリー、カランさんと叔母さん以外は这个世界で知っている人はいないはずだぞ？

「ファル、リリー！これを見てくれ！」

二人を呼んで紙を見せると、二人も驚いて顔をしかめる。

「……誰かに、知られたの？」

「どうして、知っているんでしょう？」

「……分らん。ただ、あんたこれ読んだか？」

行商人の男をにらみつけると、男は顔を真っ青にして否定した。

「いやいやいやいやっ！そんなことしたら行商人の信用問題だからっ！してない、してないからその殺気やめてっ！」

おっと、少し殺気が漏れてしまった。

まあ、普通の行商人なら手紙は見ないだろうし、本当のことを言っているとは判断しよう。

「取りあえず、竜の山まで『感知』を伸ばす……！」

円形に広げられるのは村くらいが限度だが、一定方向に向けて伸ばすだけなら距離は伸びる。

竜の山と分かっているのなら、そこまで届かせればいい！

竜の山には魔物がいない。

竜の山というくらいなので魔物が敬遠しているのかもしれないが…

…。

「……いる、ニシエルだ。一緒に……5人いるな、しかも1人は…  
…クソッ、地主の野郎だっ！」

「あの男じゃとっ…！」

俺の忌々しげな声にお婆さんも顔をしかめる。  
放置していたらどこかに行っただはすなのにごうして帰ってきて、俺  
のことを真竜として知っているのだ？

「私も行きます！」

「リリーも行くの」

2人とも一緒に行く気まんまんだ。  
もう俺の方が弱いかもしれないくらいだし、魔力もすっからかんだ  
からお願いしよう。

「ああ、頼む。皆さん、俺たちでニシエル連れ戻してきます！俺た  
ちならここの村の壁も飛び越えられるので、もう締め切ってしまう  
てください！」

「おう、分かった！頼むぞ、ケント！」

「お願いね、ケントくん！」

大人たちの返答を背中に聞いて、俺たちは村の外へ駆け出した。



## 第41話（後書き）

次回は木曜日15時の予定です。

## 第42話

竜の山の小屋まで行くと小屋の中が荒らされていて、広間の真ん中に大きな穴があげられている。

ニシエルとその他5人の反応はここからしているようだが……。

「どうする？俺1人で入ろうか？」

「そうですね……。私はみなで行った方がいいと思います。何となく感覚ではケントさんは魔力がほとんどないですよね？」

「ああ、修行で少々使いすぎたんだ。新技の練習をしていたんだがな、こんなことになるなんて想像してなかったし。しかも新技は人質相手になんの役にも立たないから」

申し訳ないので少しみっともない声がでる。

一方のリリーにも魔力は無いようだが……。

「リリーも練習してたの。でも、結局あんなだけ練習したのに狙い通り撃てないの」

リリーも修行の成果はいまいちだったようだ。

まあ、何でもかんでも一度で身につけられるわけがないからそれは普通なのだが、魔力が残っているのは身体強化しか使えないファル

のみ、というのはかなり問題かもしれない。

「……つまり、私たちは今全員接近戦しかできない、ということですね？ならもつとです、全員で行きましょう」

「1人で来いとは書いてなかったの。まあ、人質を取っているから大人数はよくないけど三人くらいなら良いと思うの」

「そうですね。まずは解放優先ですから、それまではあまり相手の神経を逆立てないようにしましょうね、リリー」

「分かったの。取りあえず黙って待機するの」

「了解。じゃ、3人で行こう。中には全部で6人いるみたいだ、気をつけてくれ」

2人がうなずくを見てから、ゆっくりと穴の中に入っていく。

『感知』を使っているので不意打ちはないだろうが用心深く進んでいると、壁にある苔がうつすらと光っていた。

足元はかなり滑らかで、自然に出来たとは思えないような洞窟だった。

魔物が出ない特殊な竜の山。

もしかしたら、真竜が住んでいたのかもしれないな。

そんなことを思いながらゆっくりと進む途中には、小動物しか出てくることはない。

そして、一番奥の広いスペースにそいつ等はいた。

「……来たな、何だ亜人どもも一緒なのか」

ナイフを気絶しているニシエルの首に当たて地主の男が言う。

「ふっ、来たときからあんたは亜人趣味のようだったからな。毎日こいつらで遊んでいるのか？ははっ、お前の脳味噌を疑うな」

「だから亜人じゃないから。おまえの方が人でなしなこと言ってるって分かってんの？」

俺は吐き捨てるように言う。

実際、亜人という表現は軽蔑的ニュアンスを多分に含んでいるのだ。獣人とエルフ、きちんと種族名があるのだ。

そうやって怒っていると俺の脇腹をリリーがっねる。

……分かってるよ。

「ほう、そのように反抗的な態度を取っていいのかな？あんたの大好きな獣人の少年の首がとれてしまうぞ？」

「くっ……！何が目的だ、俺になにをさせたい？」

歯噛みをしながらも俺は地主をにらみつける。

後ろではファルとリリーが他の4人の男の様子を牽制してくれているのだ、俺がニシエルを危険にさらしてしまっではいけない。



「ふっ、あんたのせいであの村は新規開拓などを始めてしまった。元の村は正式に廃村決定だ、私の土地は完全に無価値になってしまったのだよ」

「……………それで？」

「公都で抗議してもあの女大公は聞き入れもしないのでね。やはり亜じんとともに暮らすなどという国は良くないと私はシーレイア教国に行ったのだ、そうしたら……………」

その瞬間に地主の顔に浮かんだ表情は何と呼べばいいのだろう。喜び、欲情、敬愛、妄想、献身、恍惚。

そういった感情が入り混じり、狂気と名が付けられそうな顔だった。

……………男の狂気とか、イケメンでもキモいのに。

どん引きしている俺を置いて地主は話を進める。

「教祖さまに私はお会いする事が出来たっ！教祖さまは私の考えを肯定なさったのだ！それどころか、その場にいた勇者を紹介すらしてくださったのだ！聖剣のお力で人形のように座っておられたが、教祖さまは勇者のマスター権を私にくださると言っただっ！」

「……………ほう」

余りにひどい内容に少々殺気が漏れ出し、後ろにいたファルとリリィがびくっと肩を動かす。

「あの黒髪に黒い瞳が私のものとなる！その条件が、この世界に降りたつた真竜の最後の生き残りの力でこの竜の山の中にある遺産を持ち帰ること！しかもあの方は真竜があんただと言いつことを教えてくださいださったのだっ！」

「……………で？」

殺気の漏れが激しくなり、後ろの2人が体を震わせる……………つて、2人とも笑ってるし。

何で笑ってるのさ……………と思ったら後ろの他の4人は腰を抜かしているらしい気配。

なるほど、修行で打ち合ったりテストの採点とかで吹き出す殺気に比べたらちやっちいものだからな。

必死で地主に殺気を向けないよう抑え込んで、漏れるのは後ろにしているからなあ。

ただ1人、地主だけはそんな状況を意に介さず続ける。

「さあ、この岩の戸を開けるんだっ！この亜人のガキが殺されたくなければ、さあ早くっ！」

岩の戸、と言われて『感知』を伸ばしたがパチツとってはじかれた。

『感知』の反応では内部をのぞくことが出来ないが、以前リリーの見せてくれた光属性の結界に似たような感じがする。

「で、開けたらいいのか？どっちゃって？」

「血をたらせ、と仰っていた！さあ早くしろ！」

「はいはい、分かりましたよ」

俺はつぶやくと親指の先を少し噛みきり、岩壁にしつかりと押し当てる。

血というからまた魔力が抜けるかと思ったが、そういうわけではないらしい。

その瞬間、岩壁が一瞬まばゆく光ったと思うと、ゆっくりと左右に開き始めた。

「おお、神々しいっ！！ははっ、あっはっはっはっ！！！」

………どじが。

俺は地主に冷たい目を向けるが、それすらスルーしてくる。

もはやこいつは重症だな………と思っていたとき。

『感知』に一つの反応が現れた。

場所は開いたばかりの扉の中、結界のおかげで魔力は漏れ出ていないものの『感知』に反応がある。

「ファルツ、リリース！気をつけろっ！」

だって、『感知』に映った魔力は……。

「中の奴の魔力は、俺たち三人をあわせたよりも多いっ!!」

そう叫ぶのが精一杯だった。

その場にいた9人全員が、扉の中へと吸い込まれたのである。

一番遠くにいた地主の仲間が吸い込まれた瞬間、さっきまで輝いていた岩の扉が閉まっていった。

全員、得体の知れない魔力の固まりのもとに閉じこめられたのである。

吸い込まれた瞬間に体勢を整える。

しかし、今の感覚は何だ？

吸い込まれたというより、空港によくある歩く歩道に乗ったかのようなスムーズな移動だったが……。

辺りの様子を探るとすぐそばにリリーとファルもいたが、ファルのしっぽは逆立っている。

「……あれを見てください」

「なっ……」

「……」

俺もリリーも声がでない。

そこにあったのは、三メートルくらいの白いゴーレムが左手にニシエル、右手に地主を掴んでいる姿であった。

（久しぶりに起きてみれば……我が寢床に何ともまあ低俗な男がやってきたものよ！）

そんな低い声が頭の中に直接響いたと思うと。  
ゴーレムは右手を地面に叩きつけた。

血が、あたりに飛び散った。

第42話（後書き）

次回は土曜日15時です。

### 第43話

俺はその瞬間に動けなかったし、それはファルもリリーもだった。俺たちを遙かに上回る殺気に気圧されたのである。

ゴトリ、という音がしたと思うと、後ろの4人が失神したのか地面に崩れ落ちた。

ゴーレムはゆっくりと手のひらを開くが、そこにあっただのは布切れと血だけだ。

あの握力は肉の存在すら許さなかったのである。

「……左手の、少年を離せっ！」

「ニシエルくんは低俗じゃないです！」

「そうなの。ニシエルはいい子なの」

気圧された心を振り払って、俺は白いゴーレムに叫ぶ。

リリーとファルも睨みつけて言うが、もし俺たちにニシエルを抱えたまま襲われたら……。

手も足も出ずに潰されるだろう。

只でさえあのゴーレムの力は異常だ、絶好調の俺たち三人で戦って五分五分だろう。

(ほう、我の声が聞こえるか。それも我の殺気に耐え言い返せるとはな、3人もいるとは思ってもみなかったぞ)

笑みをこぼしたかのような気配が生まれる。

まあ、気配だけで顔はないから正確なところはわからないが。

(もとよりこの少年に危害を加えるつもりはない。というより、あの男ほど最悪なことをしない限り我に殺すつもりもない)

「ならっ！返してください、村でみんなが待っているんです」

(くふふ、ふははははっ！良かろう、しかし貴様ら三人は別だな)

「ど、どうしてなの！」

(貴様らは我に挑戦する権利がある。拒否は許さぬ)

……権利じゃなくね？というつつこみを入れられそうな雰囲気ではないだろう。

ただ、俺たちがあのゴーレムと戦っているとニシエルは帰れない。何があっても、ニシエルを帰してやらないと。

「ニシエルは返してもらおう。村まで届けるまで挑戦も却下だ。ただし、村に届けたら帰ってきておまえと戦おう。誓ってもいい」

(ほづ。なら、最上級の誓約で貴様らは誓えるのだな?)



「はい、構わないです」

「大丈夫なの。勝てばいい話なの」

(ふむ。なら、誓約成立だ)

ゴーレムがそういったかと思うと、まばゆく光る白い玉が俺たちの胸を直撃した。

心臓と同化し、否応なくその存在感を俺に知らせ続ける。

同じ違和感を2人とも感じているのか、顔も険しい。

(連れていけ。二時間は待ってやる)

そう言うとゴーレムはゆっくりと左手を開く。

けが一つなく気絶したままのニシエルはリリーが背負い、男四人はファルと2人ずつ抱えた。

ゴーレムが扉の鍵を開けた瞬間に俺たちは脱兎のごとく駆け出した。リリーと考えることは同じである。

二時間あれば、魔力回復薬を作れるっ！

魔力回復薬といっても、ポーションのようなものではない。相手を眠らせ、その間の魔力回復を劇的に向上させるのだ。

そのため、一刻も早く戻って寝る時間をとらねばならない。

気を失っているニシエルを連れ帰ってきた俺たちを見て村人たちが歓声を上げるが、残念ながらそれどころではない。

「ニシエルをお願いします、お婆さんっ！」

帰っている間にもうニシエルの様子は診てある。

ただ気絶しているだけで外傷もなく、そのうち目を覚ますだろう。気の急いでいる俺とリリーはダッシュで俺の家に駆け込む。

余裕のあるファルに村人たちへの説明を任せ、俺たちは回復薬作りに取りかかった。

「グルの実砕くの！」

「はいっ！上がりっ！」

「タース草をすりつぶすのっ！」

「できたっ！」

煮詰めて微妙な調整をしていくのはリリー、原材料を砕いたりすりつぶしたりする肉体仕事は俺が担当する。

肉体仕事が大変すぎて普通に作ったら半日かかるらしいが、そこは俺の素の身体能力でカバーする。

こうして、力業でたったの30分で作り上げた魔力回復薬はまだま

だ熱いのだが……。

「飲んだら多分寝ちゃうの。起こされるまでの間回復していくから、ファルに起こしてもらうまで寝るの！ほら、飲んでなの！」

リリーは木で出来たビールカーを俺に押しつけてくる。

まだぼこぼこ泡が立っているが、魔力不足で負けるわけにはいかないのだ。

俺は一息で薬を飲み込もうと口を付けて一気に流し込む。

「くっ！」

まずさを我慢して全部を飲み込むと、一気に眠気が訪れる。

目をしょぼしょぼさせながらリリーの方を見ると、リリーも一気飲みをしたところだった。

そして、持っていたビールカーっぽいものを机においた時点で限界が訪れる。

ドシャツと音を立ててリリーが、そして続けて俺も床に倒れ込んだ。靴を脱ぐ習慣を徹底しておいて良かった……と思いながら俺は意識を手放した。

「ケントさん、リリーっ！もうすぐですよー！」

揺さぶられる声に意識が戻ってくる。

しかし、そこに見えたのは……。

「知らない、天井だ……じゃなくて、なんで洞窟の中っ!？」

「っ！まさか、ファル、運んだの!？」

リリーの素っ頓狂な声にファルはにっこりと笑いながら言う。

「もちろんです！これで、魔力の回復の時間はかなりとれましたよね？」

「あ、ああ。ありがとう、ファル！魔力は……七分目位まで戻ってる」

「リリーは全快してるの。全く、ファルも無茶をするの」

「大丈夫でしたよ？そこまで重くありませんでしたし、強化の練習にもなりました」

にこにことしているファルだったが、間違いなく緊張感があふれている。

当たり前だ、自分の力で戦って生を勝ち取らなければならない時間がどんどん近づいてきているのだから。

「時間は後どれくらいだ？」

「後五分くらいですね……勝てるでしょうか？」

「ん……まあ、勝たないといけないんだし。戦いながら隙をつかかって戦っていこう」

「リリーは回復に専念するの。傷を負ったら教えて、なの」

「いや、リリーもあのビームを撃ってくれ。おそらくだが、俺たちの攻撃だけじゃ削りきれないと思う」

「狙いが定まらない可能性が高いの！危険すぎるの！」

「いや、リリーは出来るさ。俺も頑張るから」

「私もがんばりますよっ！」

残り時間のあいだに作戦会議をした。

俺とファルで直接攻撃をし、リリーが距離をとって砲撃する。

俺の新技についても話したが、おそらくゴーレムの核をつぶすのは『崩壊』はもってこいだろうということだった。

岩の扉までたどり着くと、ゆっくりと扉が開き始める。

今回は血を注いで開ける必要がなかったようだ。

(来たか。時間ちようどだな)

そんな声が響くと胸にあつた違和感がとれ、胸から出てきた白い光が散っていく。

(戦う前に話をしなければなるまい。貴様らは真竜を知っておるか？)

戦闘態勢を取つた俺たちに、白いゴーレムは話をする、と言つた。そして続けて語つた内容は思いも寄らぬものだったのだ。

(真竜という種が滅びてもう数百年になるのか……。今真竜がどのような扱いになっておるのかは知らぬが、真竜の役目はこの世界の守護であつた。管理者から力を託され、流れる魔力を整えていく役割だ。そして異世界からの悪魔に対し、真竜は戦いの中で主を失い、この世界で生きる真竜はいなくなった。だが最後に真竜という種が決めたのが、この地の守護をするものに力を託そう、というものだ)

「なつ……。もう、死に絶えているのか、真竜は」

自らの血縁種が滅んでいるという事実には俺はかなり衝撃を受ける。リリーもファルも、死に絶えていたということは知らなかったらし

く驚いていた。

(そうだ。そして、我々は真竜の力を三つに分けて宝玉に封印した。一つはともに戦った人族の勇者に渡し、二つは最後まで生きていた真竜の中に封じた)

「……それが、あなたなんですか？」

ファルがふるえ声で聞く。

白ゴレムは重々しく頷き、さらに話し続けた。

(うむ。そして今日、その封が解かれた。我は封印を解いた貴様らと戦い、そこに力を持つ資格があるや否やを見極めねばならぬ。生きたくば我を倒せ。さもなければ我が貴様らを殺そう)

### 第43話（後書き）

次の投稿は……月曜日に頑張りますっ！

時間は……15時になると思います。



第44話(前書き)

いつもの2・5倍なのです。

## 第44話

(生きてくば我を倒せ。さもなくば我が貴様らを殺そう)

そうゴーレムが言った途端、周囲の空間の雰囲気が変わる。ぴりぴりと皮膚を刺激するような、そんな張り詰めた空気に。

間違いない、戦闘開始だ。

俺は2人に目配せし、魔力強化を全開にする。

そして走り出そうと足に力を込め、爆音をたてて前に飛び出す。

ファルと2人でゴーレムの死角を突こうとするも、ものすごい勢いで振り回される両腕が俺たちの接近を許さない。

時折リリーの方から光線が飛んでくるが、ゴーレムは身をよじって回避していた。

関節が腰の部分にも存在するようで、俺の想定よりも広く攻撃が飛んでくる。

殴り合っていたのは何分くらいだろうか。

俺とファルは一旦ゴーレムから距離を取り、少し切れた息を整える。

(もう疲れたのか？ひ弱な生き物め)

無機物の固まりでしかないはずのゴーレムから強烈な殺気が放たれ、それと同時に俺めがけて巨大な石の固まりが現れた。

石はドリルのように尖って回転していて、普通に当たれば挽き肉だ

ろっが……。

（吹き飛ばっ！）

「させるかクソ野郎っ！」

右腕を魔力で覆い、硬化して石を迎え撃つ。

「……ふっ！」

亜音速で右腕を振り抜き、石の重心を打ち据えると、石は回転しながら周りに飛び散り、俺たちにはひとかけらも当たらない。

（ほう、やるな貴様）

ゴーレムが驚いたように呟く……まあ、聞こえてくるんだし呟いているんだろ。

その隙に後ろに回っていたファルが棒を全力で強化して、腰の部分めがけて打ちつける。

「ええいつっ！」

（ふっ、無駄だ）

バキッ！と音を立てて棒が折れるが、それほどまでにこめられたファルの全力はゴーレムを数センチ動かしたただけだった。ゴーレムは上半身だけぐるりと回転させずぐさまファルの方へ向き直るが、ファルは打ち抜いた姿勢のまま動けず、防御姿勢がとれない。

「ファル、耐えてくれっ！！」

俺はそう叫ぶと全力で地面を殴りつけた。

一気に地割れが進み、ゴーレムの足下を飲み込んだためにゴーレムはバランスを崩し、ファルの体をかすめるに終わる。

（むっ！？）

しかし、たったそれだけでファルはかなりの速度で吹き飛ばされて地面を転がった。

ただ、このチャンスが無にするわけにはいかないっ！

リリーがファルのそばに駆け寄り回復魔法をかけているのを横目で確認し、俺はゴーレムに接近する。

（その思い切りやよっ！全力で相手するに足ると判断しようっ！）

「……っ！」

ゴーレムは腰を回してこちらを向くと、虹色の光の玉を一つ浮かべる。  
ゾツと悪寒が背筋を走る。

……あれに当たるのはマズいっ！が、ここまで近づいたのに魔力をたたき込めるチャンスは逃したくないっ！どうするっ！？

一瞬躊躇したが、俺は前進を選択する。

色は違うがリリーのビームと似ているのだ、避けられないことはないと思っただが……。

(ふっ、甘すぎるな)

そんな声が頭に届いたかと思うと、ジユガッ！という音を立てて虹色の光線が伸びてきた。

リリーの光よりは遅いが、腕くらいの太さがある。

ある程度は予測していたので一本目は余裕を持って回避する。

(ブレスが一本しか出ないと誰が言った？)

続けざまに放たれた二本目は細いものの、俺の心臓の位置めがけて放たれる。

「……………くっ！」

避けきれないと判断し、上に飛び上がりながら尚もゴーレムに近づく。

光線は右の腿に直撃し、ジュワツ！と音を立てて穴を開けた。血すら出ない、完全に蒸発していた。

「……………があっ！！」

足から伝わってくる激痛に思わず俺は苦悶の声を上げる。

完全に右足の感覚はなくなり、着地したら転倒するだろう。

それでも視線はゴーレムから逸らさず、うまく動かない足で空中姿勢のバランスを取る。

（見上げた精神力だが、空中でもう一本はどうだ？）

ゴーレムは無慈悲に更なる追撃を仕掛けてくる。

三本目となったせいかなり細かったが、やはり狙いは心臓一本だった。

だが、俺は笑っていた。

（……………何？）

「……………仲間がいるんでな」

チュンツ！と軽い音とともに白い光が横から飛んできていた。ゴーレムの光線よりは威力が低いものの、光線には光線である。白い光は虹色の光に当たったが、そのままあっさり拡散してしまう。持っていたエネルギーをほぼ失い、ただの光になってしまったがそれが命中した虹色の光も心臓貫通コースから進路を反らし、俺の左肩を貫いた。

またもやジュワツ！と音を立てて左肩に穴が開くが、今度は小さいためにまだ神経はつながっている。

「ぐっつっ！！」

その分、痛みは倍増だが。

そして、俺はゴーレムのすぐそばまで肉薄していた。

（おのれっ！）

「遅いわっ！！」

回復していた魔力の八割方を込めて、右腕でゴーレムを殴りつける。打撃目的ではなく俺の魔力を送り込むことが目的であるため、物理的な衝撃はそこまでないのだろう、ゴーレムには。

魔力を全力で注ぎ込んだために障壁を作り損ね、右腕が骨折した感

覚。

指の骨は砕けているし、肩は外れている。肘の腱にもダメージがあるかもしれない。

一方のゴーレムは、折角浮かべていた虹色の玉が溶けるようにして消え、一瞬動きを止める。

注ぎ込んだ魔力は十分にゴーレムの中に送り込まれたので、一撃を喰らわせられたら『崩壊』させられるっ！と意気込んで右腕を動かそうとするも、指一本動かすことが出来ない。

こんな右腕では『崩壊』させる一撃を十分に与えられない、そのまま空中で唯一動く左足で叩き込もうとしたとき。

(貴様アツ！！よくもっ！)

ブオンツ！と音を立ててゴーレムが腕を振りかぶる。

援護射撃でリリーがゴーレムの胴体の一部を削ったが、何ら気にすることなく俺に怒りの視線を向けた。

……マズい、死ぬ。

直感に従い全力で障壁を展開する。

そんなこともお構いなしにゴーレムは俺を殴り飛ばす。

ドガンツ！と猛烈な音を立てて俺は吹き飛び、ファル達の横を飛びすぎると岩壁にバアンツ！と叩きつけられた。

あまりにも大きすぎる衝撃は障壁をあっさり打ち破り、俺の体に直接届く。

叩きつけられながらも目を強化すると、俺の魔力が完全に体全体に浸透している様子が見える。



中の魔力と相克を起こすことなくあっさり入ったことには少し疑問を感じたが、それに思考を向ける前にグシャツと叩きつけられた体が床に落ちた。  
それと同時に、俺の意識もぷつぷつりと途切れた。

「ケントさんっ!!！」

ファルが悲痛な声を上げるが、それをリリーが押しとどめた。  
どう見ても大けがだが、一方のゴーレムも謙人の攻撃が通ったのか、追い打ちをかけてこない。

456

「ファル、リリーが手当するからその間にゴーレムの相手をお願いなの」

「ケントさん、大丈夫ですよね？」

「大丈夫じゃない様子だけど、絶対死なさないの。だからファル、お願いなの!!！」

「分かりました、任せてください!!！」

こうして、2人は二手に分かれる。  
それぞれが必死で謙人の無事を願いながら。

ファルは折れてしまって半分になってしまっている木の棒を再度手に取る。

「ケントさんは周りに魔力を通して刃にまで昇華していた……。なら、そうすればあのゴーレムにも届くかもっ！」

今までにやったことのない魔力の形状変化。  
失敗が即座に死につながる状況だからこそ、成功させ続けなければならない。

……自分には回復魔法は使えない、なら今は全力でリリーを回復魔法に専念させるっ！

「ええいっ！」

(くっ、もう来たかっ!?)

ファルがそれで打ちかかると、ゴーレムも焦りを声に浮かべながら迎撃体制に入る。

しかし、さっきの謙人の一撃はかなりのダメージを与えていたらしく、さっきまでの俊敏な動きとはほど遠い。  
ただし、それでもファルの攻撃はゴーレムに届かない。  
すべてを右腕が打ち落とし、左腕が一撃を入れようと襲ってくる。

「やあっ！てやあっ！」

ファルの気合いが響き、ゴーレムの腕が欠けて飛び散る。

……私では決定打を与えられませんっ！！今は持ちこたえさせますから、リリー急いでっ！

耳を立ててどんな攻撃の予兆も聞き逃すまいと緊張させながら、うなりをあげて飛んでくる拳をやり過す。

全力を発揮し今までで一番の速度で動きながら、大切な人の動きを追い越すような気合いで、ファルは必死にゴーレムと打ち合った。

「ケントっ！」

リリーは謙人に駆け寄り、ひとまず状態を確認する。

「呼吸あり、背骨は魔力強化で破損なし。出血多量、肋骨三本骨折、内一本により肺に損傷。衝撃による臓器の負傷は……軽度。左肩甲骨に向けて貫通。右腕複雑骨折。右腿大腿骨損傷、動脈破裂。神経断裂……これを全部治すには魔力が足りないの。致命傷を優先するの」

三ヶ月の間に謙人から学んだ生物知識を総動員し、致命傷となるものから順に一つ一つ丁寧に治していく。

「やあっ！てやあっ！」

ファルの声が響き、それと同時にゴーレムとぶつかってドオンツ！と重低音が響く。  
必死で守ってくれるファルに伝えるべく、リリーも全力で治癒魔法を行使する。

「……肋骨修復完了、……肺組織修復完了。……内蔵組織修復完了。続いて右腿部の治癒にはいるの」

独り言で一つずつ確認しながら治療していくリリーは、今までにないような速度で治癒魔法を施していた。

「右腿部の修復完了……。続いて右腕の……」

右腿の大怪我を治療し終えた瞬間、リリーは猛烈なめまいに襲われる。

謙人の右腕に手を伸ばしていたはずなのに、グラツと体が傾いたと思うとリリーの体が横倒しになっていた。

「あう……魔力枯渇なの……。でも、これではケントは戦えないの、せめて右腕は治すの……」

必死で体を起こし、再度謙人の右腕の治療に取りかかる。治療を始めた当初はリリーの手のひらは眩く緑に輝いていたが、今では弱々しく明滅している。

「……早く、早くなの……」

気は急くものの、きちんと骨は繋がっていく。そして、最後の小指の骨まできちんと繋げきる。

「……呼吸安定、出血も少量。左腕は動かせないけど……もうそれを治すだけの魔力がないの……。焼かれてるせいで……出血は少ないから……少しなら大丈夫なの……」

意識はまだもどらないものの、もう危ない容態になることはないだろう。

そして、リリーは最後に謙人の顔に身を寄せせる。

「後は、お願いするの……」

そして、謙人の唇に自らの唇を触れさせた。

残っていた魔力がすべて、謙人の中へ流れ込んでいく。  
治癒一回分もないようなかな力、それでも……。

「ケントなら、何とかしてくれるって信じてるの……」

こんな場合なのに、胸が温かい。

そんなことを考えながら、リリーは意識を手放した。

唇に何か触れた気がして、俺はゆっくり目を開ける。  
その途端、ドガアンツ！と轟音が鳴り響き、ゴーレムと戦っていた  
ことを思い出す。

「やばいっ……」

急いで跳ね起きたところで、足と右腕が動くようになってきていることに気づいた。  
左肩はまだ動かないものの、複雑骨折もぶち空けられた穴も塞がっていて、中の筋肉もつながっている。

「……っ、リリースッ！」

横に倒れていたリリースを見つけ、抱き起こす。  
目を強化して確認すると、完全に魔力がなくなっていた。  
手足の末端が痙攣しているし、最後の最後まで振り絞って俺を治療してくれたらしい。

「ありがとう、リリース！」

ゆっくりとリリースを寝かせ、俺はゴーレムと戦うファルの方へと駆けだした。  
ファルもかなりぼろぼろで、左腕をぶらりとぶら下げ右腕だけで戦っている。  
ゴーレムの方はまだ五体満足のようなのだが、もうすでに体のあちこちの関節に俺の魔力が集中している。  
俺がうまく叩くことさえ出来れば、ゴーレムを無力化することが可能な状況だった。

「てやあああっ！」

猛烈なゴーレムのスイングとファルの拳とが激突し、どちらにも強烈な反動が加わるが、  
ゴーレムはその重量で耐え、ファルはしっぽを地面に突き刺して無理やりやり過ぎしていたのだが……。

「あうっ！」

ファルは強化に使う魔力が切れたのか、しっぽだけでなく足から崩れ落ちた。

追撃をゴーレムがする前に、ファルの間に割り込む。

「ゴーレムさんや、さっきはありがとう……なっ!!！」

「ケントさんっ!!！」

（貴様、回復したのかっ！あのエルフの小娘、治癒師としては超一流かっ！）

普通は声に出さないが、さっきのはかなり痛かったこともあって言葉が口から出てくる。

言葉と同時に放たれた拳は、ゴーレムの肩の部分に直撃した。

（な……なにっ!!！」）



そして、俺の魔力は速やかに分子間力を弱め、衝撃を伝えて『崩壊』させる。

ゴーレムの左肩がまるで消滅したかのように消え去り、左腕がドスンっ！と床に落ちる。

(き、貴様！何をしたのだっ！！)

「いや、自分で考えろよ」

俺は吐き捨てるように言うとファルを抱えてひとまず距離をとる。

「ケントさん……すみません、もう参加できそうにないです……」

「ファルのおかげで助かったよ、ありがとう。リリーが魔力枯渇で倒れてるから、とりあえずそのあたりにいというて」

ファルをリリーの隣に寝かせると、再度ゴーレムの元に向かう。ゴーレムの光線は俺の治療を上回るらしく、左肩は治る気配がない。リリーが魔力枯渇で倒れたのはそのあたりに原因がありそうだ。

(残るは貴様1人か？)

「戦えるのはな。ただし、俺1人でけりを付けるさ。真竜の跡継ぎ

って言うなら、俺1人で十分だろう？」

(ま、まさか！貴様は族長の血筋かつ！！)

驚愕するゴーレムに対し、俺はゴーレムの腕を交いくぐり首に一撃を与え、頭を地面に転がした。

残るは2箇所、右肩と腰部分の関節だ。

人にならない部分だったせいか、腰の関節にはかなりの魔力が集中していた。

(くっ、さっきの魔力のせいかつ！)

「まあな……というか、頭落ちてても喋れるのね。核辺りが狙い目かね？」

(くっ、我が追い込まれるとは……。貴様、やはり強者かつ……。！)

「俺だけじゃない、リリーとファルもだよ」

俺はそう言っつてゴーレムの右腕をやり過ぐすと、全力で腰部分を殴りつけた。

その勢いのまま上半身だけ吹き飛び、洞窟の床にヒビが入る勢いで落下した。

その勢いのせいか、一緒に右肩も『崩壊』して外れて転がっている。ただし、その時点で俺の魔力も切れ、その場に崩れ落ちる。

超ストレス、ぎりぎりセーフの一撃だった。

（ああ……私の負けだ。こんな達磨にされては、我には何も出来ん）

「だろうな。なら、達成でいいのか？」

（構わん。真竜の3つの能力のうち、我に封じられているのは2つ。それを貴様らに託そう）

ゴーレムが負けを完全に認めたのを聞いて、俺は完全に脱力する。完全に魔力枯渇だ、意識は何とか保っているが、手足の末端が痙攣している。

「そうか、それは謹んで受け取ろう……。だが、あんたは何者だ？ ゴーレムみたいなのが真竜なのか？」

（ふ、それはない。我は真竜ジユドスの魂が宿っているだけのゴーレムだ。ただ、ゴーレムの材料は真竜の骨だが）

「竜の体って何か高級素材っぽいよな」

（竜の骨は認めたものの魔力に反応して自在に形を変える。我はもう死ぬからな、あの獣人の娘にでも槍を作ってやれ。女にプレゼントしてやると喜ぶぞ）

「……あ、そう……」

（2人とも貴様に惚れているのか？流石だな）

「……何か、さっきまでとキャラが変わってないか？」

(元々こちらが素だ。真竜は皆お茶目な奴らばかりだったよ……)

「……あんたが、最後の同胞か？」

(ああ、真竜で意識の残っているものは我が最後だ。肉体そのものが残っているものはおらん。すまん、貴様が最後の1人となるが……)

「……俺が引導を渡すことになるとは……皮肉だよ」

洞窟の天井を見上げながらポツリと呟く。

せつかくこちらに来たのに、真竜族は俺が最後の生き残りなんて……。

(……もう、時間だ。最後に、貴様ら三人に真竜の惜しめない加護があらんことを)

ゴーレム……いや、ジユドスからその言葉が放たれたそのとき、三つの光がゴーレムから浮かび上がってきた。

白、茶色、緑色の光だ。

白い光はそのまま上へと上っていき、パチンツ！と微かな音を立ててはじけて消えた。

ジユドスの魂、というやつなのだろう。

茶色と緑色の光はクルクルとその場で回っていたが、突然ぴたりと動きを止める。

「……………」

そして、俺の元を通り過ぎてファルとリリーが倒れているところをクルクルと回っている。

意識のあるものの体が動かないファルは驚いて目を見開いている。しばらく回っていたかと思うと、緑の光はリリーの中に、茶色の光はファルの中にそれぞれ入っていった。

ファルはゆっくりと目を閉じ、光を受け入れているようだ。

あれが、真竜の力というやつなのだろうか。

俺なんかよりもよっぽど頑張った2人に宿るのなら最高だろう。

そして、首を反対側に巡らせたとき、俺は驚きに息をのむ。

法衣を着た女性が、いつの間にか俺のそばに立っていたのである。

「こんにちは、真竜の跡継ぎさん。残念ながら漁夫の利作戦は失敗でしたね……。しかし、お三方の戦いはきつと素晴らしいものだったでしょうね！」

シャンツと錫杖を鳴らしながら女は言う。

鈴の音のような、と形容するのが一番当てはまりそうな可憐な声。

絶世の美人と言えそうな容姿を俺に見せつけながら、耳あたりのよい言葉を口にする。

「……お前が、シーレイアの教祖か。そうやってあの地主も手玉に取ったのか？」

「あら？どうしてそうなりますか？」

この場所を知っていること、というのも十分な理由ではあるのだが……。

「そのちらちらする鬱陶しい『魅了』が何よりの証拠だ」

俺を虜にしようとしたさつきから魔法が発動している。

魔力は枯渴したとはいえ、ここまで露骨な魔術なら分かる。

「あら、ばれていましたか。まあ、一発目で魅了されなかった人に魅了出来ないものです……。結局、最低ラインしか達成できませんでしたわね……」

「……何を言っている？」

魔力さえ残っていれば、この女を捕まえて問い詰めるといふのに……！  
今現在は俺の動くのは首から上くらいなのである。  
どうがんばっても捕まえようがなかった。

「いえ、元はこれだけをする予定だったんです……よっ!」

そんなことを言って、女は持っていた錫杖を俺めがけて振り下ろし、俺の左腕を付け根から切り落とした。

「ぐっ……があっ!!」

「ケントさんっ!!」

離れたところでファルが声を上げるが、彼女も動くことの出来ない状況である。

普通なら強化であっさりはじき返すくらいの力であっても、今は容易に俺の体を傷つけた。

「まあ、仰る通りですよー。私はシーレイアの教祖、勇者のマスターです。殺しはしませんよ?勇者にあなたは殺される計画でいますから。だから簡単には死なないでくださいね?」

そんなことを微笑みながら言い、俺の左腕を拾い上げる。

「うんうん、真竜の腕を頂いたところで私はお暇しますねー」

そう言つて教祖は懐から青い石を取り出し、空に放り出す。

「待ちやがれこの野郎……!!」

「私は女の子なので！。それでは、さようなら」

カツ！と青い光が周りに広がり、思わず目をつぶる。  
再度目を開けたときには女の姿はどこにもなかった。

「くそ、何てことしやが……げっ、出血大サービスしてる」

ふと気づくと左肩からとめどなく血が流れている。

慌てて魔力をかき集め血を止めにかかると、またもや視界のブラックアウトが始まった。

……あー、やばいかも。

血が止まったか確認しなかったが、どうしても動くことが出来ず、俺はまたもや意識を失った。



## 第44話（後書き）

超難産で、本当に疲れました……。

次は未菜側の話で独立した章になります。  
予定では最終章ですが……。

更新は水曜日15時です。

## 第45話

私が、謙人くんのことを忘れるか。  
私が、みんなから忘れられてしまうか。

こんな究極の選択を、今私は下さなければならなかった。

今までの人生はたった17年弱で、意識のなかつた時間だつてあるけれど、両親はいつも優しくかつたしカラオケに行くような友達もいる。

かと言って、好きな人のことを忘れてしまふなんて、考えたくもない。

しかも、思い出そうとしたらあんな強烈な頭痛に襲われるのだ。

「……謙人くんのことを思い出そうとしたら猛烈な頭痛に襲われたのも、世界の強制力なんですか？」

今はないけれど、何となくさつきまで自分が感じて痛みを思い出して少ししかめっ面になる。

すると、光弘さんは驚いた顔をして言った。

「何だつて?! 普通、記憶消去は絶対かつ一瞬だよ? 思い出そうとしたら痛みを感じるなんて、聞いたことがないよ?」

「でも、私が謙人くんのことを思い出そうとする度に頭痛が酷くなりましたよ? あのととき勝手に頭痛が起こつたつていうのはかなり無

理があると思います」

あれだけ頭が痛くなったのは初めてだ。  
というか、普通の頭痛なんか遙か超えるものだったと思う。  
痛いを通り越してたもん、あれ。

「うーん……少し、君のことを調べてみても良いかい？何かわかる  
かもしれない」

「はい、何か分かるのであれば……」

「ちよつとごめんね……」

そう言つて光弘さんは右手を私の額に当て、待つこと数秒。

「うん、もういいよ。ありがとう」

「あ、はい」

何かをされたという感覚は全くない内に終わってしまった。  
しかし、光弘さんの右手の中には見覚えのないUSBメモリが握ら  
れている。

「あの、それは……？」

「うん、これが君の構成情報の「コピー」。思い出とかそういう奴はなしなんだけど……まあ、理解はさすがに出来ないだろうから、ごめん」

「は、はあ……」

確かに、手のひらをおでこに当てたらその人の情報がわかります。なんてあり得ないよね。ただ、光弘さんにはわかるらしくそのUSBメモリをパソコンに刺すと、表れたウィンドウをすごい早さで読んでいく。

「……ふあっ!?!」

「はいつ!?!」

突然光弘さんが奇声を上げ、釣られて私も変な声が出る。

「ああ、ごめん……。ただ、問題点が見つかったね……。あのジジイはこれが分かってたんでしょっかね……。はあ……」

「……あの……?」

突然、どす黒い雰囲気を身にまとい始めた光弘さんに恐る恐る声をかけると、光弘さんはぐったりした様子でこちらに向き直る。

「……ああ、ただ理不尽な仕打ちに呆れていてね……。確認なんだけど、この世界では起こり得ないような、『ファンタジーな体験』はないかい？」

「『ファンタジーな体験』、ですか？」

「そう、ニュートンやアインシュタインによる物理学を超越していきそうな体験。何だろう……。超能力とか言ってもてはやされそうな体験だよ」

「えっと……。『幽体離脱』みたいな体験をしたことはあるんですけど」

そういつた瞬間、光弘さんは思いつきり顔をしかめた。

「ごめん、それだ」

「……はい？」

「君は謙人と同じだよ。謙人の今いる世界に居た人と、地球人とのハーフ……。というより、先祖返りだ」

「……はいつ！？」

「君は、向こうの世界では『魔族』って言われる種族だよ。だから君から記憶は消えにくくて、そのせいで君そのものを世界は消去し

ようとしたんだ」

私が、異世界人！？

私が落ち着くのを待って、光弘さんはゆっくりと説明してくれた。

私の先祖の中に、この世界に来た魔族を身に宿して世界の強制力から守った人がいるらしいこと。

そして、長年の間に私の血筋に同化し、私のときに私の能力として発現したらしいこと。

それが、私の『幽体離脱』であったということ。  
そして……。

「これで、申し訳ないのだけれど君には選択権が無くなってしまった……。どうしても、向こうの世界に行ってもらう必要がある。じやなかったら、君の存在そのものが消えてしまうんだ」

そう、私は異世界に行かなければならない。

私という痕跡のすべてをこの世界から消して。

「ふふっ、そうですね……。何だか、信じられないです……。うっ、私のっ、ことを、みんなっ、忘れちゃうなんてっ……………」

ポロリと涙が私の目から零れる。

17年の生活は、私の中にとっても大きなものになっていたらしい。光弘さんはそのままじっと私のことを見つめている。少しの間、私は泣いた。

「……………ごめん、僕は君に何かをしてあげることが出来ないんだ……………」

「ふふ……………構わないですよ、私も心を決めましたっ！」

目を拭い、笑顔を浮かべる。

「異世界に行きますっ、そして謙人くんに会ってきますっ！！！」

「うん、強制してるけど、本当にごめん……………。お詫びに、向こうに行ったら女性に会うと思うから、これを渡して」

そう言って渡されたのは、小さな茶色い封筒だった。

宛先も何も書いてはいないけれど、かなり分厚い便箋が中に入っているようだった。

「……………これは？」

「うん、もうすぐ異世界へのゲートが開くんだけど、たぶんそこで向こうの世界の管理者と会うことになると思うんだ。名前はシーレ、僕の妹だよ。僕よりもよほど喋り方は婆臭いけどね」

「その、シーレさんに?」

「そ、渡してあげて。ある程度の情報を書いてあるから悪くならないようにしてくれると思う。ただ、妹はどこか抜けてるところがあるから気をつけてね」

「は、はあ……」

私は一人っ子なのでどうい感じるのかは分からないけれど、自分の妹を婆臭いとか言いますか? うーん、仲がとてもいいんだろうか?

「多分、た やのバームクーヘンを持って行かないといけないんだろっけど……まあ、それくらいの手間は惜しまないさ。さて、もう時間だよ。あそこの扉をあけて、床に飛び込んでね。少し落ちると思うけど、その先にシーレがいるはずなんだ」

「分かりました。色々ありがとうございました」

「いやいやいやいやっ!!僕の方こそ、無理やりさせてごめんね、本当にありがとうっ」



私はぺこりと頭を下げると、慌てて光弘さんが手を振る。  
まあ、異世界に行くのは強制で、私には結局何の選択権もなかったのだけれども。

——光弘さんは一生懸命対応してくれたのだから、お礼は言わないと。

そんなことを考えながら微笑むと、光弘さんは自分の額に手を当て、溜息をついた。

（あー、本当にいい子だよ……お父さんに気に入られちゃわなければ、凄くいい人生を送ったんだろうに……）

「え、何かおっしゃいましたか？」

「いや、何も無いよ。それじゃあ、君の異世界ライフに幸運のあらんことを」

「はい、ありがとうございます！」

光弘さんの祝福をありがたく受けて、私はさっき言われた扉を開ける。

先は真っ暗で見通せないけれど、きっとどこかに繋がっているのだろう。

……お母さん、お父さん、ごめんなさい。

忘れてしまっのかもしれないけれど、私は覚えているからねっ！

また少し零れた涙を振り払うように、私は暗闇の中へと一歩踏み出して……。

「きゃあああっ!!」

そのまま下へと落ちていった。

……そうだった、光弘さんは少し落ちるって言ってたなあ。

プルルル、プルルル、プルル、ガチャッ

「もしもし、お父さん？」

「おう、なんじゃみーくんや」

「もうお菓子は送riませんからね」

「な、なんでじゃっ!？」

「私はお父さんに何の反省も促せませんからね。力はあなたの方が上です。ですから、私のできる最大攻撃です。シールにも伝えますからね」

「な、なな、なっ！」

「ななじやなくて未菜ちゃんですよ。きちんと反省をして欲しいです  
ね、本当に。では」

「うぬぬぬっ！みーく

プシッ、ッ、ッ、ッ、ッ……。。

## 第45話（後書き）

大きな湖のある県出身の友人からバームクーヘンを貰ったのですが、かなり美味しかったです。

今度行った時に買いに行こうか……。

次回は土曜日更新です。

## 第46話

「きゃあああああっ！！」

落ちていく間の体感時間は十秒くらいだろうか。

遊園地のアトラクションにもろくに乗ったことのない私にはかなりきつい体験だった。

胃袋をきゅっと絞られるような時間が過ぎて、私はふかふかの何かの上に着地した。

「わあ、ふかふかだ……」

「今代の勇者は可愛らしいおなじみの。先代は厳つい男じゃったが」

「うわあっ！」

後ろから突然声が聞こえてきて私は驚いて飛び上がる。

喋っていたのは、見た目は若いのにかなりば……古臭い喋り方をする女の人だった。

「なんじゃ、妾の声を聞いた途端そんなに飛び上がらんでもいいじやろっに」

「あ、ええと、すみません……。びっくりしただけですので、ごめんなさい」

とりあえず、腰に手を当てて怒っているようなので謝ると、その人はからからと笑って言った。

「何、気にするでない。異世界からの来訪者が立て続けなのでな、妾もかなり機嫌が良いのじゃ」

「は、はあ……」

周りを見渡すと何も無い真っ白な世界。

光弘さんは色々とパソコンみたいなものを部屋に持ち込んでいたけれど、こちらはただ何も無い空間だ。

「お主は地球から来た、ということで大丈夫じゃな？」

「あ、はい。あー、シーレさん、であってますか？」

「ん？何故妾の名前を知っておるのじゃ？」

「えっと、光弘さんからお聞きしました。手紙を受け取ってますので……」

そう言って、私は貰っていた封筒をシーレさんに手渡す。

その封筒はシーレさんが受け取った途端、勝手に中身の便箋が飛び出てきて空中に並び始める。

……うーん、ファンタジー。

光弘さんがしていたこともファンタジーっぽかったけど、やっぱりパソコンを使っていたこともあってどこか現実感があった。しかし、普通では起こりえないような紙の動きを見ていると、やっぱり違う世界に来たんだな、と思うのだ。

「ふむ……お主は魔族なのか。これは問題になるかもしれんな」

「……どういふことでしょうか？」

「うむ、勇者を召還する奴らって大抵誰じゃと思う？」

「えっと……魔王と戦っている国の王様、とか？」

「じゃろつな。じゃつたら、その種族は？」

「人間です……あっ！」

シーレさんの言いたいことにふと気づく。

自らの種族を守ってもらおうと呼ぶ勇者、だつたら……。

「そう、人間じゃ。人間の召還した勇者が異種族じゃぞ？迫害される未来しか見えんわ」

召還を勝手にやってる国家はほとんどの場合最低な人が多いんだけど……。

私の場合は魔族だったということから渡りに船みたいな感じだったけど、本とかだったらほぼ誘拐だからね。

今回の国はどうなんだろう？

「うーむ……種族は完全非表示にしておくとして、この特性魔法はどうしようか……」

「特性魔法、ですか？」

「お主も向こうの世界で使っておったじやろう？種族固有の魔法じゃ、魔族は感覚魔法じゃな。光弘兄の言う……幽体離脱か？これは多分、お主が感覚を空気につなげたんじやろうな」

幽体離脱の種明かし。

何というか、超高性能のアンテナを飛ばしてるみたいな感じだろうか。

とっても使い勝手の良さそうな魔法な気がする。

「どうするかの？妾の権限でこれは止めておくことが出来るが……まあ、あつた方が後々楽じやろうな、バレないように使えばよいしの」

「うーん、じゃあ残しておいて貰えますか？」



私からしたらそんなこと言われたって使える訳じゃないんだけど。地球で出来たのはほぼ偶然……というか、勝手に出来たみたいなものだし。

そんなことを考えていると、シーレさんは羊皮紙のようなものに何かを書き込み始めた。

その速度も人間には出来ないほど速く、やはりシーレさんもすごい人なのだ……と今更ながら思う。

「良からう。さて、最後に勇者さまへのはっぴーたいむじゃ。何か欲しいものを一つ授けよう！」

「欲しいものですか？」

「うむ、いわゆるチート能力でもモテる能力でも大抵のことなら何でもござれじゃ」

そんなことを言われたら……私の言うことは一つに決まっているもの。

「じゃあ、謙人くんところに送ってくださいっ!!」

「……一発目から数少ない不可能な願いを持つてくるとは……。やはりお主は凄いの」

「あはは……。やっぱり出来ないですか……」

まあ、それくらいは分かっていたけれども……。  
言ってみるだけならタダじゃない？

「うむ。勇者召還じゃからな、召還主のところにかねばならん」

「でしたら……この世界についての正確な情報、というのはどうでしょう？」

「うむ？それは簡単じゃが……そんな簡単な要求でよいのか？」

「ええ、いくら力があっても情報が無ければ無駄ですからね。きっとどこでも一番怖いのは『無知』だと私は思います」

「ふーむ……賢いのう。情報一つで絶対強者の立場など容易に入れ替わるしの」

私の提案に納得したかのように頷くシーレさん。

私も、ずっと不思議に思っていたのだ。

異世界に行くお話って、主人公はかなりの割合でチート能力を頂くけれど。

その世界で最初に会う人がいい人じゃなかったら、騙されておしまいだと思っただ。

「ほれ、この世界に暮らしていく上で人が必ず知っている常識と、

世界情勢つてところかの。特に知っておきたい情報はあるかね？」

「そうですね……では、私を召還した国の実態とか教えてもらえませんか？」

「うむ、やはりお主は賢いの。まあ、聞いて怒るでないぞ？」

そんなことを言っつてシーレさんが話した内容は……。

「……うわあ、そんなところに召還されたんですか……」

「まあ、妾はただの管理者じゃから止められんのじゃよ。すまんの

「……まあ、いいんですけど。いや、よくはないですけど……。はあ、シーレさんに言っつてもダメですからね」

私がつくりと落ち込むような話だった。

だって、勇者召還しなければいけないほど世界が荒れてるとかそういうのじゃないらしいよ？

私を呼んだ最大の目的は、『戦争での秘密兵器』。

呼んだ国はシーレイア皇国らしいけど、隣のカルティナ公国を征服するつもりらしい。

ちなみに、その主導者は教祖と呼ばれる胡散臭い女の人。

「……すまんが、時間じゃよ。あそこにもうゲートが開いておる。

あそこに入ればその胡散臭い女のもとに一直線じゃよ」

「あれ、声に出てましたか？」

「思いつきり出ておったの。まあこれからが大変じゃとは思つが、頑張ってもらつしかないのじゃ」

「分かりました……。同じ世界にいますからいつか謙人くんにも会えますよね？」

「うむ。というか、そんなに遠くないじゃろうな。我が甥っこのいるのはカルティナとシーレイアの国境の村じゃし……。あ、この情報はサービスじゃよ」

「大変親切にありがとうございますっ！！」

何ともまあ、いい情報をシーレさんは最後にくれた。

これできつと、シーレイアを脱出すれば謙人くんには会えるはず！そんなことを言っている間にも、時間はなくなっていく。ゲートが完全に姿を見せ、大きな扉が現れる。ちょうど……ホグーツの校門みたいだ。

「それでは、いろいろとありがとうございました」

「うむ、また会える機会があるとよいの」

「その時にはまた、たくさんお話が出来ると良いですねっ！」

「そうじゃの、ここでの仕事は本当に退屈なんじゃよ……」

ドアを押し開けるとそこにはまた、暗い空間が広がっていた。  
……私は、きちんと学習している。

「……また、落ちますか？」

「……落ちるのう……」

やっぱり、と思いはするものの、躊躇ってばかりではいられない。  
私はその空間に飛び込んだ。

今度の落下感は何秒くらい。

叫ぶことなく耐えていると、突然目の前が眩い白で塗りつぶされる。

「きゃっ、何っ!？」

何も見えないまま足の裏がどこかについた感触。

そして、目の前の白は光ではなく何かの膜らしい、ということも分かった。

おずおずとその膜に手を触れると、独りでにその膜はシュルシュル

と糸になって上から空気中に溶けていく。  
そして、そこに広がっていたのは教会のような空間と。

「ようこそいらっしゃいました、勇者さまっ！私はシーレイア皇国の教祖、フィオレンティナと申します」

その空間の中ただ1人、私の前に跪く女の人。  
私が胡散臭いと言っていた教祖その人だった。

## 第46話(後書き)

次回は水曜日15時更新予定です。

## 第47話

「ようこそいらっしやいました、勇者さまっ！私はシーレイア皇国の教祖、フィオレンティナと申します」

私の目の前で跪く女の人。

妙に違和感を感じるのはどうしてなんだろう？

この人を見ていると何となく形容しがたい違和感をびびり感じてしまう。

「あの、えっと……」

「あ、いきなりすぎましたね、すみません。ひとまずこちらまで来ていただいて、座ってお話ししませんか？」

「は、はい……」

シーレさんからもらった情報によると、この人が今カルティナとの戦争を主導している人物だと聞いているけど……。

この人の案内に従って教会の礼拝堂の外に出て、隣の部屋に移る。未だにこの人の顔をしっかりと見れていないのでかなり判断に困ってしまう。

隣の部屋はかなり小さめで、ちょうど六畳くらいの部屋だった。

部屋の真ん中には金色に輝いている剣が飾っており、それを取り囲むように机と椅子が並んでいた。



「ひとまず、お座りください」

「ありがとうございます」

女の人……フィオレンティナさんが椅子を引いて勧めてくれたので、私は腰をかけ向かいに座った彼女を見つめる。

ウインブルって言うんだったかな？

そんな感じのシスターのフードをかぶっているので紙の色は分からないけれど、すごくきれいな人だった。

「勇者さま、私たちシーレイア皇国はこの世界全体の宿敵である『真竜』という種族の復活を予知しました。奴らは世界に絶望と死を振りまきますが、私たちにはそれを防ぐ手だてがありません。奴らは余りに強力すぎるのです」

「……」

この時点で私はフィオレンティナを信頼できない人間と判断した。かなり低い確率ではあるけれど、こちらの世界に来た真竜、つまり謙人くんが『邪知暴虐』なことをしている可能性もなくはない。ただ、それよりもこの女が嘘をついている可能性の方がよほど高いだろう。

その嘘を上手く暴いて、何か交換条件を引き出さないといけない……って、私悪者みたいだよ。

「世界の敵を消すために、力をお貸し願えませんか？」

「えっと……情報を鵜呑みにするのはあまり好きではないの。実情とか見に行けるかな？その後、強力をするかどうか決めたいの」

少し賭だけど、こんな感じに聞いてみれば教えてくれるかな？

などと軽く考えていると、ちらっと彼女の顔にイラつきが浮かんだのが見えた。

普通ならすぐ取り繕える表情だったかもしれないけれど、一回記憶が飛んでいて家族の反応を気にしていた身としてはあまりにわかりやすいよ？

「……国の中央からはかなり離れているんです。外国にこっそりと住んでいるみたいなのですよ」

「えっと……外国なのに私は行くの？ならその国の人に話を聞きたいな」

「……チツ……」

そう言つて、私は真っ直ぐ彼女を見つめる。

彼女は俯いていてその表情は伺うことが出来ないけれど、彼女がさつき微かに舌打ちしたのに気づいているのだ。

かなり意地の悪い質問をした自覚はある。

かなり危うい線を攻めているけれど、何もかも唯々諾々と従う人間と思わせるわけにはいかないし、かといって攻めすぎたら殺される

かもしれない。  
沈黙が続き少し攻めすぎたかな……と後悔し出した頃になって初めて、彼女が口を開いた。

「……今代の勇者さまはお賢いんですね。おおよそ私の考えていることを想定していらっしやるのでしょうか？」

出てきたのは、皮肉。

確かに想像……というか、チートな感じでもう知っている。

「……だとしたら、どうしますか？」

「……『魅了』<sup>チャーム</sup>」

そう彼女が呟いたとたん、バシィツツ!!という音が部屋に響きわたる。

その発した場所は私のこめかみのすぐそばで、私はたまらず椅子からひっくり返った。

「いつつたあ！な、何？」

「『魅了』<sup>チャーム</sup>すら防ぎますか……この勇者め、面倒なことをっ！」

完全におしとやかな仮面を脱ぎ捨て、嫌悪感と敵意を露わにフィオ

レンティナは私を睨みつける。

「<sup>チャーム</sup>魅了」を防いだ影響か風が吹き荒れたせいで、彼女のウィンプルが外れる。

「えっ………？」

そこにあつたのは緑の髪に、長く尖った耳。

人間の国を率いているのが異種族などということが起こりえるのだろうか？

「あなたは……エルフね？」

「本当に使い勝手が良いので。ただ、勇者というコマがどこか別の国に行かれても面倒ですし、あなた自身は大変使い勝手が悪い。残念ながら、始末させていただきます」

「始末って……さすがに殺されたくないけど」

「来たばかりのひよこ勇者なら、私1人で十分殺せます」

そう言ってどこからともなく彼女は錫杖を取り出した。

軽く振り回すと地面に打ちつけ、シャンツ！と軽い音が鳴る。

私は運動そのものは本当に出来ない子だったので、これはたいそうマズいかもしれない。

私はひっくり返った状態から少し身を起こし、ある程度身動きでき

るように体制を整えた。

「私、運動苦手なんですけど……」

「この部屋は魔法が使えませんよ？この体の長所は魔法ですしあまりこの部屋は使いたくはありませんでしたが、勇者の能力を防げるなら少しの不自由くらい我慢しましょう」

出口は一つ、向かうには彼女を倒さないといけない。

魔法は使えない………というか使い方も知らないし、運動能力も上がっているわけではない。

これは………ちよつとどころじゃないピンチみたいです。

「それでは、どうぞ死んでくださいな」

「それはむりっ！！」

予想通り彼女が真っ向から錫杖を真っ向から振り下ろしてくる。

私は横っ飛びに転がって避けたけれど、その錫杖の先は石の床に強烈なヒビをいれていた。

「っ！？」

向き直ったときには、彼女は横に錫杖を振り払おうとしていた。

(避けきれないっ！)

私は転がっていた椅子を体の前に掴み、自分から後ろに飛ぶ。彼女の打撃は構えた椅子の裏に直撃し、私の体を簡単に吹き飛ばした。

私は壁に当たるまで飛ばされたけれど、そのおかげで彼女から少し距離を取ることが出来た。でも衝撃はかなり通っていて、吐き気が私を襲う。

「うっ……かはっ！」

「ふむ……勇者としても、身体能力は並程度ですね。特別な勇者なら考え直しましたが、なんの特殊能力も無いようですし、本当に平凡です、ゴミです」

「う……」

確かに、私自身はあまり運動が出来ないけど……。ある程度頭は良かったし、平凡ならまだしも、ゴミって言われると少し腹が立つのよね。

とりあえず、彼女と素手で肉弾戦を挑んだところで勝ち目がない。謙人くんならきつとあっさりやつつけちゃったんだろっけど、私は無理だ。

何か突破口はないかと周りを見回していると、彼女が嘲るように言った。

「あら、まだやりますか？なら、聖剣でも使ってみますか？初代勇者さまが使ったという素晴らしい剣ですが……貴女には振ることすら出来ないのではなくて？」

そう言うと、彼女は床に転がっていた金色に輝く剣をこちらに放つてよこす。

カランツと軽い音を立てて床に転がされた剣。

体育はダンスで剣道など選択したことがない私には使えない可能性の方が高い。

……それでも。

「やってみないと分からない！」

私はその剣を拾い上げ、鞘から引き抜く。

剣はあまり重くなく、振る分には問題なさそうだ。

教科書の構えを思い出しながらゆっくりと構える私に対し、彼女は笑う。

美しい顔にぞつとするほど黒い笑みを浮かべて、彼女は言った。

「これで、私の勝ちです」

その瞬間、私の持つ剣から真つ黒な鎖が吹き出した。





## 第47話（後書き）

次回更新は日曜日になると思います。

## 第48話(前書き)

少し短いです。

## 第48話

「な、えっ？」

剣から吹き出したのは真っ黒な鎖。

一応黒いだけでイヤな感じがするわけではないけれど、鎖という時点で触りたくない。

慌てて剣を放して逃げようとしたけれど、私の体は全く動こうとせずその場に立ち尽くしたままだ。

そして、きらきら輝いている剣には全く似合わないような黒い鎖が私の体に勝手に巻き付いた。

そしてそのまま私の体をギリギリと締め上げていく。

(くっ、はめられたっ!!！)

今になって分かったが、もともと彼女の目的は私にこの剣を持たせることだったのだろう。

ほとんど運動できない私が、国のトップでもある彼女の攻撃を避けられたのがそもそもおかしかったのだ。

後ちよつとで避けられる、がんばったら逃げられる……そんな線をつまぐ攻められた私は、あっさりと罠にはまってしまった。

まさか剣にこういう形で仕込みがされているとは思っていなかったけど、今更後悔してももう遅い。

ここは異世界、地球の常識なんて通用しない。

エネルギー保存に質量保存、何もかもがどこかへ行ってしまうているのだ。

甘かった自分に歯噛みしながらも、何の抵抗も出来ずにギチギチに

体を締め上げられて、私は立っていられず床に倒れ込む。

その様子を、フィオレンティナは黒いほほえみを浮かべながら見つめていた。

「無様ね、勇者さま。貴女の前の世界はどんな甘い世界だったのかしらね」

「あ……………」

(えっ！声が、声も出ないっ！！)

慌てて体を動かそうとしても、小指一本動かすことが出来ない。

ただの鎖なのにここまで自由を奪うことは出来ないだろうに、どういうこと？

異世界クオリティはここまで……………と焦っているところで、ふと気づく。

たいてい、悪役って勝ったと思うとべらべらと自分の手札晒すよね。

彼女が何か言ってくるのを待とう、そう考えると少し落ち着いた。

すると、やはりフィオレンティナはゆっくり近づいてきて、私のそばに腰を下ろす。

「無駄よ、その鎖からは逃げられないわ。どれだけの同胞がその鎖で命を失ったか……………。この世界の管理者だって、流石にこの鎖を使って勇者を奪おうとするとは思わないでしょう」

「あ……」

「あら、まだ声が出ますか。その鎖はその体を司っている魂魄のみを縛り上げ、異世界へと放り出す神具らしいです。私たちがこの世界に来たときも、その鎖によって多数の同胞が殺されましたが……貴女には勇者である肉体がある。その肉体は有効活用させていただきます。そうして、私たちの……」

徐々にだが、視界にもやがかり始める。

意識ははっきりしているのに、世界が見えなくなる。

まだ彼女は喋っているのに、耳もどんどん聞こえなくなっていく。

(うう……。まさか最初から失敗するとは思わなかったよ……。特性魔法は……使えるけどその信号を受け取る体の方がダメだ……。) 新しい能力、魔族の特性魔法である感覚魔法を使ってみるけど、その力は今の現状を変えるに至らない。発動した感覚はあっても、それを受け取るための五感が失われているのだ。

「さようなら、勇者さま」

そういえば、名前すら聞いてなかったわ。

そんな眩きが私の耳に届いたのを最後に、私の意識は完全に暗闇の中に落ちていった。

意識は明確なのに、暗闇で身体感覚もない空間で一人っきり。

寂しい、怖いよ……。

私はいつの間にか、意識も失っていた。

ふと目が覚めると、まだ教会の中だった。辺りを見回すと、すぐそばに『私』が座っている。

微動だにしない、人形のような『私』を見下ろすこの状態は見覚えがある。

間違いない、『幽体離脱』だ。

私が意識を失っているときに発動したらしい。今の私には何も出来ることがないのだが、空中を漂っていると突然声が聞こえてきた。

『おい、勇者ミナヤ！聞こえておるかの？』

（その声は……シーレさんですか？）

『こんなことになってすまんの……』

（え？どうしてシーレさんが謝るんですか？）

『いや……勇者としての身体能力を付与するのを忘れておっつての。お主の今の身体能力は地球並なのじゃ。成長速度だけは爆速じゃが』

(ああ、それで……)

手も足も出ない私を彼女は蔑んでたのか。  
光弘さんの言う、抜けてるところだったのか。

『しかも、お主を今縛っておる神具、作ったのは妾じゃからの……』

(え！？なんですつてっ!?)

『いや、その鎖の神具は妾のお手製じゃ。外せるものは妾しかおらんのじゃよ』

(……)

『しかも、妾は今の状況を何ら変えることが出来ん。消える前にきちんと感覚魔法を発動させてやるくらいしかできなかつたのじゃ。ここからはがんばって耐えて、としか言いようがないのじゃよ』

(は、はい……。ありがとうございます、助けていただいて……)

『つむ。まあ、元はというと妾のせいじゃからの。謙人には何もいらなかつたからの、忘れておった』

(……でも、真竜に戦争を仕掛けるって言っていましたけど……謙人くんのことですよね?)

『うむ。我が甥っ子のことじゃ、きつとお主を助けてくれるじゃろ』

(うづ……謙人くんに助けてもらったために来た訳じゃないのに……)

『そろそろ妾は仕事に戻らねばならぬ。すまんが、1人似たような状況の女をつけておくから、話し相手としてのんびり機会を待つとよ』

そう言うと、私の横に光が集まり始める。

あわてて周りを見回すけれど、立っている衛兵たちの様子に何の変化も見られない。

(……見えて、ない?)

『お主らは……うむ、地球の概念で言うなら別次元におるのじゃ。当然、見えるはずがなからう?』

(なんか……何でもありですね……)

『まあ、気にするでないぞ。それでは、妾は失礼させてもらうの』

その一言を最後に、ふっと気配が消える。

やはり管理者というほどだから、強烈な力を持っているんだろうな。



私の横で光はますます強くなっている。  
その光は徐々に人の形を取り始め、突然光の玉がぱつと散る。  
そこにいたのは……。

『え？』

『すみません、私の体が……』

私を毘にはめたフィオレンティナその人だった。  
緑の髪に整った顔。  
でも、そこに浮かぶ表情は彼女とは違い暖かいものだった。

『えっと……フィオレンティナさん、ですよ？』

『はい。エルフ族族長、カランの長女フィオレンティナなのです』

『うーん、多分あなたはあの体に乗っ取られてるとかそういう感じなのよね？だって、持ってる雰囲気全然違うし』

『はい、数年前に乗っ取られたのです……。エルフとして、大変恥ずかしい限りなのです……』

『いえいえ、私も勇者らしいですが今やお人形さんですから……』

たった1人は辛いけれど、話し相手がいるだけですごく違うものだ。  
私の知らない情報をフィオレンティナさんから聞き、私の知る情報

を彼女に伝える。

少しでも現状の突破口を探そうと、私たちはたくさん話し合った。

## 第48話（後書き）

次の更新まで、少し時間をください。

最終話まで書き上げて、毎日投稿でめたいと思っています。

第49話（前書き）

お待ちせしました！

## 第49話

その後、フィオレンティナさん……何となく彼女もそう名乗っているのがイヤだったのか、フィオと呼ぶように言われたけど……とたくさん話した。

私が異世界から来た勇者らしい、ということと言つと少し驚いているようだった。

『あれ？あの体にくつついていたわけではないの？』

『そうなのです。私はミナが今持っている聖剣の中に封じられているのです。それによって経路パスをつなぎ、ミナの体を操っているのです。私は本来出て来られるはずはなかったのです』

『でもフィオさんはここにいますよ？』

『それは聖霊さまのおかげなのです。聖霊さまとミナにだけ、私は話しかけて姿を見せることが出来るようなのです。多分普通はそれが出て来るのは魔族だけだと思います。魔族の特性魔法の中には、ほとんど幽体離脱なことが出来るものもある、と聞いたことがあるのです』

『えっと……実は私、そんなんですよ』

『！？』

ぱっくり口と目を開いて固まるフィオさん。

ここまでの話でフィオさんはエルフの中でもかなり強かったという話だったのだけれど、やはり幽体離脱は出来なかったらしい。

『……………何故、異世界の勇者なのです？』

『えっと……………昔来た魔族の人が私の先祖と同化して、私が先祖返りみたいな？それで、向こうの世界には居られなくなってます』

『なるほど……………実は私の母がその戦いで指導者なのです。ですが、魔族が戦いに参加したとは聞いたことがないので』

『うーん、私にも分からないよ。突然言われたことだったし……………。それより、どうしてフィオさんは乗っ取られてしまったてるの？』

少し無理矢理だったけど、私は話を変える。

『旅をしていたときに、不吉なオーラを持った石に遭遇したのです。これは処分すべきだと思ったのですが、それを叩き割った瞬間に黒い煙みたいのが出てきて……………まず体だけ乗っ取られたのです。意志は私のままだったのです』

『割っちゃったんですか……………。海に沈めるとか、火山に投げ込むとか、そういう方法の方がよかったですんじや……………』

『っ！そういう方法があったのです！』

この世界の人はシーレさんに続いてフィオまで、天然な人なんだな……。  
おお、と今気づいたかのように頷くフィオさんに、私はやれやれと首を振る。

『体に乗っ取られてからどうしたの？』

『私の体の中で、悪魔と戦ったのです。私はエルフ、精神世界でのやりとりには慣れていたのである程度保っていたのですが……あの鎖の神具のところへ行った私の体はそれを起動させ、私の魂を縛りあげたのです。そして聖剣に神具を融合させ、勇者を操れるようにした……というわけなのです』

『うーん……だったら、聖剣壊したら魂は元に戻るのかな？』

『おそらくそうなのです。ただ、その後に私の体の中での悪魔と精神的に戦わないといけないのですよ』

『勝てる？』

私が聞くと、フィオさんは顔を曇らせる。

『残念ながら、精神世界での悪魔の攻撃的な力は比べものにならないのです。精神世界での死は魂の死、そして悪魔は魂相手だと驚異的な強さを発揮するのです。エルフの私は、堪えるので精一杯なのです』

『そっか……となると、あの悪魔って何者なの？』

『あれは……遙か昔にこの世界を襲い、真竜たちの必死の努力で追い払った悪魔たちの生き残りなのです。彼女の話だとあと1人生き残りが居て、それも魔王らしいですよ』

『うわあ……ということは、彼女の目的はきつと……元の世界とゲートをつなぐことだろうね。侵略目的か帰還目的かは分からないけど』

『教国全土の人口をすべてすりつぶせば何とかつなげるかな？というくらい、ゲートの魔法は被害が大きいのです。勇者召還のように聖霊さまの力を借りませんか』

『そこまで被害を出すわけには行かないよね』

『はい。ですが、彼女はまず、脅威である真竜の排除に向かうようなのです。それはおそらく勇者であるミナがさせられるでしょうが、少し時間に余裕はあるのです』

もう一人の悪魔である魔王。

そして、最後の1人である真竜の謙人くん。  
彼を殺そうとする私の体。

聖剣に封じられている私とフィオさんの魂。  
これらを考えると……。

『フィオさんの体の奪還、私も手伝うわ！私は魔族だし、何かの足



しにならない?』

『それは……嬉しいのですが、精神世界で戦えるのですか? そうでなければ、死んでしまうのです!』

『えっと……ここって私の精神世界でしょう? だったら、今から練習したらいいと思うの』

『でも……』

逡巡しているフィオさんに、私はこう言った。

『だって、暇じゃない! 色々と力を尽くしてみたいでしょう?』

結局、フィオさんも折れて戦い方を教えてくれるようになった。ちなみに私の肉体も、教国の騎士たち相手に戦闘訓練をさせられている。

今は騎士のみんなに袋叩きにされているようだ。

痛覚は完全にシャットアウトされているが、自分の体がボコボコにされているのを見ても何も楽しくない。

フィオさんの姿をしている悪魔が私に出した命令は、「副団長に勝利すること」。

団長は偵察隊を組織して隣のカルディナ公国を偵察に行っているらしい。

『結構な勢いで殴られてますが……痛くないのです？』

『うん、痛覚は最初つながってたんだけど、さすがに無理だったから消したの。肉体は目の動き一つ私の指示に従わないけど、一応感覚をすべて戻すことは出来たよ？』

『……それは辛そうなのです。それでは、私たちも始めるのです！』

腕をぶんぶん振り回して、フィオさんは気合いを入れたようだ。私も、新しいことをやるんだ、という気持ちに身が引き締まる。

『まず、精神世界では自らの精神体として自我が形を取るのです。そのとき、どんな姿を取るか自分でイメージする必要があるのですが……もう出来ているので……飛ばしちゃうのです』

『と、飛ばしちゃうんだ……』

早々に気合いを外されてしまうものの、フィオさんは至って真剣だ。少し緩んでしまった気を引き締め、再度フィオさんと向き合う。

『精神世界ではイメージがものをいうのです。生憎と時間はありますから、早速実践してみるといいのです』

そういうと、フィオさんは少しの間目を閉じる。  
私も何が起るか固唾をのんで見つめていると……。

『えいつ!』

可愛らしいかけ声とともに一本の木が目の前に出現していた。  
高さは私の身長くらいで、太さも私が抱え込める程度だろうか。  
別に大樹でもないこの木を作り出した意図が分からず、私は首を傾げた。

『これは、なんなの?木……だとおもうのだけど……』

『何でもいいです、何とかしてこの木を折ってみてほしいのです』

『へ???』

『ですから、この木を折るなり砕くなり、壊してくださいというこ  
となのです』

いきなりなんだろう???

首を傾げながらも木に手をかけ、折ろうとしたけれど……。

『あれ?ま、曲がりすらないよ?これって、本当に木なの?』

『もちろん、木なのです。私のイメージによって生み出した木なのです。そう、精神世界ではイメージしたものは何でも出現するのです。しかし、そのイメージは大変強固なものでなくてはならないのです。適当なイメージでは何も作れず、イメージすることだけに精神力を使うことになるのです』

『なるほど……だったら……』

技術の授業で数回使ったことのある両刃ノコギリを目を閉じてイメージする。

イメージを集中すること数秒、私の両手にかすかな重みが生まれ、ゆっくりと目を開けた。

『おお……ノコギリが出来たよ！』

『使ってみたらいいのです。使えるなら何でもよいのです』

私はフィオさんの言葉に従い、ノコギリを木に当てる。

そして力を込めて引いた途端、カシャンツと小さな音を立ててノコギリが砕け散った。

『あれ？』

『当然、適当なイメージだと傷一つつかないのです。おそらくミナはあれを形から知らないのです。だから、すぐに砕けてしまったの

です』

『そんな……ということとは私が馴染んだものしかここではほとんど使えないってということ？』

『そういうことなのです。だからこそ、付いてくるには練習が要るのです』

『あう……現代知識は役に立たないのか……』

肩を落としながら私はフィオさんと練習に励んだのだった。

第49話（後書き）

明日の15時にまた更新します！

## 第50話

『うーん……これも無理か……』

臆気な記憶から引つ張り出してきた、チェーンソーが碎け散る。これまでに一週間ほど経っており、その間に試した道具は百を超えていた。

『すごいのです。よくそんなに道具を思いつけるのです』

『まあ、前の世界はもので溢れていたからね……。結局、何も効かなかったから意味がないような気がするよ……』

私がかかり落ち込んでいると、フィオさんは私の肩をぼんぼんと叩いて慰めてくれる。

『普通は、道具を具現化するだけで一苦労なのです。おそらく、ミナの敗因は慣れない道具ばかり使うことなのです』

『うーん……チェーンソーはまあ、慣れてはいないけど、ガスコンロとかはかなりいい出来だったと思うんだけど……』

向こうではよく料理してたし、その関係で具現化がうまくいったの

だろう。

まあ、同様に作り出した包丁も効かなかったんだけど。

『あの円形に火が出る道具……あのイメージで、普通レベルなんです。前の世界で、もっとも長く取り組んだものは何なのですか？が、こころより長く取り組んだものがあると思うのです。あ、睡眠は例外なのですよ？』

思わぬところからアドバイスをもらい、私は考えてみる。  
17年に近い人生の中、もっとも長くやったこと……。  
私自身は途中記憶がないから、直近で考えるなら……。

『勉強、だね……』

意識なく寝ていた時期が長かったせいで、年齢と同じ学年にはいるために入院中も、そしてその習慣のまま退院してからも勉強していた。  
スポーツも出来なかったし、将来を考えるとどうしようもなかったから……。

『それは、この木を切り倒すのに使えないと思うのです……』

『……植物はセルロースっていうのが主成分だったよね』



細胞壁に含まれるセルロース。  
多糖類で人間には消化できない。  
構造式は……などと、知識が頭の中にとんと広がる。

『せ、せる……?』

『そして、反応させるなら脱水反応かなあ。濃硫酸の性質は……』

この一週間で気づいたことの一つに、口に出すことでイメージははつきりする、ということだ。

私がイメージを口に出して作ったノコギリは、ほとんど歯が立たなかつたものの碎けはしなかつたのだ。  
しかし……。

『脱水?分子?何を言っているのです?』

現代知識、特に化学のオンパレードだ。

役に立たないかもなあ、じゃなくて役に立たせよう。

私だって学校でまじめに勉強してきたんだし、それを使わないのは大損でしかない。

しばらくイメージを集中させていると、キラキラとした光が私の手のひらに集まってくる。

『……あ。容器に入れないと』

『えっ???』

イメージに致命的な不備があったことに気づき、止めようとしたが時すでに遅く。

『あっついつ!?!』

量は少なく数ミリリットルだったからよかったものの、それでも私の手のひらに濃硫酸が飛んで私は飛び上がった。

慌てて水を出して手のひらを洗い、しげしげと飛んだ跡を見つめる。黄色くなっている部分がぼつぼつとあるので、おそらくはきちんと作り出せているだろう。

『手のひらが黄色くなっているのです。大丈夫なのです?』

『うん、洗ったから反応は止まってるし。じゃあ、改めてその木に挑みましようか』

改めてイメージを集中し直したけれど、一度具現化しているので今回は簡単に生み出すことが出来た。

そう、瓶一本に入っている濃硫酸である。

『これ、何なのですか？』

『えっとね……取りあえず、お酢と比べものにならないくらい酸っぱいものかな？』

酸っぱすぎて、酸っぱいなどと感じることなく飲んだら死ぬけれど……。

『これが、何か使えるのですか？』

『うーん、生物だったらかなり効果がある成分だと思っただけ。あんまり真似してはいけないから、こういうテストにしか使わないけどね』

『そんなに危険なのです？手のひらが黄色くなっているだけだと思うのですが……』

『まあ、見れば分かると思うよ。じゃあ、飛ばないように離れててね』

フィオさんがある程度離れたことを確認してから、私は大きく息を

吸って止め、一気に瓶の中身を振りかけた。  
そのままびよんとフィオさんの隣にまで下がり、呼吸を再開する。

『これで、何とかなると思うけど……どうだろう？』

『どれくらいの時間、離れておくのです？』

『まあ、数分かな。くさい臭いが漂ってくると思うから、風でここに流した方がいいかも。そういえば、この私の精神世界でこんなことして大丈夫なのかな？』

ふと気づいて私はフィオさんに尋ねる。

忘れていたけれど、ここは私の精神世界なのだ。  
よくよく考えたら、硫酸まき散らすとかどうかしてるとしか思えない。

『明確に自らを傷つける、という意図がない限り、自らを傷つけることはないのです。これは生き物として、必ず存在する安全装置のようなものなのです』

『うーん、つまり私がここで何をしても、大抵大丈夫なんだね？』

『自分の精神世界しんせいですから、自分がもっとも好きに過ごせる世界なのかもしれないのです。ただ、ここには本来なら他者は存在できないので1人なのが前提なのです』

……やったね、引きこもる場所を見つけた！

なんていう冗談は置いておいて、再度フィオさんの作った木を見ると……。

『お、想定通り』

『え、ええ?!』

黒く炭化したようになっていて、それを見て、フィオさんは仰天している。

あわてて駆け寄り、虚空から木の棒を取り出すとついついとついついでいる。

表面に振りかけたただけなので深くまで脱水反応を起こしているとは思っていなかったのだけれど……。

『ああ……完全に、枯れてしまったのです』

『あれ、表面だけじゃなくて?』

『はい。私は里では世界樹とよく接していたので、世界樹の特性を少し反映させていたのです。その特性の一つが、「ダメージを全体に薄く広げることで影響を減らし、エルフに治せるレベルにする」というものなのです』

『ああ、じゃあ……山ほど劇物を取り込んでしまったわけだ……。なんかごめんね?』

『いえ、イメージですからいいのですけど……約束ですから、共闘をお願いするのです。こんなものがイメージできるのなら、百人力なのです』

『ああ、流石にこれを彼女にぶっかけるつもりはないよ？』

『え??これで倒すのではないのです?』

『うーん、だって悪魔って体はタンパク質かな?そもそもそこから分からないし。それに練習とか実験ならまだしも、実践に使うにはあまりに残酷すぎるもの』

『そ、そういうものなのですか……?』

首を傾げるフィオさんは、想定以上のダメージを受けていた木に触れる。

そして、その木はカシャンツと軽い音を立てて砕け散った。

『悪魔は精神世界では魔法を使ってくるのです。それだけ魔法が身近な世界だったのだと思うのです。私もイメージを全力で集中させれば何とか放てるのですが、正直実践では使えないのです』

『魔法か……。それなら、いけるかも』

『う、すごく、悪い顔をしているのです』

私が浮かべた表情を見て、思いつきり顔をしかめるフィオさん。

……失敬な！普通の笑顔だし！悪巧みしてただけで！

暗い教会の一室で、微動だにせず座っている少女が1人。

瞬きのタイミングは必ず5秒に一回で、背もたれにもたれることもなく座る様子は人形のようなようだ。

すると突然、部屋の扉が開け放たれる。

光が射し込み、開いていた目が少し細くなるが、彼女の表情や姿勢にそれ以上の変化はなかった。

「さあ、勇者！これを見なさい！」

意気揚々と帰ってきたフィオレンティナは、右手に持っていたものを高々と掲げる。

勇者、と呼ばれた未菜は、生気を感じられないような動きでゆっくりとフィオレンティナの右手を見る。

そこには青い光を燦然と放つ小さな玉があった。

「持ちなさい」

短い命令にすつと手を伸ばし、未菜は玉を受けとる。  
フィオレンティナは更に鞆を開き、一本の人の腕を取り出した。

「この血液を玉にかけなさい」

ただ淡々と従う未菜は、自らの手のひらが血塗れになることも、そして自分が握っている腕は人間のものだ、ということも考慮しない。ポタツポタツという小さな音が暗い部屋に響く。

「うーん、条件が違ったかしら？」

あまり変化が見られず、フィオレンティナが呟いたそのときだった。

「あ……」

「眩しいっ！」

目が眩むほどの青い光が部屋を満たし、同時に強風も吹き荒れる。

その風と光が止んだとき、その場に立っていたのは人形のような振る舞いそのままに強烈な力を内包している未菜と、高笑いをするフィオレンティナだった。



「キヤハツ、キヤハハハハツ！！これで最強の勇者が私の駒よつ！  
！キヤハハハハツ！！」

それを聞いても、未菜の顔に表情が浮かぶことはなくただ右手を伸ばして立っていた。

その手のひらには、割れて光を放つこともなくなった玉のかけらが載せられていた。

第50話（後書き）

明日も更新です。

## 第51話

重く、黒く、何もない暗い空間に、俺は1人たたずんでいた。ただひたすら、何をするともなく。

「いつまで立ってるの」

かなり昔に聞いたきり、耳に入ってくることのなかった声色が俺の耳に届く。

「……母さん」

「あら、分かったの。嬉しいわね」

少し淡白な物言いの中に、愛情がたくさん含まれていることを俺は知っている。

辺りを見回すと、小さな青い竜がちょこんと丸まっていた。パタパタと尻尾をゆらしながら、丸い瞳でこちらをじっと見つめている。

「母さん、生きてたの？こっちの世界に戻ってたとか？」

「いいえ、私もお父さんも死んだわ。それは変わらない事実ね」

「なら、どうしてここに？」

「あなたの血よ。あなたは真竜としての血を引いているのだから、そこには種族の記憶が含まれるの。本能で知っているような内容だね。そこに、私の魂の一部を残してあるのよ」

「そっか……父さんは？」

「お父さんはこっちの世界には来られないからね。一応あなたの中にいるけど、出て来られないわ」

「そう……でも、会えて嬉しいよ」

俺がそういうと、母さんのしっぽも少し弾むように動く。やっぱり心配してくれていたのだろう、胸が熱くなる。

「まあ、私が出てこられる時間も短いので早く済ませましょうか。悪魔に腕切られていますし」

……やはり、あいつは悪魔だったか。体にまとっている魔力は綺麗なのに、深層にある魔力は真っ黒だったのだ。

何か出来るわけではないけれど、何者かが分かっただけでありがたい。

「さて、教えてなかったから仕方ないですが………あなたの血は猛毒です。体質の合う人ならうまく取り込めますが、普通の人なら即死ものですよ？3人に渡して、3人とも切り抜けるなんて奇跡以外の何物でもない」

鋭い眼光と共に放たれた厳しい言葉に、俺は縮こまる。

母さんは翼を広げ、俺は母さんの目から目を離すことが出来なかった。

「はい………」

「そして、血を渡すことの本当の意味……。魔力が抜けた自覚はありませんね？」

「……はい、あります」

「血を渡すこと、それは求婚と同義です。真竜は怪我をしない限り永遠に生き続けます。そのとき、異種族と結ばれたら必ず別れなければいけない。そこで、自らの眷属とすることで永遠の命を分け与えるのです」

「……まさか」

「そう、あなたが血を分け与えた3人は、もう普通の種族ではないのですよ」

母さんの言葉に俺は凍り付く。

母さんは嘘をつかない、ということは……。

「俺は3人の人生を、勝手に、決めてしまった……？」

「まあ、3人もあなたの血が無ければ死んでいますから。それをどう思つかは3人次第ですよ。少なくとも、死にかけていた子たちを助けたことには変わりありませんから」

「……はい」

落ち込んでいた俺を少し、慰めてくれるように母さんは言ってく  
る。

知らなかったとはいえ、適当な行為は良くないということを痛感さ  
せられた。

「そして、もう一つ。あなたが倒したゴーレムには、真竜としての  
権能を目覚めさせる欠片が封じられていました。真竜が滅んでから、  
次に力を持って世界を守る種族の助けになるように私たちは封じた  
のですが……あなたが生きてこちらに来たので、こちらが優先され  
たのですね」

「そうだったんですか……」

「しかし、あなたはその力をその3人の女の子に渡してしまってい  
る。だから、光は女の子たちに分かれたのです」

「でも、光は二つしかなかったけれど……」

「もう一つは人間に渡していたのですよ。ところが、悪魔の手に渡っている……やはり人間は、きちんと管理することすら出来ないようです」

氷より冷たい声で言い放つ母さんに、俺はますます小さく縮こまる。

……本当に怖い。

「さて、あの猫の女の子に渡った力は重量操作。ただ、こちらの世界には重力の概念がなかっただけで、本質は重力操作だと私は思います。これが何かは分かりますか？」

「……母さんの姿を見ていると、その翼だけでは単純に体を持ち上げられないはずだから。そのための魔法だと思えます」

「そうです。あと、エルフの女の子に超回復と全魔法適性ですね。彼女たちエルフは自らの力を把握するのに長けていますから、すぐに気づけるでしょう」

「……俺には、ないですか？」

おずおずと聞いた俺に、母さんは柔らかい笑みを浮かべた（真竜の姿だけど、分かるの！）。

「あなたは彼女たちを守るために、無意識のうちにでしょうがその

力を分け与えているのです。優しいあなたに残っているのは、あなたが鍛えたものだけでしょね。でも、それがあなたの強さの原点なのですから。誰かを守るといふのは大変ですから頑張っただ鍛えなさい、いくらでも成長できるはずですよ」

「……………うん」

「そろそろ時間ですね。最後に、ゴーレムは持って帰るとよいでしょう。魔力と、あなたの知識があれば彼女たち2人によい武器となるはずですよ。真竜の骨で出来ていますから、うまく魔力を通せば、自在に形を変えられます」

「……………うん、ありがとうございます」

「最後に、悪魔に負けたままというのは許しませんからね。叩き潰してきなさい」

「はいっ！」

俺は胸を張って返事をする。

そして、母さんがにっこり笑ったと思うと、体がゆっくりと上っていく感覚があった。

戻るのが、2人の元へ……………。



「ケントっ!」

「ケントさんっ!」

口々に叫ぶ声を聞いて、俺はゆっくりと目を開ける。  
体中が鉛のように重いし、少し視界もかすんでいる。

……ああ、左腕ぶったぎられたんだっけ。

目を向けると左肩の血はきちんと止まっており、今もリリーが治癒魔法らしい魔術をかけていた。

「リリー、ファル……。2人とも、大丈夫か？」

「私たちは大丈夫です、リリーが治してくれました……。それより、ケントさんがっ!」

「ああ、血が足りてないわ……。リリー、無茶しなくていいぞ?」

俺がそういうと、リリーは首を横に振った。

「ぜんぜん大丈夫なの。目が覚めてからこっち、魔法を使うよりも

魔力が回復する方が早い。部位欠損は治せないから、血だけ作るの。今、造血してるの」

「ああ、ありがとう。それと、治療してもらいながらで悪いけど、今回のゴーレムを倒した結果なんだが……」

そういつて、俺は母さんから聞いたことをファルたちに伝えていく。

「そんなことが……私にはそういう新しい力って分からないのですけれど……」

「何か違和感を感じていたの。でも、まさかそんな力とは思ってなかったの」

驚いている2人を横目に、俺はゆっくりと身を起こす。

「あ、まだ起きない方がいいの！」

「いや、もう大丈夫だから……」

そして、意図的に最後に回した内容を言うために、俺はリリーの治療を止めてもらった。

「俺は、君たちを治すために血を渡した。でもそれは、俺が君たちの人生を変えたとも言えるんだ。俺は君たちをそれぞれの種族から変えさせてしまったらしいんだ。謝ってすむ話じゃないけど、きち

んと謝りたい。本当に、ごめんなさい」

こちらにあるのかは分からないが、正座をして俺は頭を下げる。こつこつと頭を下げたのは、ファルの着替えをのぞいたとき以来だろつか……。

最近だな。

「……ネームプレート、オープン」

「あつ、ネームプレート、オープン」

リリーが突然ぼつりと眩き、慌ててファルも唱える。

A4大の個人情報を見ながら、リリーは笑って俺に言う。

「ここを見てほしいの。リリーは逆に、嬉しいの」

「えっ？」

そういつて見せてきたネームプレートの、ある一点を見るけれど、俺は何が言いたいのか分からない。

種族  
真竜 辰野謙人の眷族

「……それって、どういう……」

「ケント、あなたとずっと一緒に居られるということ。大好きなあなたと居られるのなら、リリーにとってこれは祝福なの」

「あ、リリーだけじゃないです！」

そう言って差し出されたファルのネームプレートにも、種族は俺の眷族と書かれている。

ファルは顔を少し赤らめながら、はっきり言ったのだ。

「私だって、ケントさんが大好きです。一緒に居られるなら、私も嬉しいです」

「2人とも……」

俺は泣きそうになるけれど、彼女たちは俺のことをゆっくりと抱きしめた。

「ただ、一つ聞きたいのは……」

「3人目は、誰なの」

微笑みながらも、バシッと追求する姿勢の2人だった。少し引き気味になりながらも、俺は渡辺のことを説明する。

「もう1人は、今は俺が元いた世界にいると思うんだ。まあ、いろいろあつて彼女にも血を渡したんだ。名前は渡辺未菜。俺と同じ年だ」

「女の方ですか……。会ってから考えなければいけませんね、リリ」

「そうなの。徹底的に追求するの」

彼女たちの意欲にかなり引きながらも、俺はこれからのことに話を変えた。

「これからだが、どうやらあの教祖の女が俺を狙って勇者という刺客を放ってくるらしい。俺は今、このように満足には戦えない、手伝ってほしいんだ」

「もちろんですよ!」

「水臭いの。手伝うのくらい、当たり前なの。ついでに腕も取り返すの」

「ありがとう、2人ともし」

2人の優しさに甘えてばかりで心苦しいけれど、次は全力で俺が2人を守ろう。

それだけの力を、早くつけなければっ……！！

## 第51話（後書き）

最終話執筆中。

明日中には投稿できるよう全力を尽くします。

第52話（前書き）

過去最長です。



## 第52話

ヒュンヒュンヒュンツと風切り音が鳴り響く。

ファルが村の外で白い棒を振り回しているのだ。

「ていつ、やあっ!!」

気合いとともファルの中の魔力が励起し、振り下ろした棒に青い光が宿る。

ファルが全力で振り下ろした先は地面。

ドゴオンツ!!という轟音をたてて振り下ろした棒は、半径二メートルのクレーターを生み出した。

ファルは額に浮かんだ汗を拭くと、少し離れていたところに立っていた俺の方を向き、笑顔でVサインを作った。

ファルの持つ白い棒はゴーレムの体から作り出したものである。

魔力で圧縮に圧縮を繰り返し、魔力が浸透しやすいように成型をした結果、『如意棒』のような特性を持つに至った。

そう、魔力に応じて伸び縮みが自在で、太さも変えられるのである。ただ本物と違って、最小サイズが30センチ、最大サイズが5メートルと制限があるのだが……十分だろうし。

ファルは渡した翌日にはその特性を使いこなし、今は重力操作とのコンボを練習中だ。

最初は数十秒集中してからでないと発動しなかった重力操作も、二

週間経った今では息をするように操作できる。

ただ、「棒を振り下ろし直撃した瞬間だけ重力を極大化する」などという無茶を試みているために時間がかかっているのである。

今のクレーターは丁度成功した結果であり、辺りにはあちこちにそんなクレーターが空いている。

どうせ攻め込んでくるのだし、わざわざ埋め直すまでもないと放置しているのだ。

村人たちは一旦離れたところの村に匿ってもらっている。

作物を運んでいったから受け入れ先の村も喜んでたし、大丈夫だろう。

クレーターからひとつ飛びで俺の隣までやってきたファルに俺は話しかける。

「どう、棒の使い心地は？」

「すごくいいです！ただ、対人戦での使い勝手が分からないのが不安ですね……」

「俺と組み手してみる？」

「いえ、左手が……」

そう、俺の左手は結局治ることがなかった。

魔法とはいえ奪われた腕を再度生やすなんていうことは出来なかったようだ。

取り戻さない限り腕を治せないことが分かっていた2人は、みすみす俺に怪我をさせてしまったことを悔やんでいた。

だがそれは俺も同じであり、しかも母さんに『雪辱してくる』と誓っている。

「俺もこの体で戦うんだ、腕をなくしてからもう二週間、試行錯誤を繰り返してきたんだ。それに……」

と、ここでニヤツと俺は笑う。

「前回俺は組み手で負けたからな。ファルに雪辱戦を挑みたいね」

怪我を負ってから俺が練習したのは3つ。

一つ目は、『感知』の強化だ。

今までは俺の魔力を周囲に飛ばしていたが、それでは最高距離が半径五キロくらいになってしまう。

そこで、地面に通っている魔力の地脈を用いることで大幅に距離を伸ばした。

さすがに精度は極端に落ちるが、それでも半径八十キロで誤差十メートルだ。

そして、俺の魔力による『感知』では誤差数センチだ。ちなみに、今はこれで悪魔の状況を探っている。

奴は只今二千人を率いてこちらに向かって進軍中だ。

後一日、余裕はあるだろう。

二つ目は、『崩壊』の練習。

あまりに力押しすぎるこの技だが、何度か繰り返す内にコツをつかみ、かなり必要な魔力を減らせたのだ。

最後に、新技の開発。

腕が一本使えないというのはかなり大きなハンデだ。

それをカバーすべく開発した新技を、ファルとの組み手で使ってみようというわけである。

「さて、じゃあやりますか。本気で来てくれ、じゃないと技の使える度合いが分からんし」

「分かりましたが……一応、リリーを呼びましょう。すぐに治せるリリーがそばにいたら安心です」

そう言つて、ファルは森の方へ走っていく。

ちなみに、森からは何度もドォンツ！という重低音が響いているのだが……。

当然、リリーの魔法である。

森の中は魔物が多いので、リリーはここ数日は森の中で魔法を放っている。

教祖の姿を聞くと、彼女はこう言ったのだ。

「それは間違いなく、お姉ちゃんなの」

その次の日から、リリーは魔法を特訓し始める。

使える属性を増やし、魔力すら回復する『超回復』も使えるリリーは、もう魔法特化だった。

リリーには杖を渡してある。

魔法を待機させることができ、同時の発動を助ける機能がある。

姉を助けようとあまりに根を詰める姿に、負担軽減を目指して作ったのだ。

実際ファルが無理やり気絶させて寝かせていたほどリリーは必死だったのである。

これらから考えると消去法で、渡辺の中にあるのは竜息吹だろう。

地球にいる限り俺と同様発動することはないだろうし、そもそも封じた玉は悪魔の元にあるのだ。

今回の件では俺たちには全く関係のないことである。

あれだけ轟音を立てておきながら、一切疲れた様子を見せないリリーが戻ってきた。

「ファルと組み手するって聞いたの。大丈夫なの？」

「ああ、俺も戦うからにはきちんと実力をつかみたい」

「もう……分かったの。部位欠損さえしなければ治すから、思う存分やればいいの」

「はは、すまん」

「よろしくね、リリー」

あきれた顔でリリーは首を振るが、俺は変えるつもりはなかった。

俺は右手を前に出した姿勢を取り、ファルも棒を振り回して真っ直ぐに構える。

「それじゃあ……始めなのっ！」

リリーの合図と同時に、ファルの姿がぶれる。

俺の普通の動体視力ではぶれる速度。

ただそれは、ファルの強化によるものではない。

(……間違いない、重力操作か)

『重さ』としてではなく、『重力』の概念を教えたのは俺だ。

ファルは間違いなく、自らの進行方向に重力の向きや大きさを変えている。

そこに強化が加われれば、音速は容易に超えるだろう。

彼女は二週間前に得た力を完全に使いこなしていた。

ドパンツ！という轟音が鳴り響き、暴風が吹き荒れる。

それは衝撃波となって辺りに広がっており、リリーはそばで小さな結界を張っていた。

俺は強化だけで、そのファルの動きの余波を乗り切る。

しかしファルの速度は音速を超えています上がり、もう強化した目ですら捕らえられなくなる。目を閉じて『感知』に集中することでなんとか位置を把握していると、突然それすら線になる。

(……まずいつ！)

俺は迷わず新技を発動して目を開けた。

目の前ではファルが横向きに棒を振り抜く直前らしく、俺の目にその姿が映る。

その次の瞬間、ファルの作るクレーターの音を遥かに超える轟音が炸裂した。

翌日。

俺たち3人は村の外の平原で敵を待ちかまえていた。

奇襲をかけることも考えたが、兵隊はすべて奴の魅了にはまった一般兵だったのだ。

実力から言って俺たちに拮抗する戦力は、鎧で全身を覆った勇者らしき人物と、悪魔本人のみ。

わざわざ一般兵を倒す必要もない、という判断だった。

「お姉ちゃんは私がやるの。ボコボコにして起きてもらうの」

「そんな肉体的でいいのか？」

「冗談なの。ある程度痛めつけてから精神世界に介入するの。その後悪魔を叩き出すの」

「じゃあ……俺が勇者を相手にしよう。ファルはリリーのフォローだ。俺はリリーのお姉さんを知らないし、分担はそちらの方がいいだろうでも、出来たら拘束魔術はリリーに頼みたいな。ファルは一般兵がやってくるようなら、まずそいつ等の意識を奪い、遠くに運んでやってくれ。余波で死ぬだろうし、俺も勇者の様子を窺いつつ運ぼう」

「そうですね……あまり犠牲は出たくありませんし、そうしまし  
よう」

そんな会話をしていると、500メートル少々離れたところで軍勢は止まった。

何をしているのか？と思うと、風に乗って声が届く。

「真竜の、片腕がない男！勇者が殺しに来たわ、大人しく勇者に殺されなさいっ！」

教祖の声だ、と俺が思ったそのとき。

「お姉ちゃんの体を、返せっ……！」



絶叫したリリーが先頭で強化全開で突っ込んでいく。どうやら我慢が出来なかったようで、俺とファルも続けて飛び出した。

リリーは離れていた距離をあっさりと縮め、前にいる一般兵をポイポイ上に投げ捨てている。

遅れて到着したファルがその吹き飛んだ兵士たちを受け止めて意識を奪い、地面に転がしていく。

俺も追加で兵士の意識を奪い、ほんの数秒で過半数の一般兵が地面に倒れた。

なかなか減らない一般兵に業を煮やしたか、リリーが魔力を多めにすぎ込んで魔法を発動させる。

「じゃまなのっ！ 『影縛り《シャドウバインド》』っ！ 『

リリーの声に応じて、シュルシュルとそれぞれの影から黒い縄が飛び出し、体にまとわりついていく。

それと同時に隔離のための魔術が発動し、倒れた兵士も起きていた兵士も、あっさりと自らの影のロープで拘束されてゴロゴロと転がされていった。

照準が甘くて俺やファルの影に対しても発動したのは御愛嬌だ。俺たちはあっさり抵抗<sup>レジスト</sup>したが、それは勇者や教祖も同じだった。

「おや、まさかここまでとは……。素晴らしい魔術の力をお持ちです」

「お姉ちゃんはそのんこと言わないのっ！」

2人が大量の魔法を展開し、全力のぶつかり合いが始まった。ファルと俺も隔離のための魔法にあぶれた一般兵を早々に運び出そうとしていたのだが……。

「ケントさん、後ろっ!!！」

「くっ!!！」

『感知』から勇者の反応が消失したかと思うと、俺の方へと切りかかってきた。

(……なぜ、映らない!?)

「ケントさんっ!!！」

「大丈夫だっ！保つから取りあえずこいつら運んでおいて！」

身を屈めてその剣先をやり過ぎし、俺は勇者と真っ直ぐ相對する。全身を銀色の鎧で覆っており、フルフェイスヘルメットのような防具を頭に着けている。身長は少し低い、女だろうか？

「お前、勇者らしいな……。ダサいな、そのヘルメット」

軽い挑発を試してみるが、何の反応も返してこない。

何の変化を見せることなく、ただ構えた剣で切りかかってくるのを余裕を持ってかわしていく。

「なぜ、あんな悪魔の味方をする？勇者なら魅了の効果くらい分かるだろう？」

聞いてみるが、相手は無言だ。

目を全力で強化して見てみると、勇者の持つ剣から出た魔力の鎖が勇者自身を縛り上げているのが分かる。

全力強化でないと見えないとは、かなり高度な魔法らしい。

鎖はその隠蔽効果がついているし、どうやらこいつも操り人形のようにだ。

「……………」

無言のまま勇者はこちらに駆け寄ると、手に持つ剣を振り下ろす。

ブォンツ！と音をたてる剣だが、当たらなければ意味がない。

動きもかなり複雑だが、正直攻撃は単調であるし、確かに人より格段に強いけれど、俺が強化して裁ける程度しかない。

取りあえず鎧を破壊して面を拝もう。

そう考えた俺は、『崩壊』の分の魔力を両手に集中させる。  
そして、勇者が剣を振り下ろしたところを避け、勇者が姿勢を崩した瞬間を狙って俺は勇者の左腕に触れて魔力を流し込む。  
さらに続けざまに蹴りを腕に放って衝撃を与え、『崩壊』を発動させた。

「……………」

うまく魔力を回したつもりだったが、剣の方には回らず壊せたのは鎧だけだ。

ピシピシッと音を立てたかと思うと、鎧が消滅していく。

戸惑ったのか追撃をやめ、立ち尽くす勇者だったが、鎧は俺が触れた左腕から粉となって消えていく。

そして、そこにあっただのは……………。

「なっ、渡辺っ！！」

生気のない虚ろな目をした渡辺の姿だったのである。

渡辺がこちらに来ている、という衝撃に固まったのは何秒だったろうか。

ふと気づくと、渡辺の右手に眩い光がたまっていた。

その姿は、否応なくあのゴーレムの光線を思い出させた。

(……まさかつ！竜息吹かつ！？)

「させねえっ！」

「……」

俺は叫ぶと、体中に魔力を巡らせ強化を全開にして渡辺に飛びついた。

右腕を全力で振り抜き、光がたまっている右手を殴りつける。

間一髪、その瞬間に竜息吹は発射され、俺はその余波に容赦なく転がされる。

竜息吹の発射方向はうまく空に向けられたようだったが、その効果は絶大だった。

上空に留まっていた雲を丸ごと吹き飛ばし、空に丸い青空が覗いていたのである。

「ぐうっ……！」

転がされた俺は腕の痛みに呻き声を漏らしつつ、立ち上がろうと右腕を動かすが、そこに焦げ臭いにおいが漂ってくる。

「……なっ！」

右腕は消し飛んでいた。

両腕を失ったことに衝撃を受けるが、今は強化によって痛みをカットしている状況だ。

強化が解けたらシヨックしかねない、となんとか強化を維持させていると、渡辺はゆっくりとこちらの方を向いた。

(マズい、せめて離れないとっ！)

残っている両足に力を込めて動かそうとするが、そのときになって俺は全身の筋肉が痙攣していることに気づく。

(くそっ、竜息吹には麻痺効果付きかよっ！)

渡辺は歩いてこちらにやってくる。

どうやら竜息吹は彼女にとっても負荷が大きかったらしく、右腕が炭化している。

その手で鞘にしまっていた剣を握ろうとして右腕が崩れたのを、彼女は無感動に見つめる。

それはまるでダメージ計算をする機械のようで……。

「やめろ、渡辺っ！」

「……………」

俺の声を完全に無視し、残った左腕で剣を抜く。

ゆっくりと歩く彼女は、間違いなく俺を殺そうとしていた。

「ケントさんっ！」

「あらあら、あなた達を巻き込んだブレスを撃たせるはずだったのに……流石真竜ね、反らすなんて」

「リリー、ケントの元へっ！」

「分かつ……」

「行かせると思っているのかしら？」

周りにゾンビを召喚し、邪魔している間に教祖自身が攻撃を加える。

ファルモリリーも焦って攻撃が大振りになっており、教祖の攻撃が身をかすめるようになっていた。

渡辺は淡々と俺の現状を把握し、俺のすぐそばに立つ。

確かに俺は体を動かして攻撃ができないが、ただ、麻痺は体にしか効果がない。

俺が技を使う分には何の問題もないのだ。

寄ってきた渡辺が、剣を逆手に持って振り下ろした瞬間、ファルを破った新技を発動させる。

「『変換』っ！」

体を青い魔力が覆い、それに剣が触れた瞬間大きな音を立てて剣が動きを止める。

『変換』。

それは、運動エネルギーを全て、音に変える技である。

ファルと戦ったときには相殺できたのは棒の動きだけだったが、それは逆に持っていたファルはそのまま動き続けたということであり、ファルはそのまま制御を失ってすっ飛んでいったのだった。

機械的にしか動けない渡辺は、その状態で固まって現状把握に忙しい。

その隙をついて動きを止めた剣に向かって俺はありったけの魔力をそそぎ込んだ。

黒い魔力のせいで魔力の流れが悪いが、それは力業で押し通る。

そして、最後の一押しをしようとしたところで気づいた。麻痺しているせいで『崩壊』のトリガーを引けないのだ。

(しまった、どうする!?)

考えたのはほんの数瞬。

俺は覚悟を決め、『変換』を解いた。

その途端再度剣が俺に迫るが、途中で止められていたせいで軌道がずれ、切っ先は心臓からかなり下のところへ突き刺さった。

(…………ぐっつ!)

魔力が減って強化が弱まり、鈍い痛みが腹に走る。



そしてその瞬間、俺はその衝撃を使って『崩壊』を発動させた。

音を立てる間もなく剣が砕け散り、その瞬間に意識を失って倒れ込む渡辺。

俺は強化した目で、渡辺を縛る魔術が解除されているのを確認したが、それと同時に叔母さんが世界樹のそばで発したような光が2つ、ちかちかと瞬きながら教祖やファルたちのいる方へと飛んでいくのがわかった。

戦況がどちらに転ぶかは分からなかったが、麻痺している俺は何も出来ず、意識のない彼女が俺の上で動かないのを耐えるしかなかった。

リリーとファルは教祖1人を相手に攻め倦ねていた。

ファルの高速機動を塞ぐのが目的か、教祖はリリーを相手に接近魔法戦を行っていたのである。

ファルもリリーもお互いにつまくあわせて戦うが、教祖はさらに上をいていた。

「『ファイア・ボム』っ！」

「『ウオーターウォール』、『ウィンドカッター』……おやおや、その程度ですか？」

「……ふんっ！」

「『転移』」

何よりも手こずっているのが、教祖の使う『転移』だった。

ファルの一撃やリリーの魔法の弾幕が当たりかけると、転移で2人の背後に回ってくるのだ。

リリーの超回復によって2人は肉体的疲労を感じないが、それでも精神的にはかなりのものがある。

何よりも謙人が竜息吹を受けて倒れたのが2人の焦りに繋がった。

「きゃあっ!!」

「ファルっ!!」

教祖の『転移』を見逃したファルが錫杖による一撃を食らって地面に倒れ込む。

「さあ亜人め、石になりなさいっ!!」

「ダメなのっ!!」

追撃でファルが魔法を放つが、それが届くよりも教祖の魔法の方が早い……と絶望したときだった。

突然教祖から感じる魔力量が激減し、発動しかけていた石化の魔術が霧散する。

そこにリリーの魔法が直撃し、たまらず教祖はファルから飛び退いた。

そして、教祖は少し離れたところに倒れている謙人の方を向き、驚愕の声を漏らす。

「なぜだ！なぜ神器が壊れているっ！？」

変化はそれだけに留まらない。

謙人のことを睨みつけていた悪魔は、突如胸をかきむしり苦しみだしたのだ。

「ぐあああつ！お、おのれっ、なぜエルフの意識が残っているっ！  
！再度喰い殺されたいか！？」

「お姉ちゃんっ！！」

フィオ自身の精神は死んでいない。

そう確信したリリーは真っ直ぐに悪魔の元へと駆けより、エルフの特性魔法である精神魔法を展開して、悪魔の中へと飛び込んだ。

「さあ、出番ねっ!」

「行くのですっ!」

私の体が謙人くんを襲っているのがとても苦しい。

必死で体の動きを鈍らせようとしたが、謙人くん本来の能力である竜息吹で謙人くんを攻撃までしてしまった。

申し訳なくて、つらくて、さっきまで私は泣いていたけれど、フィオさんは背中を撫でてくれていた。

謙人くんのおかげで聖剣が壊され、私たちが自由になった瞬間。

私はフィオさんに捕まって、フィオさんの体の中、悪魔の精神の元へと飛び込んでいった。

「薄暗いね……何というか……イヤな感じ」

「たぶん、悪魔の力が染み込んでしまっているのです。何とかして追い出さないと……」

たくさんのお木が生えていたが、そのほとんどが枯れてしまっていて灰色だ。

辺りは無秩序に生い茂った森の中のように薄暗く、不穏な空気を漂わせていた。

フィオさんの木への思いはイメージの強さから伝わってきていたの

で、この風景はフィオさんにとってはとてもつらいものだろう。

「いました、悪魔なのです……」

「へえ……なんか、想像通りだね」

枯れた森の奥から姿を見せたのは、皮膚はどす黒く翼と尾を生やした、地球でも悪魔として通じるような外見の女だった。

「私の計画をよくも邪魔してくれたな……。エルフならまだしも、何故勇者がここにいるのだ？」

「あれ、聞きたい？でも言わないよ？」

私は挑発するつもりで思いつきりイヤな感じで言っつけれど、悪魔は眉をしかめただけで言い放つ。

「ふむ……まあいい、殺せばいいのだから」

「殺されるのはそっちなのです。私の体、返してもらおうのです！」

フィオさんが負けじと言い返す。  
それをキツカケに、私たちは激突した。

まずフィオさんが魔術をイメージして放ち、私は強度を無視して大量のモノを生み出し、投げつける。

その間に、私は本命となるモノのイメージを固め始めた。

「トルエンを合成、硝酸と硫酸を混合、混酸に……。二ト口化反応を起こして…」

「邪魔なものばかり積み上げるなっ！ 『フレイム・ボム』っ！」

私が積み上げたのは燃えにくいものや燃えやすいもの、熱で溶けるものや固まるものまで何でもだ。

私が使ったことのあるものや聞いたことがあるものを、記憶の許す限り積み上げているので、その高さや幅は十数メートルにまで達している。

そのようなところで足止めを食らっている中、あちこちから適当に撃ってくるフィオさんの魔法が山を崩し、圧倒的な質量として襲いかかるのだ。

崩れたり、砕けたりするものはどんどん私が補充していくので、悪魔も魔法をこちらに当てにくいようだ。

「……………鬱陶しい。『深淵』」

ボソツと呟く悪魔は、その直後に大きな魔術を発動させる。

作り上げていたバリケードの下に黒い穴が広がると、モノの山は重力に従い一瞬で落下し、空間から消滅したのだ。

「くっ、マズいのですっ！」

「フィオさんっ、何とか時間を稼いでっ！」

今の状況では私は打開できるものを具現化できないし、フィオさんの魔法一択となってしまう。  
かなりの悪条件だというのに、フィオさんは笑っていた。

「ここは私が戦うのです！かかってこい、なのですっ！」

「たかがエルフ1人には悪魔たる私は止められないと思いますが…  
…まあ、早々に死んでもらいましょうか」

余裕が戻ったのか、喋り方が慫慂なものになる。  
2人が構えて魔法の撃ち合いを始めようとしたそのときだった。

「お姉ちゃん1人じゃないのっ！私を忘れてもらっちゃ困るの！」

上から声が聞こえたかと思うと閃光が走り、上から雷が降ってきた。  
慌てて飛び退く悪魔の前に、1人の女の子が下りてくる。

「お姉ちゃんに手を出す奴は許さないのっ！」

「リリーっ!!」

その女の子はフィオさんの話によく出てきていた妹らしい。

……フィオさんよりも背が高いので、彼女の方が姉に見えるけれど、  
思わぬ援軍に私もフィオさんも肩の力を抜き、私は全力で合成を進めて具現化を急ぐ。

「そこにいるのはワタナベミナさんだと思うの。後で、お話があるから覚悟しておいてほしいの」

「……合成、合成……分かったから、後二十秒は時間を稼いでっ!!」

「分かったの」

「リリーと一緒になら余裕なのです！任せてなのですっ!!」

私が合成しているのは爆薬だ。

化学反応を直接起こすのは生き物が違う以上不確実だと考えた私は、  
純粋に物理的襲撃を与えることを考えたのだ。

そこでフィオさんに聞いたのが、守る魔法の存在だった。

この世界にある物理衝撃を純粋に防ぐ魔法は、自らにかける身体強化と光属性による結界だけらしい。

悪魔はそのどちらも使えないらしいので、この作戦に踏み切ったのだ。



しかし、なら悪魔は何故精神世界での強さを誇ったかというところ、やはり魔法なのだそうだ。

光を除く全ての属性を使いこなす悪魔は、ある攻撃に対する反対の属性の防御を繰り出すことで身を守り、攻撃を一方的に加えていたそうだ。

「……できたっ！離れてっ！」

私の合図でフィオさんとリリーがその場から飛び退き、一瞬だけ悪魔の周りに空間ができる。

そこに私は、今の今まで練ったイメージを具現化した。

私が作ったのは爆薬と可燃性の気体。

具現化したそれらは一瞬のうちに反応して……。

轟音をあげて火柱となる。

「……ミナの世界ではコレが一般に見られるのです？」

「……どれだけの魔力を注いでるのよ」

その火柱は、十数メートルにまで達していた。

……やりすぎたかな？

火が燃え尽きた後、私たちはゆっくりとその場に近づく。

あたりの森の薄暗さがどんどん明るくなって、新しく草や若木が生え始めているから、きっとかなりのダメージを与えたと思っていたのだが……。

爆発の中心では、見た目無傷の悪魔が倒れていた。

「なっ、無傷って!?!」

「ミナ、違うのです。悪魔からは魔力がほんの少ししか感じられないのです。どうやら本気で瀕死のようなのです」

「そっか……」

自分たちを襲ったものとはいえ、自分の手で相手を瀕死まで追い込んでしまった、ということに今更ながら思い至る。

裁判所もない、文明レベルもそこまで発達していないこの世界ではそれが普通なのだろう……。

「ぐ……この世界には……まだ……1人仲間がいる……私より強い……殺されてしまうといい……」

眩く悪魔に、リリーが尋ねる。

「その悪魔、蛇っていつと伝わると思うの。合ってる？」

「……ああ……猛毒を持ち……私よりも……魔法が上手い……お前たちに……勝ち目はない……」

まだ強い奴がいるのか、そう思った私やフィオさんだったが、リリーはあっさり言い放った。

「もう、そいつは死んでるの。私に取り憑いてきたけどケントがあっさり潰しちゃったの」

「……なっ……」

「つまり、あなたが最後ということなの。さて、死ぬ覚悟はできたの？」

「ふっ……仲間はどういないのか……好きにしろ……」

「じゃあ……」

「ちょっと待ってっ！！」

思わず、私はリリーやフィオさんを止めていた。甘い自覚はあったけれど、殺したくはなかったのだ。

それに、仲間が死んでいると聞いたときの悪魔の顔は、とても人間的だった。

どうしても、見捨てたくはなかったのである。

「ねえ、あなたは悪魔なのよね？」

「…それが……どうした……」

「私と契約しない？契約したら生きていくのは出来るよね」

「なぜ……その必要がある……」

「私はこの管理者を知っているもの。あなたの世界に返してあげられるかもしれないから」

「ほ……本当かっ！」

悪魔は驚いているようだったが、それよりも驚いたのはフィオさんたちだった。

「何を考えているのです！？悪魔と契約なんて、あり得ないのです！」

「バカじゃないの？ホント何言ってるの？」

「私は、甘い環境でただの人間として育ったから。実際は魔族だけどね、でもこういう形で殺したくないの。さて、悪魔さん。私はあ

あなたが元の世界に戻るために全力を尽くしましょう。そして、あなたは過去の罪を清算し改心するまで私に従ってもらいます。これで、どうですか？」

「帰れるのなら……何でもしよう……」

「なら、契約成立ねっ！」

私と悪魔の間に、ほんのりと温かい絆が生まれる。

それと同時に悪魔の体が薄れ、私の中に入ってきた。

『当分の間は、ここに籠もっておきます。助けてくれてありがとう』

……』

「いや、攻撃したのは私だからそれは言わなくていいと思うよ？」

悪魔の姿が消えたのを見届けて、フィオさんが口を開く。

「今の契約内容なら大丈夫だとは思っています。でも、悪魔の力を好き勝手に振るわないという契約も、私と結んでほしいのです」

今の話だと、力の制御はすべて私の手の上にあることになってしま  
うから……まあ、当然のことだろう。

「いいよ、私からもお願いしたいくらいだもの」

「何かしたらリリーが許さないの。覚悟しておくがいいの」

リリーに脅されつつも、もう一つの契約が私の胸に宿る。

こちらに来てから早々に苦難に巻き込まれたけど、よい絆も出来たんじゃないかな。

「さあ、帰って謙人くんに挨拶しないと……いや、それよりも大怪我させたから謝らないと……」

「あ、ママに怒られるのです……」

私とフィオさんは、それぞれ大変なことが残っていきそうだ。

## 第52話（後書き）

今夜中にエピソードを投稿し、完結となります。

## エピソード

海の近くにある小さな村。

来客もほとんどない辺鄙なところだったが、最近はずますます人が来なくなっていた。

ある日の早朝、村長は家の扉を叩く音で目が覚める。

一人暮らしをしている村長は目をこすりながら扉を開けると、そこには村の若い男が立っていた。

「何じゃこんな朝早くに。まだ日も出とらんじゃろっ?」

「いえ、村に泊めてほしいという人が4人来ているのですが……食料のない現状ですから……」

村に珍しい来客だったようだ。

久しぶりの客に少し顔をゆるめ、村長は男に言う。

「よいよい、儂の家に泊めよう。儂は年寄りじゃから食料を減らし  
てもまあ問題はないからの」

「でっ……ですがっ!」

「せっかくの来客を断りたくないわい。ここに案内せよ」



「は、はい……」

待つこと数分、男は客を村長の家に連れてきた。3人の少女と1人の少年の4人組で、全員がくたびれた旅装をしていた。

エルフの少女は魔法の杖を持っているようだったが、他のものは武器を持っていないようである。

村長は4人に家にあった最後の食料である、魚の干物を朝ご飯に出した。

「旅をなさっておいでかの？」

「ええ、もう少し北の方まで行くつもりです」

「身を守る武器はお持ちでないのかな？」

「私は素手が武器ですし、他の者もそれぞれ武器は小さくして持参していますから大丈夫ですよ。ところで……この村で何かお困りのことはありますか？ 私たちのパーティーで出来ることならお手伝いさせていただきますのですが……」

少年からの申し出に、村長はじっくりと考え込む。

村の食糧難を取り除いてもらえるかどうか。

しかしそれだけの実力があるのだろうか。

村人だけでなく領主が諦めたこの状況を……。

「失礼ながら、あなた方のパーティーランクを聞かせていただいてもよろしいかの？」

「えっと……B - 1ですね」

「なんとっ!!」

ほとんどAに近いそのランクなら助かるかもしれないと、村長は驚きとともに依頼内容を口にする。

「釣り合う報酬は出せないと思うのですが……近くの海に住み着いているオオクラゲの魔物を倒してもらいたいです」

「驚いていましたね、村長さん」

「ああ、まあ報酬いらないうって言ったしな」

「いや、そうじゃなくてランクじゃないかしら……」

「ランクが低いのが我慢ならないの。たかがオオクラゲくらい、1人でも朝飯前なの」

「どこからどう見ても過剰戦力だ、間違いなくな……」

少年たちはのんびりと海に向かいながら話している。

余裕を見せるその言葉は、それだけの實力を持っているからこそ出た言葉だった。

「今から行くのはAー3のパーティー相手だからな。勝ってAランクに登つとかないといけないし、オオクラゲ相手だと俺たち1人だけならいいウォーミングアップだろ」

「じゃあ、誰がオオクラゲとやるの？リリーも立候補するの」

「私もやりますっ！」

「オオクラゲ相手にそんな簡単に……。普通じゃなさすぎるよ、みんなは……。私は……。海を沸騰させるから止めとこうかな」

勢いよく手を挙げたエルフと獣人の少女とは対照的に、人間の少女は遠慮気味だ。

その理由として挙げている内容がすでに普通でないことに彼女自身は気づいていない。

「まあ、渡辺は仕方ないか……」

「謙人くん？未菜って呼ぶ約束」

「ああ、すまん。じゃあ、未菜を抜いた3人でくじを引こうか」

「絶対当てますっ!」

「リリーがやるのっ!」

人っ子1人いない砂浜とはいえ、パーティーの様子はバカンスを楽しむ友人たちのようだった。  
当然、話している内容はバカンスとは程遠い。

「よしっ、私ですっ!」

「外したの……」

「リリー、俺も外したからそんなに落ち込むな。ファル、頑張れよ」

「ええ、行つてきますね」

軽い調子で獣人の少女が言い、数百メートル離れたところに浮かんでいるオオクラゲの元へと跳躍する。

「何秒かかると思う?」

「一分はかかると思うの。触手だし」

「うーん、三十秒くらいだろう。ファルなら重力を逆さにして海から引き上げて、チョンパすると思うが……」

「折角なら食べられそうな部位を見繕ってほしいね」

「もう、終わりましたけど……」

「早いなっ！？十秒経ったか経ってないかくらいだぞ？」

「どうやって倒したの？」

「重力を捻って絞りました」

「」「」……「」「」

たった創立三ヶ月でAランクにたどり着いた伝説のパーティー。  
彼らの破竹の勢いは、まだまだ続いていくのであった。

## エピソード（後書き）

これにて『母親の実家は異世界でした！』は完結となります。  
初投稿作品で、読みづらい点など数多くあったと思いますが、読んでいただきありがとうございました。

後ほど、活動報告も更新します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1136cn/>

---

母親の実家は異世界でした！！

2016年9月5日11時38分発行